鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（160）
坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡
二〇一一年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（160）

川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）

坂ノ下（さかのした）遺跡・後ヶ原（うしろがはら）遺跡

（薩摩川内市東郷町）

2011年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴って，平成21年度に実施した薩摩川内市東郷町に所在する坂ノ下遺跡及び後ヶ原遺跡の発掘調査の記録です。

坂ノ下遺跡は，川内川が大きく蛇行する河川堆積地にある縄文時代から近世の遺跡です。遺構は，中世の溝状遺構１条と集石遺構１基を発見し，縄文時代後期から近世の遺物が出土しました。中でも，古代相当の越州窯青磁や緑釉陶器，縦耳を有する滑石製石鍋等が出土したことは，古代・中世前半における川内川を介した東シナ海沿岸部と内陸部の物流ルートを解明する資料と期待されます。

一方，後ヶ原遺跡からも，縄文時代から近世の遺物が出土しました。特に，検出した近世の河川氾濫の痕跡は，河川と深く係わる生活があったことを示していました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所，薩摩川内市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成２３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

ふりがな	さかのしたいせき・うしろがはらいせき
書名	坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡
副書名	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅱ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第160集
編著者名	廣　栄次
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡：0995－48－5811
発行年月日	西暦2011年３月31日

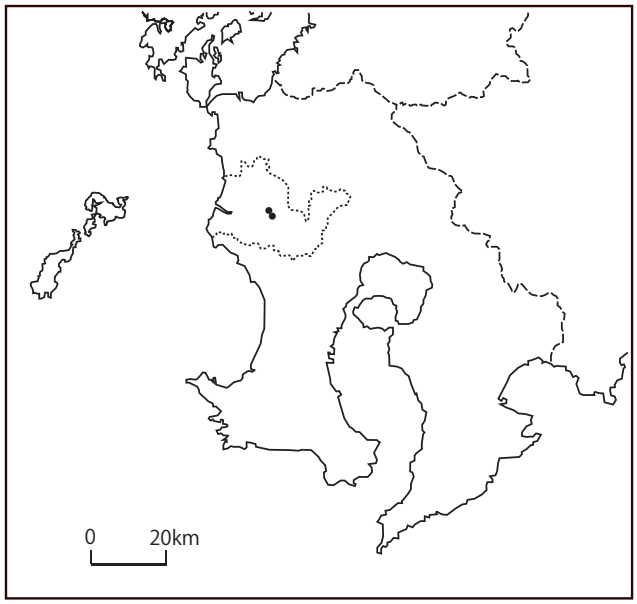
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
坂ノ下遺跡	鹿児島県 薩摩川内市 東郷町 南瀬	46215	38－57－０	31° 51′ 05″	130° 22′ 39″	確認・本調査 2009.7.1～ 2009.10.26	1,400㎡	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う記録保存調査
後ヶ原遺跡			38－56－０	31° 51′ 08″	130° 22′ 28″		2,100㎡	

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
坂ノ下遺跡	散布地	縄文時代		曽畑式土器，辛川式（納曽式）土器，西平式土器，黒川式土器，組織痕文土器，スクレイパー，石核，擦切石器，磨製・打製石斧，礫器，磨石・敲石，石皿・台石，砥石，軽石製品	
		弥生中期		黒髪式土器	
		古墳時代		東原式土器，辻堂原式土器，笹貫式土器	
		古代		土師器，須恵器，越州窯青磁，緑釉陶器	
		中世	集石遺構 溝状遺構	土師器，龍泉窯青磁，白磁，古瀬戸，滑石製石鍋他 土錘，羽口	
		近世		薩摩焼	
後ヶ原遺跡	散布地	縄文時代		スクレイパー，使用痕剥片，石核，磨石・敲石，軽石製品	
		弥生		黒髪式土器，須玖式土器	
		古代		土師器，越州窯青磁	
		中世		龍泉窯青磁，土師質土器・瓦質土器，滑石製品，土錘	
		近世		肥前焼，肥後系陶器，薩摩焼	

要約

坂ノ下遺跡は，本来の包含層の下位のみ残存し，上位の層は近世の削平を受けている。中世の溝状遺構及び集石遺構を検出し，縄文時代から近世にかけての遺物が出土した。平成11年度に旧東郷町が隣接地を発掘調査しており，当該遺跡の調査成果を補強する資料となる。特に，古代で越州窯青磁碗や緑釉陶器，11世紀～12世紀前半のいわゆる縦耳の滑石製石鍋が出土し，川内川の物流ルートを探る有益な資料となる。中世の遺物量は少ないが溝状遺構１条，集石遺構１基が検出されている。

後ヶ原遺跡では，遺構は検出されず，包含層内出土の遺物では，少量ながら縄文時代の軽石製品や古代の土師器や越州窯青磁，中世の滑石製品，土師質土器等が出土した。近世の河川堆積層内から弥生時代中期から近世（19世紀前半）までの遺物が出土しており，その多くは，隣接する上段丘の現集落及び坂ノ下遺跡からの流れ込みと判断される。



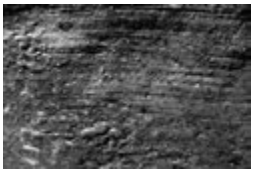
坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡位置図

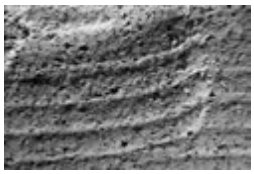
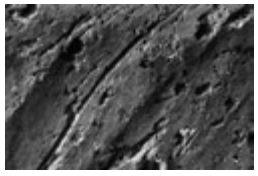
例　　言

1　本書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う坂ノ下遺跡及び後ヶ原遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬に所在する。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査事業は，平成21年７月１日から同年10月26日まで実施し，整理・報告書作成事業は，一部は先行して平成21年度に，本格的には平成22年度に県立埋蔵文化財センターで実施した。
5　掲載遺物番号は，通し番号であり，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
7　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。
8　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。
9　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，廣栄次が整理作業員の協力を得て行った。
10　土器の実測・トレースは，廣が担当し，整理作業員の協力を得て行った。
11　石器の実測・トレースは，（株）九州文化財研究所に委託し，廣が監修した。
12　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。
13　本書の執筆・編集は廣が行った。
14　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，遺物注記等で用いた遺跡名は「サカ」である。

凡　　例

1　基準方位は磁北であり，レベル数値は海抜絶対高である。
2　使用した土色及び胎土の色調は，『新版標準土色帖　2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。ただし，陶磁器の胎土の色調や釉調については，『標準土色帖』を基準としながら，一般的な色調感も加味して表現した。
3　遺構・遺物実測図の縮尺は，挿図中に記した。
4　本書で用いる土器の表現については，次のとおりである。
・　本稿の弥生・古墳時代相当の土器において，ナデの調整方向や手順に規則性が窺える資料やハケメ調整と同様な調整方向・手順でヘラナデ調整を施す資料が確認されたため，ナデやヘラナデについても極力図化し記録することとした。

調整	実際	図示例	特徴
ナデ			ナデ調整の内，ヘラ状工具の測縁端や始・終点が捉えられないもの。

調整	実際	図示例	特徴
ヘラナデ			ナデ調整の内，ヘラ状工具の側縁端（幅0.5～1cm程）や始・終点（方形状の工具圧痕）が捉えられるもの。胎土中の砂粒の移動や胎土の強い削り取りが見られない点で，後述のケズリと区別して捉えた。
ハケメ			ヘラ状工具により，胎土に板目を明瞭に残すもの。
ケズリ			ヘラナデに似るが，より土器への押圧が強く，胎土中の鉱物や砂粒の移動が捉えられるもの，胎土の削り取りが捉えられるもの。

・　ススや噴きこぼれ，丹塗り等については，以下のように図化した。なお，縄文土器に付着するススについては，本稿では図化していない。

スス付着範囲

赤色土器　丹（朱）塗範囲

黒色土器　黒色部分

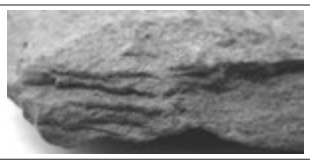
5　観察表の記述については，以下のような定義付けを行って類型化した。

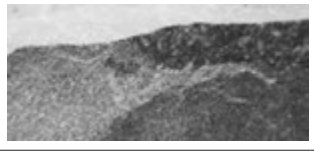
・「部位」の項目については，胴部上位から口縁部にかけて一旦すぼまり，口縁部で開く（直口する）部位は「頸部」，胴部上半で屈曲を伴い大きく張り出す部位は「肩部」と呼称した。

・「胎土」の項目については，肉眼観察を行った。特に多く含まれる鉱物について「◎」を，ある程度含まれるものを「○」，僅かに捉えられる程度は「△」，殆ど捉えられないのは空白とした。

・「調整」の項目については，調整を複数記載している場合は，前述が主たる調整で，後述が従的な調整である。縄文土器の条痕については，凹凸間が３㎜以上幅を有するのは「条痕」，３㎜未満は「条線」と区別した。光沢を有するヘラミガキは「ミガキ」，光沢を有しないがヘラによるミガキ痕が捉えられるのは「ミガキ状」と区別した。また，砂粒の移動を伴わず，指頭か工具使用かを判断できない一般的なナデは「ナデ」，ヘラ状工具の使用が認められる場合は「ヘラナデ」と呼称した。

・　石器の石材については，本遺跡では頁岩がホルンフェルス化した石材が多く出土し，本県で一般的に出土する頁岩は少量である。遺跡直近の河川敷の礫の多くは頁岩がホルンフェルス化した石材であり，近くの河川礫を持ち込んだと思われる。そこで，本稿では，その傾向を示すために頁岩質のホルンフェルスは特記して，他のホルンフェルスと区別して記載した。頁岩質ホルンフェルスの多くは，近くの河川礫の持ち込みと判断される。なお，頁岩質ホルンフェルスとはあくまでも造語であり，鉱物学的には存在しない名称である。

頁岩		欠損箇所に層状剥離が顕著に見られる。

頁岩質 ホルンフェルス		欠損箇所に層状剥離があまり見られない。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 1
　　１　分布調査
　（１）　調査概要及び調査経過…… 1
　（２）　調査体制…… 1
　　２　試掘調査
　（１）　調査概要及び調査経過…… 1
　（２）　調査体制…… 2
　第３節　確認調査及び本調査
　　１　調査概要…… 2
　　２　調査体制…… 2
　　３　調査経過（日誌抄より）…… 2
　第４節　整理・報告書作成作業
　　１　作成概要…… 5
　　２　作成体制…… 5
　　３　作成経過（日誌抄より）…… 5
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 6
　第２節　歴史的環境…… 6
第３章　調査の方法
　第１節　調査の方法…… 9
　　１　発掘調査の方法…… 9
　　２　遺構の認定と検出方法…… 9
　　３　整理作業の方法…… 9
　　４　出土遺物の分類…… 9
　第２節　層序……13
第４章　坂ノ下遺跡の調査成果
　第１節　縄文時代の調査……18
　　１　調査の概要……18
　　２　遺物……18
　第２節　弥生・古墳時代の調査……35
　　１　調査の概要……35
　　２　遺物……35
　第３節　古代の調査……46
　　１　調査の概要……46
　　２　遺物……46
　第４節　中世の調査……55
　　１　調査の概要……55
　　２　遺構……55
　　３　遺物……58
　第５節　近世の調査……61
　　１　調査の概要……61
　　２　遺物……61
第５章　後ヶ原遺跡の調査成果
　第１節　縄文時代の調査……62
　　１　調査の概要……62
　　２　遺物……62
　第２節　弥生時代の調査……66
　　１　調査の概要……66
　　２　遺物……66
　第３節　古代の調査……67
　　１　調査の概要……67
　　２　遺物……67
　第４節　中世の調査……69
　　１　調査の概要……70
　　２　遺物……71
　第５節　近世の調査……72
　　１　調査の概要……72
　　２　遺物……72
第６章　自然科学分析
　第１節　概要……74
　第２節　植物珪酸体分析…… 74
第７章　総括……76
写真図版

挿　図　目　次

第１図　試掘調査トレンチ配置図及び調査確定範囲等２
第２図　鹿児島県図……６
第３図　周辺遺跡地図……７
第４図　基本土層図（坂ノ下遺跡）……13
第５図　基本土層図（後ヶ原遺跡）……14
第６図　土層図（１）……15
第７図　土層図（２）……16
第８図　遺跡調査範囲及び地形図……17
第９図　遺物出土状況図（縄文時代）……18
第10図　遺物実測図（１）　Ⅰ～Ⅳ類土器（縄文時代）‥20
第11図　遺物実測図（２）　Ⅴ～Ⅶ類土器（縄文時代）‥21
第12図　遺物実測図（３）　Ⅷ・Ⅸ類土器（縄文時代）‥22
第13図　遺物実測図（４）　Ｘ類土器（縄文時代）……23
第14図　遺物実測図（５）　石器（縄文時代）……25
第15図　遺物実測図（６）　石器（縄文時代）……26
第16図　遺物実測図（７）　石器（縄文時代）……27
第17図　遺物実測図（８）　石器（縄文時代）……28
第18図　遺物実測図（９）　石器（縄文時代）……29
第19図　遺物実測図（10）　石器（縄文時代）……30
第20図　遺物実測図（11）　石器（縄文時代）……31
第21図　遺物実測図（12）　石器（縄文時代）……32
第22図　遺物出土状況図（弥生・古墳時代）……35
第23図　遺物実測図（13）ⅪⅠ・ⅪⅢ・ⅪⅤ類土器（弥生・古墳時代）…37
第24図　遺物実測図（14）ⅪⅤ・ⅪⅤ類土器（古墳時代）……38
第25図　遺物実測図（15）ⅪⅥ類土器（古墳時代）……39
第26図　遺物実測図（16）甕形・壷（鉢）形土器（古墳時代）……41
第27図　遺物実測図（17）壷（鉢）形土器（古墳時代）……42
第28図　遺物実測図（18）高坏（古墳時代）……43
第29図　遺物実測図（19）高坏（古墳時代）……44
第30図　遺構位置図及び遺物出土状況図（古代）……46
第31図　遺物実測図（20）土師器　坏（古代）……48
第32図　遺物実測図（21）土師器　埦・甕（古代）……49
第33図　遺物実測図（22）土師器　甕・土製品（古代）……50
第34図　遺物実測図（23）須恵器　坏他（古代）……51
第35図　遺物実測図（24）須恵器　甕・壷（古代）……52
第36図　遺物実測図（25）須恵器　甕・壷・輸入陶器（古代）……53
第37図　遺構位置図及び遺物出土状況図（中世）……56
第38図　溝状遺構実測図（中世）……57
第39図　集石遺構実測図（中世）……58
第40図　遺物実測図（26）土師器　坏・皿・輸入陶磁器・滑石製品（中世）……59
第41図　遺物実測図（27）　滑石製品・土製品・羽口（中世）……60
第42図　遺物実測図（28）国産陶器（近世）……61
第43図　遺物実測図（29）石器（縄文時代）……63
第44図　遺物実測図（30）石器（縄文時代）……64
第45図　遺物実測図（31）石器（縄文時代）……65
第46図　遺物実測図（32）ⅪⅠ・ⅪⅡ類土器（弥生時代）……66
第47図　遺物出土状況図（古代）……67
第48図　遺物実測図（33）土師器・須恵器　碗・輸入磁器（古代）……68
第49図　グライ層検出状況及び推定分布範囲（中世）…69
第50図　遺物出土状況図（中世）……70
第51図　遺物実測図（34）土師質土器・瓦質土器・輸入磁器・滑石製品・土錘（中世）……71
第52図　遺物実測図（35）国産陶磁器（近世）……73
第53図　遺跡の広がりが予想される範囲……79

表　目　次

第１表　試掘調査結果 …… 1
第２表　周辺遺跡の地名表…… 8
第３表　遺物観察表（１）Ⅰ～Ⅹ類土器（縄文時代）……33
第４表　遺物観察表（２）石器（縄文時代）……34
第５表　遺物観察表（３）Ⅻ～ⅩⅥ類土器（弥生・古墳時代）·45
第６表　遺物観察表（４）土師器　坏　碗　甕（古代）……53
第７表　遺物観察表（５）土製品・須恵器・輸入陶器（古代）……54
第８表　遺物観察表（６）土師器　輸入陶器　滑石製品他（中世）……60
第９表　遺物観察表（７）国産陶器（近世）……61
第10表　遺物観察表（８）石器（縄文時代）……65
第11表　遺物観察表（９）ⅩⅡ・ⅩⅢ類土器（弥生時代）……66
第12表　遺物観察表（10）土師器・須恵器　碗・輸入磁器（古代）……68
第13表　遺物観察表（11）土師質土器・瓦質土器・輸入磁器・滑石製品・土錘（中世）……71
第14表　遺物観察表（12）国産陶磁器（近世）……73
第15表　植物珪酸体含量（１）……74
第16表　植物珪酸体含量（２）……75
第17表　植物珪酸体含量（３）……75

写　真　目　次

写真１　H－６区のトレンチ壁で捉えられた河川氾濫の波状文…16
写真２　45の輪積み痕……22
写真３　49の底部断面……22
写真４　53の底部断面……22
写真５　142の接合痕……37
写真６　160の突帯上の刻み……39
写真７　180の底部の破裂痕……42
写真８　216の脚内部の絞り痕……44
写真９　217の坏部と脚柱部の接合部……44
写真10　241の籾痕……49
写真11　241の籾痕の拡大……49
写真12　259の頚部内面の指紋痕？……52
写真13　372の籾痕……68
写真14　グライ層検出状況……69
写真15　グライ層堆積状況……69
写真16　縄文晩期土器の底部断面（１）……77
写真17　縄文晩期土器の底部断面（２）……78
写真18　古墳時代の甕形土器突帯上の刻み……78
写真19　古墳時代の壷形土器内面の接合痕（１）……79
写真20　古墳時代の壷形土器内面の接合痕（２）……79
写真21　古墳時代の壷形土器内面の接合痕（３）……79

図　版　目　次

図版１　調査前風景（坂ノ下：L・M－10～12区及び後ヶ原を望む）……81
　　調査前風景（北側から後ヶ原を望む）……81
図版２　調査前風景（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－13～18区）……82
　　表土剥ぎ（後ヶ原確認調査）……82
　　確認調査風景（後ヶ原：５Ｔ～11Ｔ）……82
　　完掘状況（後ヶ原：６Ｔ）……82
　　遺物出土状況（後ヶ原：７Ｔ）……82
図版３　南壁土層断面（坂ノ下：Ｍ－14・15区）……83
　　南壁土層断面（坂ノ下：Ｍ－12区）……83
　　東壁土層断面（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－12・13区）……83
　　南壁土層断面（後ヶ原：Ｋ－９・10区）……83
　　西壁土層断面（後ヶ原：Ｊ・Ｋ－８・９区）……83
図版４　本調査風景　西側から（坂ノ下：L・M－16～18区）……84
　　本調査風景　東側から（坂ノ下：L・M－10～13区）……84
　　本調査風景　北西側から（後ヶ原：Ⅰ～K－８～10区）……84
　　本調査風景　東側から（後ヶ原：Ⅰ～K－８～10区）……84
　　本調査風景　北東側から（後ヶ原：H～K－７～10区）……84
　　遺物出土状況　西側から（坂ノ下：L・M－16～18区）……84
図版５　溝状遺構完掘状況（中世）（坂ノ下：L・M－15区）……85
　　集石遺構検出状況（中世）（坂ノ下：M－12区）……85
　　完掘状況　東側から（坂ノ下：L・M－14・15区）……85
　　完掘状況　北東側から（後ヶ原：Ⅰ～K－７～10区）……85
　　完掘状況　北東側から（後ヶ原：H～K－５～10区）……85
　　埋め戻し状況　南側から（後ヶ原：H～K－５～10区）……85
図版６　縄文時代の土器（１）坂ノ下……86
図版７　縄文時代の土器（２）坂ノ下……87
図版８　縄文時代の土器（３）坂ノ下……88
図版９　縄文時代の土器（4）・縄文時代の石器（1）坂ノ下……89
図版10　縄文時代の石器（２）坂ノ下……90
図版11　弥生・古墳時代の土器（１）坂ノ下……91
図版12　古墳時代の土器（２）坂ノ下……92
図版13　古墳時代の土器（３）坂ノ下……93
図版14　古墳時代の土器（４）坂ノ下……94
図版15　古墳時代の土器（５）坂ノ下……95
図版16　古墳時代の土器（6）・古代の遺物（1）坂ノ下……96
図版17　古代の遺物（２）坂ノ下……97
図版18　古代の遺物（3）・中世の遺物（1）坂ノ下……98
図版19　中世の遺物（2）・近世の遺物　坂ノ下・縄文時代の石器　後ヶ原……99
図版20　弥生～近世の遺物　後ヶ原……100

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

平成18年７月，薩摩地方北部を記録的な豪雨が襲った。特に川内川流域は県境を越えたえびの地区から河口の川内地区まで多大な被害を受ける災害となった。同年10月には，川内川激甚災害対策特別緊急事業（平成18～22年度の５か年）が採択され，復興へのスタートを切ることとなった。

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて事前に協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，同年11月，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所（以下，「川内川河川事務所」）は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に先立って，事業対象地（41か所）内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，「県文化財課」）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は，平成18年12月に川内川流域の湧水町・伊佐市（旧菱刈町・旧大口市）・さつま町・薩摩川内市内の埋蔵文化財分布調査を実施し，18か所について埋蔵文化財調査が必要であることが明らかとなった。

この結果をもとに，平成19年２月には川内川河川事務所から県文化財課へ埋蔵文化財調査対象地の試掘調査実施が依頼され，同月の下ノ原Ｂ遺跡（旧大口市）の調査を皮切りに，調査着手の条件が揃ったところから試掘調査を進めることとなった。

薩摩川内市坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡については，平成21年２月19日に県文化財課が約8,800㎡（未買収地約1,800㎡を除く。）を対象に試掘調査を実施し，遺物包含層が残っていると考えられる部分（約2,400㎡）について本調査の対象となることが明らかとなった。

本調査は，未買収地が解決したことを受け，平成21年７月１日から同年10月26日に県立埋蔵文化財センターが実施した。

整理・報告書作成作業については，本調査期間中に遺物の水洗い等は一部着手。また，平成22年１月～３月には遺物の水洗い・注記作業を先行させながら，平成22年４月～平成23年３月まで，本格的な作業を実施し，報告書刊行の運びとなった。

第２節　事前調査

１　分布調査

（１）調査概要及び調査経過

坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡の分布調査は平成18年12月26日に川内川河川事務所からの依頼を受け，県文化財課が実施した。

対象地は，既に周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれており，工事の内容と遺跡の現状を把握しながら調査を進めた。

その結果，隣接する農道工事の際に遺構・遺物が発見されていることや，畑地表面から遺物が採集されること等から，工事対象地は試掘調査の実施が必要であることが判明した。

（２）　調査体制

企　画・調　整　鹿児島県教育庁文化財課
調　査　統　括　鹿児島県教育庁文化財課
　　課　　長　中尾　理
調　査　企　画　課　長　補　佐　前原　浩一
調　査　統　括　埋蔵文化財係長　青崎　和憲
調　査　担　当　文化財主事　前迫　亮一
調　査　協　力　薩摩川内市教育委員会

２　試掘調査

（１）調査概要及び調査経過

坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡の試掘調査は，平成21年２月19日に実施した。対象となる区域は約8,800㎡であったが，この時点で未買収地であった約1,800㎡を除く調査となった。

調査は，約２×３ｍを基本とするトレンチを５か所設定し，小型バックホウによる掘り下げを中心に進めた。地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら掘り下げを行った。トレンチは，状況に応じて拡張しながら進めた。

その結果，3トレンチ及び４トレンチで遺物が出土したため，約2,400㎡について本調査が必要となった。

坂ノ下遺跡（１Ｔ）				試掘面積　5.76㎡
層序		層厚（cm）	遺構・遺物	備考
1	淡黄白色砂層	20		表土（水害時の堆積物がベース）
2	暗茶褐色土層	10		旧表土
3	淡黄茶褐色砂層	10		
4	淡褐色砂層	20		
5	淡黄褐色砂層	15		
6	淡褐色砂層	15		
7	暗褐色砂層	25		
8	淡褐色砂層	20＋α		

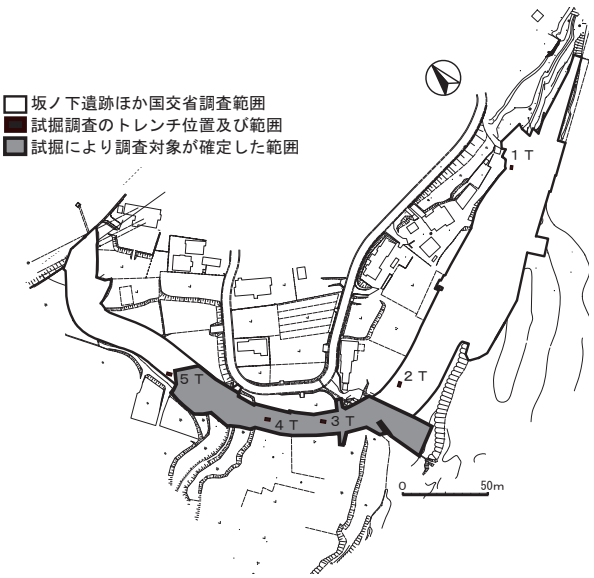
坂ノ下遺跡（２Ｔ）				試掘面積　8.00㎡
層序		層厚（cm）	遺構・遺物	備考
1	淡黄白色砂層	20		表土
2	淡褐色砂層	20		
3	淡黄灰白色砂層	30		
4	淡黄褐色砂層	40		
5	暗褐色砂層	30		
6	淡黄白色砂層	50		
7	淡褐色砂層	50		
8	淡褐色粘質土層	100＋α		8層上面から20cmぐらいに粘土層あり

坂ノ下遺跡（３Ｔ）				試掘面積　13.20㎡
層序		層厚（cm）	遺構・遺物	備考
1	暗茶褐色土層	20		表土
2	暗茶褐色土層	30		
3	明黄褐色土層	20	土器・石器	縄文時代後・晩期
4	淡黄褐色土層	100		中間に淡黄白色のブロック含む。
5	明黄茶褐色土層	20		
6	明黄茶褐色土層	20		淡黄白色土のブロックあり。
7	淡褐色砂層	20		
8	淡黄灰褐色砂層	40＋α		サラサラしている。

坂ノ下遺跡（４Ｔ）				試掘面積　11.00㎡
層序		層厚（cm）	遺構・遺物	備考
1	暗褐色砂層	15		表土，やや灰色がかっている。
2	暗褐色土層	20	青磁	中世
3	淡褐色土層	30	土器・石器	古墳・古代
4	暗褐色土層	0		
5	明黄褐色土層	20＋α		トレンチ周辺で縄文晩期・古墳の遺物採集。

後ヶ原遺跡（５Ｔ）				試掘面積　6.25㎡
層序		層厚（cm）	遺構・遺物	備考
1	暗褐色砂層	15		表土
2	淡褐色砂層	40		
3	淡黄褐色砂層	30		
4	淡褐色砂層	30		2層より暗い。
5	淡灰褐色砂層	10		鉄分を含む。
6	暗褐色砂層	10		鉄分を含む。
7	淡茶褐色砂層	20＋α		鉄分を含む。

第１表　試掘調査結果



第１図　試掘調査トレンチ配置図及び調査確定範囲等

（２）調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長	有川　昭人
調査企画	課長補佐	福山　徳治
	文化財係長	堂込　秀人
調査担当	文化財主事	前迫　亮一
調査協力	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主任文化財主事兼係長	井ノ上　秀文
	薩摩川内市教育委員会	
	専門主幹	中島　哲郎
	文化財グループ員	小原　浩
立会者	国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所	
	専門員	東郷　純一
	国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所川内出張所	
	技術係長	岩田　走馬

第３節　確認調査及び本調査

１　調査概要

平成21年７月１日（水）から同年10月26日（月）の間に，坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡の確認調査及び本調査を実施した。平成20年度の試掘で遺物包含層の存在が確認されていた河岸段丘上面（坂ノ下遺跡）に対して，傾斜面（坂ノ下遺跡）及び低段面（後ヶ原遺跡）は，平成20年度時点では未買収地が含まれたため試掘が不可能であり，遺物包含層の有無等不明であった。平成21年度に用地買収が済み，確認調査の実施が可能となった段階で，未試掘・未確認用地を早急に確認調査することとなった。そこで，平成21年度は，試掘を実施していない傾斜面（坂ノ下遺跡）及び低段面（後ヶ原遺跡）の確認調査を優先的に実施することとし，特に後ヶ原遺跡の確認調査を先行して行うこととした。後ヶ原遺跡調査区で11か所（２Ｔ～11Ｔ，１Ｔは未実施），坂ノ下遺跡調査区で６か所（12Ｔ～17Ｔ）のトレンチを設定した。７月・８月時の後ヶ原遺跡調査区では，トレンチ下位で地下水が湧出し，遺物包含層の有無を確認できずに，確認調査を断念した。８月後半からは，坂ノ下遺跡の確認調査及び本調査に移行した。10月に入り，後ヶ原遺跡調査区の地下水の水位が下がった状況の中で，坂ノ下遺跡の発掘調査と並行して，後ヶ原遺跡の確認調査及び本調査を実施した。

調査の方法は，草払いを実施した後，重機（バックホウ）によって表土を除去して，人力（山鍬・鋤簾・移植ゴテ等を利用）により掘り下げを行った。

Ⅱ層～Ⅵc層（後ヶ原遺跡はⅥ層）上面まで，段階的に調査を進めた。各層下面では，遺物の取り上げを行った後，遺構検出を行った。検出した遺構については，掘り下げや出土遺物の取り上げを行った後，写真撮影や遺構図作成，コンター図作成，土層図作成等を実施した。

坂ノ下遺跡及び後ヶ原遺跡ともに，トレンチによる確認調査を実施後，遺構・遺物が発見された箇所についてはトレンチを広げ，本調査を実施した。 その結果，坂ノ下遺跡調査区内で中世の溝状遺構が１条，集石遺構１基が確認された。遺物については，坂ノ下・後ヶ原両遺跡で縄文時代から近世までの遺物が出土した。

２　調査体制

本調査（平成21年度）

事業主体	国土交通省九州整備局川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
	調査企画	
	次長	齊藤　守重
	次長	青﨑　和徳
	調査第一課長	中村　耕治
	調査第一課第二調査係長	宮田　栄二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	久保田　昭二
	文化財主事	廣　栄次
	文化財主事	羽嶋　敦洋
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主事	田之上　美佳
調査指導	鹿児島大学法文学部	
	教授	森脇　広

３　調査経過（日誌抄より）

発掘調査の経過は，日誌抄から略述したものである。

（１）平成21年度調査

＜平成21年７月１日（水）～７月24日（金）＞

・発掘調査ガイダンス
・事務書類記入
・荷受け
・用具の準備
・調査区内環境整備
　草払い・杭打ち・看板立て・寒冷紗作り
　防砂柵作り及び設置
・確認トレンチ表土剥ぎ（２Ｔ～５Ｔ）
・所長・調査課次長現地指導
・グリッド杭測量
・水道工事完了
・レベル移動
・２Ｔ～４Ｔ　Ⅱ層掘下げ
・５Ｔ～７Ｔ設定及び表土剥ぎ
・ベルトコンベア・発電機移動
・４Ｔ　Ⅳ・Va～ｃ層掘下げ
・６Ｔ～９Ｔ　Ⅳ層掘下げ
・８Ｔ～10Ｔ　トレンチ設定及び表土剥ぎ
・８Ｔ　Ⅳ層掘下げ
・トレンチ配置図作成
・５Ｔ　Va～ｃ層掘下げ
・９Ｔ・10Ｔ　Ⅲ層掘下げ
・グリッド設定及びレベル移動
・４Ｔ　土層掃除・北壁土層写真撮影
・安全パトロール
・４Ｔ　土層北壁実測
・11Ｔ・12Ｔ　表土剥ぎ
・11Ｔ　Ⅱ層掘下げ
・５Ｔ　Va～ｃ層遺物取上げ
・６Ｔ　Va～ｃ層遺物出土状況写真撮影及び遺物取上げ
・11Ｔ・12Ｔ　配置図作成
・中村調査一課課長現地指導
・２Ｔ　Ⅱ～Ⅶ層掘下げ及び遺物取上げ
・５Ｔ・６Ｔ　Ⅶ層掘下げ
・10Ｔ　Ⅲ層掘下げ
・13Ｔ　Ⅱ層掘下げ
・２Ｔ　Ⅱ層掘下げ及び遺物取上げ

＜７月27日（月）～８月21日（金）＞

・６Ｔ　Ⅳ層掘下げ
・７Ｔ・８Ｔ　Ⅳ・Va～ｃ層掘下げ及び遺物取上げ
・10Ｔ　Ⅲ・Ⅳ層掘下げ及び遺物取上げ
・12Ｔ　Ⅱ～Ⅳ層掘下げ
・11Ｔ　Ⅱ～Ⅳ層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｇ－５・６区　ベルコン設置
・Ｇ－５・６区　Ⅶ層上面コンター作成
・５Ｔ・６Ｔ　土層分層及び完掘状況写真撮影
・10Ｔ・11Ｔ　Va～ｃ層掘下げ
・Ｆ～Ｈ－４～６区　Ic層下面掘下げ
・２Ｔ　Ⅳ層～Ⅸ層下層確認掘下げ
・２Ｔ・７Ｔ～10Ｔ　完掘状況写真撮影
・Ｆ～Ｈ－４～６区　ベルコン設置
・土木業者来跡による現場確認
・調査区内草払い
・トータルステーションデータの整理
・所長及び調査課次長現地指導
・Ｆ～Ｈ－４～６区　Ic層～Ⅶ層掘下げ及び遺物取上げ
・３Ｔ　Ⅶ層完掘状況写真撮影
・11Ｔ　Va～ｃ層掘下げ及び遺物取上げ・清掃・完掘状況写真撮影
・13Ｔ～15Ｔ設定及びIc層～Ⅴ層掘下げ
・Ｊ－９・10区表土剥ぎ及びIc層～Va～ｃ層掘下げ
・大型土嚢袋設置（駐車場河川側）
・Ｆ～Ｈ－４～５区　Ⅱ層～Ⅸ層掘下げ及び遺物取上げ

＜８月24日（月）～９月18日（金）＞

・13Ｔ～15Ｔ　Ic層～Ⅴ層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｆ～Ｈ－４～５区　Ⅱ層～Ⅸ層掘下げ及び遺物取上げ
・13Ｔ～17Ｔトレンチ配置図作成
・宮田係長現地指導
・16Ｔ完掘
・Ｌ・Ｍ－13～18区　表土剥ぎ及びベルコン移動
・15Ｔ　Ⅴ層掘下げ及び完掘
・Ｌ・Ｍ－12～18区　Ic層～Ⅴ層掘下げ及び遺物取上げ
・調査一課長現地指導
・Ｌ・Ｍ－16～18区　Ⅳ・Ⅴ層掘下げ及び遺物出土状況写真撮影・遺物取上げ
・16Ｔ・17Ｔ　表土剥ぎ
・16Ｔ・17Ｔ　掘下げ　Ic層～Ⅴ層掘下げ・完掘及び完掘状況写真撮影
・Ｌ・Ｍ－11～13区　表土剥ぎ
・Ｍ－17区　Ⅴ層検出入佐式土器出土状況写真撮影
・Ｌ・Ｍ－12～15区　Ic層～Ⅲ層掘下げ
・Ｌ－17区　Ⅴ層検出入佐式土器出土状況平面・断面実測
・Ｌ・Ｍ－16・17区　Ⅴ層掘下げ及び完掘
・Ｌ・Ｍ－15区　Ⅴ層検出溝状遺構１号埋土掘下げ
・Ｌ・Ｍ－16～18区　南側土層清掃及び写真撮影・土層図作成
・Ｌ・Ｍ－18区　東側土層清掃及び写真撮影・土層図作成終了
・Ｌ・Ｍ－16～18区　Ⅴ層清掃及び完掘状況写真撮影
・Ｌ・Ｍ－12～14区　Ⅱ～Ⅳ層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｌ・Ｍ－16区　溝状遺構半截及び埋土状況写真撮影・断面実測・完掘

・Ｌ・Ｍ－17・18区南側土層実測終了
・Ｌ・Ｍ－16区　溝状遺構完掘及び平面実測
・安全パトロール
＜９月28日（月）～10月16日（金）＞
・Ｌ・Ｍ－11～14区　Ⅲ～Ⅴ層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｌ・Ｍ－15・16区　Ⅲ層掘下げ及び遺物取上げ
・台風養生
・Ｌ・Ｍ－14・15区　Ⅵa層以下確認掘下げ
・Ｌ・Ｍ－18区　東側土層清掃・写真撮影・土層実測
・Ｌ・Ｍ－11～13区　Ⅱ～Ⅴ層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｊ・Ｋ－８～11区　Ⅳ～Ⅵa層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｌ・Ｍ－15区　東側土層清掃及び写真撮影・実測
・Ｍ－16～18区　南側土層清掃・写真撮影・実測
・Ｌ・Ｍ－12・13区　Ⅵa層以下掘下げ
・Ｋ－９～11区　Ⅴ・Ⅵa層掘下げ
・Ｌ・Ｍ－10～12区　Ⅵa層以下掘下げ
・５Ｔ・６Ｔ・８Ｔ～11Ｔ　Ⅳ～Ⅵ層掘下げ
・Ｊ・Ｋ－８・９区　Ⅳ層迄重機により表土剥ぎ
・Ｊ・Ｋ－９・10区　Ⅵ層上面コンター図作成
＜10月19日（月）～10月28日（水）＞
・Ｌ・Ｍ－10・11区　Ⅱ～Ⅴ層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｊ・Ｋ－９・10区　Ⅵ層上面コンター図作成
・Ｍ－13区　確認トレンチ写真撮影
・Ｈ・Ｉ－７・８区　重機による表土剥ぎ
・Ｊ・Ｋ－８～11区　Ⅵ層清掃及び完掘状況写真撮影
・セクベル外し・遺物取上げ
・Ｍ－10～13区　南側土層分層・清掃・写真撮影・実測
・Ｌ・Ｍ－13・14区　東側土層清掃・写真撮影・実測
・Ｌ・Ｍ－15・16区　Ⅴ層清掃・完掘状況写真撮影
・Ｌ・Ｍ－10・11区　Ⅳ～Ⅵa層掘下げ及び遺物取上げ
・Ｈ～Ｋ－８～11区　土層写真撮影・実測・コンター作成
・Ｌ・Ｍ－11～13区　北側Ⅵ層以下トレンチ掘下げ・完掘状況写真撮影
・ベルコン及び発電機移動，フェンス撤去
・道具片づけ
・荷出し
・プレハブ等清掃・撤収
・調査区壁重機により補強
・集石遺構実測
・Ｌ・Ｍ－10～13区南側土層実測
・図面整理
・調査区埋め戻し
・関係機関へのあいさつ
・リース品の確認及び撤収
・埋め戻し

第４節　整理・報告書作成作業

１　作成概要

整理作業及び報告書作成作業については，一部の遺物の水洗いは平成21年７月から同年10月の発掘調査期間中に発掘作業現場で行い，その後，一部は，平成22年１月から３月までの間，県立埋蔵文化財センターで実施した。残る大半の報告書作成作業は，県立埋蔵文化財センターにおいて，平成22年４月から平成23年３月までの間に実施した。

２　作成体制

事業主体	国土交通省九州整備局川内川河川事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
作成企画	次長	齊藤　守重
	次長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
作成担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	廣　栄次
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	総務係長	大園　祥子
作成指導	鹿児島大学埋蔵文化財室	
	准教授	中村　直子

３　作成経過（日誌抄より）

一部の土器については，発掘調査期間中の平成21年７月から平成21年10月26日の間に，土器洗いを実施した。それらの土器については，平成22年１月から３月の間に，土器注記を実施した。そして，本格的な整理・報告書作成作業は，平成22年４月６日から平成23年３月31日まで県立埋蔵文化財センターで行い，その経過は以下に記す。

＜４月＞

石器洗い，土器注記，接合，土器の分類，石器の分類及び掲載石器の選別，石器委託の準備

＜５月＞

土器分類，土器接合，土器復元，縄文土器・須恵器・滑石製品実測，石器委託の準備及び委託実施

＜６月＞

土器接合，土器復元，縄文・弥生・古墳時代土器・陶磁器実測

＜７月＞

土器接合，土器復元，古墳時代土器・土師器・陶磁器実測・トレース

＜８月＞

復元，縄文土器・須恵器拓本，実測図トレース，土層図トレース・レイアウト準備，溝状遺構トレース

＜９月＞

実測図トレース修正，レイアウトカバー作り，土器観察表作成，石器実測図校正及び納品，石器整理，石器レイアウト準備，遺物写真準備・遺物写真撮影，遺物指導（鹿児島大学　中村直子准教授：９月17日）

＜10月＞

実測図トレース修正，土器トレース図仮レイアウト，遺物写真撮影，石器トレース図仮レイアウト・石器整理，石器観察表作成，集石遺構トレース，遺構位置図作成，遺構トレース図レイアウト，遺構コンター図作成，土器データ抽出，原稿執筆

＜11月＞

遺物整理，遺物データ抽出及び整理，原稿執筆

＜12月＞

各図面本レイアウト，原稿執筆，報告書入札（12月20日），遺物整理

＜１月～２月＞

報告書校正，図面整理，遺物整理

＜３月＞

報告書校正・納品，図面整理，遺物整理

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

坂ノ下遺跡は，鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬字坂ノ下，後ヶ原遺跡は同字後ヶ原に所在する。

遺跡の所在する薩摩川内市東郷町は鹿児島県の北西部に位置し，東は薩摩郡さつま町（旧宮之城町），西は田海川を挟み薩摩川内市中心部（旧川内市），南は川内川を隔て薩摩川内市樋脇町，北は紫尾山系を隔て阿久根市及び出水市と接する。

東郷町は，海岸線をもたない南北に細長い町域を有し，町全体の約70％を山地で占める。河川は，北部山地の紫尾山系に源を発する田海川，樋渡川，岩切川，山田川が南流し，これらの河川が町の南部を西流する川内川と合流する。

東郷町の地形の特徴としては，大きく北部山地，鳥丸・斧ヶ渕平地，笠山山塊，山田・南瀬平地の四つに区分される。北部山地は，標高1.067ｍの紫尾山を中心に起伏量200ｍ～400ｍの中起伏山地を成す。その他はシラス土壌を主体とした大地が広がり，鳥丸・斧ヶ渕平地及び山田・南瀬平地や河川流域に広がる谷底平地となっている。これらの平地と河川流域に各集落が形成されている。

東郷町の地質は，北部山地に砂岩頁岩互層が，丘陵地に安山岩層が，低丘陵地にシラス層が広がる。これらが主な基本的地質構成となっている。その中で，斧ヶ渕地区の樋渡川及び岩切川中流域には，鮮新世終末期の火山活動に伴ってできた湖沼により形成された珪藻土層が広く分布し，植物化石を多く含んでいる。

本遺跡のある坂ノ下及び後ヶ原地区は，川内川中流域の蛇行する舌状沖積地にあり，国道を挟んで北側には三日月湖沼が残存し，旧河川の状況が垣間見える。そして国道から川内川に向け緩やかに傾斜する標高約14ｍの河岸段丘上に立地している。現集落は，微高地上に広がり，河川沿いの低地には耕作田が広がる。

第２節　歴史的環境

薩摩川内市東郷町は，有史以降の史跡が多く残っている。特に，古代の薩摩国府との関連や中世以降の在地勢力と関東御家人との関係等，様々な事象について文献史学上大変重要な地域である。しかしながら，有史以前の状況については，発掘調査事例が少ないこともあり，不明な点が多い。

ここでは，少ない発掘調査事例ではあるが，旧石器時代から中世にかけての東郷町の歴史について概観する。

旧石器時代の遺跡では，黒曜石を用いた細石刃，野岳・休場タイプの細石刃など，細石刃文化期の遺物が出土した小田・小田原遺跡がある。西隣の旧川内市では，県内初の旧石器時代の尖頭器が出土したとされる楠元町馬立遺跡や，剥片尖頭器，ナイフ形石器，細石刃などが出土した高城町の前畑遺跡，中福良町の成岡遺跡がある。その他，百次町の上野城遺跡，大原野遺跡など重要な遺跡があり，今後の東郷町における発掘調査事例の成果が期待される。

第２図　鹿児島県図

縄文時代においては，分布調査及び確認調査を含めて発掘調査事例が増える。

縄文時代早期の遺跡では，口縁部外面に貝殻腹縁による刺突文が施され石坂式土器類似の円筒形深鉢形土器が発見された五社遺跡が代表的である。

縄文時代前期の遺跡では，曽畑式土器が出土した坂ノ下遺跡が，中期から後期の遺跡では，阿高式や出水式・南福寺式・指宿式土器が出土した鳥丸遺跡がある。中でも，底部に木葉痕がスタンプされた阿高式土器の出土は注目される。

縄文時代晩期の遺跡では，精製浅鉢や石器類が出土している屋根添遺跡で天城Ⅱ式・Ⅲ式土器が出土し，川原遺跡では埋設土器が検出されている。ともに，熊本地方の文化の影響が指摘されている。屋根添遺跡では，これらの土器と共に石鏃や石匙，抉入状石器・楔形石器・ノミ状小型磨製石斧・薄手の片刃磨製石斧・厚手の両刃磨製石斧・石皿・磨石・砥石・敲石・石錘などが出土している。その中でも，盤状石製品（円形や方形）の出土は注目される。

東郷町で本調査がされた遺跡は，少ないこともあってか，弥生時代相当の遺跡は確認されない。

古墳時代では，川内川流域に遺跡が集中する。川原遺跡では，辻堂原式土器の甕形土器や壷形土器，高坏，坩，

丹塗研磨土器が出土している。しかしながら，確認調査では遺構が発見されておらず，この遺跡の特徴については不明である。宮ノ脇遺跡では，中津野式土器と思われる甕形土器や丹塗の高坏が出土している。その他，東原式土器の甕形土器や時期不明の甕形土器底部が出土している司野下遺跡，成川式土器や青海波文タタキが施してある須恵器片が出土した小田・小田原遺跡などがあるが，これらの遺跡も遺構発見が少なく，これらの遺物と遺構とを関連付けた遺跡の特徴は捉えられていない。

古代の遺跡としては，土師器の壷や鉢，双孔棒状土錘，須恵器が出土している五社遺跡がある。土師器には，坏，内黒土師器の外面に丹塗を施したものや内面に内黒土師器と同じ手法で赤色顔料を塗り込めた内朱土師器，刻書土器がある。また，これらの遺物と共に須恵器の坏，蓋，甕，壷等が出土しており，8世紀後半から９世紀頃のものと思われる。この遺跡においても遺構が発見されておらず，遺跡の特徴はつかめていない。総じて，遺物の発見はあるが遺構との関連が検証できる遺跡が少なく，今後の発掘事例を待ち，それぞれの時期の東郷町の歴史について解明していく必要がある。

中世以降になると，在地豪族の大前氏と関東御家人の渋谷氏に関わる城館跡や寺社跡，石塔，文書等が多く存在し，今後の発掘調査の成果とつきあわせることで中世以降の東郷町の姿が明確になってくることが期待される。

第３図　周辺遺跡地図　　1／25,000

2表　周辺遺跡の地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	柏ノ木	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕柏ノ木	丘陵	奈良，平安	土師器・須恵器・緑釉陶器	平成11年本調査
2	城ヶ原城跡	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬城ヶ原	台地	中世		
3	知屋城跡	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬知屋城	丘陵	中世		
4	司野古石塔群	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕七ツ枝	丘陵	中世(鎌倉)		「東郷町郷土史」
5	五本松経石埋蔵地	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬五本松	台地	近世		「東郷町郷土史」
6	香積寺跡	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬諏訪ヶ原	台地	近世	墓碑・仁王像	「東郷町郷土史」
7	岩戸之下	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬岩戸下	河岸段丘	縄文(晩)，奈良，平安		平成12年分布調査、平成13年確認調査
8	南瀬古石塔群	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬仮屋	台地	中世(鎌倉)	板碑・石塔	「東郷町郷土史」
9	岩切	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕岩切	台地	縄文(前)，古墳，奈良，平安	縄文土器・成川式・土師器	平成12年本調査
10	大原	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕大原	台地	縄文	土器片・石鏃・黒曜石	昭和60年分布調査、町埋文報(1)
11	笹原	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕笹原	台地	縄文	土器片・石鏃・黒曜石	昭和60年分布調査、町埋文報(1)
12	司野下	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕司野下	河原	古墳	甕形土器・鉢形土器	昭和10年分布調査、町埋文報(1)平成15年試掘調査（一部）
13	川畑	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬川畑	河岸段丘	縄文(晩)	刻目突帯文・石匙・石鏃	平成９年確認調査
14	平畑	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬平畑	河岸段丘	古墳，奈良，平安	土師器	昭和60年分布調査、町埋文報(1)
15	道清	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬道清	丘陵	縄文，古墳，奈良，平安	石鏃・土師器・土錘	昭和60年分布調査、町埋文報(1)
16	屋根添・川原	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬屋根添川原	河岸段丘	縄文(晩)，古墳～中世	土器片・石器・土師器・陶器	平成元年一部本調査
17	宮之脇A	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬宮之脇	河岸段丘	縄文(晩)，奈良，平安	土器片・土師器・石鏃	平成元年確認調査
18	宮之脇B	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬宮之脇	河岸段丘	縄文(晩)，奈良，平安	土器片・土師器・石鏃	平成元年確認調査
19	大谷	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬大谷	台地	縄文	土器片・黒曜石	平成２年分布調査
20	狐ヶ段	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬狐ヶ段	台地	縄文，古墳	土器片・黒曜石	平成２年分布調査
21	轟木	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬轟木	台地	縄文，奈良，平安	土器片・須恵器	平成２年分布調査
22	大椿	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬大椿	台地	縄文，奈良，平安	土器片・石器・須恵器	平成２年分布調査、平成３年確認調査
23	大牟礼	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬大牟礼	台地	縄文	黒曜石	平成２年分布調査、平成３年確認調査
24	野中(城ヶ原城跡)	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬野中	台地	縄文	土器片	平成２年分布調査
25	古城跡	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬大堀	丘陵	中世		平成２年分布調査
26	古城跡	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬上平田	丘陵	中世		
27	笹原	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕笹原	台地	縄文，古墳，中世	石鏃・黒曜石剥片・土器片	平成４年分布調査
28	松坂	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕松坂	台地	縄文	黒曜石剥片・縄文土器	平成４年分布調査
29	茶屋段	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕茶屋段	台地	縄文，古墳	石鏃・成川式	
30	後ヶ原	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬後ヶ原	河岸段丘	縄文(晩)	石鏃・黒曜石・土師器	平成９年確認調査、町埋文報(1)
31	坂ノ下	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬坂ノ下	河岸段丘	縄文，古墳，奈良，平安	縄文土器･石器･成川式･土師器	平成11年本調査
32	城ヶ原A	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬城ヶ原	台地	縄文，古墳	縄文土器・成川式	平成４年分布調査
33	城ヶ原B	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬城ヶ原	台地	縄文	縄文土器	平成４年分布調査
34	大牟礼	鹿児島県薩摩川内市東郷町斧渕大牟礼	台地	縄文，古墳	縄文土器・成川式	平成４年分布調査
35	坂中	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬仮屋	台地	縄文	縄文土器	平成４年分布調査、平成９年確認調査
36	宇都	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬宇都	台地	古墳，中世	成川式・土師器・青磁	平成４年分布調査
37	諏訪ヶ原	鹿児島県薩摩川内市東郷町南瀬諏訪ヶ原	台地	縄文，古墳，古代	成川式	平成４年分布調査、平成13年確認調査
38	野首城跡	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野諏訪上	低地	中世(鎌倉中)		倉野小の北西約400m、別名「野久尾城」、倉野氏の居城
39	水流	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	低地	中世		
40	木下の逆修塔群	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野木下	低地	中世(鎌倉末)	石塔群	（町）昭和50.9.1
41	塔之原殿墓	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原村子	低地	不詳	大型石塔一基	（町）昭和50.9.1
42	柳原	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野	台地	中世	土師器	
43	木下	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野	台地	奈良～平安	土師器	
44	下原	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野	台地	縄文，中世	内黒土師器・縄文土器	
45	中原	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野	台地	縄文	黒曜石剥片･縄文土器･土師器	
46	上原	鹿児島県薩摩川内市樋脇町倉野	台地	縄文，古墳	縄文土器・須恵器・土師器	
47	柳原A	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	台地	縄文	縄文土器	
48	柳原B	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	台地	縄文，古墳	縄文土器・石鏃・土師器	
49	柳原C	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	台地	古墳	土師器	
50	上祢地原A	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	台地	縄文，中世	石鏃・内黒土師器	
51	上祢地原B	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	台地	縄文，古墳	石斧・成川式	
52	榎木水流	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原	台地	縄文	独鈷石･塞ノ神式・並木式	
53	上修理田	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原祢地山	台地	縄文	縄文土器・黒曜石剥片	
54	茶屋堀A	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原岩元	台地	古墳	成川式	
55	茶屋堀B	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原岩元	台地	縄文，中世	土師器･縄文土器･黒曜石剥片	
56	茶屋堀C	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原岩元	台地	古墳	成川式	
57	岩元原A	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原岩元	台地	中世	土師器	
58	岩元原B	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原岩元	台地	古墳	成川式	
59	岩元原C	鹿児島県薩摩川内市樋脇町塔之原岩元	台地	古墳	成川式	
60	久住原	鹿児島県薩摩川内市久住町落シ・宇ノ勢・道畠・辰田・諏訪田	台地	縄文～近世	土器片･陶磁器･須恵器･黒曜石	
61	中鶴	鹿児島県薩摩川内市久住町中鶴	低地	古墳～中世(室町)	土器・青磁	
62	長野原	鹿児島県薩摩川内市中村町長野原	台地	古墳～中世(室町)	土器・青磁・白磁・染付	
63	久住城跡	鹿児島県薩摩川内市久住町井場ヶ迫	丘陵	中世(戦国)	曲輪跡	
64	清水城跡	鹿児島県薩摩川内市中村町寺之段	丘陵	不詳	平地あり	
65	小鹿倉城跡	鹿児島県薩摩川内市中村町城山	丘陵	不詳	陣跡?	
66	椿山城跡	鹿児島県薩摩川内市中村町上持	山頂緩斜面	不詳	土塁跡	
67	雲之上城跡	鹿児島県薩摩川内市中村町片山・白谷・白山	山頂緩斜面	不詳	土塁跡	
68	萩原城跡	鹿児島県薩摩川内市中村町宮ヶ原	山頂緩斜面	不詳	平地あり	

第３章　調査の方法

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡の確認調査及び本調査は，平成21年７月１日(水)から同年10月26日(月)の間に実施した。

平成20年度の試掘で遺物包含層の存在が確認されていた河岸段丘上段面（坂ノ下遺跡）に対して，傾斜面（坂ノ下遺跡）及び低段面（後ヶ原遺跡）は，平成20年度時点では未買収地を有していたため試掘調査が不可能であった。そこで，平成21年度は，試掘調査を実施していない低段面（後ヶ原遺跡）の確認調査を優先的に実施した。また，両遺跡は上段面・傾斜面・低段面と海抜高及び地形が大きく異なり全体的な層位を早く捉える必要性があり，後ヶ原遺跡だけでなく坂ノ下遺跡についても満遍なくトレンチを設定して確認調査を進めた。トレンチ数は,後ヶ原遺跡では11か所，坂ノ下遺跡で６か所である。７月・８月時の後ヶ原遺跡では，２・３ＴではⅤa～Ⅵ層の遺物包含層は削平を受けていることが確認された。４Ｔについては，先行トレンチを入れ，途中からは重機による下層確認に切り替えた。Ⅴa～Ⅵ層の遺物包含層を確認するとともに，著しい湧水を捉えた。９・11Ｔでは縄文時代の遺物包含層を捉えることができたが，その他の５～８・10Ｔ調査では，河川堆積層（Ⅱ～Ⅳ層）掘削中に地下水が湧出し，遺物包含層に達する前に確認調査を断念した。８月後半からは，上段面・傾斜面（坂ノ下遺跡調査区）の確認調査及び本調査に移行した。10月に入り地下水位が下がってきた状況の中で，後ヶ原遺跡調査区のトレンチ内の湧水も収束し，坂ノ下遺跡の発掘調査と並行して，後ヶ原遺跡の確認調査及び本調査を実施した。

調査の方法は，草払いを実施した後，重機（バックホウ）によって表土を除去して，人力（山鍬・鋤簾・移植ゴテ等を利用）により掘り下げを行った。

坂ノ下遺跡ではⅡ層～Ⅵa層まで,後ヶ原遺跡ではⅡ層～Ⅵ層上面まで段階的に調査を進めた。各層下面では，遺物の取り上げを行った後，遺構検出を行った。検出した遺構については，掘り下げや出土遺物の取り上げを行った後，写真撮影や遺構図面作成，コンター図作成，土層図作成等を実施した。坂ノ下遺跡及び後ヶ原遺跡ともに，トレンチの確認調査を実施後，遺構・遺物が発見された箇所についてはトレンチを広げ，部分的に本調査を実施した。その結果，坂ノ下遺跡では中世相当の溝状遺構が１条，集石遺構１基が確認された。遺物については，坂ノ下・後ヶ原両遺跡で縄文時代前期～晩期，弥生中期，古墳時代から近世の遺物が出土した。

２　遺構の認定と検出方法

各土層を１枚１枚掘り下げて，下位の土層が露出した段階で層表面を揃えた。その後，周辺土層と異なる色調を有するプランの有無を確認した。遺構が検出された場合は，遺構大小により１／４カットもしくは，1／２カットで埋土の色調や質，周囲の土層との相関関係，床や壁等掘り込み面の状況を確認して，遺構の有無を判断していった。坂ノ下遺跡内に10件，後ヶ原遺跡内に５件の遺構らしきプランを検出し精査を進めたが，明瞭な遺構と認定し得たのは，坂ノ下遺跡内の溝状遺構１条と集石遺構１基であった。なお，坂ノ下遺跡Ｌ・Ｍ－13～18区周辺においては，土坑状や柱穴状の黒褐色砂壌土を埋土とする遺構？が複数検出されたが，埋土内に軽石の小礫を含み近世以降と判断されるもの，床面が凹凸を有したり根が壁奥に広がったりするなど樹根と判断されるもので占められた。

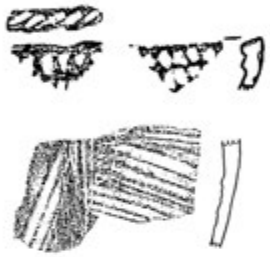
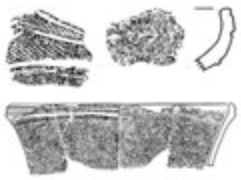
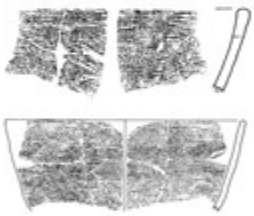
３　整理作業の方法

まず，遺物洗い・注記作業を行った。その後，石器実測委託に向けて石器の分類を行い，実測遺物の抽出及び実測委託を行った。土器等については，接合作業に向けて遺物分類等遺物整理を行い，土器接合を実施した。土器接合後，遺物の分類及び再整理を行い，実測分を抽出し，担当者の指導のもと，土器実測を作業員が行った。なお，器面調整等については，担当者が実測した。遺構及び遺物の図面トレース及び遺物拓本作業・レイアウトは，担当者の指導のもと作業員が行った。遺構位置図や遺物出土状況図等の図面作成及び原稿執筆は担当者が実施した。

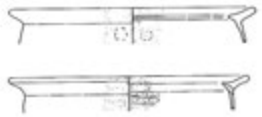
４　出土遺物の分類

坂ノ下・後ヶ原両遺跡の縄文時代から古墳時代の土器及び古代・中世の土師器の坏・埦については，資料が小片で，土器の全体像が捉えられない資料も多い。そこで,既知の土器研究をもとに，時代毎・部位毎に以下のように分類して報告することとする。Ⅰ～ⅩⅥ類は口縁部を中心とした土器分類で，既知の土器型式を特定しうる主たる特徴を含む属性である。縄文時代の深鉢形・浅鉢形,弥生時代～古墳時代の甕形・壷型土器の口縁部に相当する。一方，Ａ～Ｆ類で分類してあるのは，脚部等土器の特定部位における属性であり，土器型式の編年上は重要だが，土器型式を特定するには不十分と考えられる従属的属性である。古墳時代の甕形土器の脚部等の他,古代・中世の土師器の口縁部・体部・高台に相当する。

縄文時代

Ⅰ類	内外面共に無文である。胎土に滑石を含むことから，既知の土器研究から縄文前期相当の曽畑式土器や中期相当の春日式土器の可能性が考えられる。Ⅱ類の出土例があることから，曽畑式土器の可能性を見る。	
Ⅱ類		口縁部内外面及び口唇部に連点を施す。「坂ノ下2002」では、胴部資料に，縦位や斜位の沈線で文様を構成する前期比定の曽畑式土器が確認され，上述の口縁部資料も曽畑式土器と思われる。
Ⅲ類		外面に縄文を施した後，斜行沈線を施す（磨消縄文）。小片資料のため，既知土器型式との関連は不明である。
Ⅳ類		胴部から口縁部にかけて大きく外反し，口縁上位で逆「く」の字状に緩やかな外傾に転じる。屈曲部には刻目突帯が巡る。市来式土器の可能性を見る。
Ⅴ類		口縁部がやや外反し，口縁上端部で直口する。器面に縄文が施され，沈線により文様が作出される（磨消縄文）。辛川式土器や納曽式土器に比定される。
Ⅵ類		口縁部が外反し，口縁上端部で屈曲直口（やや内弯）する。口縁部外面には縄文が施され，横・斜沈線が巡らされる（磨消縄文）。一部は縄文が施されない。西平式土器の深鉢形土器に比定される。
Ⅶ類		頸部が大きく外反し，口縁部で屈曲・直口する。幅狭の口縁部外面には縄文が施され，横・斜沈線が巡らされる（磨消縄文）。器面に研磨を施す西平式土器の精製浅鉢形土器に比定される。
Ⅷ類		口縁部は，やや外反（直口）から内傾（内弯）するものまで多様である。黒川式土器の粗製深鉢形土器に比定される。
Ⅸ類		肩部が「く」の字状に屈曲し，口縁部が（上端部のみのも）外反する。口縁端部は玉縁状を呈する。内外面が黒色研磨され，黒川式土器の精製浅鉢形土器に比定される。
Ⅹ類		胴部外面の下半に，蓆目等の組織痕が残される。内面には黒色研磨が施され，組織痕文土器に比定される。

弥生時代

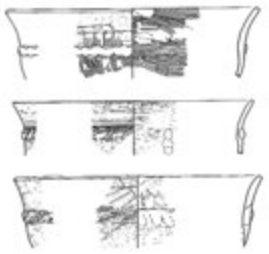
XI類		口縁部が逆L字状に外に張り出し,口唇部幅は2cm程である。口唇断面観は舌状を呈するいわゆる「鋤先口縁」である。黒髪式土器の甕形土器に比定される。
XII類		口縁部の上位を外側に「く」の字に折り曲げて口縁部の張り出しを作出する。口唇縁端部は，丸く舌状に仕上げる。須玖Ⅱ式の最後の段階の遠賀川以西系の特徴を持つか?

XIII類		口縁部が袋状に膨らむいわゆる「袋状口縁」を呈する壷形土器である。頸部と口縁部の境には明瞭な段が形成される。

古墳時代

甕形土器（口縁部～胴部）

XIV類		胴部上半でやや締まり頸部を形成し,口縁部にかけて外反する。頸部内面には,明瞭な稜を有するもの,不明瞭なものの何れも含まれる。胴部には，刻目突帯が巡らない。
XV類		頸部の締まりが弱く，口縁部の外反も弱い（ほぼ直行する）。胴部に,刻目突帯が巡らない。

XVI類		器形的には，XIV類に類似する。明瞭な稜を有するもの,不明瞭なものの何れも含まれる。胴部には,刻目突帯が巡る。

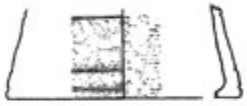
甕形土器（脚部）

甕脚A類		脚部内面の断面観が「∩」字状を呈する。
甕脚B類		脚部底面を平坦に均し,内面断面観が「π」字状を呈する。

甕脚C類		脚部底面中央部を摘み出し，脚部の内面断面観が「M」字状を呈する。
甕脚D類		脚部内面の断面観はB類に似るが，脚部の整形がやや雑な小型のミニチュア土器である。

壷形土器（底部）

壷底A類		底部尖端を平坦に仕上げる。
壷底B類		底部が丸底もしくは，尖底である。
壷底C類		底部尖端を平坦に仕上げる点ではA類に似るが，底部がやや高台状に丁寧に仕上げられる。

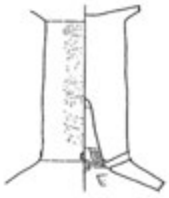
壷底D類		底部尖端が上げ底状に凹む。
壷底E類		底部外面が，下位に広がるジョッキ形を呈する。

高坏（坏部）

坏部A類		坏腰部が大きく立ち上がる。坏腰部の接合部は，沈線状の段差を有しない。

坏部B類		坏体部が円弧状に立ち上がる。坏腰部の接合部に，沈線状の明瞭な段差が作出される。

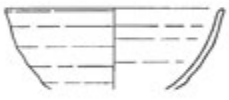
高坏（脚柱部）

高坏脚A類		脚柱部がほぼ円筒形を呈し，裾部がラッパ状に開く。脚柱部内面は中途で塞がり坏底部まで至らない。
高坏脚B類		脚柱部が緩やかに開き，裾部がラッパ状に開く。脚柱部内面は筒状を呈し，坏底部近くまで中空が達する。

高坏脚C類		脚形態はB類に似る。脚柱部内面は，脚部中途で中空が塞がり，坏底部まで至らない。

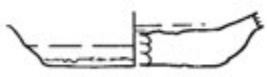
古代

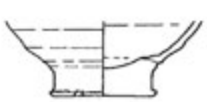
土師器埦（口縁部）

土師埦A類		口唇端部が端反らない 。

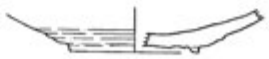
土師埦B類		口唇端部が端反る。

土師器杯・埦（底部）

土師底A類		底部の断面観が，高台状を呈しない。
土師底B類		底部の器厚がやや厚く，やや和高台に近い。高台縁端は張り出さない。

土師底C類		Bより高台が高く，高台縁端がやや外に張り出す。
土師底D類		Cより高台が高く，充実高台の器高が1cm程を測る。

土師底E類		中空高台の器高が1cm程である。

土師底F類		中空高台の器高が,0.4cm程と低い。

土師甕（口縁部）

土師甕A類		口縁部が逆L字状に,外に大きく張り出す。
土師甕B類		口縁部が,外側に外反する。A類より張り出しが弱い。

土師甕C類		口縁部上端が僅かに外に張り出す。張り出しはB類より弱い。口唇縁端部が,玉縁状を呈する。

第２節　層序

坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡周辺は川内川中流域に位置し，川が円弧状に大きく蛇行する内側に所在する。両遺跡は，河川堆積物により形成された河岸段丘が河川側に舌状に張り出す段丘上段面，中段面，下段面，各段面をつなぐ傾斜面の４地形により形成される。南側に位置する段丘上段面から北東方向に下る傾斜面が坂ノ下遺跡に相当し，続く下・中段面が後ヶ原遺跡に相当する。なお，現集落は舌状河岸段丘の上段面に形成され，海抜高もほぼ同じレベルの坂ノ下遺跡の北東側に位置する。現集落の西側の段丘直下の下段面が後ヶ原遺跡であり，その西側には耕作田が広がっている。前述のとおり，両遺跡は異なる段丘面で形成され，特に後ヶ原遺跡は，19世紀前半に川内川による浸食・堆積作用を受けていると判断され，両遺跡の地層の堆積状況は大きく異なる。

１　坂ノ下遺跡

VIa層～VIc層は何れも砂層であり，坂ノ下遺跡が所在する河岸段丘上段面及び傾斜面を形成する基盤層である。恐らくは，北東側に位置する現南瀬集落方向にも伸び，同集落の基盤層にも相当すると思われる。

VIa層上位が縄文後･晩期の遺物包含層である。基本的には明黄褐色砂層であるが，本層の上位に存在したと思われる黒褐色砂壌土（Ⅲ・Ⅴ層）が染み込み，やや濁りを呈する。VIb・VIc層は何れも無遺物層である。VIbからVIc層へと下位に行くほど堅く締まる。VIc層はやや桃色（赤色）を呈する。なお，下層確認のため，重機により地下４m程掘削を試みたが，本砂層以下に明瞭に異なる地層は確認されず，砂層が厚く堆積する状況が確認された。しかし，後ヶ原遺跡最北部の中段面で捉えられる河床礫層及びその上位のアカホヤ火山灰起源と思われる粘土層が，坂ノ下遺跡の河川堆積砂層以下にも存在する可能性がある。

層序	色調	遺構・遺物	備考
Ⅰa	暗茶褐色土層		暗茶色は堆肥に起因
Ⅰb	礫敷設層		道路敷設基盤層
Ⅰc	暗褐色砂層		小礫及び小軽石片を，比較的密に含む。旧耕作土
Ⅱ	暗褐色砂壌土層	近世	小礫及び小軽石片を僅かに含むが，Ⅰc層より疎である。Ⅰc層より黒色が強く，土も締まり堆積が安定的である。下層部分は小礫及び軽石の密度がより疎で，黒色が強まり，Ⅲ層に至る。
Ⅲ	黒褐色砂壌土層	弥生中期～中世	基本的に，小礫・小軽石片を含まない。Ⅴ層に酷似するが，Ⅴ層より灰褐色がやや強く，土の締まりがやや弱い。
Ⅳ	淡灰色砂層		水流作用により高所より低所に流れ堆積したもの。黒褐色砂壌土に粒子がやや大きい砂が混じる。
Ⅴ	黒褐色砂壌土層		Ⅲ層に酷似するが，Ⅲ層より黒色が強い。土が締まり，堆積がより安定的である。
VIa	明黄褐色砂層	縄文時代	VIa～VIc層は基本的に同質であるが，やや色調を異にする。縄文後･晩期の遺物包含層をVIa層とし，無遺物層を色調及び土質の締まり具合によりVIb・VIc層に分層。
VIb	淡黄褐色砂層		無遺物層。中間に白色砂質ブロックを含む。VIa層より，土質がやや締まっている。
VIc	淡赤黄褐色砂層		無遺物層。VIa・VIb層より桃・赤色が強い。VIa・VIb層より土質の締まりが強い。

第４図　基本土層図（坂ノ下遺跡）

Ⅴ層からⅢ層は，段丘上段面では削平を受けており残存しない。本来は，段丘上段面にも，河川堆積砂層（VIa～VIc層）の上位に黒褐色砂壌土層（Ⅴ層）が堆積していたと思われる。弥生時代から中世の生活面を形成していたと思われる黒褐色砂壌土層（Ⅴ層）は上段面西端部から傾斜面にのみ残される。なお，Ⅴ層・Ⅲ層の起源は本

来は同一であったと思われる。Ⅴ層が，人為的に，もしくは，自然による流れ込みで傾斜面に堆積したのがⅢ層と見なし得る。Ⅳ層は，図版10のとおり，Ⅴ層とⅢ層の間層で，上段面から傾斜面への雨水等による流れ込みを立証する砂粒堆積層が見てとれる。Ⅱ層は，数㎜～１㎝程の軽石粒を含む近世の包含層である。

２　後ヶ原遺跡

Ⅷ層は最下層に位置し，河床礫層が捉えられる。数㎜～１㎝未満程度の大粒の砂粒に円礫が無数に堆積する。この地層が捉えられるのは，最北部の地点のみで舌状河岸段丘の根元部（山手の麓に近接）の中段丘に位置する。この一帯が，かつて河床であった傍証と判断され，その時期は，上位層に当たる後述のⅦ層（アカホヤ火山灰層）以前に比定され，坂ノ下遺跡を含めた最古層であると判断される。

Ⅶ層も，後ヶ原遺跡の最北部の段丘中段面にのみ捉えられる。両遺跡で唯一確認される火山灰堆積層であり，粘土層を形成する。茶褐色を呈する色調や肌理の細かい粒子から，アカホヤ火山灰起源の噴出物の可能性を見る。

Ⅵ層は，河川堆積由来の砂層であり，坂ノ下遺跡のⅥa層と共通する。坂ノ下遺跡では，縄文時代の遺物を包含するが，本遺跡では，その上位（20㎝程度の深度）にのみ縄文時代～中世の遺物が出土し，以下30㎝程調査を試みたが，遺物は捉えられなかった。Ⅵ層は，全体的に酸化鉄の赤色や，ややグライ化した青灰色の色調が無数に縦走する。より低地部では湧水が激しく，酸化によるマンガン分やグライ化による青灰色の変色が顕著である。本層が捉えられるのは下段丘面においてであり，20㎝程度の深度をもって遺構・遺物が検出できなかったことや，湧水により発掘調査が困難であると判断したため，下段面では，本層より下位の発掘調査を行っていない。

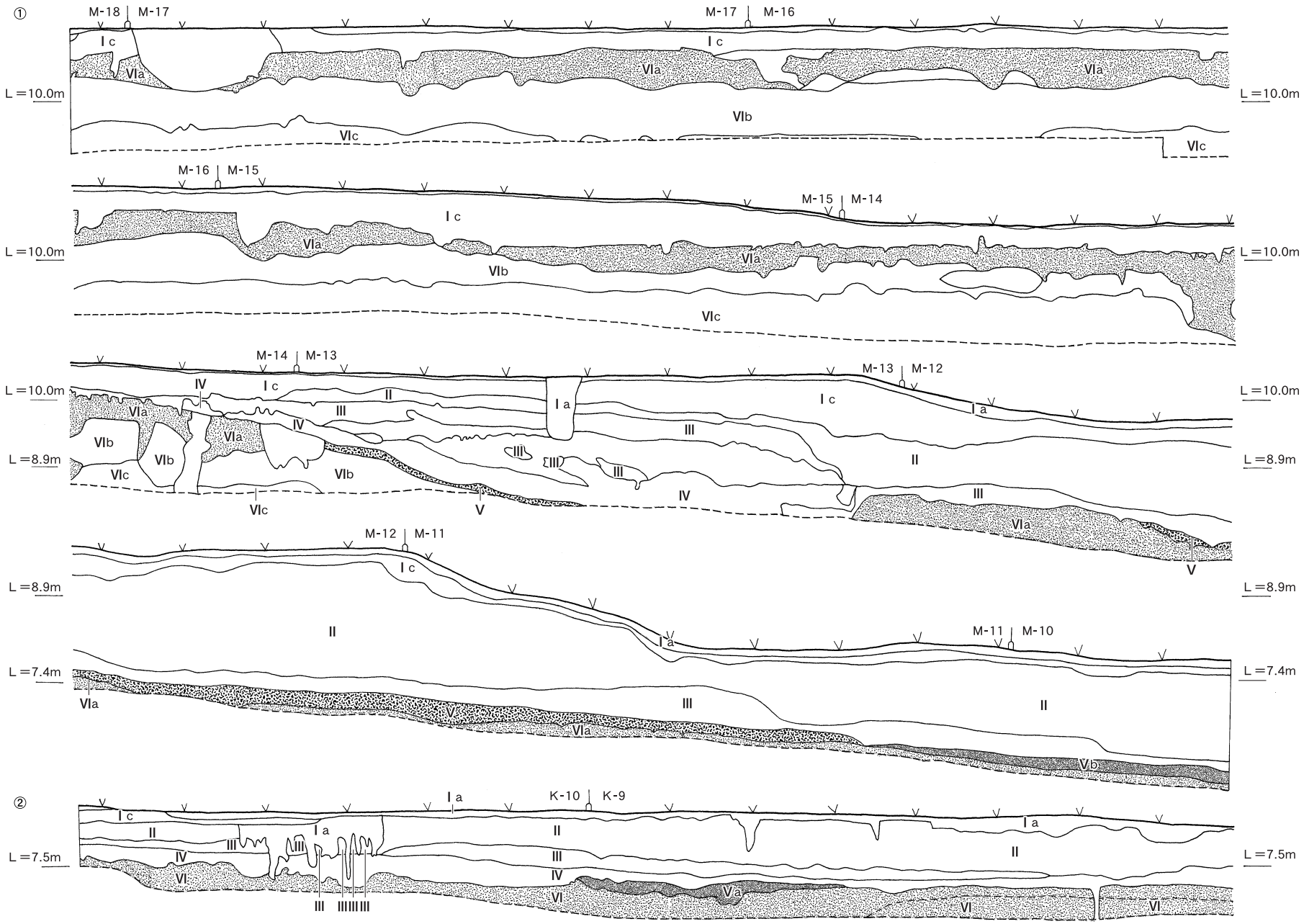
Va～Vc層は，本来は同質の黒褐色砂壌土層であると思われる。段丘下段面でもより低地部で湧水が著しく，色調が黒褐色～青灰色，堆積物が砂壌土～粘土へと下位になる程グライ化が顕著となり，その程度によりVa～Vc層と分層を行った。Va層は，10月時点の湧水レベルより上位にあたる層で，黒褐色砂壌土層であり，基本的にグライ化は見られない。Vb層は，黒褐色土が黒灰色を帯び，やや粘性が増した土質である。梅雨時の７月調査時点では，本層の上位辺りに湧水水位が位置していたことから，年間の湧水水位の最上位に相当する土層であると思われる。Vc層は青灰色粘土層であり，少雨期であった10月時点でも，湧水水位程度に位置していたことから，年間の湧水水位の最下位に位置する土層である可能性がある。なお，本遺跡の湧水は，基本的に東側の現集落側（高位）から西側の耕作田（低位）に向けて流れており，本層が地下水頭に相当するものと判断される。本層の土壌サンプルの分析により珪藻化石が検出されている。また植物珪酸体分析では，タケ亜科やススキ属など乾いた場所に生育する種類とヨシ属など湿潤な場所に生育する植物が捉えられ，乾いた場所や湿潤な場所が併存した可能性が指摘されており（参照Ｐ74・75），本Vb・Vc層が沼池床底であった可能性が高いことを示す。

Ⅳ層～Ⅱ層は，河川堆積による砂層である。下位にいく程，縦走するグライ化及び鉄分の赤化が見られる。Ⅳ～Ⅱ層中には，層位に偏在なく19世紀前半を下限とする陶磁器が包含されることから，その時期以降の河川氾濫による堆積層であろう。なお，同遺跡の下・中段面の境界辺り（Ｈ－６区）に設けたトレンチには，波状文が土層に残されており（写真１参照），氾濫時の川岸に残された河川水量の水位を示す痕跡と考えられる。堆積砂層の出自は，河川上流からの流土の可能性もあるが，特殊な出土遺物も含めて隣接する坂ノ下遺跡と類似することから，増水による段丘崖の崩壊，及びその堆積により形成された可能性が高いと判断される。

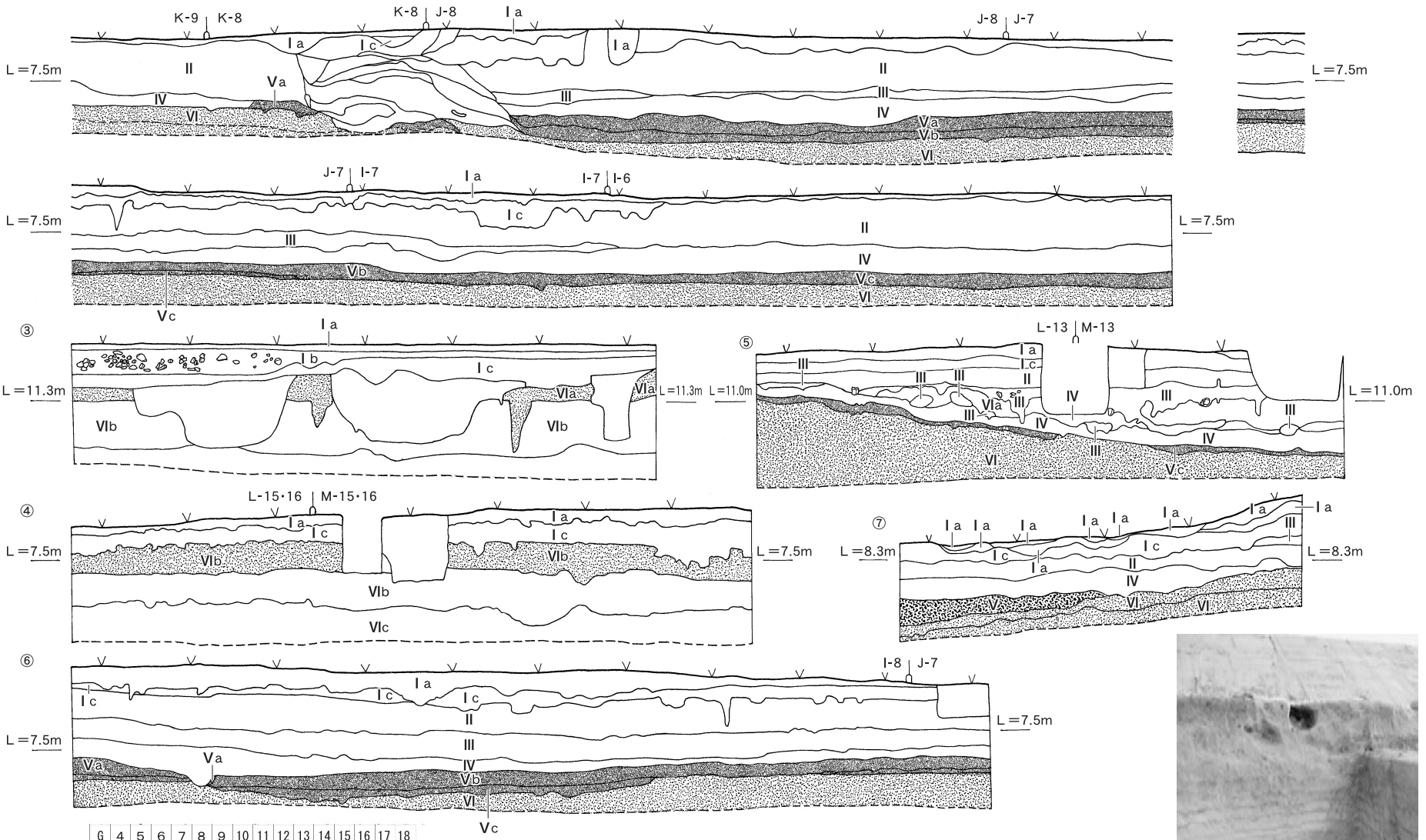
層序	色調	遺構・遺物	備考
Ⅰa	暗褐色砂層		現耕作土
Ⅰb	淡褐色砂層		小礫及び小軽石片を含む。旧耕作土
Ⅱ	淡黄褐色砂層	近世	近世における水性堆積層
Ⅲ	淡褐色砂層		近世における水性堆積層。水性作用による弱いグライ化もしくは鉄分により赤化した箇所が筋状に縦走する。
Ⅳ	淡灰褐色砂層		近世における水性堆積層。Ⅲ層より，グライ化及び鉄分による赤化が強くなる。特に，下層において顕著である。
Va	黒褐色砂壌土層	弥生中期～中世	Ⅴ層は，黒褐色砂壌土層を基本とし，下位に位置する程，水性作用によるグライ化が進み，青灰色が増し，粘性が強くなる。その度合いにより，殆どグライ化しないVa層，グライ化するVb層，グライ化が進み粘性を呈するVc層に分類。
Vb	黒灰色砂壌土層	弥生中期～中世	弱グライ層。
Vc	青灰色粘土層	弥生中期～中世	強グライ層。
Ⅵ	淡黄灰褐色砂層	縄文時代	本調査区におけるⅥa層（明黄褐色砂層）に相当する。Ⅵa層に比べて淡灰色を呈するのは，水性作用によるグライ化による変性作用を受けたためと思われる。より低い位置に所在する地点では，グライ化が進み，青灰色を呈し，粘性が強くなる。
Ⅶ	茶褐色粘土層		火山灰堆積層か。アカホヤ火山灰に由来するか。グライ化を受けていない。
Ⅷ	礫層		河床礫層。円礫や数mm～１cm未満程度の大きめの砂が堆積する。

※　本稿では，下記の様に定義づけて用語を用いる。
- 弱グライ層は，酸素欠乏による還元作用を受けた地層を示し，黒灰色を呈し粘性が弱い土壌をさす。
- 強グライ層は，よりグライ化が進み青灰色を呈し，粘性が強い土壌のことである。

第５図　基本土層図（後ヶ原遺跡）

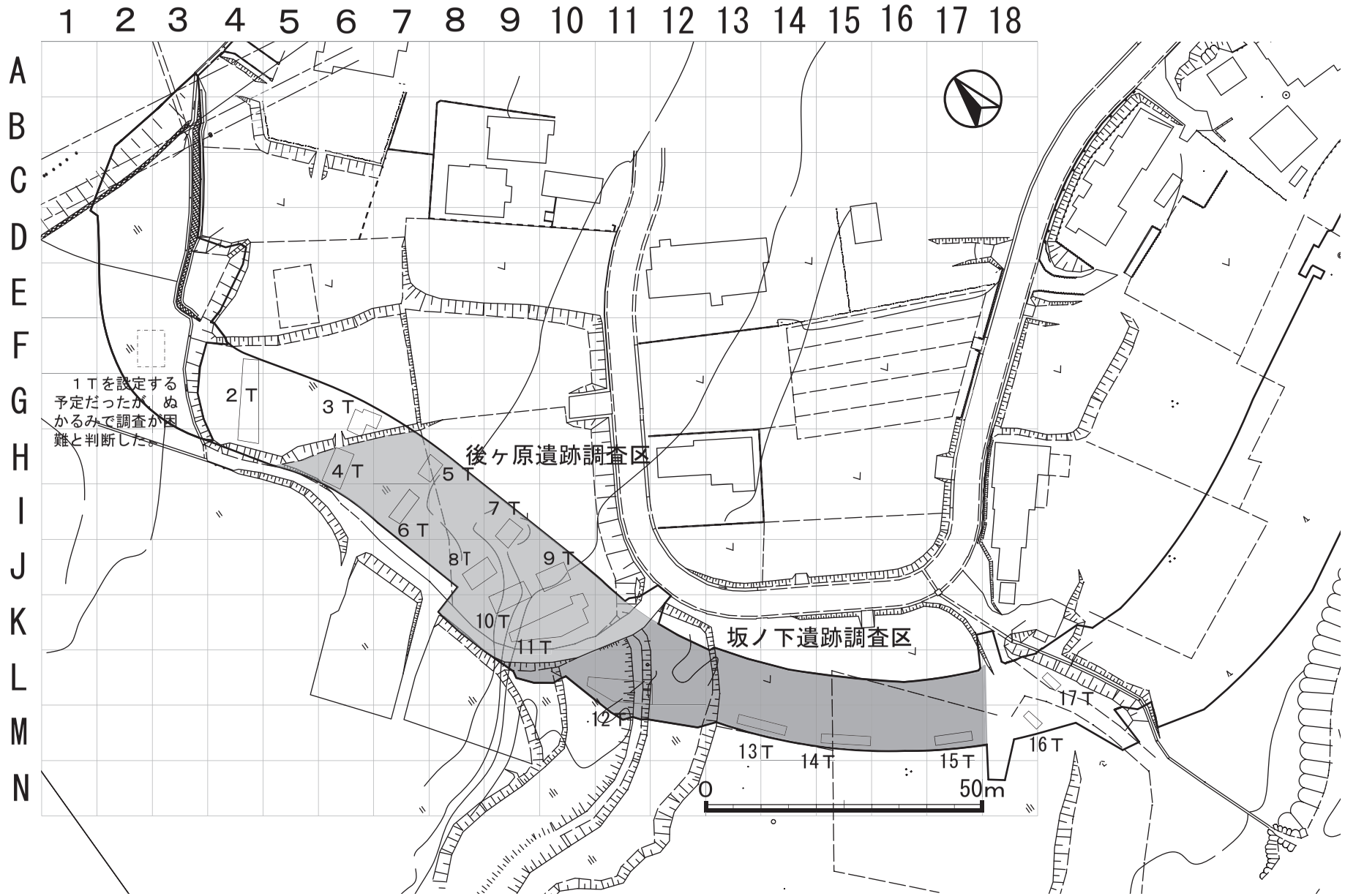

①
M-18
M-17
M-16
M-15
M-14
M-13
M-12
M-11
M-10
L＝10.0m
L＝8.9m
L＝7.4m
Ⅰc
Ⅰa
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅵb
Ⅵc
②
K-10
K-9
L＝7.5m

第６図　土層図（１）



第７図　土層図（２）

写真１　Ｈ－６区のトレンチ壁で捉えられた河川氾濫の波状文



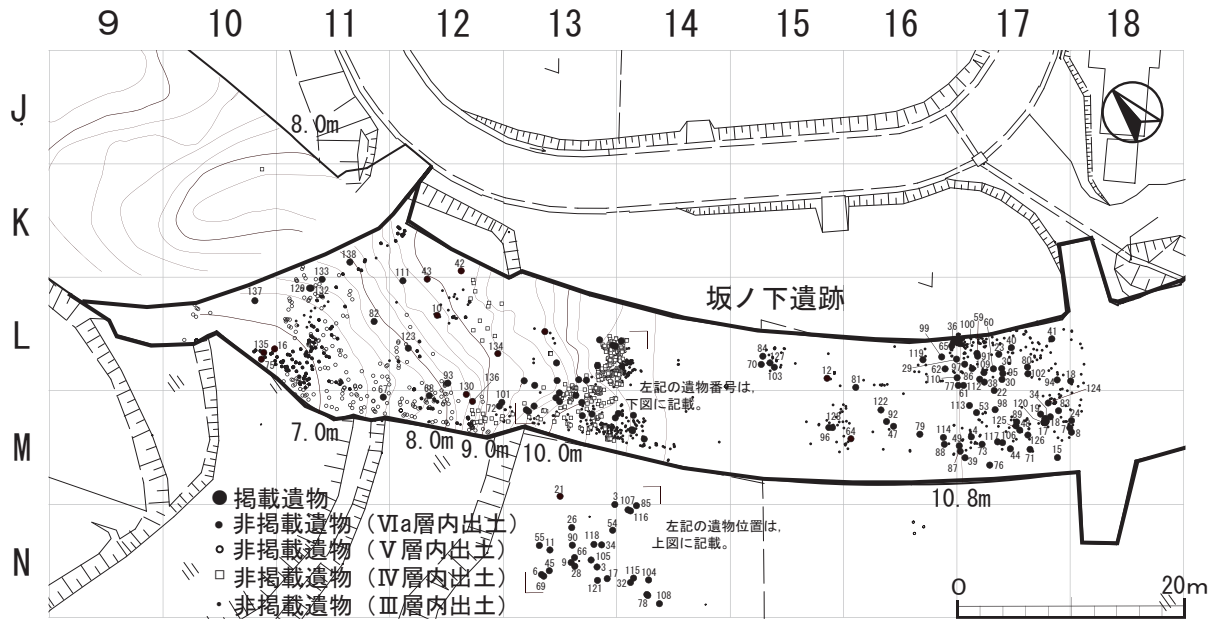
第８図　遺跡調査範囲及び地形図

４章　坂ノ下遺跡の調査成果

第１節　縄文時代の調査

１　調査の概要

本稿では，後世の包含層（Ⅱ～Ⅴ層）や現耕作土内（Ia～Ic層）出土遺物も重要と判断される資料については掲載してあるが，縄文時代の包含層と捉え得るのはVIa層であり，遺物もVIa層を中心に出土している。VIa層は，本遺跡の遺物包含層の最下層である。川内川に張り出した舌状沖積の河岸段丘を形成する明黄褐色砂層である。土器については，胎土内に滑石を含む不明土器他，既知の土器型式でいう曽畑式土器，市来式土器，辛川式（納曽式）土器，西平式土器，黒川式土器，組織痕土器が出土している。石器については，スクレイパー，石核，擦切石器，磨製・打製石斧，礫器，磨石・敲石類，石皿・台石類，砥石，軽石製品が出土している。なお，遺構は検出していない。



第９図　遺物出土状況図（縄文時代）

２　遺物

（１）土器

縄文時代の遺物は，出土レベルに差異は捉えられなかったことから，土器については，器形及び施文形態等の特徴から，既知の土器型式をもとに，Ⅰ類～Ⅹ類に分類した。分類の詳細は本稿「第３章　調査の方法　４　出土遺物の分類」を参照されたい。量的にはⅤ類～IX類が殆どを占める。

①　Ⅰ類土器（第10図－１）

１は本遺跡で唯一確認された，土器胎土に滑石を含む土器片である。明赤褐色を呈し，ミガキもしくは丁寧なナデが施され，含まれる滑石により光沢を有する。

②　Ⅱ類土器（第10図－２・３）

２は，表裏面の口縁上端及び口唇部に，ヘラ状工具による連点が施される。0.6㎝程の薄い器厚である。「坂ノ下　2002」の「遺物番号112」に類似する。３は，並行する右下り及び左下りの斜行沈線（条痕）で文様を作出し，左右の文様帯を２条の縦位の沈線で分割する。「坂ノ下　2002」の「遺物番号111」に類似する資料が報告されている。内面は器面剥落が顕著であり，水性作用の可能性を見る。

③　Ⅲ類土器（第10図－４）

本資料１点のみの出土である。内外面共にミガキもしくはナデを施し，漆黒の色調を呈するいわゆる「黒色磨研」土器である。外面には，丁寧な磨消縄文が施される。

④　Ⅳ類土器（第10図－５）

微隆起突帯上に，ヘラ状工具で斜位の刻みを施す。ヘラ状工具による粗いナデ調整で，明赤褐色の色調である。本類は，この１点のみの出土であるが，「坂ノ下　2002」

では「遺物番号116・117」の２点が報告されている。

⑤　Ｖ類土器（第10・11図－６～12）

６～10は，口縁部資料である。６は，口縁部の上下端に横位沈線を施し，その間隙に右下りや左下りの斜行沈線を施す。基本的文様構成は，11に類似すると思われる。口縁部の文様帯直下を１条の工具刺突による連点が横走する。７・８は同一個体と思われる。口縁部上下端の横位沈線間を２条の連点が縦走する。９は，斜位の短沈線（押し引き状連点？）を施した後，横位（斜位）沈線を施す。いわゆる「磨消縄文」に似る。10は口縁部上位が内弯する。上下端を横位沈線を施し，間隙は「コ」の字状の文様が描かれる。沈線が極細の細沈線である。丁寧なナデによりやや硬質の胎土である。文様形態や胎土など，本類の他資料より下記Ⅵ類に類似の特徴にも捉えうる。11・12は，胴部資料である。胴部中位に斜行縄文を施した後，上下端に横位沈線，間隙に斜行沈線を施し，三角形状（鋸歯状）のモチーフを描く。11には左右交互に反転させた半竹管文が縦走する。

以下，Ⅵ・Ⅶ類については，既知の土器型式上，胴部の特徴に共通点が認められるため，胴部をまとめて取り扱った。

⑥　Ⅵ類土器（第11図―13～21）

本類は，幅狭の口縁部に磨消縄文等が施される一群である。13～15は，何れもにぶい黄橙色の色調が共通する。13は，口縁部上位が大きく内弯し，縄文を施した後に下端に横位沈線を横走させ，上端には波状口縁に並行して２条の沈線を巡らす。波頂部には，内外面方向からの刻みがM字状に施される。「坂ノ下　2002」の「遺物番号11」に類似する。14・15は，口縁上端部が逆「く」の字状に屈曲内傾し，1.5㎝程度の幅狭の口縁部が作出される。14の口縁部には縄文が施され，15には二枚貝復縁部の貝殻押圧が施される。16は，胎土に乳白色の小礫を多く含む。口縁縁端部に１条の沈線を巡らし，幅狭の口縁部には２条の沈線を山形状に巡らせる。17～19は，胎土・色調が酷似し，同一個体の可能性もある。口縁部に２条の沈線が巡る。内面には部分的にミガキ痕が捉えられるが，外面調整がナデかミガキかの峻別は困難である。20は，上述資料より口縁部の張り出しが強く，口縁上端部は逆「く」の字状に屈曲する。21は，口縁上端部に１条，口縁下端部に２条の横位沈線を施す。上端の横位沈線上に１点，中位の沈線上に３点の横位の刺突連点が施されることから，上述Ｖ類の可能性もある。なお，胎土には金雲母が含まれる。

⑦　Ⅶ類土器（第11図―22）

本類は，この１点のみの出土である。口縁上端部に，微細な縄文が捉えられ，2条の横位沈線を巡らすいわゆる「磨消縄文」である。なお，細めと太めの異なる沈線により構成され，器面には丁寧なミガキが施される。「坂ノ下　2002」の「遺物番号121」に類似する。

⑧　Ⅵ・Ⅶ類の胴部（第11図―23～29）

23～25は，胴部内面に明瞭な稜が形成され，口縁部にかけて膨らむ器形であると判断される。胴部内面の稜が明瞭であることから，既知の土器型式では，辛川式（納曽式）土器（Ｖ類）より西平式土器（Ⅵ・Ⅶ類）に分類される。23・24は横位沈線上に刺突連点を巡らせる。25～27は，縄文施文後に沈線文を施す磨消縄文である。23～26の文様的特徴は辛川式や能曽式の特徴とも類似する。一方，27～29は典型的な西平式土器（Ⅵ・Ⅶ類）に比定される。27の微細な縄文原体は，「坂ノ下　2002」の「遺物番号119」に類似する。28は５条の横位沈線のみ施し，縄文は捉えられない。29は，内面に明瞭な稜が形成される。無文で，内外面ともに丁寧なミガキが施される。

⑨　Ⅲ類～Ⅶ類土器の底部（第11図―30～34）

30～34の何れも，やや上げ底気味の底部外面から，縄文後期比定の土器資料の可能性で報告したい。30は赤褐色の色調で，内外面ともにミガキもしくは丁寧なナデを施す。底部外面の中央部がやや凹みを呈する。31は明赤褐色の色調で，上げ底である。底部外面の凹みには乳白色の粘土が膜状に付着する。32・33は，共ににぶい黄橙色の色調を呈し，大きく「く」の字状に外に張り出す特徴的な底部下端部を有することから，同一個体の可能性が高い。34は，鉢状の器形を呈し，内外面ともにミガキが施される。Ⅵ・Ⅶ類の西平式土器の底部資料の可能性を見る。

⑩　Ⅷ類土器（第12図―35～53）

ア　口縁部（第12図―35～44）

口縁部の器形については，やや内弯気味の35～37，外傾（外反）気味の38～40，内傾する41に分けられる。口唇端部の形態では，大きく５つに細分が可能である。35・36の口縁部断面は，舌状を呈する。37～41は，いわゆる「玉縁口縁」である。36・39の胎土中には透明色の雲母が密に含まれ，37・38の胎土中にも，僅かながら雲母が含まれる。42・43は，玉縁口縁の口唇端部にリボン状突起が添付される。42の口縁部の張り出しは弱いが，43は，逆「く」の字状に大きく張り出す器形である。43については，リボン状突起の一部が剥落し，添付前の玉縁口縁が露出する。リボン状突起の添付前の段階で，玉縁口縁を丁寧にナデ調整しているのが明瞭に捉えられる。44は，

口唇端部を外側に摘み出している。

イ　胴・底部（第12図―45～53）

45は肩部資料である。内面の輪積み痕が明瞭に捉えられる（写真２参照）。46～53は，底部資料である。46は底端部が外に張り出し，黒川式土器の粗製深鉢形土器に特徴的に見られる。底部の器厚最薄部は0.4㎜と極薄く，底部が極めて平坦に仕上げられることから，平らな板等を敷いて押圧成形を施したと推察される。「上水流2007」の「遺物番号445・467：図版39・40」で指摘されている底部内面の器壁に炭素分の吸着が，本資料にも見られる。但し，本資料が，「上水流　2007」で定義付ける半粗半精製土器であるかは，不明である。47～53は，脚状を呈する底部資料群である。「坂ノ下　2002」の「遺物番号199」に類似し，同稿では「弥生土器の甕」と紹介されている。本稿では，既知の土器研究から充実脚台に相応する口縁部資料（山ノ口式土器等）が確認されていないことから，縄文時代晩期鉢形土器の底部の可能性で報告したい。なお，断面観察により，47～50・52は，丸底状の器体と脚台を接合して底部成形がなされているのが見てとれる（写真３・４参照）。

⑪　Ⅸ類土器（第12・13図―54～63）

ア　口縁部（第12・13図―54～60）

54は，恐らく底部から胴部にかけて外に張り出し肩部を形成し，口縁部にかけて屈曲内傾し，さらに鋭角的に「く」の字状に屈曲・外反して口縁上縁部に至る玉縁口縁である。55～58は，やや丸みをもつ肩部が逆「く」の字状に内傾し，口縁上端部で「く」の字状に外に張り出す。55～57の玉縁口縁には，外面には沈線が施されない。58の口縁上端部の沈線内には，赤色顔料が付着する。59・60は，肩部を形成せずマリ状の器形を呈する。59が口縁端部で屈曲し外側に張り出す。60は玉縁口縁で，胴部に沈線が巡らされる。

イ　胴部（第13図―61）

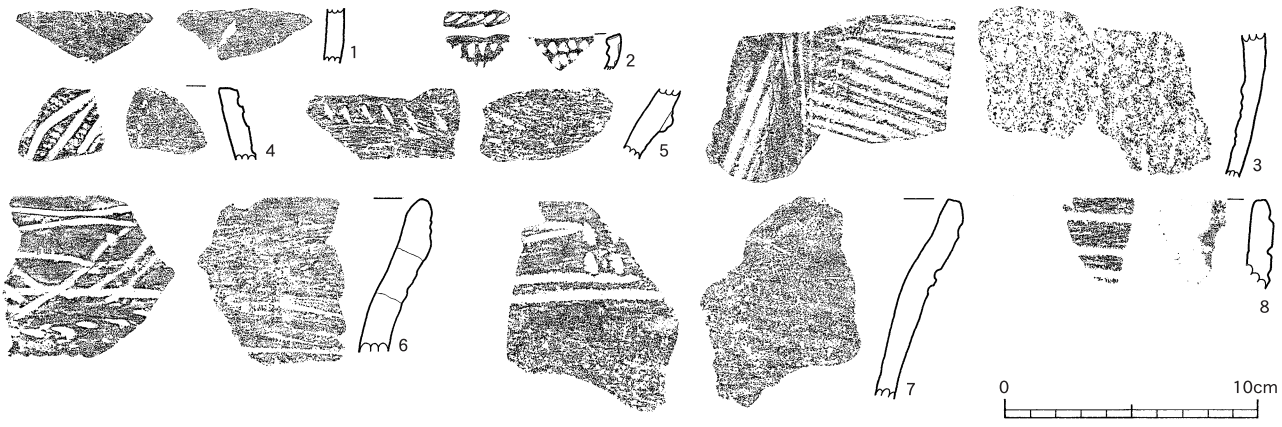
61は，肩部から内傾してステップを形成し，頸部で「く」の字状に屈曲外傾する。２条の沈線が巡り，「坂ノ下2002」の２点「遺物番号133・134」に類似する。同掲の，沈線文で三叉文を形成する滋賀里式系の「遺物番号133」と同一個体の可能性がある。石英・長石・角閃石等の鉱物が多く含まれ，他の土器資料に比して特異である。

⑫Ｘ類土器（第13図―62・63）

62は，胴部中位から底面に至る組織痕土器片であり，器面に蓆目が残される下半と輪積み成形による上半が捉えられる。63には，比較的肌理の細かい蓆目が残される。62・63（特に63）は，一般的な組織痕土器同様に内面の器面調整が丁寧である。

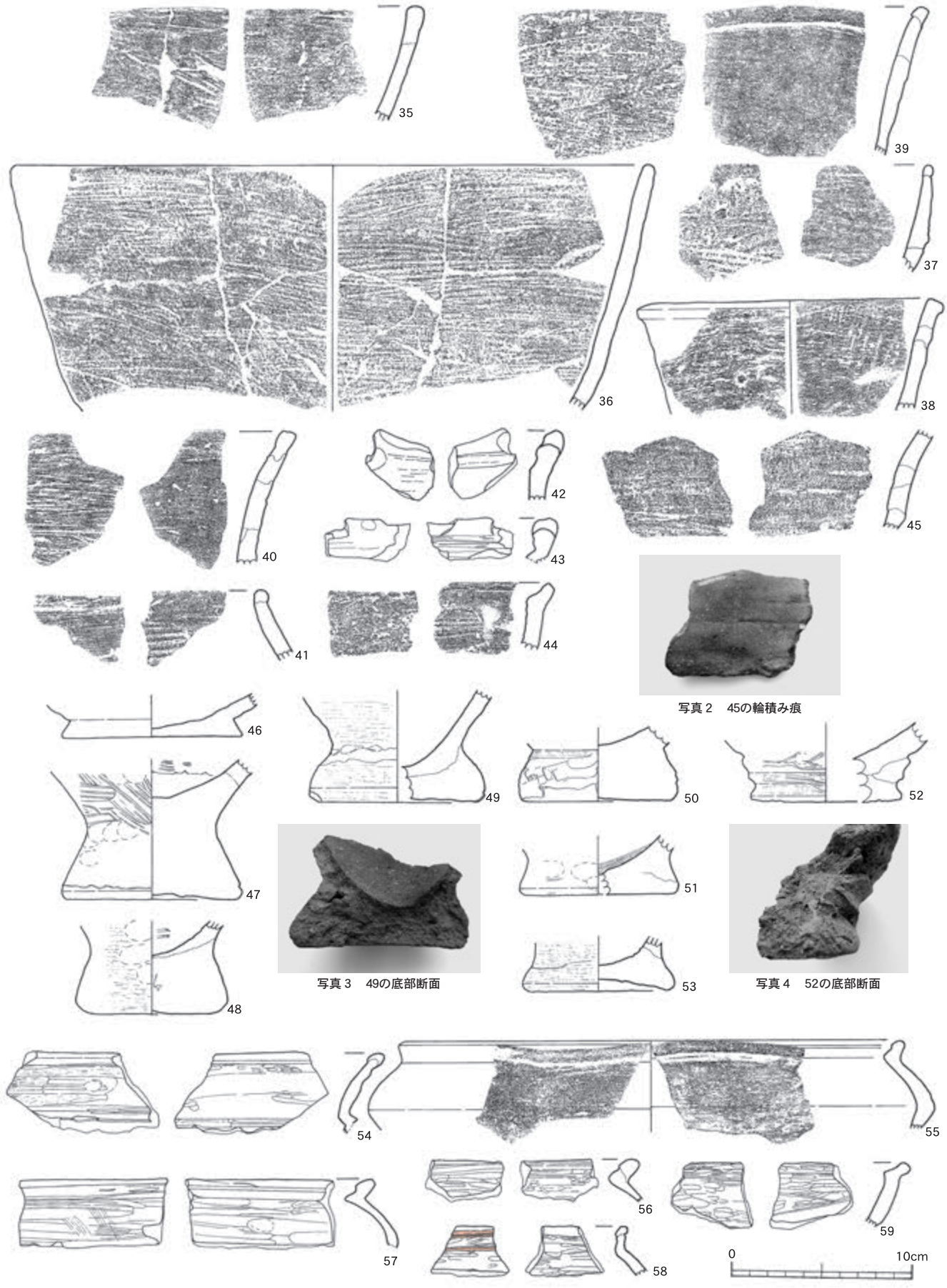
⑬　その他（第13図―64～66）

64・65は円盤状土製品である。縄文晩期土器の粗製深鉢に見受けられる毛羽状の粗いナデ調整が施される。何れも側縁が磨滅しており，使用の痕跡が窺える。64は，外面に炭化物が厚く付着する。円盤状土製品の用途の可能性の一つに挙げられるいわゆる「メンコ」と考えるには，メンコの衝撃に炭化物の付着が耐えられるか疑問が表出する。66は，竹串状の工具で三叉文を描き，中央部に同工具による縦位の連点を施す滋賀里式系土器を素材とする。二重に巡らされた長楕円の外側の円に即して打ち欠いてある。用途は不明である。本資料と同様，上述61も滋賀里式系土器であるが，本資料は色調が浅黄色でナデ調整である点，文様が二重の長楕円である点など61とは特徴を異にし，少なくとも２点以上の滋賀里式系土器の存在が捉えられる。

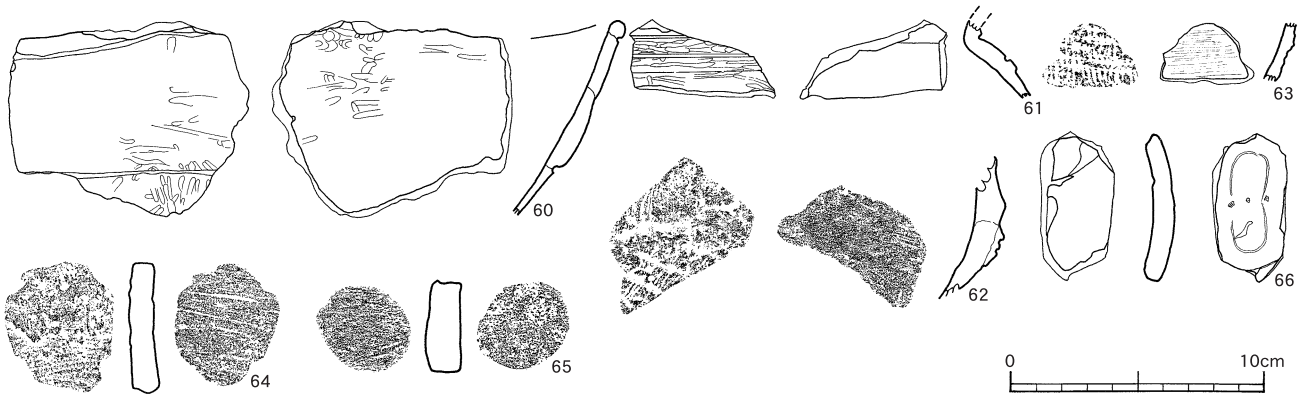


第10図　遺物実測図（１）Ⅰ～Ⅳ類土器（縄文時代）

第11図　遺物実測図（２）Ⅴ～Ⅷ類土器（縄文時代）



第12図　遺物実測図（３）Ⅷ・Ⅸ類土器（縄文時代）



第13図　遺物実測図（４）Ｘ類土器（縄文時代）

（２）　石器

縄文時代の遺物包含層であるVIa層を中心に，土器同様に後世の包含層（Ⅲ層～Ⅴ層）等出土遺物も重要と判断される資料については掲載した。縄文時代遺物包含層のVIa層内の上位には，弥生･古墳時代相当の土器も出土しており，厳密に縄文時代相当と断定できない面もあるが，既知の石器研究や遺物出土状況から縄文時代相当遺物として報告したい。時代編年が明確な共伴土器の殆どが縄文後・晩期であることから，以下報告する石器についても，縄文後・晩期相当の可能性が高いと判断される。主な器種は，スクレイパー，石核，擦切石器，磨製・打製石斧，礫器，磨石・敲石類，石皿・台石類，砥石，軽石製品である。なお，石器の資料個体総数は494点であり，このうち72点を図化した。

①　スクレイパー（第14・15図―67～73）

11点中７点図化している。67は，針尾系黒曜石を素材とし，三稜を有する器形である。周縁に表裏両面側から微細な押圧剥離を施す。掻器や削器の可能性がある。本遺跡で唯一確認される黒曜石資料である。68～71は，頁岩質ホルンフェルスを素材とする。本遺跡では，同石種を素材とする打製石斧の比率が高いが，同石種の剥片があまり確認されない。68～70は礫皮面を有する縦長剥片を素材とすることから，石斧整形剥片を利用した可能性を推察する。スクレイパーは，刃部形態により切断対象が想定されうると思われるので，刃部形態にも着目する必要がある。68は，右側縁に表裏両面側からの押圧剥離により刃部を作出する。上縁部に裏面側からの調整剥離も捉えられることから，基部作出の可能性もある。刃部は，やや張り出す円弧状を呈する。69は，右側縁に表面側から丁寧な押圧剥離を施し，やや内弯する刃部を作出し，鎌状の器形を呈する。70は裏面側から押圧剥離により，比較的雑な刃部を作出する。表面上位に粗い剥離を施し，基部を作出する。刃部が逆「３」の字状を呈することから，69と同様な中空で切断する鎌状の使用が想定される。71は，打製石斧の刃部欠損品を再利用した可能性を見る。表面上縁の割れ口に，表裏面側から調整剥離を施す。72は，扁平な安山岩を素材とする。同石材を利用するのは，他に打製石斧などに４点見られる。本資料は，押圧剥離により直線的な刃部を作出する。73は，本遺跡唯一のチャート製である。三稜を有する円柱状の器形である。三稜中，左側縁の稜はやや鋭い。頂部は潰れており，楔や錐の使用の可能性もある。

②　石核（第15図―74～76）

石核は，7点中３点図化している。74は，鉄石英（赤色チャート）製である。上面を一撃し打面を形成し，同打面から周縁を巡るように剥片を取る。その後，形成された面を周縁から打ち込み，剥片を採取する。最後に，上面からの一撃で大きな剥片を採取する。結果的に，三角錐状の器形が作出される。75は，上牛鼻産の黒曜石で，綺麗な剥片採取が困難な石材である。基本的に，何れの面においても，面の周縁から中心に向けて敲打し剥片を採取する。最後に，上面からの一撃により大きな剥片を採取して廃棄する。76は，針尾系黒曜石で，比較的良質な剥片が採取できる。かなり小片で，剥片採取が進んだ結果と考えられる。良質な石材なためか，比較的縦長の剥片が採取されている。上面を，一撃により打面形成をする。その後，正面は上面側から，裏面は左右の側面側からの敲打により剥片を採取する。

③　擦切石器（第15図―77）

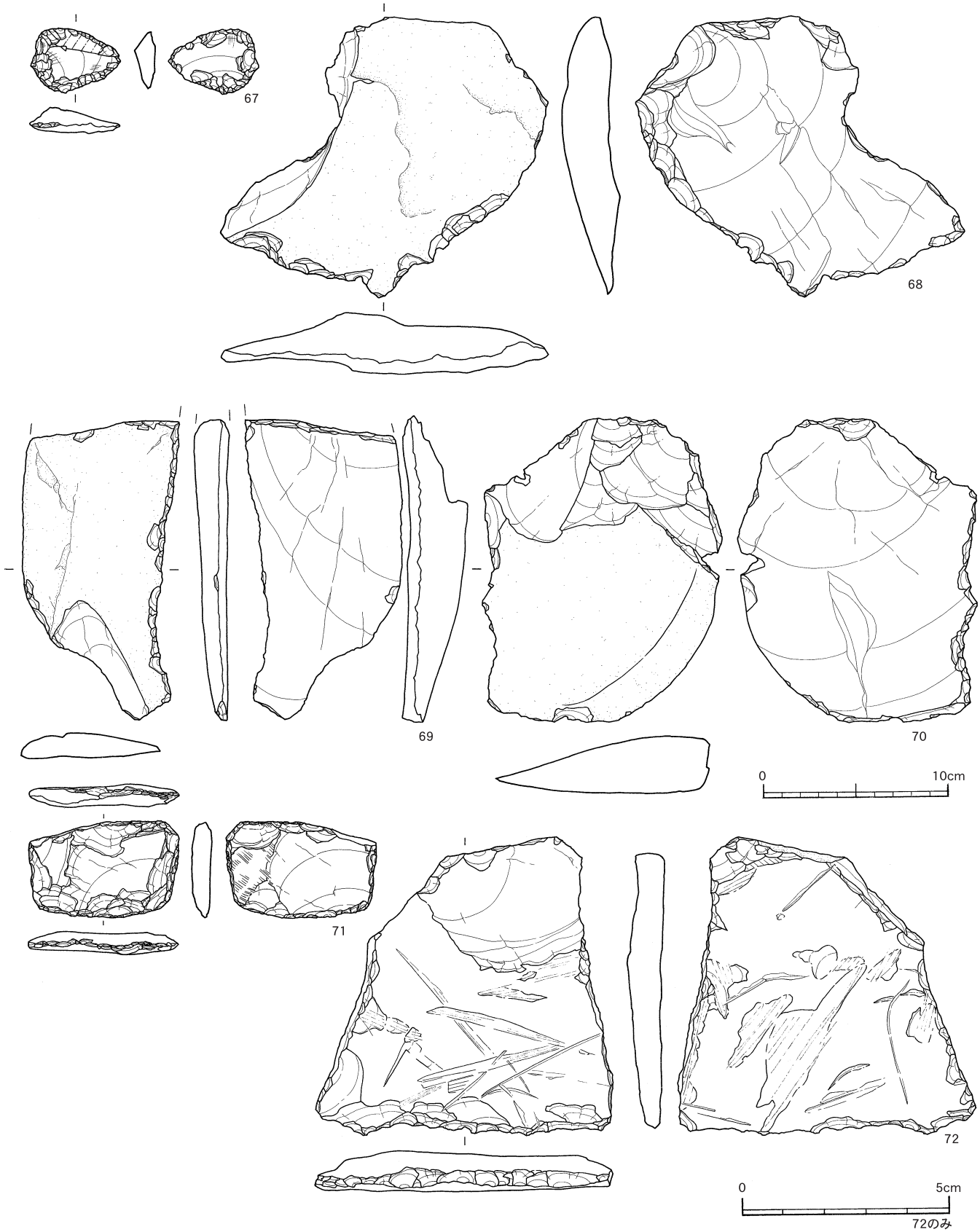
本稿唯一の器種である。石材は，頁岩質ホルンフェルスである。通常の頁岩より火山ガラス等が多く含まれる。器厚0.3㎝程と扁平で，全面に研磨が施される。上下縁端（特に下縁端）は，やや鋭角状に仕上げられる。

④　磨製石斧（第15図―78～82）

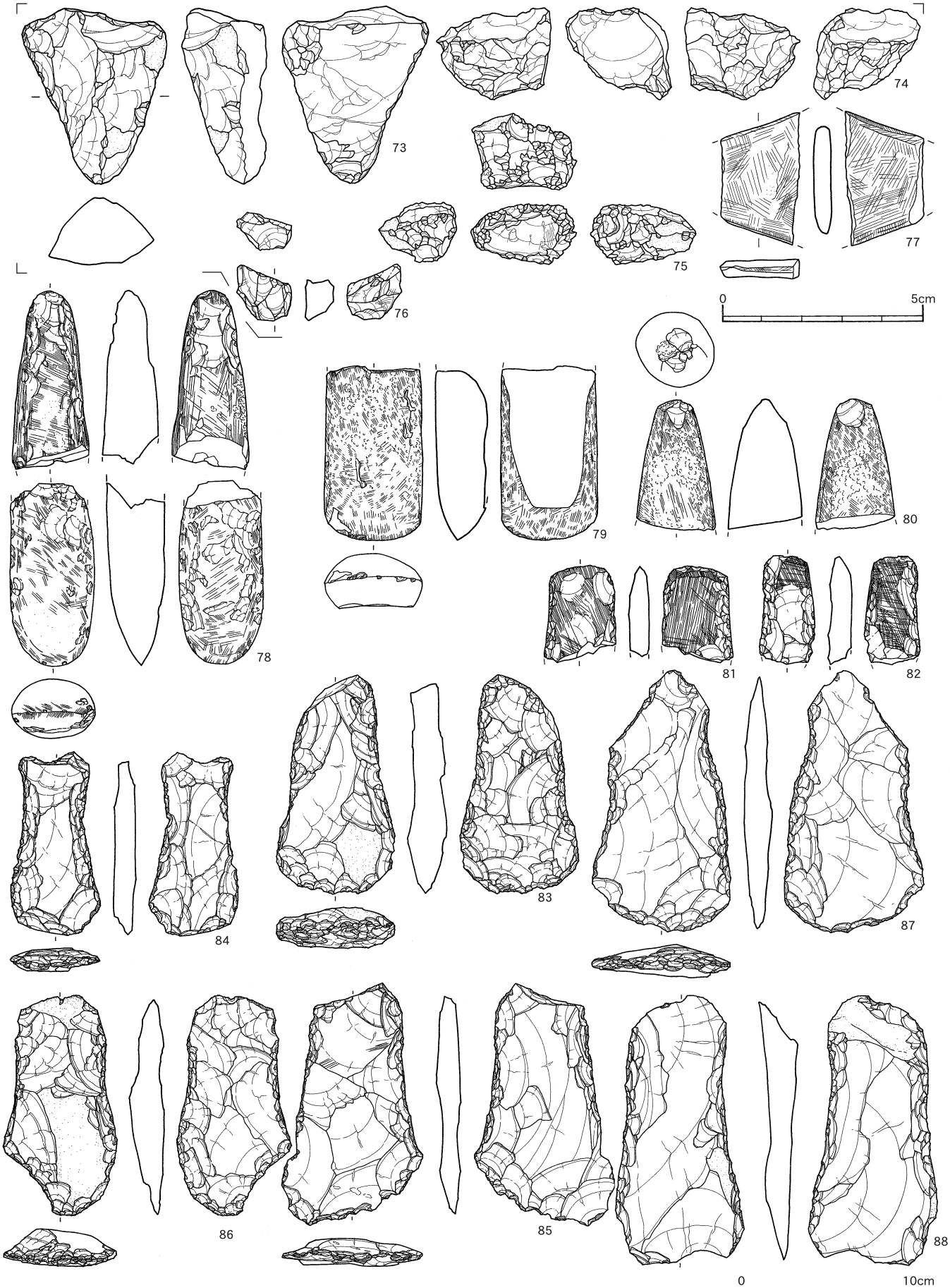
７点中５点図化している。頁岩質ホルンフェルス製が大半である。78は，別個に出土したが２点が接合した。平面観がやや弯曲する。両側面の上半には光沢をもつ平坦面が形成される。光沢は，着柄による使用痕と思われる。また，右側面の光沢のある平坦面上位は僅かに抉りを呈し，着紐痕の可能性もある。現況からは，スポック状の柄を有したのか，着紐により柄を装着したのか等，柄の装着方法を判断できない。表面上半は微細な凹凸を有し，下半は光沢をもつ。一方，裏面上半は光沢を有し，下半は微細な凹凸を有する。表裏面の上半及び下半に，正対する特徴（光沢及び微細な凹凸）が見られる。切断対象である木材と刃部の当たり方や体部と着柄具との摩擦の関係に起因すると思われる。79は刃部である。器形が定型的で整形が丁寧である。体部中位で欠損し，裏面の刃部側が剥離することより，切断対象である木材に接する裏面側に，衝撃力が及んだ証左であろう。なお，体部中位で真直ぐ欠損しており，装着する柄の痕跡を示す可能性もある。80は基部である。両側面に，極平坦面を作出する。両面には，研磨により磨かれる箇所と微細な凹凸を有する面がある。なお，表裏面の微細な凹凸を観察すると，両面ともより深く凹凸の程度が強い箇所が捉えられ，位置的に相対する。これは，78に捉えられる右側面の上位の僅かな抉りの位置に，ほぼ合致する。着紐痕の可能性を見る。81は，磨製石斧の基部欠損で捉えた。左右の側縁に剥離を施すことより，打製石斧への転用の可能性もある。上縁から2.5㎝程の位置にはエッジの潰れがあり，着紐痕の可能性がある。82も基部欠損で図化したが，上端が鋭いエッジを有することから，楔状の刃部の可能性もある。一方，両側縁を中心に剥離整形が施され，上縁から2.5㎝程の位置にはエッジの潰れがある点など，81に類似し，打製石斧への転用の可能性も一考である。本稿唯一の変成岩製である。

⑤　打製石斧（第15・16図―83～104）

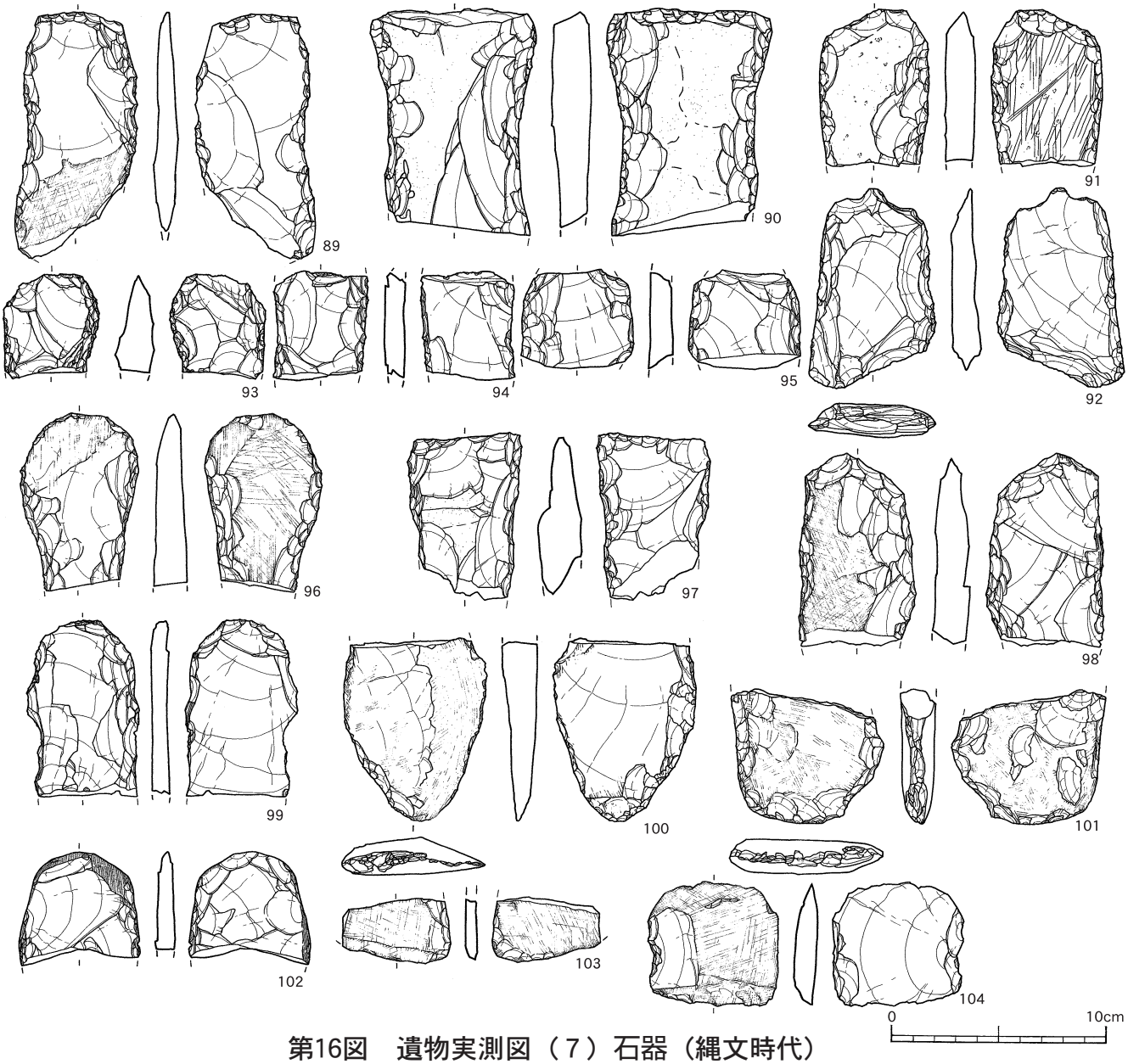
31点中22点図化している。90・91・101は安山岩製で，他は頁岩質ホルンフェルスがほとんどである。表裏面の認定は，断面が凸状を呈する面を表面とし，より平坦面に近い面を裏面として図化した。83～88は一部欠損はあるものの，ほぼ原形をとどめ，扁平打製石斧（器形的には有肩石斧）に分類しうる。全て，横長剥片を素材とする。86は，刃部が斜位に欠損するが，刃部再加工を施す。欠損により器形が左右非対称である。左右側縁部の使用痕範囲も左右相対せず，特に表面左側縁（裏面右側縁）に使用痕が偏在する。刃縁端に鋭いエッジが捉えられることから，鎌の可能性も考えられる。87は，抉り部を欠損する。88・89は，刃部を欠損する。打製石斧は，刃部を欠損すると再加工により再整形を施す事例が多く，基部及び刃部の欠損品を器形的に区別するのは困難である。本稿では，欠損品の使用痕の状況を鑑みて報告したい。90～95は，抉り部の欠損により基部のみを残す資料である。刃部に一般的に捉えられる光沢を伴う使用痕が，上縁部に伴わないことから基部資料と判断した。90は安山岩製で，打製石斧資料としては３点出土する内の１点である。比較的軟らかく，加工の容易な安山岩製であるためか，左右対称の定型的器形を有する。節理が中途でクラッシュしやすい頁岩製より，剥離の方向が予想しやすく，理想とする器形により近い器形を呈する資料と見なし得る。また，石材としての軟らかさもあり，使用痕がより捉えやすい。抉り部側縁の磨滅が左右相対せず，ややズレながら残される。着紐をずらしながら結えた可能性を示すか，または基部上縁のエッジが潰れない箇所が捉えられることから，基部をソケットに差し込むタイプの柄は想定しにくいと思われる。91は，安山岩製である。90の基部幅が7.5㎝程と幅広であるのに対して，本資料は５㎝程と幅狭である。使用上，衝撃を受けることが少ない基部が欠損することは考えにくく，再加工の可能性も低いと考えられる。よって，基部は本来の形や大きさをとどめていると考えられることから，少なくとも製作目標とされる打製石斧のイメージには，90のような幅広タイプと91のような幅狭タイプの２種類があることが推察される。なお，幅広タイプは90のみで，他の資料は幅長3.7㎝から５㎝の間に収まる幅狭タイプに分類できる。96～99・102は，器形的には基部に捉えうるが，縁端部にとろっとした光沢のある使用痕が捉えられることから，刃部の可能性を否定できない資料である。96はラケット状を呈するが，上縁部を顕著な使用痕が巡る。97は，上縁が方形を呈し定型的である。本遺跡資料を含む打製石斧の基部は，概して側縁部の調整が雑で定型的ではないことから，図面配置が逆位で，上縁が刃部に相当する可能性もある。但し上縁部に，顕著な使用痕は認められない。100～103は，刃部のみ残す欠損品である。100は刃縁の調整剥離が比較的細かく，器面全体に使用による磨滅が及ぶ。抉り部が直線的に破断する。101は，安山岩製である。表面左縁は断面観が舌状であるのに対して，右側縁はエッジを呈する。右側縁を刃部とするナタ状の使用法も一考である。102は最厚部が0.8㎝で，103は器厚0.4㎝と共に極薄である。一般的な鍬用途にしては，器厚が薄く頼りない印象であるが，明瞭な使用痕が周縁を巡り使用は顕著である。104の皮面には擦痕が入ることから，打製石斧の欠損品と捉えた。



第14図　遺物実測図（５）石器（縄文時代）



第15図　遺物実測図（６）石器（縄文時代）



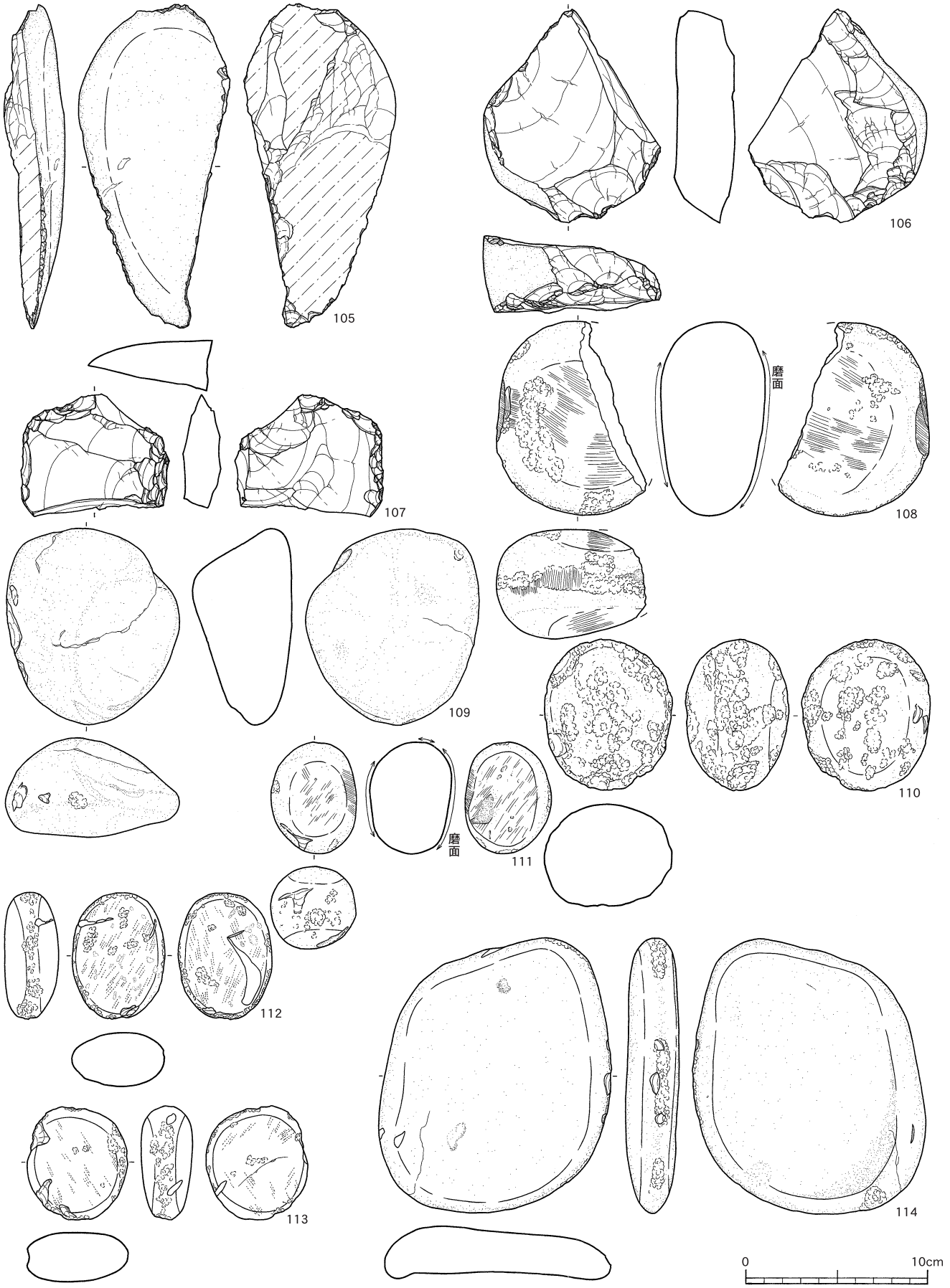
第16図　遺物実測図（７）石器（縄文時代）

⑥　礫器類（第17図―105～107）

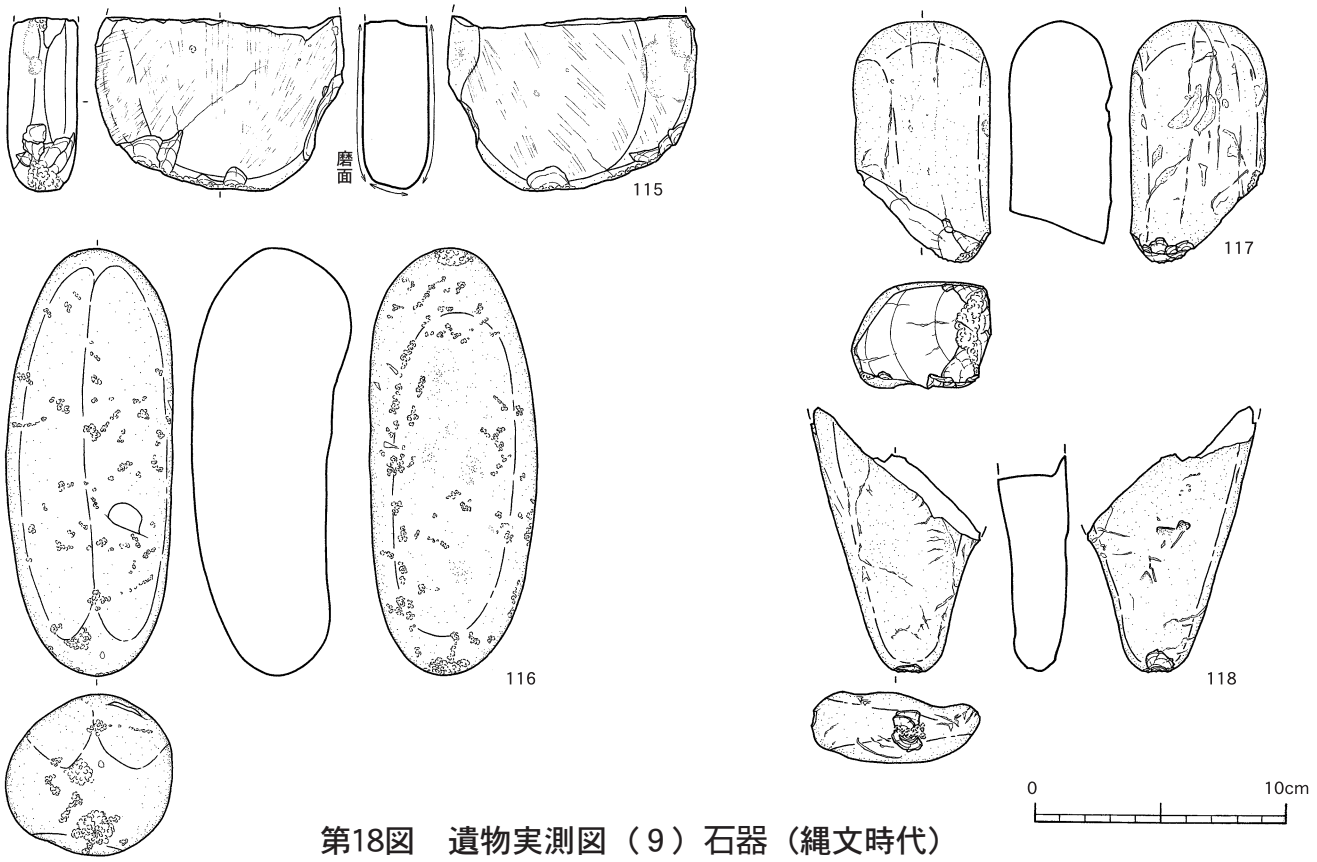
６点中３点を図化している。３点とも，頁岩質ホルンフェルスである。105は，表面左側縁及び上縁に押圧剥離状の調整を施す。106は，下縁に錐状の剥離を施し，刃部を作出する。刃部に一部潰れがあるものの，使用痕は顕著ではない。107は，下縁部に比較的細かな調整を施し，刃部を作出する。本遺跡では打製石斧に特徴的に使用されている頁岩質ホルンフェルスを使用していることや，表面左側縁に打製石斧の抉り部に見られる刃潰しが捉えられることから，打製石斧欠損品の二次利用の可能性を見る。

⑦　磨石・敲石類（第17・18図―108～118）

39点中11点図化している。磨面や敲打痕等の有無は同一資料中に混在しているため，機能的に区別せず磨石・敲石類と一括して扱うこととする。108～113は，円礫を素材とする。108は，側面及び表裏面に敲打痕を有する。側面には，集中的な使用により部分的に平坦面が形成される。109は表面左側面に剥離痕，下面に微細な敲打痕が見られる。110は，側面を中心に，全面的に敲打痕を有する。111は敲打痕は部分的であり，擦痕が捉えられる。112・113は，やや扁平な礫素材である。112・113ともに，側面を中心に敲打痕を有し，部分的に深い敲打欠損が見られる。114・115は，扁平な石を素材とする。何れも，側面に部分的な敲打痕を有する。115の下面の敲打痕は顕著であり，器面に擦痕及び磨面を有する。116～118は，棒状の礫を素材とする敲石である。116は，上下面に浅い敲打痕を有する。117は，下面の割れ口が敲打により潰れている。118は，下面に剥離痕及び敲打痕を有する。



第17図　遺物実測図（８）石器（縄文時代）



第18図　遺物実測図（９）石器（縄文時代）

⑧　石皿・台石類（第19・20図―119～125）

26点中７点図化した。119は表面のみに擦痕及び磨面が捉えられる。表面の敲打痕は極浅く，下位に集中する。手握の磨石・敲石として用いられたか，左側面や側縁に敲打痕を有する。120は，表面に擦痕が縦走し，凹み状の敲打痕が２か所捉えられる。121の表面の特異な凹みは，自然に生じたものである。側面は円形に面取りされており，目的・用途は不明である。122は，偏平な砂岩を使用する。123は，表面右下の角部に，集中的な敲打痕を有する。本資料自体は，本来かなりの重さを有していたと想定されることから，角部の敲打痕は，欠損後の使用により生じたと考えられる。121・124・125は，扁平な花崗岩を石材とする。121には敲打痕は捉えられないが，124・125は表面に敲打痕を有し，台石の機能も有していたと考えられる。

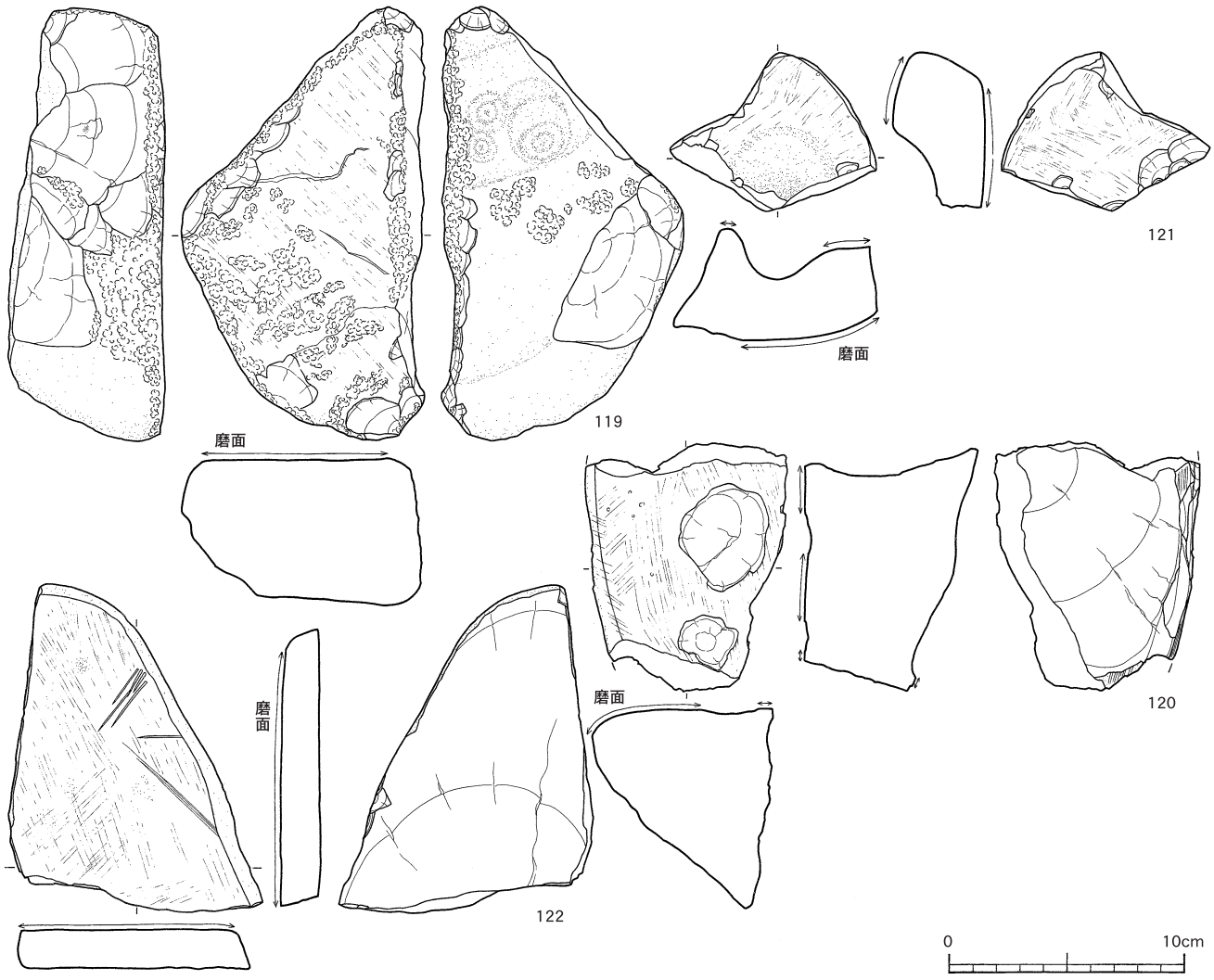
⑨　砥石（第20図―126～128）

火山ガラスを含む石材である点や，集中的使用による顕著な長楕円状の凹みを有することを特質として砥石に分類し，その特徴が顕著で無いものは石皿・台石とした。３点中３点図化している。126は，火山ガラスを含む砂岩である。表裏面の中央部が，顕著な使用により大きく凹み，擦痕及び磨面を有する。表裏面だけでなく側面も磨ってあり，側面には部分的に敲打痕が捉えられる。据え置きのほか，手握して用いた可能性を見る。127は，126以上に火山ガラスを密に含み，砂粒の肌理が細かい。表面は人為的に平坦であり，擦痕が縦･斜走する。128も，火山ガラスを多く含む砂岩製である。表裏面ともに長楕円状に凹みを呈する。表裏面の長楕円の凹みに即して擦痕が縦走し，長楕円外側には横走する擦痕が刻まれ側面に延びる。

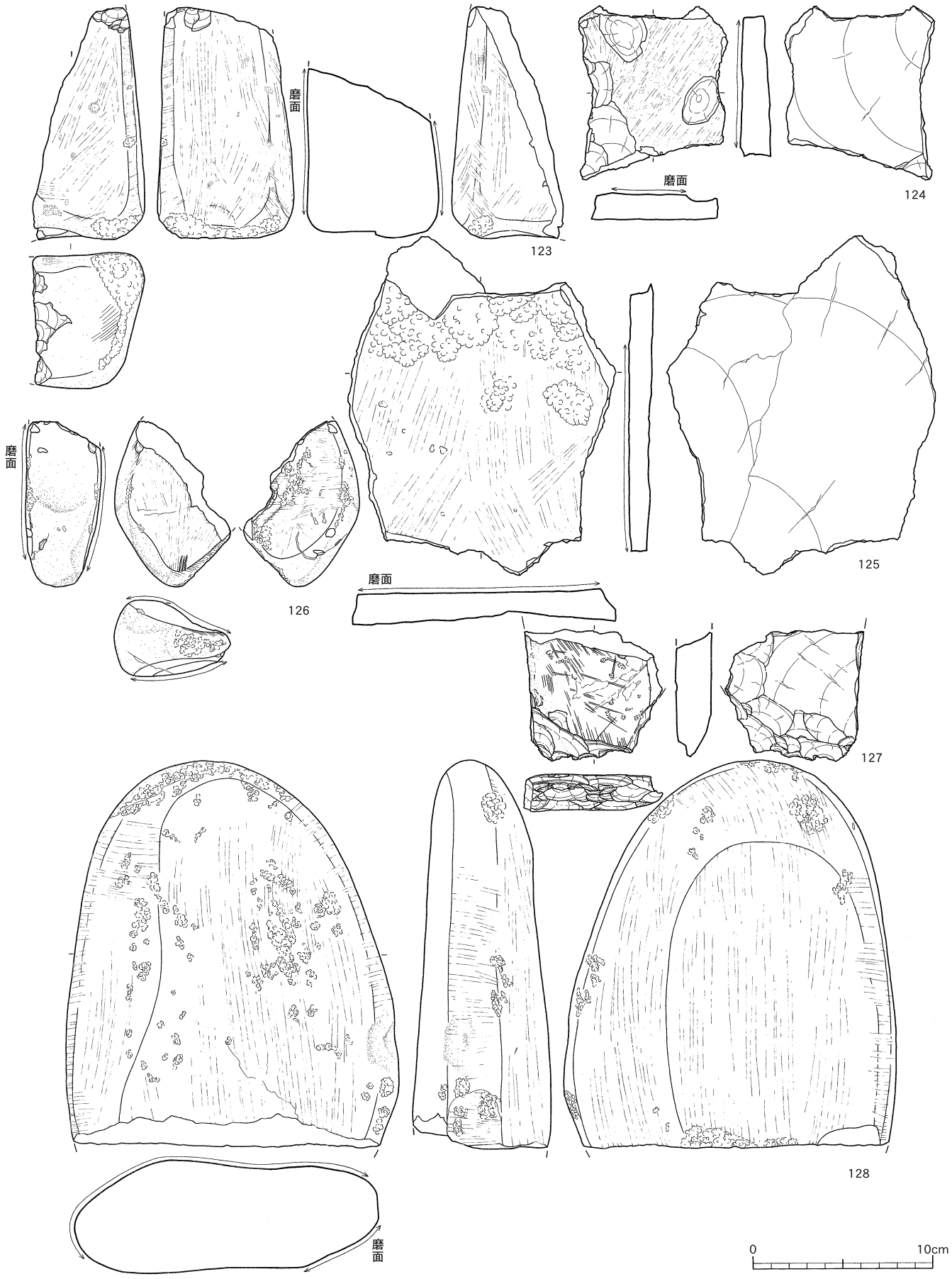
⑩　軽石製品（第21図―129～138）

43点中10点図化している。本遺跡の軽石製品に捉えられる人為的痕跡には，以下のようなものがある。一つ目には，磨って生じたと考えられる平坦面や曲面である。磨面以外に切り取った可能性もあるが，実見上磨面と見なし得ると判断し，本稿では磨面と定義したい。なお，縁辺を有する板状の工具で磨った際に生じるＬ字状の切り込みは，以下「立ち上がり」と呼称して述べる。また，刃状の切っ先で切り込みを入れたような痕跡は「切り込み」と呼称することとしたい。磨り面の多くは凹み状を呈するので，本稿では，特に平坦面を有する資料のみ特筆したい。二つ目は，鋭利な刃状の道具による切り込みである。断面観がＵ字状を呈するものもあり，その場合は特筆したい。そして，三つ目が貫通しない穿孔である。

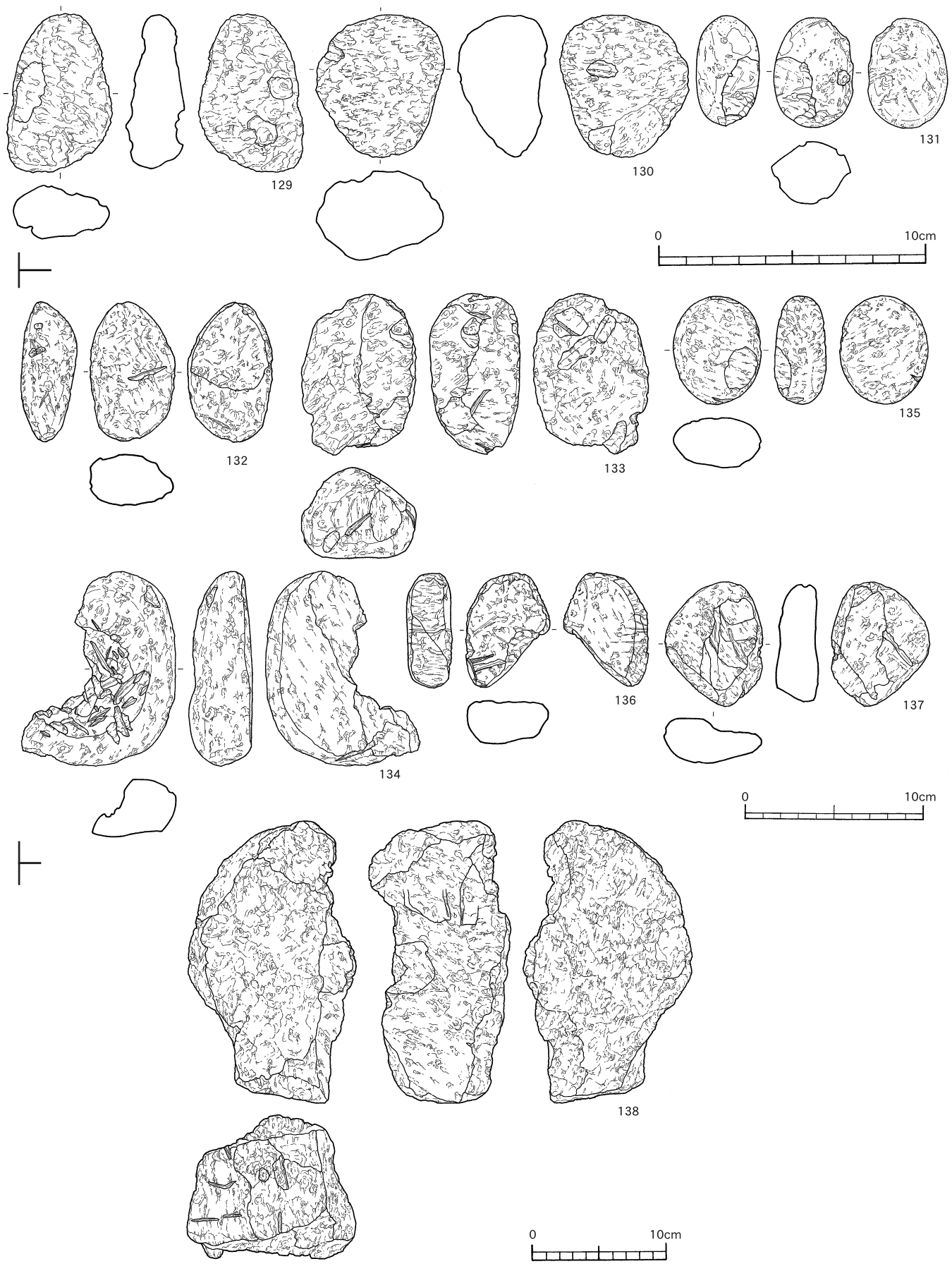
本稿では，以上の痕跡に分けて，軽石製品を述べていくこととする。129～131は，貫通しない穿孔と磨面を有する一群である。129の表面左側の磨面は，僅かに凹み状に弯曲する。130の裏面下側の磨面は，ガジリの可能性もある。裏面中央には，穿孔が捉えられる。131の磨面の上辺は立ち上がりを有し，対象物には角状の縁端があったと思われる。132～134は，磨面・不貫通孔及び切り込みを有する。132の表面は凹み状を呈し，裏面は平坦である。左側面の不貫通孔は，竹串状の極細の工具による。133は複数の切り込みを有するが，殆どの切り込みは断面が凹み状を呈する。134は欠損ではなく，人為的に切断されている。本来は，ドーナツ状の器形を呈する。断面観察より，本来は最薄部で0.3cm程の器厚を維持していた不貫通の凹みを有していたと判断される。表面中央部の直径5.5cm程の凹み内には，幅１cm弱程，器厚0.1cm強の工具痕が無数に刻まれる。135～138は，磨面及び切り込みを有する。136は，表面及び左側面の磨面が顕著で，特に表面は切断されたように磨られている。137の磨面も切り取られたように顕著である。表面の磨面はステップ状に切り合うことから，角や切っ先を有するものを磨ったと判断される。磨面は，一部平坦であるが，殆どは僅かながらも凹み状を呈している。138は，長軸21cm，短軸12.5cm程の大きな軽石製品である。被熱による赤化が見られるが，表面の幅2.5cmや１cm程の工具痕は割れ口に施されており，被熱・破損後に使用されたと判断される。幅2.5cmの工具痕については，切り合い関係が不明瞭である。幅2.5cmは，1cm幅の工具痕の並走により重複抽出されたデータの可能性もあり，本来は１cm程の工具痕のみの可能性もある。



第19図　遺物実測図（10）石器（縄文時代）



第20図　遺物実測図（11）石器（縄文時代）



第21図　遺物実測図（12）石器（縄文時代）

第３表　遺物観察表（１）Ⅰ～Ⅹ類土器（縄文時代）

挿図	番号	出土区		層	器種	部位	色調		調整		胎土							焼成	備考	取上番号
							外側	内側	外側	内側	石英	長石	角閃石・輝石	雲母	小礫	赤石	滑石	他			
10	1	L	17	Ⅵa	Ⅰ類	胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○				◎		普通		1947
	2	M	14	Ⅵa	Ⅱ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○				◎		普通		一括
	3	L	13	Ⅵa	Ⅱ類	胴部	にぶい黄色	にぶい黄色	ナデ	条痕	○	○	○		○				普通		6205 6706
	4	M	17	Ⅵa	Ⅲ類	口縁部	黒色/明赤褐色	黒色/明赤褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○			○			普通		2366
	5	L	10	Ⅵ	Ⅳ類	口縁部付近	明赤褐色	にぶい黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	○	○	○		○				普通		6515
	6	M	13	Ⅲ	Ⅴ類	口縁部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○		◎	◎			普通		6232
	7	M	18	Ⅱ	Ⅴ類	口縁部	明赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		1844
	8	M	18	Ⅵa	Ⅴ類	口縁部	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		◎				普通		2379
11	9	M	13	Ⅱ	Ⅴ類	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		2711
	10	L	12	Ⅴ	Ⅴ類	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	ヘラナデ	ナデ	○	○	○						普通		4544
	11	L	13	Ⅲ	Ⅴ類	胴部	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			普通		5113
	12	L	13	Ⅱ	Ⅴ類	胴部	赤褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			普通		5941
	13	M	13	Ⅴ	Ⅵ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ/ミガキ		○	○						普通		一括
	14	L	11	Ⅴ	Ⅵ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	◎						普通		一括
	15	M	17	Ⅵa	Ⅵ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	◎		○				普通		2354
	16	L	10	Ⅴ	Ⅵ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	◎		◎	○			普通		6186
	17	M	17	Ⅵa	Ⅵ類	口縁部	黄橙色	浅黄色	ミガキ	ミガキ	○	○	◎						普通		2529 2533 2576
	18	L	18	Ⅱ	Ⅵ類	口縁部	浅黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	○	○	◎						普通		1834
		M	17	Ⅵa																	2521
	19	M	17	Ⅵa	Ⅵ類	口縁部	浅黄色	淡黄色	ナデ	ナデ/ミガキ	○	○	◎						普通		2265
	20			Ⅰ	Ⅵ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		◎			火山ガラス	普通		一括
	21	L	13	Ⅲ	Ⅵ類	口縁部	にぶい黄色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○			火山ガラス	普通		2997
	22	M	17	Ⅱ	Ⅶ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ミガキ	ミガキ	○	○	○						普通		一括
		L		Ⅵa																	2333
	23	L	17	Ⅵa	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ミガキ状	○	○	○		○	○			普通		2230
	24	M	18	Ⅵa	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	浅黄色	にぶい黄橙色	ミガキ状	ミガキ状	○	○	○		○				普通		2349
	25	L	14	Ⅵa	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	赤褐色	オリーブ黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		一括
	26	L	13	Ⅲ	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		4356
	27	L	13	Ⅲ	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		一括
	28	M	13	Ⅴ	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	黄色	浅黄色	ナデ	ミガキ状	○	○	◎						普通		4634
	29	L	17	Ⅵa	Ⅵ・Ⅶ類	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	○	○	○		○				普通		2242
	30	L	17	Ⅵ Ⅵa	Ⅲ～Ⅶ類	底部	赤褐色	暗赤褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○		◎				普通		2232 2331
	31	L	13	Ⅵa Ⅳ	Ⅲ～Ⅶ類	底部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○						普通		一括
	32	M	14	Ⅵa	Ⅲ～Ⅶ類	底部	浅黄色	オリーブ黄色	条痕	条痕	○	○	○		○				普通		2572
	33	M	13	Ⅵa		底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕	条痕	○	○	○		○				普通		一括
	34	M	17	Ⅵa	Ⅲ～Ⅶ類	胴部～底部	黄橙色	淡黄色	ミガキ	ミガキ	○	○	◎						普通		2522 2523 2527 2528 2530 2531 2532 2534
			18	Ⅵ																	2635
12	35	L	17	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部	暗褐色	浅黄色	ヘラナデ	条痕	○	○	○	◎	○				普通		一括
	36	L	17	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部～胴部	黄橙色	オリーブ黄色	条線/ヘラナデ	条痕	○	○	○	◎	○				普通		1935 1936 1937 1938 1940 1941 1943 1943 1944 2248 2249 2250
	37	M	13	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヘラナデ	ミガキ状	◎	◎	○	◎					普通		一括
	38	L	17	Ⅱ	Ⅸ類	口縁部～胴部	赤褐色	にぶい黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	○	○	○	○	○				普通		1912
	39	M	17	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	条線/ヘラナデ	ミガキ状	◎	◎	○	○	○				普通		2367
	40	L	17	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部	にぶい褐色	にぶい黄橙色/赤色	条線	ヘラナデ	○	○	○						普通		1873
	41	L	17	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	条線	条痕	○	○	○		○				普通		1848
	42	K	12	Ⅲ	Ⅸ類	口縁部	にぶい黄色	オリーブ黄色	ミガキ	ミガキ	○	○	○		○				普通		2253
	43	L	12	Ⅱ	Ⅸ類	口縁部	にぶい橙色	にぶい橙色	ミガキ	ミガキ	○	○	○						普通		4806
	44	M	17	Ⅵa	Ⅸ類	口縁部	浅黄色	明赤褐色	ヘラナデ	条痕	○	○	○			○			普通		2277
	45	M	13	Ⅲ	Ⅸ類	肩部	褐色	オリーブ黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		◎				普通		5690
	46	M	16	溝	Ⅸ類	底部	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ナデ	◎	◎	○		○				普通		一括
	47	M	16	Ⅵa	Ⅸ類	底部	明赤褐色	浅黄色	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		◎				普通		2180
	48	M	17	Ⅵa	Ⅸ類	底部	明赤褐色	にぶい黄橙色	ナデ	貝殻条痕	◎	◎	○		○				普通		2006
	49	M	17	Ⅵa	Ⅸ類	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	◎	◎	○		○				普通		2287
	50			Ⅰ	Ⅸ類	底部	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		一括
	51	M	18	Ⅵa	Ⅸ類	底部	黄橙色	オリーブ黄色	ナデ	ナデ/条痕	○	○	○		○				普通		一括
	52	M	13	Ⅳ	Ⅸ類	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	貝殻条痕・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			普通		一括
	53	M	17	Ⅱ	Ⅸ類	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		2045
	54	L	13	Ⅳ	Ⅹ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄色/赤褐色	ミガキ	ミガキ	△	△	○						普通		6964
	55	L	13	Ⅱ	Ⅹ類	口縁部	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ナデ/条痕	○	○	○						普通		4473
	56	L	12	Ⅳ	Ⅹ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ミガキ	ミガキ	△	△	△						普通		一括
	57	L	13	Ⅲ	Ⅹ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ミガキ	ミガキ	△	△	△						普通		一括
	58	L	17	Ⅵa	Ⅹ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ミガキ	ミガキ	○	○	○						普通	赤色顔料塗付	一括
	59	L	17	Ⅵa	Ⅹ類	口縁部	にぶい黄色	にぶい黄色	ミガキ	ミガキ	○	○	○						普通		2235
13	60	L	17	Ⅵa	Ⅹ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ	○	○	○		○				普通		1883
	61	L	17	Ⅵa	Ⅹ類	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ	○	○	○					火山ガラス	普通		1961
	62	L	16	Ⅵa	Ⅹ類	胴部～底部	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	ナデ/ミガキ状	○	○	○		○				普通		1964
	63	M	17	Ⅵa	Ⅹ類	胴部	にぶい黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○						普通		一括
	64	M	16	Ⅱ	円盤状土製品		にぶい黄褐色	にぶい黄色	条痕	ヘラナデ	○	○	○		○				普通	炭付着	2214
	65	L	16	Ⅱ	円盤状土製品		にぶい黄褐色	灰オリーブ			○	○	○		◎				普通		2082
	66	M	13	Ⅲ	不明品		浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	△	△	△						普通		2715

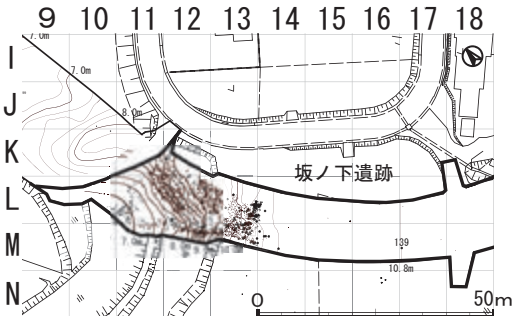
第４表　遺物観察表（２）石器（縄文時代）

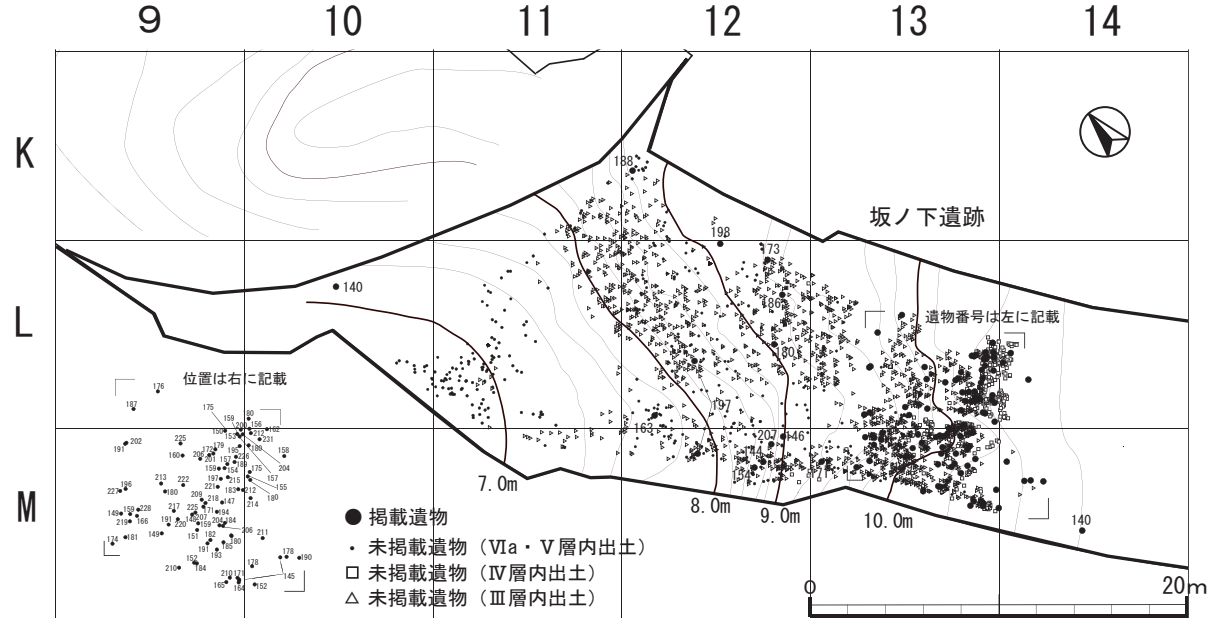
挿図	番号	出土区		層位	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号
14	67	M	11	Ⅲ	スクレイパー	黒曜石　（針尾系）	1.6	2.2	6	1.55	5814
	68	M	12	Ⅲ	スクレイパー	頁岩質ホルンフェルス	6.8	8	1.5	55.66	5133
	69	M	13	Ⅲ	スクレイパー	頁岩質ホルンフェルス	7.3	3.8	9	23.43	4274
	70	L	15	Ⅵa	スクレイパー	頁岩質ホルンフェルス	7.9	5.85	1.6	57.54	2538
	71	M	17	Ⅵa	スクレイパー	頁岩質ホルンフェルス	5.3	8.1	1.3	72.18	2016
	72	M	12	Ⅵa	スクレイパー	安山岩	7.2	7.3	1	59.36	1770
15	73	M	17	Ⅵa	スクレイパー	チャート	4.4	3.7	2.2	26.14	2047
	74	M	13	Ⅵa	石核	鉄石英（赤色チャート）	2.3	2.9	2.7	15.25	一括
	75	L	10	Ⅵa	石核	黒曜石（上牛鼻系）	2.65	1.9	1.95	7.62	6182
	76	M	17	Ⅵa	石核	黒曜石　（針尾系）	1.7	1.3	0.95	1.38	2360
	77	L	17	Ⅵa	擦切石器	頁岩質ホルンフェルス(火山ガラスを含む)	3.3	2	0.5	4.57	1963
	78	M	14	Ⅵa	磨製石斧	頁岩質ホルンフェルス	10.3(18.4)	4.7(4.7)	3.3(3.3)	220(378)	2408
							10(18.4)	4.3(4.7)	3(3.3)	158(378)	2561
	79	M	16	Ⅱ	磨製石斧	頁岩質ホルンフェルス(硬質)	9.8	5.4	3	280	2174
	80	L	17	Ⅵa	磨製石斧	頁岩質ホルンフェルス(硬質)	7.3	4.4	4.15	164.18	2382
	81	L	16	Ⅵa	磨製石斧	頁岩質ホルンフェルス	5.4	4	1.1	34.51	2309
	82	L	11	Ⅲ	磨製石斧	変成岩	6	3.05	1.3	38.7	5184
	83	M	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	12.3	6.6	2.3	195.03	2261
	84	L	15	Ⅵa	打製石斧	頁岩	10.2	5	1.3	76.78	2544
	85	L	14	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	13.6	7.95	1.5	163.27	4569
	86	L	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	12.35	6.35	2.1	145.71	1922
	87	M	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	15.1	7.25	2.9	185.34	2069
	88	M	16	Ⅵa	打製石斧	頁岩	14.7	1.55	1.8	194.14	2156
16	89	M	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩	11.5	5.65	1.1	85.25	2001
	90	L	13	Ⅳ	打製石斧	安山岩	10.6	7.7	1.8	220	4664
	91	L	17	Ⅵa	打製石斧	安山岩	7.3	5.15	1.4	89.32	1896
	92	M	16	Ⅵa	打製石斧	頁岩	9.3	5.9	1.55	90.76	2181
	93	L	12	Ⅲ	打製石斧	硬質頁岩	4.9	4.4	1.8	42.16	5128
	94	L	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩	5.1	4.35	1.7	33.48	1975
	95	L	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	4.55	5.15	1.1	38.11	1881
	96	M	15	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	8.25	5.5	1.6	82.24	5877
	97	L	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	7.8	5.3	2	82.14	1951
	98	M	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	8.7	5.45	1.75	106.32	2036
	99	L	16	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	8.2	5.2	1	51.84	1948
	100	L	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	8.6	6.7	1.75	106.19	1933
	101	M	12	Ⅴ	打製石斧	安山岩	6.25	7.2	1.65	93.4	5962
	102	L	17	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	5.35	5.6	0.9	32.95	1863
	103	L	15	Ⅵa	打製石斧	頁岩	3	5	0.5	12.02	2554
	104	M	14	Ⅵa	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	5.7	6.05	1.05	47.26	2412
17	105	M	13	Ⅳ	礫器	頁岩質ホルンフェルス	17.8	8.3	3.3	420	4617
	106	M	17	Ⅵa	礫器	頁岩質ホルンフェルス	11.7	9.8	4.25	480	2361
	107	L	14	Ⅵa	礫器	頁岩質ホルンフェルス	7.7	8.1	2.1	136.84	4726
	108	M	14	Ⅵa	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	10.6	8.3	6	670	2405
	109	L	17	Ⅵa	磨石・敲石類	砂岩	10.8	9.55	5.5	650	1903
	110	L	17	Ⅵa	磨石・敲石類	安山岩	8.2	7	5.7	400	1958
	111	L	12	Ⅵa	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	6.1	4.7	4.5	179.69	5164
	112	L	17	Ⅵa	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	6.9	5.15	3	131.88	1916
	113	M	17	Ⅵa	磨石・敲石類	砂岩	6.05	5.6	2.8	128.21	2061
	114	M	16	Ⅵa	磨石・敲石類	砂岩	15.1	12.85	2.9	820	2162
18	115	M	14	Ⅵa	磨石・敲石類	砂岩	6.9	9.75	2.75	280	2425
	116	L	14	Ⅵa	磨石・敲石類	頁岩質ホルンフェルス	16.8	6.6	6.3	1000	4575
	117	M	17	Ⅵa	磨石・敲石類	頁岩質ホルンフェルス	9.5	5.4	4.15	320	2030
	118	L	13	Ⅲ	磨石・敲石類	頁岩質ホルンフェルス	10.45	6.6	2.8	179.82	4264
19	119	L	16	Ⅵa	石皿・台石	砂岩	18.3	10.35	6.7	1560	2103
	120	M	17	Ⅵa	石皿・台石	花崗閃緑岩	10.5	8.7	8.5	900	1988
	121	M	13	Ⅵa	石皿・台石	花崗閃緑岩	6.7	8.8	4.7	250	1762
	122	M	16	Ⅵa	石皿・台石	砂岩	13.9	11.8	1.6	370	2184
20	123	L	12	Ⅴ	石皿・台石	花崗閃緑岩	12.85	7.55	7.6	810	6370
	124	M	17	Ⅵa	石皿・台石	花崗閃緑岩	9.7	8.4	1.7	200	1981
	125	M	17	Ⅵa	石皿・台石	花崗閃緑岩	18.8	15.9	2	590	2003
	126	M	17	Ⅵa	砥石	砂岩(粒子が非常に細かい)	9.15	6.4	4.25	230	2009
	127	L	15	Ⅵa	砥石	砂岩（火山ガラスを多量に含む）	7.3	7.7	2.1	162	2543
	128	M	15	Ⅵa	砥石	砂岩	21.6	18.5	7.7	3680	5878
21	129	L	11	Ⅳ	軽石製品	軽石	5.9	4	2.2	11.03	6941
	130	M	12	Ⅲ	軽石製品	軽石	7.9	7.25	5	75.14	6063
	131	L	14	Ⅵa	軽石製品	軽石	4.1	2.95	2.35	8.06	一括
	132	L	11	Ⅴ	軽石製品	軽石	7.8	4.7	2.9	61.16	6939
	133	L	11	Ⅵa	軽石製品	軽石	9	6.45	5.1	23.44	6591
	134	L	12	Ⅲ	軽石製品	軽石	10.9	8.65	3.6	42.83	4509
	135	L	10	Ⅳ	軽石製品	軽石	6	4.9	2.9	24.98	6351
	136	M	12	Ⅲ	軽石製品	軽石	6.35	4.2	2.6	11.02	6060
	137	L	10	Ⅵa	軽石製品	軽石	6.95	5.5	2.45	18.18	1526
	138	K	11	Ⅳ	軽石製品	軽石	21.2	12.65	10.75	670	6937

第２節　弥生・古墳時代の調査

１　調査の概要

本稿では，VIa層への落ち込みや後世の包含層等（Ⅱ層）の出土遺物も重要と判断される資料については掲載してある。弥生・古墳時代の包含層と捉えられるⅤ層（黒褐色砂壌土）は，台地から下る傾斜面（K～M－10区～13区）にのみ残存し，残存層厚が薄いために出土点数は多くはない。一方，隣接する段丘上段面（L・M－13区～18区）は開削によってか削平を受けており，弥生時代～中世の包含層（Ⅴ層）は残存しない。しかし，本来は同区に存在したⅤ層（黒褐色砂壌土）が，急傾斜面のK～M－10区～13区に流れ込み，Ⅴ層の上に堆積したのがⅢ・Ⅳ層（黒褐色砂壌土）であると判断され，K～M－10区～13区内のⅢ･Ⅳ層出土遺物は,段丘上段面(L・M－13区～18区）の様子を伝える遺物として認識されうる。なお，弥生・古墳時代相当遺物の一部は，縄文時代包含層のVIa層内の上位でも出土している。遺物に関しては，土器は，弥生時代の黒髪式土器が少量出土し，その多くは古墳時代相当の東原式土器，辻堂原式土器，笹貫式土器が占める。石器は，磨製石鏃や磨製扁平片刃石斧等既知研究上，明確に弥生・古墳時代に比定し得る製品は出土していない。弥生・古墳時代の可能性も否定できない打製石斧，石皿・台石類や砥石，軽石製品などが出土したが，明確に本時代に含める根拠を持たないため縄文時代に含めて報告した。なお，弥生・古墳時代相当の遺構は検出されていない。





第22図　遺物出土状況図（弥生・古墳時代）

２　遺物

（１）土器

弥生・古墳時代の遺物は，L・M－13区～18区においてはVIa層上面で出土し，K～M－10区～13区においては，流れ込みであるⅢ・Ⅳ層及び本来の包含層（Ⅴ層）で出土している。後世の攪乱を含め出土層が混在しているため，出土のレベル差を持って時代認定は不可能である。そこで，器形及び施文形態等の特徴から，既知の土器型式をもとに，弥生時代・古墳時代に分けて報告をしたい。また，古墳時代相当の土器に関しては，縄文時代ほど属性変化が明確でなく，器形全形や土器組成等を総合的に捉えて土器編年を判断する必要がある。しかし，完形が少なく，遺構内出土遺物や明瞭な包含層を有しない本遺跡出土遺物に関しては，古墳代内の細編年の分類は困難であり，各器種・各部位毎にまとめて報告していくこととする。分類の詳細は本稿「第３章　調査の方法　４　出土遺物の分類」を参照されたい。

甕形土器（弥生時代）

①　XI類土器（第23図―139～143）

（ア）　口縁部（第23図―139～142）

139は口唇部及び胴部器厚が１㎝程と，本類の中では厚い器壁を有する。ぼてっとした口唇部・口縁部の断面観，明赤褐色の色調，砂粒を多く含む胎土など，以下に述べる資料とは特徴を異にする。140～142は，口唇部器厚が0.7㎝程，胴部器厚が0.5㎝程と極めて薄い。口唇部と胴部の接合部の内面側には，摘み出しにより，大きく張り出した稜が作られる。

（イ）　胴部（第23図―143）

143は赤褐色の色調で，砂粒が多く含まれる。胴部外面に縦位のハケメが捉えられ，粗い胎土や雑な調整など，140～142とは趣を異にする。

壷形土器（弥生時代）

②　XIII類土器（第23図―144）

袋状を形成する口縁部資料で，1点のみの出土である。弥生時代中期相当の須玖式土器等の壷形土器に見られるミガキではなく，ナデ調整である。口唇端部を平坦に仕上げる。色調は斉一的な橙色で，在地の胎土であると思われる。本稿では弥生時代に含めて報告するが，川内川を上流に遡る二渡遺跡（さつま町）においては，類似資料を口縁部に持ち，本稿177類似品を頸部に，本稿189・190類似品を胴部に持つ古墳時代相当と思われるほぼ完形品が１個体出土しており，注目される。

甕形土器（古墳時代）

③　XIV類土器（第23・24図―145～154）

（ア）口縁部

145～149は，内外面特に内面に明瞭な稜を作出するタイプである。一方，150～154は，内面に明瞭な稜を形成しないタイプである。154のみナデ調整であり，他は口縁部にいわゆる「カキアゲ」を施す。カキアゲの調整方向に２つのパターンが捉えられる。工具痕を僅かに重層させながら，縦位のカキアゲを右から左の順に施すのが146・149・151，左から右の順に施すのが145・147・148・150・152・153である。比率的には１：３となり，製作者の利き腕の比率に関連すると推察される。なお，148・151・153などは，口縁部のカキアゲと胴部のハケメ調整の順序は，一致している。他方で，カキアゲ・ハケメの手法にも２つのタイプが見てとれる。一つ目は，口縁部に縦位のハケメ，頸部に横位のハケメ，胴部に縦位のハケメと，調整方向の異なるハケメを組み合わせるタイプである。代表的なのが151である。最初に，胴部上半から下半の順に重層させながらハケメ調整を施す。その次に，頸部下半で縦位（下方向）のハケメを施した後，頸部では横位（左方向）のハケメを施す。最後に口縁部で縦位（上方向）にカキアゲる。なお，胴部と頸部・口縁部のハケメの肌理が２種捉えられ，使い分けがなされている。145・146・150・152は，頸部下半に横方向のハケメが捉えられることから，151に類似する手法に区分できる。一方，147～149・153は，口縁部・胴部ともに縦位のハケメを施すタイプである。なお，内面の器面調整に関しても，151に一定の規則性が捉えられる。基本的に，横位・斜位のハケメを胴部下半から胴部上半，口縁部へと順に重層させた後，最終的に間隙をハケメで埋めて全面的に仕上げる。

④　XV類土器（第24図―155・156）

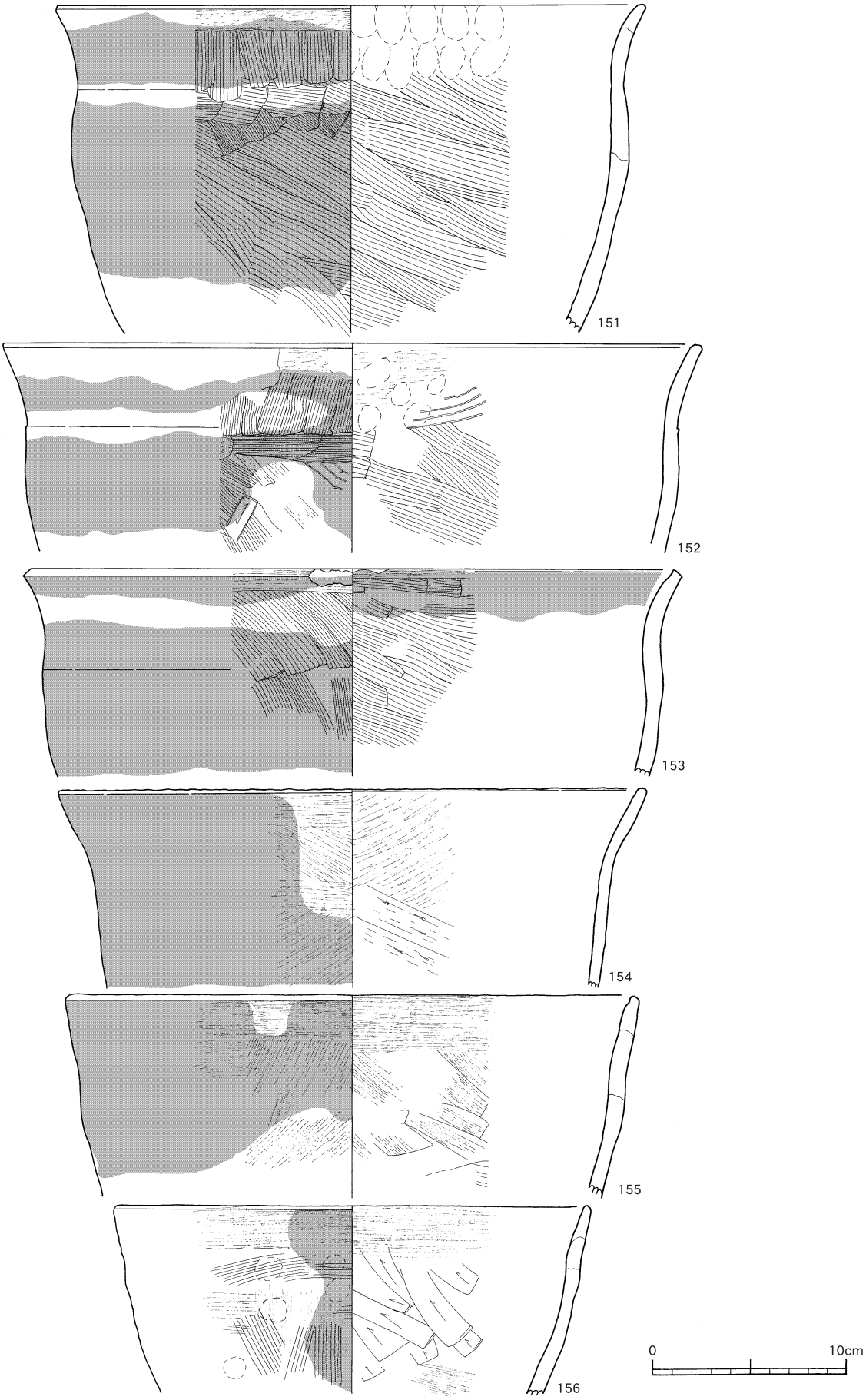
何れも，いわゆる「カキアゲ」が施されない。155は，主として工具ナデで調整し，156は外面に僅かにハケメ，内面に上方向へのケズリを施す。内面調整は，斜位のナデ・ケズリを胴部下半から胴部上半・口縁部へと順に重層させた後，最終的に間隙をケズリで埋める。この手順は，上述151の内面調整と同様である。

⑤　XVI類土器（第25図―157～162）

157～162は，内面に明瞭な稜を形成しない。157・158は指頭により突帯の上下縁端を摘んだ上，突帯上面を平坦に均して器体に固着させる。159～162の突帯上の刻みは，ヘラ状工具を斜位に刺突しハケメ状工具痕を明瞭に残す。突帯の上下縁端にも明瞭なハケメ状の工具痕が施され，軟質の道具（布や革等）を当てた可能性が窺える。調整については，157のみカキアゲを施す。頸部を左から右の順にカキアゲた後，頸部に突帯を巡らせる。最終的に，口縁部全体に横ナデを施すため，カキアゲが不鮮明になっている。胴部には，主として縦位のハケメが施されるが，総じてハケメが不鮮明である。一方，内面の横位のハケメは明瞭に残される。口縁部にハケメを明瞭に残す資料群（XIV類）と，以下ハケメを施さない且つ突帯を巡らす資料群（XVI類）との具有的特徴を持つ158～162は，口縁部にカキアゲを施さず，胴部内外面ともに明瞭なハケメが捉えられない。159は，外面に一部縦位のハケメが捉えられるが，基本的な調整はヘラナデと判断される。内外面ともに胴部下半から順に口縁部にかけてヘラナデを行っており，調整の手順は上述のXIV・XV類に共通すると判断される。

写真５　142の接合痕

第23図　遺物実測図（13）XI・XIII・XIV類土器（弥生・古墳時代）



第24図　遺物実測図（14）XIV・XV類土器（古墳時代）

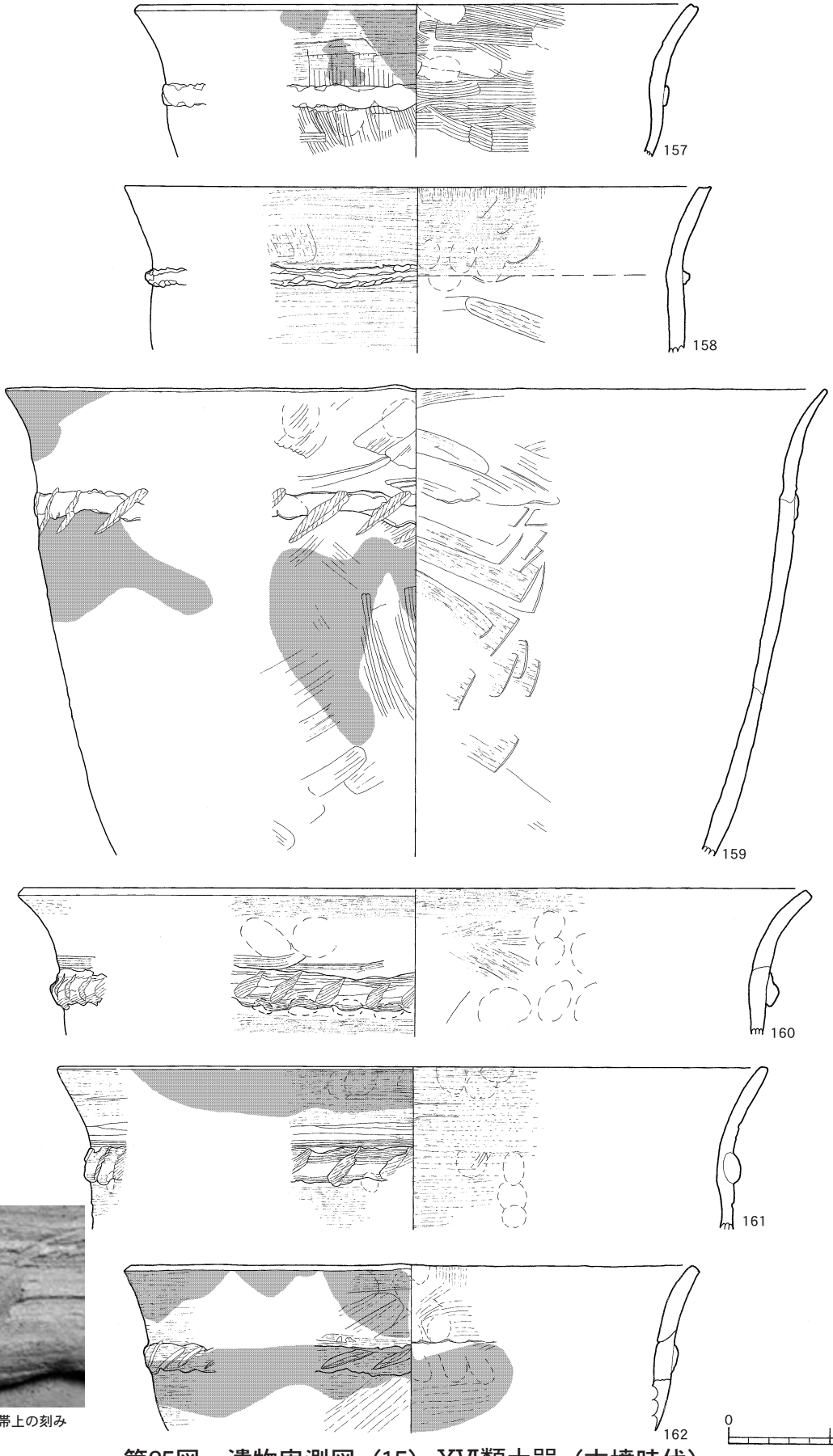


写真６　160の突帯上の刻み

第25図　遺物実測図（15）XVI類土器（古墳時代）

（イ） 脚部（第26図―163～169）

何れも甕形土器の脚部資料である。脚部断面観により３つに分類可能である。分類の詳細は「第３章　調査の方法　４　出土遺物の分類」を参照されたい。

163は甕脚Ａ類，164・165は甕脚Ｂ類，166・167は甕脚Ｃ類，168・169は甕脚Ｄ類に相当する。168・169は，断面観ではＢ類に含まれるが，他の脚部に比して小さい。また，手捏ねの摘み出しにより脚が尖端に仕上げられている。163・164・166・167が，見込み（胴部内底面）をややＵ字状に成形するのに対して，165のみ指ナデにより平坦に均す。また，163・166・167の断面から，甕形土器が壷状の胴部と脚部を接合させて成形する技法・手順が見てとれる。

⑥　壷形・鉢形土器

壷形土器及び鉢形土器については，破片資料では分類が困難な面があり，「壷形・鉢形土器」として一括して取り扱うこととした。

（ア）口縁部（第26図―170～175）

170は，胴部から口縁部にかけて屈曲・直口する。口縁部・胴部に縦位のハケメを施す。171・172は，やや袋状に内弯する口縁部の器形より，いわゆる「小型丸底壷」の器形が想定される。171は，外面全体に赤色顔料を塗布する。胴部内面には，板状の粘土（幅3.5㎝）が２枚重ね合わせながら接合されている。接合痕の断面観より，口縁部を下位に据えて底部側から接合・成形する。つまり，その時点で底部は成形されておらず，筒状の器体であると想定される。その後，胴部と底部を固着させる。頸部から手を差し入れ，胴部上半（頸部直下）をヘラ状工具で胴部中位から頸部の順に横位ケズリを施す。最後に，口縁部と胴部を固着させ，外面調整等で仕上げる。頸部口径は6.5㎝であり，製作者はこの口径に手握が貫通できる人物と判断される。身長174㎝の編者の手拳は貫通せず，製作者は小柄な男性や女性の可能性を見る（本稿「第７章　総括」参照）。172は，焼成前に内面側から孔が一孔穿たれる。内面の穿孔外縁には，使用によると思われる微細な剥離が一巡する。173は小型の壷である。石英・長石等鉱物が密に含まれる。174は鉢であり，内面には，焼成時付着のススの辺りに破裂痕が見られる。175は，厚手の器厚や雑な器面調整等判断して，鉢の口縁部の可能性が高いと思われる。

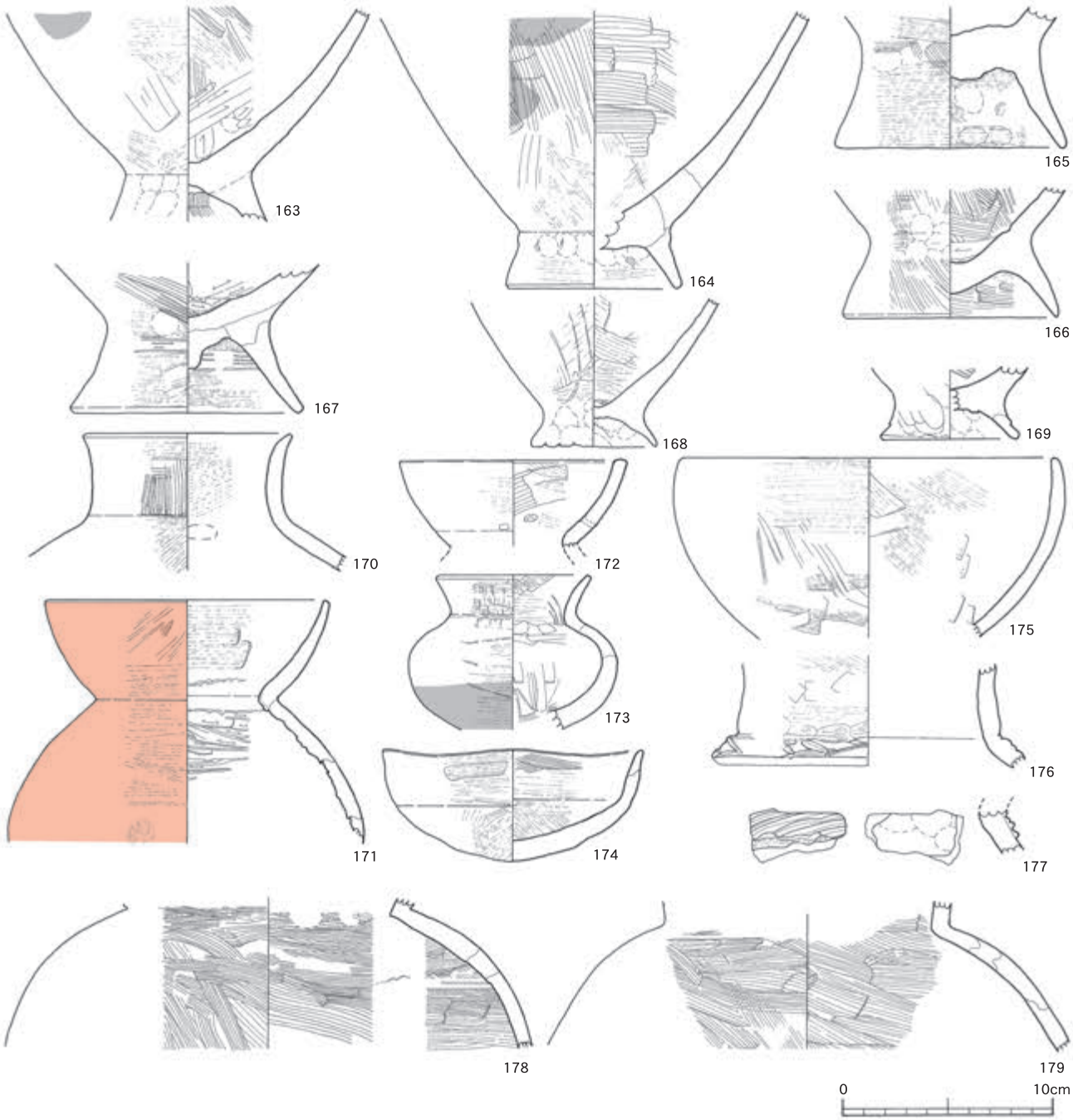
（イ）胴部（第26・27図―176～190）

176～179は，頸部資料である。176は，頸部の突帯上に，左下り後右下りの刺突を交差させ「×」のモチーフを作出する。その後，右方向へ施文を移動し，複数の「×」を巡らす。177は，突帯上に工具側縁による刺突，もしくは押圧を緩斜行させる。144・189・190と接合する可能性があり，詳しくは144の詳述を参照されたい。178・179は器形や調整・色調等から同一個体の可能性が高い。内外面共に，明瞭なハケメが施される。外面には傾斜の異なる右下りのハケメが重層するが，調整の順序等規則性は捉えられない。外面には単位幅が狭いハケメが施されるのに対して，内面には単位幅が異なる２種類のハケメが施される。２種類のハケメ単位は時期差を表すと考えられる。内面胴部下半の幅広のハケメで胴部下半から底部を成形した後，胴部上半の器体を接合し，幅狭のハケメで調整及び接合の固着を図ったと推察される。前述の181と同様な成形技法・手順が窺える。180～190は，胴部の資料（一部底部を含む）である。180にも前述の178・179同様の単位の異なる２種のハケメが捉えられ，同様な成形技法・手順をとると考えられる。胴部下半の外面には，直径6.5㎝程の破裂痕が残される。破裂痕内に付着するススは，焼成時のススと一致せず，煮炊き等使用に伴う破裂痕だと思われる。一般的には貯蔵具とされる壷形土器であるが，胴部上半にススが巡っており，煮炊きに利用したと判断される。185は間隙をおいて一定角度の斜位のハケメを施した後，より角度の急な斜位のハケメで間隙を埋める。突帯以下では，ヘラナデを等間隔で横走させるために，斜位のハケメと横位のヘラナデが格子状に交差する。内面調整も，横位ハケメ間の間隙を埋めるようにハケメを重層させる点で外面に類似するが，178～180同様に，単位の異なる２種のハケメが認められる。186～188は，外面にハケメが捉えられるものの，基本的にはナデ消している。188は，内面に工具状ナデが明瞭且つ密に施される。187・188は，突帯以下胴部にススが付着する。180同様に，煮炊き利用の可能性を示唆する。189・190は，色調が鮮やかな橙色を呈する。189の外面には，粗めの条痕状ハケメが捉えられる一方，内面のハケメは丁寧且つ密で，明瞭に残される。内面調整は，胴部中位のハケメを施した後，上位のハケメを施す。また，胴部中位のハケメがやや浅く，上位のハケメはやや深めで，ハケメの深浅も異なり，両ハケメには時間差がある可能性がある。なお，189・190の資料については，144・177と接合する可能性があり，詳しくは144の詳述を参照されたい。

（ウ）底部（第27図―191～203）

小型丸底壷の器形を有する資料も含めて，底部形態（断面観）の違いから５つに分類した。分類の詳細は「第３章　調査の方法　４　出土遺物の分類」に基づく。なお，底部を含むが胴部の属性が顕著に捉えられる174・180～183については，上述の口縁部及び胴部にて詳述したが，底部形態上の分類については含めて述べたい。181・183・191～195は壷鉢底Ａ類に属する。191は，内外面ともに明瞭なハケメを施すが，外面に一部上方向へのケズリが捉えられる。内面底部の工具状ナデは，工具痕が深く食い込み，一見ケズリに近い。192は，内外面共に明瞭な

ハケメが入る。193の内面には上方向へのケズリが施され，194の外面には上方向への条痕状のハケメが施される。195は，小型丸底壷に類する。内面底部は，ハケメを反時計回りに回旋させる。174・180・196～198は，壷鉢底Ｂ類に属する。196・197は，底部がやや膨らみ，198は尖底である。194の外面には条痕状のハケメが入る。196の外面調整はヘラ状ナデであり，197は内外面共に上方向へのケズリを施す。底部の器面調整に，底部形態毎の共通性は見られない。199･200は壷鉢底Ｃ類に属する。199の外面調整はケズリであり，内面は条痕状のハケメである。200の底部縁端部には，指頭刺突が捉えられる。201･202は壷鉢底Ｄ類に属し，赤色を塗布する。202は，底部に４脚の鼎を有する。壷鉢底Ｅ類は，203の１点のみで，いわゆる「ジョッキ形」の器形を呈する。「外川江　1984」の「図面番号755～760」に似るが，3条の沈線が巡るのは本資料のみである。



第26図　遺物実測図（16）甕形・壷（鉢）形土器（古墳時代）

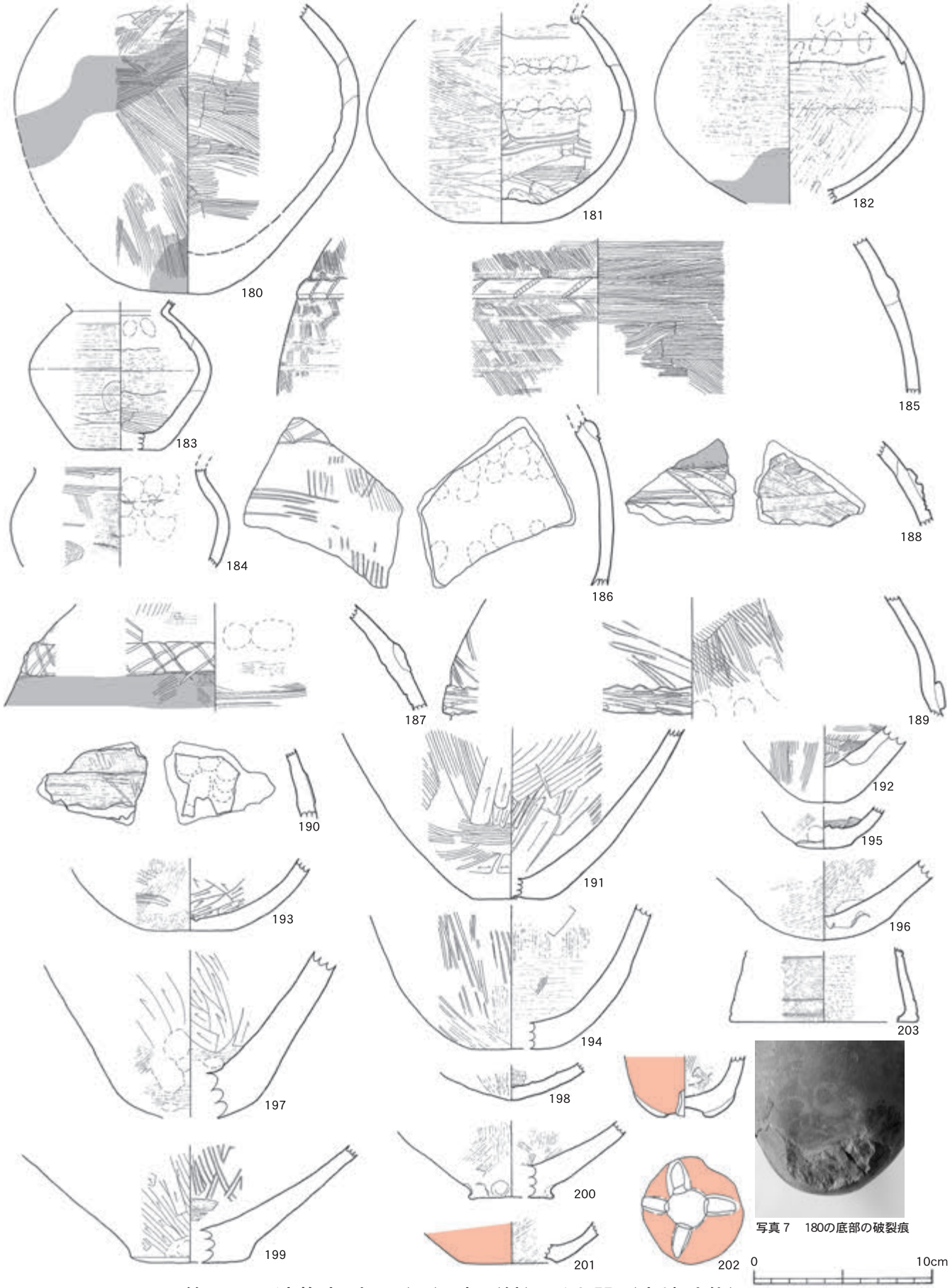


写真７　180の底部の破裂痕

第27図　遺物実測図（17）壷（鉢）形土器（古墳時代）

⑦　高坏

（ア）口縁部（第28・29図―204～212）

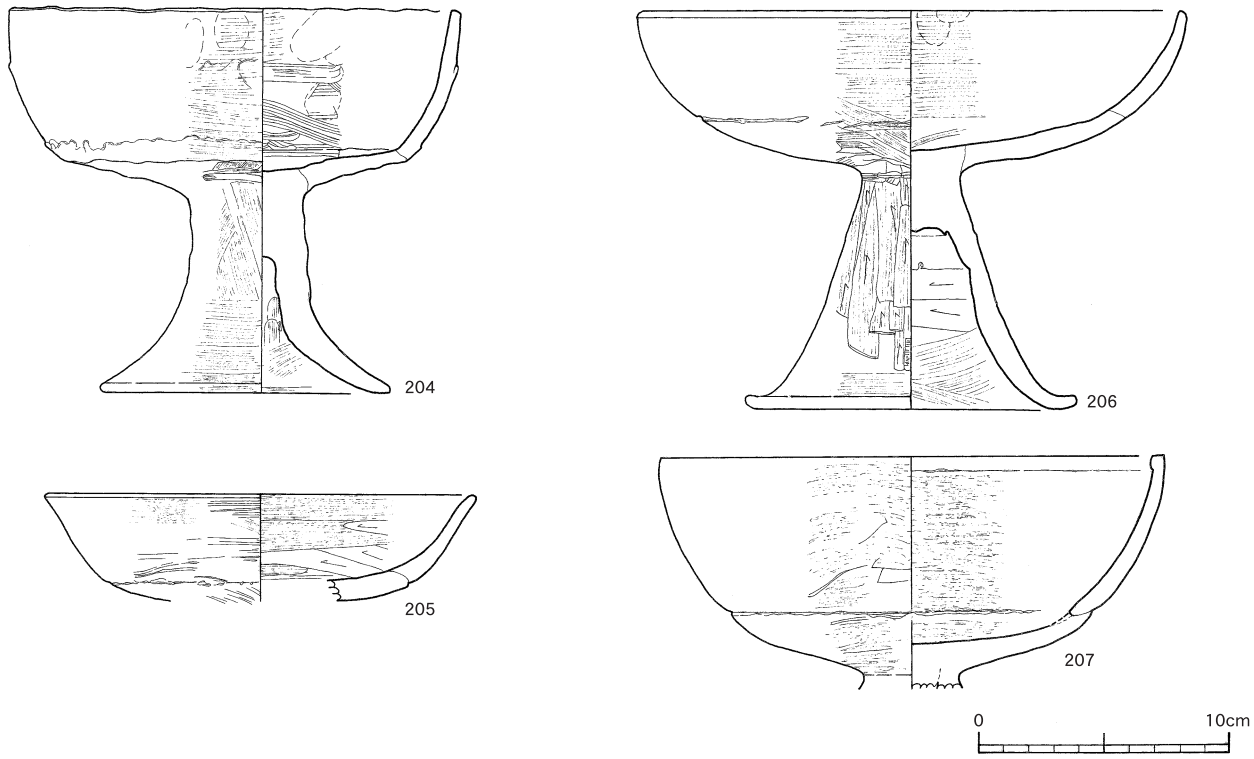
胴部の坏底部と体部の接合形態により，二分できる。坏部Ａ類は，204の１点のみである。器面のナデ調整が不十分で凸凹が顕著で，整形も左右対称的でない。坏底部と体部の接合が不完全であり，坏底部から体部に至る屈曲部（腰部）を面取り状にナデて一巡させ固着を図る。器形的には，腰部で屈曲して直口気味に立ち上がる。205～212は坏部Ｂ類に含まれる。205～207は，腰部の接合部の目止めが不完全であり，一方，沈線状の段差も明瞭・丁寧に作出されない。206は，脚柱部外面に，縦位上方向のケズリ（ややヘラナデ状）を左から右の順に施す。一方，脚柱部内面には，横位左方向のケズリを下から上の順に施す。脚柱部内面のケズリの手順は，他の資料にも共通する。208～212は，腰部に沈線状の明瞭な段差が巡らされる。210・211は赤褐色の色調を有し，硬粘質の胎土である。「赤色」効果を意図する可能性が考えられる。なお，210は，外面にススが付着する。212は，赤色顔料を塗布する。

（イ）脚部（第29図―213～227）

脚部は，脚部外面及び内面の断面形態により三分できる。高坏脚Ａ類は，213の１点のみである。脚内面の中空が中途でとどまる点は以下の215～222･224と共通するが，脚半分にも至らず穿孔径も２㎝弱と小さい。脚柱部と裾部の付根に，脚内面側から直径0.5㎝程の焼成前穿孔を４孔穿つ。内側の穿孔周縁は細かな剥離により破砕される。時期は異なるが，278に同様な事例が見られる。脚柱部の円筒形状の器形や膨らみ気味の裾部，穿孔を有する点など先行形態を保持し，脚内面は中空が中途でとどまる点で後行的要素を持つ。高坏脚Ｂ類は，214・215の２点である。214は，脚柱部内面で，左方向のケズリを右から左にスライドさせながら施す。坏底部に達する脚内面の中空は先行的要素である一方，広がる脚やラッパ状の裾部の器形は後行的要素を持つ。215～222は，高坏脚Ｃ類に含まれる。215・217・220・221の脚柱部内面の整形・調整の手順は，基本的に214と共通する。216・217は，脚柱部内面に絞り痕が明瞭に残される（写真８参照）。216・217の脚内面の中空は，一旦は裾部に達していると思われ，粘土を詰めて塞ぎ固着の補強を図っている（写真９参照）。板状の脚を筒状に成形し坏部に接合する技法が推察される資料である。なお，坏底部絞り痕に関しては，226の内面にも捉えられる。214・216・219は，脚柱部上端側面から外に張り出して坏底部を作出し，さらに坏底部に粘土を重ね貼付し強度補強する。なお，220～222は赤色顔料を塗布する。

⑧　ミニチュア土器（第29図―228～232）

何れも，手捏ねにより仕上げる。228～230は甕形土器をモチーフとし，231は壷形である。232は坏部を有すると推定され，高坏もしくは器台と思われる。雑感であるが，甕形土器や壷形土器に比して，高坏やミニチュア土器の量的比率が多く感じられる。



第28図　遺物実測図（18）高坏（古墳時代）

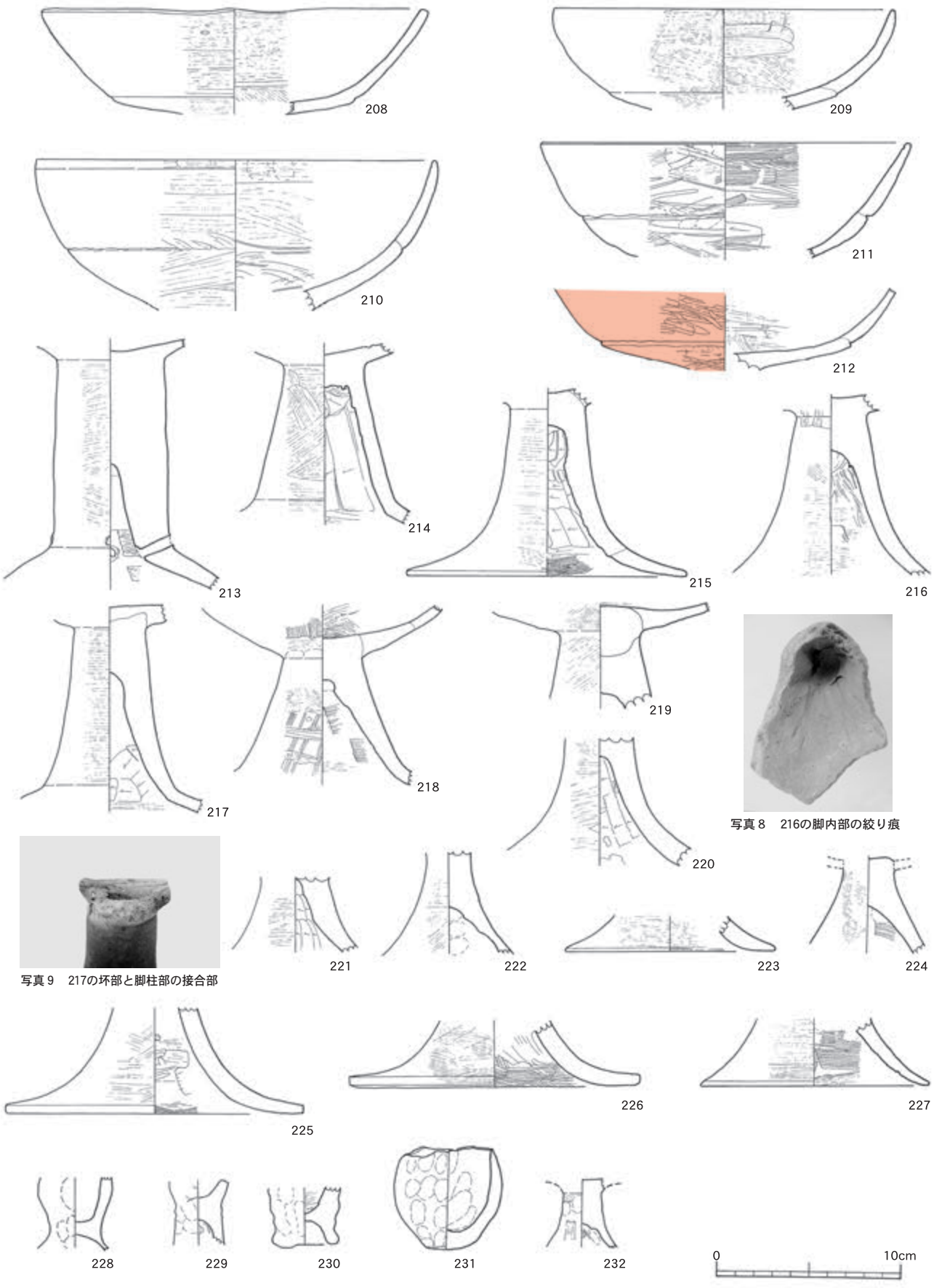


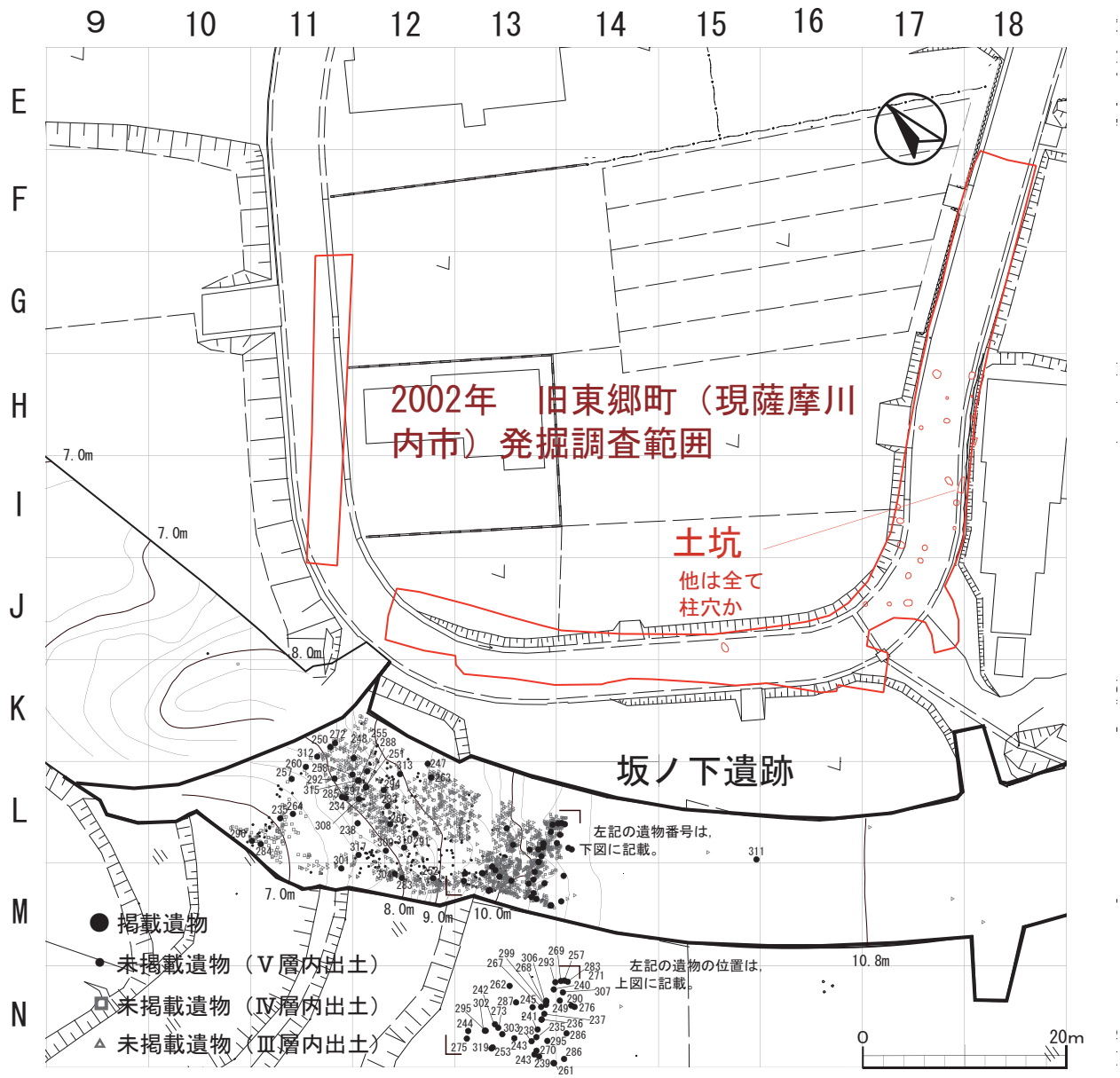
写真８　216の脚内部の絞り痕

写真９　217の坏部と脚柱部の接合部

第29図　遺物実測図（19）高坏（古墳時代）

第５表　遺物観察表（３）XⅡ～XⅥ類土器（弥生・古墳時代）

挿図	番号	出土区		層	器種	部位	色調 外側	色調 内側	調整 外側	調整 内側	胎土 石英	長石	角閃石・輝石	雲母	小礫	赤石	滑石	他	焼成	備考	取上番号
23	139	M	17	Ⅵa	XⅠ類	頸部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		◎	○			普通		2372
	140	M	14	Ⅵa	XⅠ類	口縁部	淡黄色	浅黄色			○	○	○		○				普通		5322
	141			Ⅰ	XⅠ類	口縁部	にぶい黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○						普通		一括
	142	L	10	Ⅳ	XⅠ類	口縁部	明赤褐色	灰オリーブ	ナデ	ナデ	○	○	○						普通		一括
	143	M	13	Ⅵ	XⅠ類	頸部	赤褐色	灰オリーブ	幅広ハケメ	ケズリ	○	○	○		○	○			普通		6016
	144	M	12	Ⅳ	XⅢ類	口縁部～頸部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		6067
	145	M	14	Ⅵa	XⅣ類	口縁部～肩部	橙色	浅黄色	ハケメ	幅広ハケメ	◎	◎	○						普通		2418
	145	M	13	Ⅲ	XⅣ類	口縁部～肩部	橙色	浅黄色	ハケメ	幅広ハケメ	◎	◎	○						普通		4743
	146	M	12	Ⅲ	XⅣ類	口縁部	浅黄色	浅黄色	ハケメ	ハケメ	○	○	○						普通		6284
	147	M	13	Ⅳ	XⅣ類	口縁部～胴部	浅黄色	にぶい黄色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		◎				普通		4217 4220 4227
	148	M	13	Ⅲ	XⅣ類	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ	(幅広)ハケメ・ナデ	○	○	○						普通	スス付着(外面)	4771
	149	M	13	Ⅱ Ⅲ	XⅣ類	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ	ハケメ	○	○	○						普通	スス付着(外・内面)	3287 5077
	150	L	13	Ⅳ	XⅣ類	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ	ハケメ	◎	◎	◎		○				普通		4175
24	151	M	13	Ⅲ	XⅣ類	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		○				普通	スス付着(外面)	5058
	152	M	13	Ⅲ	XⅣ類	口縁部～胴部	橙色	浅黄色	ハケメ	ハケメ	○	○	◎		○				普通	スス付着(外面)	1643 5549
	153	L	13	Ⅳ	XⅣ類	口縁部～胴部	赤褐色	にぶい黄橙色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		○				普通	スス付着(外面)	4168 4173
	154	M	13	Ⅳ	XⅣ類	口縁部～胴部	橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通	スス付着(外面)	4189 6376
	155	L	13	Ⅱ	XⅤ類	口縁部～胴部	にぶい黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	◎		○				普通	スス付着(外面)	6746
	156	L	13	Ⅱ	XⅤ類	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・ハケメ	ケズリ	◎	◎	◎		○				普通	スス付着(外面)	7014
25	157	L	13	Ⅳ	XⅥ類	口縁部～胴部	浅黄色	浅黄色	ハケメ	ハケメ	○	○	○						普通	スス付着(外面)	4171 4191
	158	L	14	Ⅵ	XⅥ類	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	浅黄色/橙色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		3985
	159	M L M L	13	Ⅱ Ⅲ Ⅳ	XⅥ類	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・ハケメ	ナデ	◎	◎	◎						普通	スス付着(外面)	2865 7016 4941 4184
	160	L	13	Ⅱ	XⅥ類	口縁部～胴部	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○					火山ガラス	普通		3391
	161	M	14	Ⅵa	XⅥ類	口縁部～胴部	にぶい橙色	にぶい黄色/赤色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通	スス付着(外面)	一括
	162	L	14	Ⅵa	XⅥ類	口縁部～胴部	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	◎		○				普通	スス付着(外・内面)	4083 4084
26	163	L	12	Ⅴ	甕脚A類	胴部～脚部	にぶい黄色	にぶい黄色	ナデ	ハケメ・ケズリ	◎	◎	◎		○				普通	スス付着(外面)	5717
	164	M	13	Ⅳ	甕脚B類	胴部～脚部	にぶい橙色/赤色	橙色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		○	○			普通	スス付着(外面)	6823 一括
	165	M	13	Ⅲ	甕脚B類	脚部	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	○		◎	○			普通		5043
	166	M	13	Ⅱ	甕脚C類	脚部	橙色	橙色	ハケメ	ハケメ	◎	◎	○		○				普通		3279
	167	M	13	Ⅲ	甕脚C類	脚部	にぶい橙色	橙色	ハケメ	ケズリ	◎	◎	○			○			普通		46??
	168	M	13	Ⅲ	甕脚D類	胴部～脚部	にぶい黄橙色/橙色	橙色	ハケメ	ハケメ	○	○	○			◎			普通		5063
	169	M	13	Ⅳ	甕脚D類	脚部	赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	◎		○	◎			普通		一括
	170	L	13	Ⅲ	壷形・鉢形	口縁部	黄橙色	黄橙色	ハケメ	ナデ	◎	◎	◎		○	◎			普通		一括
	171	L M	13 14 13 12	Ⅱ Ⅵa Ⅲ Ⅲ Ⅴ	壷形・鉢形	口縁部～胴部	赤色/浅黄橙色	赤色/浅黄橙色	ナデ	ナデ/ケズリ	○	◎	○			◎			普通	赤色顔料(外面)	7018 1736 4934 4937 5995
	172	L	13	Ⅲ	壷形・鉢形	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	△	△	△			◎			普通		4306
	173	L	12	Ⅵ	壷形・鉢形	口縁部～底部	浅黄橙色	灰白色	ナデ	ナデ	◎	◎	◎		○	○			普通	スス付着(外面)	7042
	174	M	13	Ⅱ	壷・鉢B類	口縁部～底部(完形)	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		2901
	175	L	14 13	Ⅱ	壷形・鉢形	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	◎		○				普通		6751 6988
	176	L	13	Ⅱ	壷形・鉢形	頸部	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			普通		3006
	177	L	13	Ⅳ	壷形・鉢形	頸部	赤褐色	明赤褐色	ナデ	なで	◎	◎	○		◎				普通		一括
	178	M	13 14	Ⅲ Ⅵ	壷形・鉢形	頸部～胴部	にぶい黄橙色	にぶい橙	ハケメ	ハケメ	○	○	○		◎	○		火山ガラス	普通		1646 2417
	179	L	13	Ⅱ	壷形・鉢形	頸部～胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		◎				普通		3365
27	180	L M L M L M L M	12 13 14 13 14 13	Ⅱ Ⅲ	壷・鉢B類	頸部～底部	浅黄橙色/橙色	浅黄橙色/にぶい橙色	ハケメ	ハケメ	◎	◎	○		◎	◎			普通	スス付着(外面)	2602 2611 2626 2696 3305 4019 4909 6701 6701 6772 6886 6959 4921
	181	M	13	Ⅱ Ⅲ	壷鉢A類	胴部～底部	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ・ハケメ	△	△	△			◎			普通		3552 3921 5466
	182	M	13 14	Ⅱ Ⅳ	壷形・鉢形	胴部	黄橙色	浅黄色	ナデ	ナデ	△	△	△			◎			普通	スス付着(外面)	3915 4759 一括
	183	M	13	Ⅳ	壷鉢A類	頸部～底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	○		○	○			普通		6736
	184	M	13	Ⅱ Ⅲ	壷形・鉢形	胴部	赤色/明褐色	明赤褐色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	○	○	○		◎				普通		2616 5545
	185	M	13	Ⅱ	壷形・鉢形	胴部	橙色	橙色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		◎	◎			普通		2597
	186	L	12	Ⅲ	壷形・鉢形	胴部	黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	○	○	○			◎			普通		4535
	187	L	13	Ⅱ	壷形・鉢形	胴部	浅黄色	浅黄色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	○	○	○			○			普通	スス付着(外面)	4133
	188	K	12	Ⅳ	壷形・鉢形	胴部	橙色/にぶい黄橙色	明赤褐色/にぶい褐色	ミガキ・ハケメ	ハケメ・ナデ	○	○	○		○				普通	スス付着(外面)	6935
	189	L	13	Ⅱ	壷形・鉢形	胴部	橙色	橙色	幅広ハケメ・ナデ	ハケメ	◎	◎	◎		◎				普通		6896
	190	M	14	Ⅵ	壷形・鉢形	胴部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	◎		◎				普通		2414
	191	L M	13 13	Ⅱ Ⅲ Ⅳ	壷鉢A類	胴部～底部	淡黄色	淡黄色	ハケメ・ケズリ	幅広ハケメ	◎	◎	◎		○				普通		一括 3070 5044 4633
	192	M	13	Ⅳ	壷鉢A類	底部	淡黄色	黄灰色	ハケメ	ハケメ	◎	◎	◎		○				普通		一括
	193	M	13	Ⅳ	壷鉢A類	底部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ケズリ	○	○	○		◎				普通		4623
	194	M	13	Ⅲ	壷鉢A類	胴部～底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	幅広ハケメ	ナデ	◎	◎	○		◎	○			普通		5337
	195	L	13	Ⅱ	壷鉢A類	底部	明黄褐色	橙色	ナデ・ハケメ	ハケメ	○	○	○		○				普通		7027
	196	L	13	Ⅱ	壷・鉢B類	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・ハケメ	◎	◎	○		○				普通		3319
	197	M	13 12	Ⅲ	壷・鉢B類	胴部～底部	にぶい黄橙色	浅黄色	ケズリ	ケズリ	◎	◎	◎		◎	○			普通		4332 5272
	198	L	12	Ⅵ	壷・鉢B類	底部	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・ハケメ	○	○	○			○			普通		4428
	199	L	13	Ⅱ	壷・鉢C類	胴部～底部	にぶい黄橙色	淡黄色	幅広ハケメ	幅広ハケメ	◎	◎	◎		○	◎			普通		357
	200	L	13	Ⅱ	壷・鉢C類	胴部～底部	明赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○				普通		6995
	201	L	13	Ⅲ	壷・鉢D類	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○			○			普通	赤色顔料(外面)	4308
	202	L	13	Ⅱ	壷・鉢D類	胴部～底部	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○			◎			普通	赤色顔料(外面)	3482
	203	M	13	Ⅲ	壷・鉢E類	底部	橙色	灰黄色	ナデ	ナデ	○	○	○			○			普通		一括
28	204	M L	13 14	Ⅱ	坏部A類	口縁部～底部	浅黄橙色/黄橙色	にぶい黄橙色/にぶい橙色	ナデ	杯部ハケメ/ナデ・脚部ナデ	○	○	○		○				普通		2604 2613 6783 6859
				Ⅲ	坏部B類	口縁部～底部	浅黄橙色/黄橙色	にぶい黄橙色/にぶい橙色	ナデ	杯部ハケメ/ナデ・脚部ナデ	○	○	○		○				普通		一括
	205	L	10	Ⅲ	坏部B類	口縁部～体部	浅黄橙色	淡黄色	ナデ	ナデ	○	○	○			◎			普通		一括
	206	M L	13	Ⅱ	坏部B類	口縁部～脚部	橙色	にぶい黄橙色	杯部ナデ・脚部ケズリ	杯部ナデ・脚部ケズリ・ナデ	○	○	○		○				普通		2615 3726
	207	M	13	Ⅲ Ⅳ	坏部B類	口縁部～体部	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	△	△	△			◎			普通		6288 4245
29	208	M	14	Ⅳ	坏部B類	口縁部～体部	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	△	△	△			◎			普通		一括
	209	M	13	Ⅲ	坏部B類	口縁部～体部	橙色/浅黄橙色	淡黄色	ナデ	ナデ	○	○	○			○			普通		5051
	210	M L M	13	Ⅲ Ⅳ	坏部B類	口縁部～体部	赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○						普通		4746 5670 5676 4597
	211	M	14 13	Ⅲ Ⅳ	坏部B類	口縁部～体部	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ハケメ	○	○	○		○				普通		4987 一括
	212	L	14 13	Ⅱ	坏部B類	口縁部～体部	浅黄橙色	浅黄橙色	ミガキ	ナデ	△	△	△			○			普通		6704 6820
	213	L	13	Ⅵ	高坏脚A類	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ/ハケメ	△	△	△			◎			普通		6573
	214	L	13	Ⅱ	高坏脚B類	脚部	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ケズリ	○	○	○						普通		3400
	215	L	13	Ⅳ	高坏脚B類	脚部	橙色/浅黄色	橙色/浅黄色	ナデ	ケズリ	◎	◎	○			○			普通		4203
	216	M	13	Ⅵ	高坏脚C類	脚部	橙色	橙色/浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		○	◎			普通		4643
	217	M	13		高坏脚C類	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ケズリ	○	○	○			◎			普通		一括
	218	M	13	Ⅲ	高坏脚C類	体部～脚部	にぶい橙色	にぶい橙色	杯部ハケメ・脚部ナデ	杯部ナデ・脚部ケズリ/ハケメ	○	○	○	○	◎	○			普通		5050
	219	M	13	Ⅱ Ⅲ	高坏脚C類	体部～脚部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	△			◎			普通		3547 4685
	220	M	13	Ⅲ	高坏脚C類	脚部	浅黄色	浅黄色	ナデ	ケズリ	△	△	△						普通	赤色顔料塗付(外・内面)	5686
	221	L	13	Ⅲ	高坏脚C類	脚部	浅黄橙色	浅黄色	ナデ	ケズリ	△	△	△						普通	赤色顔料塗布(外面)	4340
	222	L	13	Ⅲ	高坏脚C類	脚部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ユビオサエ	○	○	○		○				普通	赤色顔料塗付(外・内面)	5011
	223	L	13	Ⅱ	高坏	脚部	にぶい黄橙色	灰黄色	ナデ	ナデ	△	△	△			◎			普通	赤色顔料塗付(外・内面)	一括
	224	M	14	Ⅳ	高坏	脚部	にぶい橙色	暗灰黄色	ナデ	ハケメ・ナデ	△	△	△						普通		一括
	225	L M	13	Ⅱ Ⅲ	高坏	脚部	橙色	橙色	ナデ	ハケメ・ナデ	△	△	△			◎			普通		3156 4769
	226	L	13	Ⅱ	高坏	脚部	橙色	赤褐色	ナデ	ハケメ	△	△	△			◎			普通		6805
	227	L	13	Ⅱ	高坏	脚部	橙色/浅黄色	にぶい黄色	ナデ	ハケメ	△	△	△			○			普通		3321
	228	M	13	Ⅲ	ミニチュア土器	胴部～脚部	にぶい黄橙色	橙色	ユビオサエ	ナデ	○	○	○		○				普通		2744
	229	L	13	Ⅱ	ミニチュア土器	脚部	明赤褐色/にぶい黄色	明赤褐色	ユビオサエ	ナデ	○	○	○			◎			普通		一括
	230	L	12	Ⅴ	ミニチュア土器	脚部	橙色	橙色	ユビオサエ	ナデ・ケズリ	○	○	○		○				普通		一括
	231	L	14	Ⅱ	ミニチュア土器	口縁部～底部(完形)			ユビオサエ	ユビオサエ	○	○	○		○				普通		6709
	232	L	13	Ⅲ	ミニチュア土器	脚部	浅黄色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			普通		一括



第30図　遺構位置図及び遺物出土状況図（古代）

1　調査の概要

古代の遺物は，K～M－10区～13区（傾斜面）で多く出土した。しかし，古代・中世の本来の遺物包含層（Ⅴ層）は層厚が薄く，包含層（Ⅴ層）内遺物は僅かであり，多くは，その上位の流れ込みの層（Ⅲ・Ⅳ層内）で出土している。流れ込みのⅢ・Ⅳ層内遺物も，本来は，台地上段面（L・M－13区～18区）のⅤ層内遺物であったと判断でき，坂ノ下遺跡上段面の様相を捉える上では重要であると捉え，本節でも掲載した。なお，一部は縄文時代包含層のⅥa層内の上位でも出土している。遺物に関しては，底部の切り離し痕がヘラ切りである土師器や中空の高台を有する土師器の坏・埦，須恵器の甕・壷・碗，越州窯青磁碗や緑釉陶器碗が出土している。遺構については，検出されていない。なお，古代の遺物の本来の所在位置に推定される河岸段丘上段面（L・M－13～18区）の隣接地（北東側2,30m先）には，「坂ノ下　2002」により，柱穴21基と土坑１基が報告されている。なお，柱穴については，「規則的な並びは確認できなかった」と報告され，掘立柱建物跡と認定できるのはなかったようである。土坑については，「牛と思われる骨が出土し―（中略）―比較的新しい時代のものであると思われる」とある。

2　遺物

（１）　土師器

坏及び埦の器種分類は，特に破片資料の場合，困難な

面が多いが，本稿では高台を有しない，もしくは低い充実高台を有するのを坏に分類し，中空高台を有するのを埦として扱うこととする。また，底部の高台の有無が捉えられない口縁部資料については，本遺跡では坏の底部が多いことに鑑み，坏の口縁部に含めて報告したい。

① 坏　口縁部（第31図―233～236）

明瞭に坏と認定しうるのは234～236の３点である。233は極僅かに口唇端部が端反るのに対し，235・236は端反らない。233は，本稿の他の坏・埦の資料に比して，胎土中に砂粒や小礫が密に含まれる。234は内外面に，235は内面にススが付着する。本稿資料の坏・埦には，内外面にススや赤化等火熱を受けた痕跡を残す資料が高比率で見られる。燈明皿への転用等の可能性も一考だが，外面のスス付着や赤化から，人家火災や祭祀儀式に伴う被熱の可能性が高いと判断される。236は唯一確認される坏の「内黒土師器」である。内面には，幾重にも斜行するミガキ痕が錯綜する。外面にススが付着する。233・234の底部にはいわゆる「ヘラ切り痕」が捉えられ，その軌跡からロクロ（器体）を時計回りに回転させたと推察される。

② 埦　口縁部（第32図―237～245）

口縁部形態については，237のみ口唇端部が端反らない口縁部Ａ類であり，他は，端反るＢ類に含まれる。237は底部が僅かに高台状を呈するＢ類に属する。内外面にススが付着する。237は内外面の色調が鮮やかな明橙色であり，赤色土器を意識した素材選択の可能性が窺える。238は充実高台を有する底部Ｃ類に属する。Ｃ類は本資料１点のみである。底部ヘラ切り痕から，ロクロは233・234同様に時計回りの回転が捉えられる。239はスス付着や被熱赤化が238と酷似しており，同一個体の可能性が高い。胎土色調が237よりさらに赤色が強く237同様に赤色土器を意識した素材選択の可能性を見る。なお，238・239もスス付着や被熱による赤化が顕著である。240は，中空高台を呈する底部Ｅ類に属する。高台が「ハ」の字状に開く。内外面にススが付着する。241は，内面に籾痕が捉えられる（写真９・10参照）。242は，いわゆる「内黒土師器」の埦である。外面にスス及び若干の熱変色が見られる。以上の資料に比して，243～245は復元口径が大きく，243・244の復元口径16.5㎝，245が18㎝程である。244は，赤色顔料の塗布が外面及び一内面側の口縁部上端部に及ぶ。赤色及び浅黄橙色であり，選択的素材使用が考えられる。245は，外面に粗い斜位のハケメが施される。

③ 坏・埦　底部（第32図―246～264）

高台を有しない底部Ａ類は，246・247の２点である。246の底部厚は0.6㎝と薄く，底径は６㎝程を測る。坏の可能性を見る。一方，247は底部厚が１㎝程とやや厚く，重量感がある。僅かに高台状を呈し，Ｂ類の要素も見られる。248～250は，底部が厚みのある円盤状を有するが，高台に至らないＢ類である。249の見込みのユビオサエの軌跡からは，時計回りのロクロ（器体）の回転が捉えられる。これは，前述の233・234・238の底部のヘラ切り痕の軌跡と一致する。250は内面にススが付着する。251～257は，器高１㎝程の高台を有するＣ類である。253・254の底部には黒色が着色される。類例を見ない特異な資料である。255の高台側面には，ススが付着する。254・256～258は，数㎜大の赤色粒子を多く含む。256・257には，長軸長８㎜～９㎜程度，短軸長３㎜程の籾痕が捉えられる。258～263は，器高１㎝程の中空高台を有するＤ類である。258の高台は，「ハ」の字状に外に張り出し，畳付は平らに均す。鮮やかな橙色を呈する色調で，2，3㎜大の赤色粒子を密に含む胎土である。底部内面の整形・調整にバリエーションが見られる。258が凸レンズ状に膨らむのに対して，261は凹レンズ状にへこむ。260は極平坦に均すが，259・264は底部内面の周縁にナデを巡らす。262・263は花弁状に摘み出し，中心部が膨らむ。「坂ノ下　2002」の「遺物番号299」には同様な資料が報告されている。内黒土師器は，260・261・264の３点である。262の見込みには，ほぼ並行する11条程の極細の線刻が刻まれる。「坂ノ下　2002」には，篦状の工具で突き刺した跡がある「遺物番号295」と内面に指頭での調整痕と篦状工具で突き刺した跡がある「遺物番号300」が報告されている。また，本稿では１点も確認されない墨書土器が，「坂ノ下　2002」「遺物番号301～307」で報告がなされている。259・263は，割れ口にもススが付着することから，欠損後の被熱即ち人家火災等が原因と考えられる。前述したが，坏の口縁部資料にも，ススや赤化等被熱変性を受けた資料が捉えられる。264は，器高0.4㎝程の低い高台を有するＦ類である。

④ 坏・埦　体部（第32図―265）

265は小片の為，断定は難しいが，色調や器厚から古墳時代の鉢形土器もしくは土師器の埦の体部片と判断した。内面に２粒の籾痕が捉えられる。本遺跡で出土した土器の胎土を遍く観察し，籾痕やコクゾウムシの圧痕を探したが，古墳時代の土器に籾痕等を捉えることはできなかった。一方，古代・中世の土器からは，何点かの籾痕を確認することができたので，本資料も古代・中世の土師器の可能性が高いと判断し，掲載した。

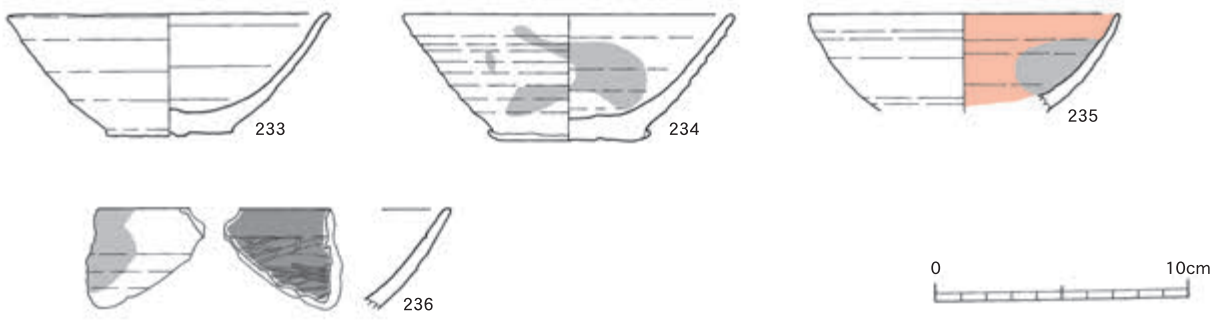
⑤ 甕類（第32・33図―266～274）

口縁部の断面形態により，3分が可能である。口縁部がＬ字状に強く外に張り出す甕Ａ類が266～269で，270～

273も同様に外に張り出すが，Ｌ字状というより「く」の字状で張り出しが弱い（Ｂ類）。274は，口縁部の外反が弱く口唇端部が玉縁状に肥厚する（Ｃ類）。266～268は口縁部及び胴部の器厚に大差はないが，269～274は，本来の厚みを保持する口縁部の器厚に対して，胴部内面の器厚は，ケズリにより極薄く仕上げられる。270の胴部断面の最薄部は，3㎜程と極薄である。器面調整については，内面に関しては上方向のケズリで共通するが，外面については縦位ハケメ・横位ハケメ・ナデの３種に分類できバリエーションに富む。266・269・270・271・273は，外面に縦位のハケメを施す。266は，縦位ハケメ後に横位のやや幅広の単位のハケメを１条巡らす。269・270・273は，単位が幅広の条痕状のハケメで，その後のナデ消しにより不鮮明である。271は，左から右の順にハケメを施すのが捉えられる。267は，横位ハケメを鮮明に残す。この１点のみの出土である。268・272・274は，横位ナデを巡らす。268・272が工具状ナデであるのに対して，274は，ユビナデと思われる。内面ケズリについては，266・267・270・271・273などは，右から左の順に，斜位に上方向のケズリを施す。製作者の立ち位置を反時計回りにずらしながら，もしくは土器自体を時計回りに回転させながら製作する作業風景が再現し得る。逆に268は左から右の順にケズリを施していると捉えられる。外面調整の多様さが，時期差を示すのか，製作者の個性の顕現なのか検討していく必要性を感じる。

（２） 土製品等（第33図―275～279）

275は，坏の充実高台を面取りした円盤状土製品である。殆ど剥離痕を伴わず，輪積み状の接合痕に沿って剥離する。側縁や割れ口がやや摩耗している。重さは50.43gである。「坂ノ下　2002」の「遺物番号292～300」には，「土師器の埦と使用した後，二次加工を施したことが伺える」との報告があり，本資料も二次加工及び再利用の可能性を持つと判断される。276は，中心部に最短径0.3㎝の穿孔を施す。穿孔断面は，外側に開き中心部が狭まる。穿孔時の串状工具の回旋に伴う穿孔痕と判断される。紡錘車への転用品の可能性を見る。重さは56.55gである。一方，体部の剥落・面取りが粗雑であることや，割れ口の摩耗が弱く顕著な使用が見られないこと，他遺跡で底部に穿孔を施す祭祀具と思われる坏等が出土していることなどを鑑み，底部に穿孔を伴う坏の欠損品の可能性も指摘しておきたい。277は，手捏ねで成形する。両面側から雑な穿孔を１孔施す。両面に指頭押圧が捉えられる。本遺跡より下流側の川内川旧河川敷に所在する外川江遺跡「外川江　1984」の「図面番号792～813」には杓子型土器が報告されており，同種製品の取っ手に相当する可能性を見る。他には，「先史・古代の鹿児島　2007」の「図３　岡野」掲載の人形土製品の腕部の可能性も考えられる。278は，口径2，3㎜程の穿孔を１孔施す。埦を想定して図化したが，小片のため断定できない。279は長楕円礫状を呈し，粘土塊の可能性を持つ。胎土は，色調が橙色で数㎜程の赤色粒子を含む等，土師器の胎土に酷似する。なお，「坂ノ下　2002」の「第Ⅴ章　発掘調査のまとめ」に「（いくつかの柱穴の）数ケ所からは，土師器を作る過程で放置されたかのような塊（図版６：図版９の誤植と判断される）が出土した」との報告があり，図版９に写真が掲載されている。



第31図　遺物実測図（20）土師器　坏（古代）

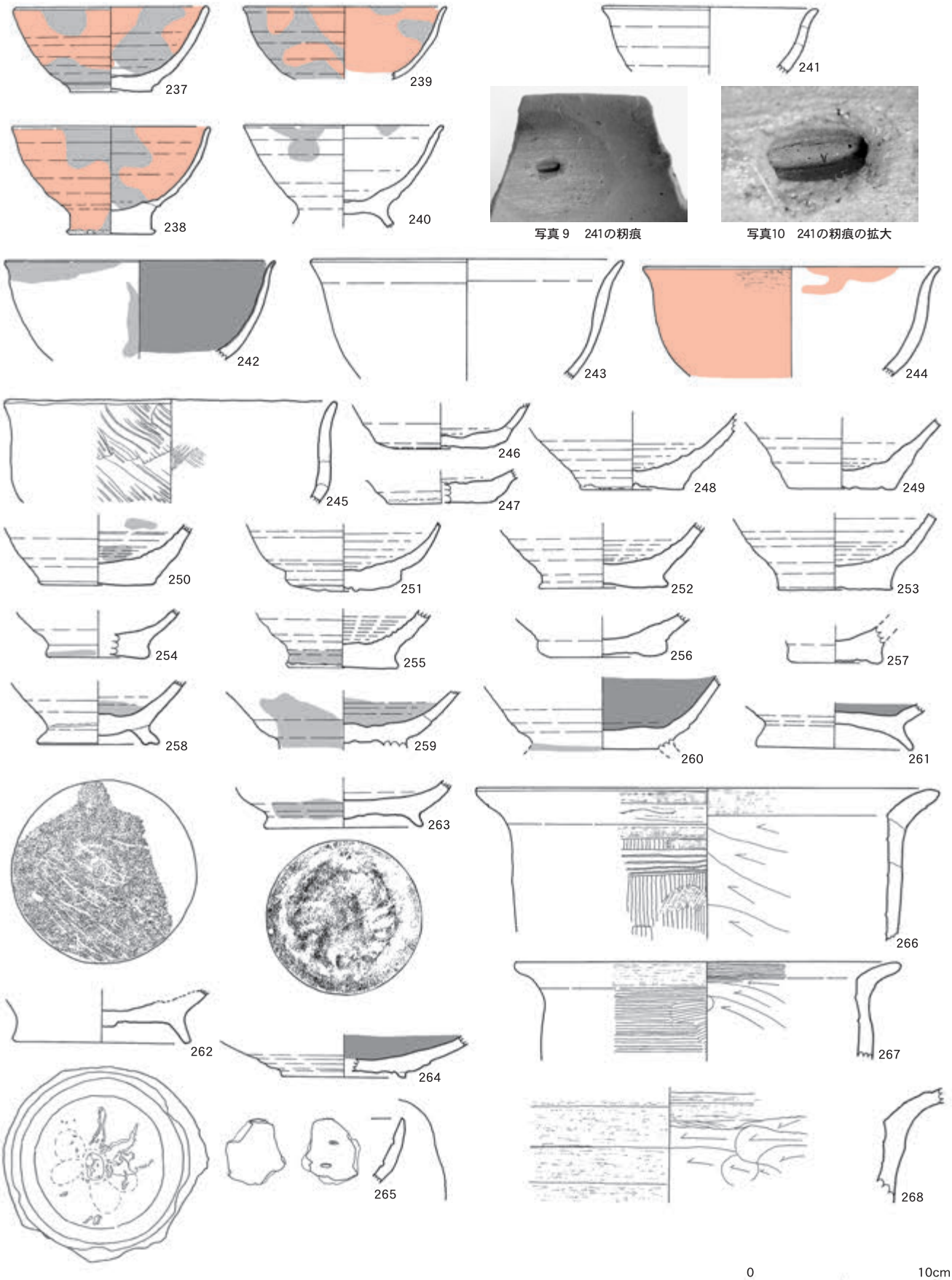
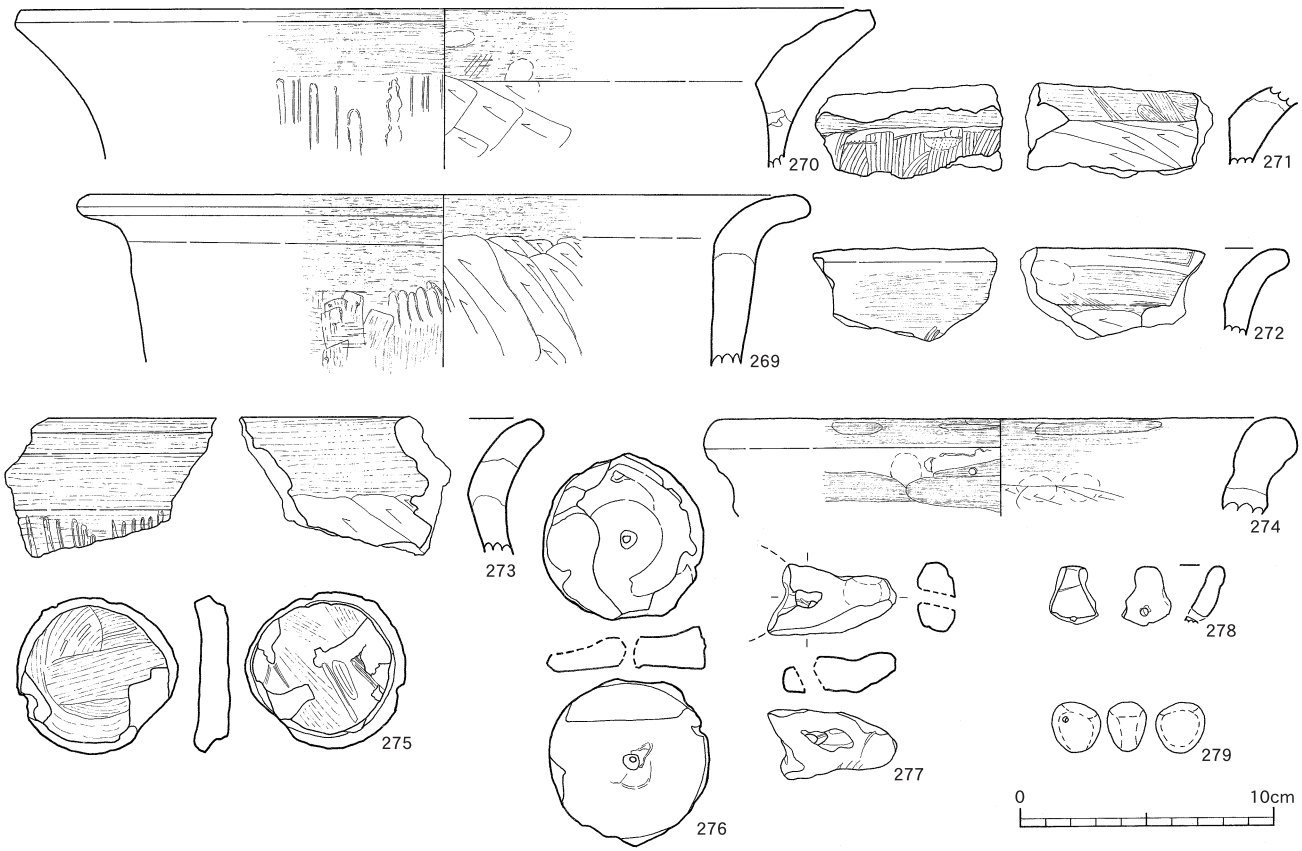


写真９　241の籾痕

写真10　241の籾痕の拡大

第32図　遺物実測図（21）土師器　埦・甕（古代）



第33図　遺物実測図（22）土師器　甕・土製品（古代）

（３）　須恵器（第34～36図―280～307）

本稿では小片が多く，坏・皿・碗の器種分類は困難であるので，「坏・皿・碗」としてまとめて報告することとする。「坂ノ下　2002」では，「甕が少なく，ほとんどが壷であった」と報告するが，本遺跡では甕が多く確認された。

①　坏・皿・埦（第34図―280～282）

280・281は，口縁部資料である。280は，器高が高いので埦と判断される。口縁上端部をやや内弯させ，口唇端部が尖端を呈する。器厚は0.4cm程と薄い。一方，281はユビオサエにより口縁上端部がやや端反る。口唇部断面は舌状を呈する。器厚は0.7cmとやや厚めである。282は，腰部にユビオサエを施し，体部がやや外反する。底部には，ヘラ切り痕が捉えられる。外面の色調はにぶい黄橙色を呈し，やや焼成が弱い。

②　甕・壷（第34～36図―283～307）

（ア）口縁（第34図―283～290）

283～287の他，290と比較して口径が広いと捉え，288・289も甕に分類した。283・284の復元口径は，本稿須恵器中，最大で，口径（外径）53.2cm程を測る。二重口縁を有し，頸部に４条の櫛描き波状文を巡らす。285も二重口縁を有し，頸部には平行タタキ痕を施す。286は，復元口径（外径）が40.5cm程と大型である。頸部が大きく外反し，口唇上端を鋭く尖らせる。287は復元口径（外径）25.5cm，288は18.6cm，289は18cmを測る。何れも，口唇部にM字状の凹みを有する。290は，二重口縁を有する壷の口縁部資料である。本稿で明確に判断しうる壷の口縁部は，本資料１点のみである。頸部の復元外径は5.7cm，内径は1.3cmを測る。頸部に1，2条の沈線を巡らす。

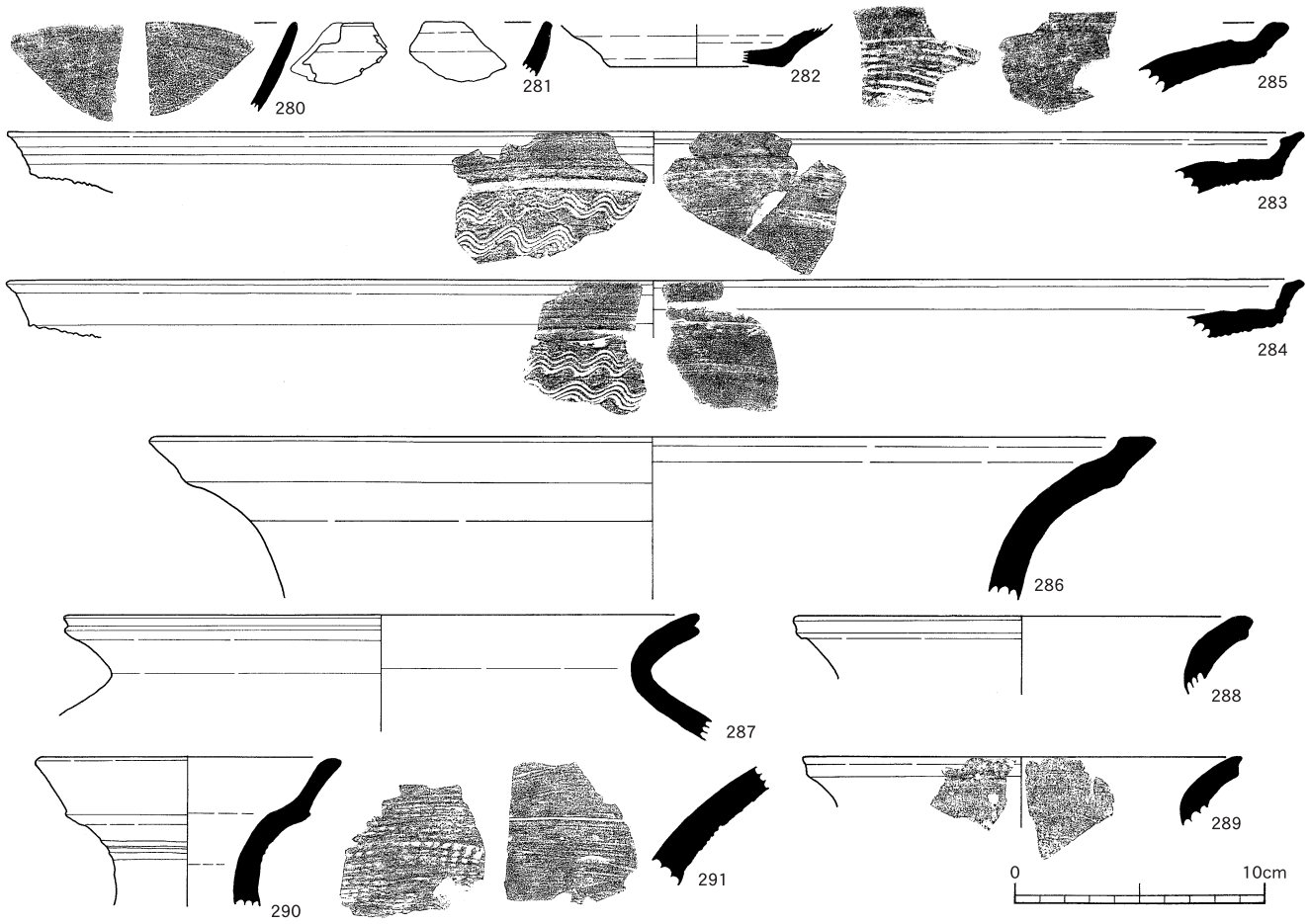
（イ）胴・底部（第34～36図―291～307）

291～297は，甕・壷の頸部資料である。外面調整は，292にはナデ痕，291・295～298には格子目のタタキ痕が，296・297には平行タタキ痕が（296は一部格子目を含む）捉えられる。一方，内面調整は，294～297には同心円状の当て具痕が捉えられる。295は，頸部内面の指頭押圧に伴う布目状の格子目が捉えられる（写真12参照）。糸組み部分が凸状を呈することから，布でなく格子目状を施したヘラ状工具等特異な素材を当てた可能性を示す。298は肩部の資料で，縦位の把手を添付する。胴部にはススが付着する。頸部内面の指頭押圧に伴う布目状の平行文が捉えられる。294と同様に，糸組部分が凸状を呈することから，294同様の特異な工具（素材）を当てた可能性を示す。299～307は，胴部資料である。外面は，全面が格子目のタタキ痕で覆われる。内面は，最大径部より上位では同心円状の当て具痕が捉えられ，下位では

縦位の平行当て具痕が残される。タタキ整形の順を追うと，胴部下半の平行当て具タタキ後に，上半の同心円状のタタキを施す（写真・まとめ参照）。304の外面には黒色の灰釉が付着する。305の外面は赤黒色の灰釉が覆い，内面には黒褐色の灰釉が，斑点状に付着する。306は，外面がにぶい赤褐色に変色する。307は底部付近の資料である。胎土が淡黄色を呈し，外面にはススが付着する。外面に，平行タタキ痕とは別に，櫛描き状の平行沈線が６条程施される。

（４）陶磁器（第36図―308～319）

308～314は，越州窯青磁Ⅱ類の碗である。越州窯青磁のⅡ類は，9世紀後半から10世紀代の年代が与えられる（山本信夫氏指導）。308は，内外面ともオリーブ黄色を呈する口縁部資料である。309・310は，内外面が浅黄色の同色調で，同一個体と思われる。311は腰部資料で，312は底部が蛇の目高台を呈し，畳付幅は1.5㎝である。311・312もにぶい黄色の同色調で器厚や器形が類似する事から，同一個体の可能性がある。313はオリーブ黄色の釉が均一でなく，部分的に釉溜まりが見られる。腰部は無施釉である。314は，底部から腰部にかけて鈍い赤褐色を呈する。見込みには，淡黄色の胎土目が付着する。内面には，僅かにオリーブ灰色／浅黄色明黄褐色の釉が残存する。胎土の悪土を隠すために，化粧土をしている。315～317も越州窯青磁Ⅱ類である。315・316は壷の底部が想定され，同一個体の可能性がある。内外面とも灰オリーブ色を呈し，底部は切り出しにより作出される。底部には砂目が付着する。316は，一部底部にも施釉が回り込む。317は，胎土や色調が317・318に類似するが，底部に砂目が捉えられない差異が見られる。底径が5.5㎝程とやや大きめで，碗や鉢等器種は特定できない。318・319は，緑釉陶器である。器種は壷か。底部を削り出しにより作出する。「坂ノ下　2002」にも，写真図版や文章中に，緑釉陶器片の出土が報告されている。



第34図　遺物実測図（23）須恵器　坏他（古代）

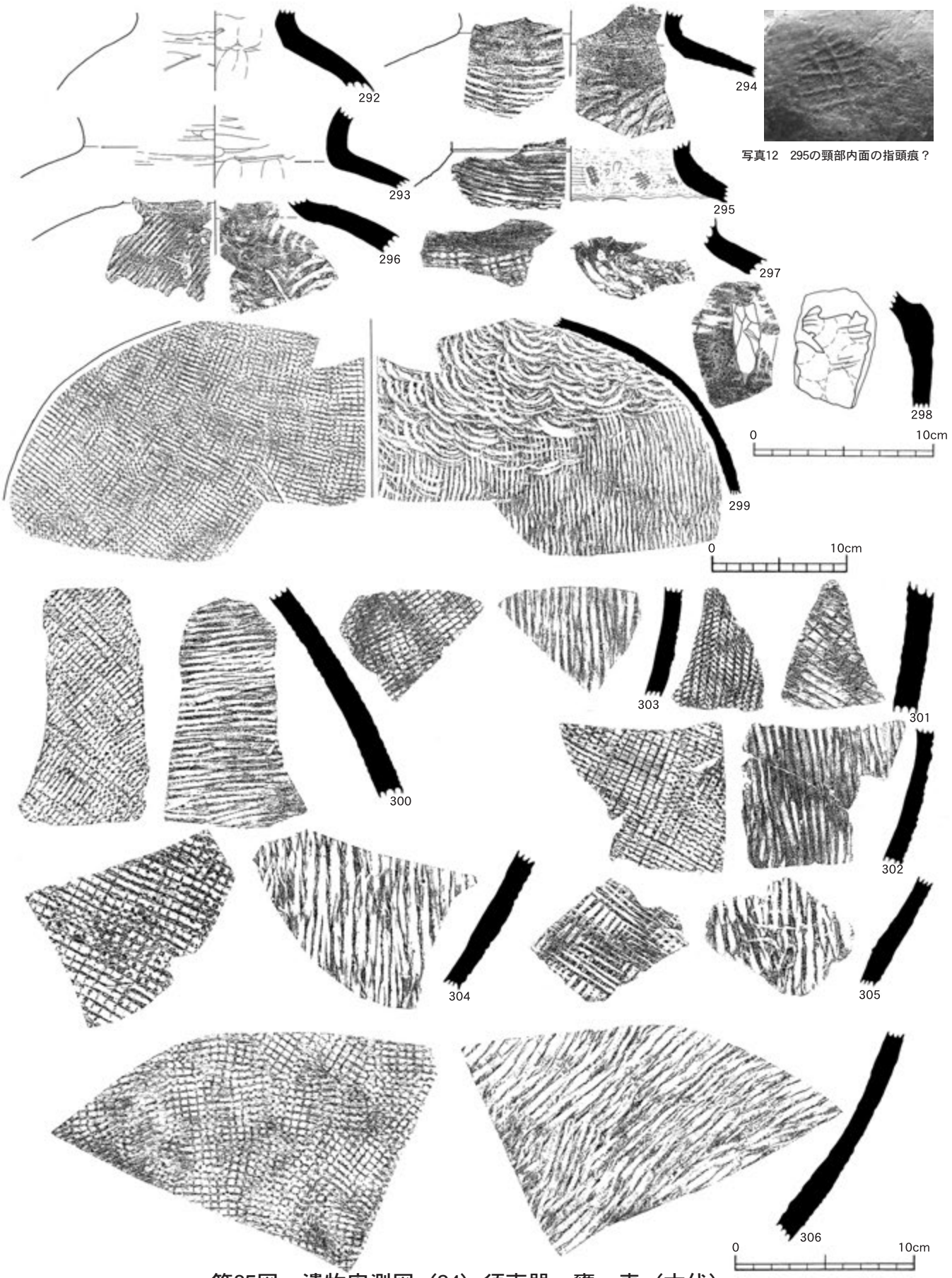
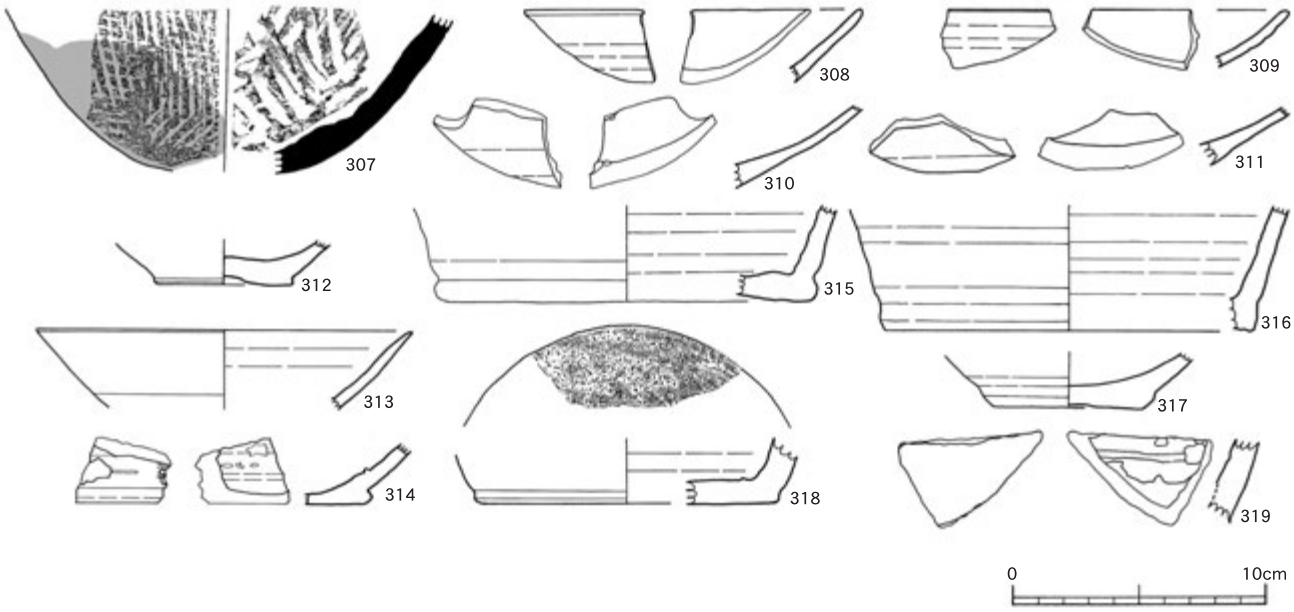


写真12　295の頸部内面の指頭痕？

第35図　遺物実測図（24）須恵器　甕・壷（古代）



第36図　遺物実測図（25）須恵器　甕・壷・輸入陶器（古代）

第６表　遺物観察表（４）土師器　坏　椀　甕（古代）

挿図	番号	出土区		層	種別・器種	形態分類	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 外側	色調 内側	調整 外側	調整 内側	備考	取上番号
31	233	L	12	Ⅲ	土師坏	土師塊口A類	口縁部～底部(完形)	12.00	5.00	4.85	橙色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		5774
	234	L	11	Ⅲ	土師坏	土師塊口A類	口縁部～底部(完形)	12.60	6.00	5.00	にぶい黄橙色/橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	スス付着(外・内面)	5831
	235	L	11	VI	土師坏	土師塊口B類	口縁部～体部	12.00	－	－	にぶい黄橙色	明赤褐色/浅黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	赤色顔料塗布(内外面)、火熱受	6203
		M	13													6216
	236	L	13	Ⅱ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～体部	14.20	－	－	にぶい黄橙色	黒色	ロクロによるナデ	ミガキ	黒色A類・火熱受	6973
32	237	M	13	Ⅳ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～底部(完形)	10.00	41.00	4.60	浅黄色/橙色	浅黄色/橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内外面胎土橙色	6418
		L		VI												6204
		M														6217
																6218
																6219
	238			VI	土師塊	土師塊口B類/土師SD1類	口縁部～底部(完形)	10.20	4.80	5.90	赤色/赤褐色	橙色/赤色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内外面胎土橙色	6018
		M	13													6019
	239	M	13	VI	土師塊	土師塊口B類	口縁部	10.40	－	－	赤褐色	明赤褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	赤色顔料塗布(内外面)、火熱受	6018
	240	L	14	Ⅱ	土師塊	土師塊口B類/土師底E類	口縁部～高台	10.30	－	－	浅黄橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	スス付着(外・内面)	6940
																6948
																7004
																7006
																一括
			13													一括
	241	M	13	Ⅲ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～体部	10.90	－	－	橙色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	籾痕付着	5540
	242	M	13	Ⅳ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～体部	－	－	－	淡黄色	黒色	ロクロによるナデ	ミガキ	黒色A類・火熱受	6220
	243	M	13	Ⅱ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～体部	16.40	－	－	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		3276
	244	M	13	Ⅲ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～体部	15.40	－	－	赤色/浅黄橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	赤色顔料塗布(外:全面, 内:口縁部)	5067
				Ⅳ												4595
	245	L	13	Ⅲ	土師塊	土師塊口B類	口縁部～体部	17.60	－	－	橙色	橙色	幅広ハケメ	ロクロによるナデ		5346
	246	L	13	Ⅳ	土師塊	土師底A類	底部	－	7.00	－	淡黄色	淡黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		6608
	247	L	12	Ⅲ	土師坏・塊	土師底B類	底部	－	6.00	－	浅黄色	浅黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		一括
	248	K	12	VI	土師坏・塊	土師底B類	体部～底部	－	5.50	－	橙色	にぶい黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		7043
	249	L	13	Ⅲ	土師坏・塊	土師底B類	体部～底部	－	5.80	－	浅黄橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		5816
																5817
	250	K	11	Ⅱ	土師坏・塊	土師底B類	体部～底部	－	6.45	－	橙色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	スス付着(内面)	6767
	251	L	12	Ⅲ	土師坏・塊	土師底C類	体部～底部	－	5.50	－	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		5731
				Ⅳ												6604
																6605
	252	M	12	V	土師坏・塊	土師底C類	体部～底部	－	6.60	－	橙色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	高台底面黒色塗布	5172
	253	M	12	Ⅲ	土師坏・塊	土師底C類	体部～底部	－	6.20	－	淺黄橙色/にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	高台底面黒色塗布	6065
		L	11	Ⅳ												一括
	254	M	14	Ⅲ	土師坏・塊	土師底C類	体部～底部	－	5.60	－	浅黄橙色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	高台底面黒色塗布	一括
	255	L	12	Ⅲ	土師坏・塊	土師底C類	体部～底部	－	6.30	－	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	高台底面黒色塗布	6135
	256	L	12	Ⅲ	土師坏・塊	土師底C類	体部～底部	－	6.20	－	浅黄橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ		5819
	257	L	14	Ⅳ	土師坏・塊	土師底C類	底部	－	5.00	－	浅黄橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	籾痕？付着	一括
	258	L	11	Ⅲ	土師塊	土師底D類	体部～高台	－	6.60	－	橙色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	スス付着(内面)	5821
	259	11T		Ⅳ	土師塊	土師底D類	体部～高台	－	6.90	－	淡黄色	淡黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	火熱受	6480
	260	L	11	Ⅳ	土師塊	土師底D類	体部～腰部	－	6.00	－	浅黄橙色	黒色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	黒色A類・火熱受	6596
	261	M	13	Ⅲ	土師塊	土師底D類	体部～高台	－	8.40	－	浅黄色	黒色	ロクロによるナデ	ミガキ	黒色A類	5329
	262	L	13	Ⅲ	土師塊	土師底D類	体部～高台	－	9.80	－	にぶい橙色/浅黄色	浅黄色	ロクロによるナデ・ハケメ	ロクロによるナデ・ハケメ	見込みに刻書あり	4157
	263	L	12	VI	土師塊	土師底D類	体部～高台	－	8.30	－	淡黄色	浅黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	火熱受	7041
	264	L	11	Va	土師塊・皿	土師底F類	体部～高台	－	6.70	－	にぶい黄橙色	黒色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	黒色A類・籾痕？付着	6535
	265	L	13	Ⅳ	土師塊	土師塊口A類？	口縁部～体部	－	－	－	明赤褐色	にぶい黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	籾痕？付着	一括
	266	L	12	Ⅲ	土師甕	土師甕A類	口縁部～胴部	24.00	－	－	にぶい黄色	にぶい黄色	ハケメ	ケズリ		5658
	267	L	13	Ⅲ	土師甕	土師甕A類	口縁部～胴部	－	－	－	にぶい橙色	にぶい黄褐色	ハケメ	ケズリ		4201
	268	L	13	Ⅲ	土師甕	土師甕A類	口縁部～胴部	(21.10)	－	－	明赤褐色	にぶい黄色	ナデ	ケズリ		4193
32	269	K	13	Ⅲ	土師甕	土師甕A類	口縁部～胴部	32.6(24.0)	－	－	にぶい黄色	にぶい黄色	ナデ	ケズリ		6945
	270	L	14	Ⅱ	土師甕	土師甕A類	口縁部～胴部	27.0(21.3)	－	－	明赤褐色/にぶい橙色	にぶい褐色	幅広ハケメ	ケズリ		5667
	271	L	14	Ⅲ	土師甕	土師甕A類	頸部	－	－	－	明赤褐色	にぶい黄橙色	ハケメ	ケズリ		4188
	272	K	11	Ⅲ	土師甕	土師甕B類	口縁部	－	－	－	橙色	橙色	ナデ	ケズリ		5424
	273	M	13	Ⅲ	土師甕	土師甕B類	口縁部～胴部	－	－	－	にぶい黄橙色	にぶい褐色	ナデ	ケズリ		5097
	274	M	14	Ⅲ	土師甕	土師甕C類	口縁部	20.60	－	－	にぶい黄色	灰オリーブ	ナデ	ケズリ		一括

第７表　遺物観察表（５）土製品・須恵器・輸入陶器（古代）

挿図	番号	出土区		層	種別	器種	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	色調		調整		備考	取上番号
											外側	内側	外側	内側		
33	275	M	13	Ⅲ	土製品	円盤状土製品	6.35	1.50	6.35	50.43	明赤褐色	橙色	ナデ	ナデ		5976
	276	L	14	Ⅵa	土製品	紡錘車	6.50	1.20	6.30	56.55	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		4742
	277	L	12	Ⅳ	土製品	杓子型土器？人形土製品？	5.10	1.50	2.80	17.10	明赤褐色	明赤褐色	ユビオサエ	ユビオサエ		一括
	278	L	12	Ⅳ	その他	土師埦？不明	2.30	8.50	1.95	3.20	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	穿孔1孔あり	一括
	279	M	13	Ⅲ	その他	粘土塊？	2.00	1.55	1.95	4.59	橙色	橙色	ナデ	ナデ		一括

挿図	番号	出土区		層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		胎土	備考	取上番号
											外側	内側	外側	内側			
34	280	H	5	Ⅲ	須恵器	埦	口縁部	－	－	－	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練		1537
	281	L	11	Ⅳ	須恵器	埦	口縁部	－	－	－	灰黄色	灰黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練	焼成やや不良	一括
	282	M	13	Ⅳ	須恵器	坏・埦	底部	－	7.00	－	にぶい橙色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練	焼成やや不良	一括
	283	L	14	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	49.20	－	－	暗赤褐色	灰黄褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練		4082
				Ⅴ													5708
	284	L	11	Ⅳ	須恵器	甕	口縁部	49.20	－	－	オリーブ灰色	灰黄褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練		6177
			10														一括
	285	L	11	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	－	－	－	黄灰色	黄灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練，白色砂粒含む		5197
	286	M	14	Ⅵ	須恵器	甕	口縁部～頸部	37.00	－	－	オリーブ黒色/灰色	灰黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練	外面に自然釉付着，内面に斑に自然釉付着	1609
				Ⅵ													1642
		L		Ⅵ													4988
		M															一括
	287	L	13	Ⅱ	須恵器	甕	口縁部～頸部	25.0(20.0)	－	－	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練，やや白色砂粒含む		3143
	288	L	12	Ⅴ	須恵器	甕	口縁部	17.00	－	－	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練		5172
	289	L	12	Ⅳ	須恵器	甕	口縁部	16.80	－	－	灰色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練		一括
	290	L	14	Ⅵ	須恵器	壺	口縁部～頸部	11.20	－	－	黒/灰色	暗紫灰色/灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練，やや白色砂粒含む		3955
	291	L	12	Ⅲ	須恵器	甕	頸部	－	－	－	極暗赤褐色	暗赤灰色	ロクロによるナデ→格子目タタキ	ロクロによるナデ	精練	外面に自然釉付着	4410
35	292	L	11	Ⅲ	須恵器	甕	頸部～胴部	(6.6)	－	－	にぶい黄橙色	灰オリーブ色	格子目タタキ→ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練	焼成やや不良	5216
	293	L	13	Ⅱ	須恵器	甕	頸部	(12.4)	－	－	にぶい黄色	にぶい橙色/灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練		7040
	294	L	12	Ⅲ	須恵器	甕	頸部	(10.5)	－	－	灰色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ→平行タタキ	上:ロクロによるナデ　下:同心円当て具	精練，やや白色砂粒含む		5633
	295	M	13	Ⅱ	須恵器	甕	頸部	(11.5)	－	－	灰オリーブ色	灰オリーブ色	平行タタキ	上:ロクロによるナデ　下:同心円当て具	精練		2593
																	2894
	296	L	10	Ⅳ	須恵器	甕	頸部～胴部	(8.2)	－	－	褐灰色	にぶい橙色	平行タタキ→ロクロによるナデ	上:ロクロによるナデ　下:同心円当て具	精練，やや白色砂粒含む	焼成やや不良	6350
	297	L	12	Ⅲ	須恵器	甕	頸部	－	－	－	灰黄色	灰黄色	格子目タタキ→ロクロによるナデ	上:ロクロによるナデ　下:同心円当て具	精練		5755
	298	L	12	Ⅳ	須恵器	甕	胴部	51.00	－	－	にぶい黄橙色	灰黄色	平行タタキ→ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精練	焼成やや不良，縦耳部付，スス付着	一括
	299	L	13	Ⅵ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	灰色	灰色	格子目タタキ	上:同心円当て具　下:平行タタキ	精練，やや白色砂粒含む		6020
																	6021
	300	L	12	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	灰オリーブ色	灰色	格子目タタキ	平行タタキ	精練，やや白色砂粒含む		5856
	301	M	14	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	黄灰色	黄灰色	格子目タタキ	平行タタキ	精練	外面に自然釉付着	6330
	302	M	13	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	浅黄色	灰色	格子目タタキ	平行タタキ	精練		2863
																	2896
	303	M	13	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	黒色/オリーブ灰色	オリーブ灰色	格子目タタキ	平行タタキ	精練		5797
	304	M	12	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	黒色/淡黄色	灰色	格子目タタキ	平行タタキ	精練	外面に自然釉付着付着	6151
	305	L	15	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	赤褐色	灰黄褐色	格子目タタキ	平行タタキ	精練	外面に自然釉付着	一括
	306	L	13	Ⅵ	須恵器	甕	胴部	－	－	－	灰色	灰色	格子目タタキ	平行タタキ	精練，やや白色砂粒含む		6022
	307	L	14	Ⅱ	須恵器	甕・壺	胴部～底部	－	－	－	淡黄色	淡黄色	格子目タタキ	平行タタキ	精練	スス付着(外面)，焼成やや不良	6847
36	307	L	14	Ⅱ	須恵器	甕・壺	胴部～底部	－	－	－	淡黄色	淡黄色	格子目タタキ	平行タタキ	精練	スス付着(外面)，焼成やや不良	6847

挿図	番号	出土区		層	種別	器種・分類	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	備考	取上番号
36	308	L	11	Ⅲ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	口縁部	－	－	－	灰白色	オリーブ黄色		5595
	309	M	13	Ⅳ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	口縁部	－	－	－	灰白色	浅黄色		一括
	310	M	12	Ⅲ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	体部	－	－	－	灰白色	浅黄色		5865
	311	L	12	Ⅳ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	体部	－	－	－	灰白色	にぶい黄色		5948
	312	L	11	Ⅲ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	体部～底部	－	5.4	－	灰白色	オリーブ黄色	蛇の目高台	5569
	313	L	12	Ⅱ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	口縁部～体部	14.4	－	－	灰白色	オリーブ黄色		3702
	314	M	15	Ⅱ	輸入陶器	埦:越州窯青磁埦Ⅱ類	腰部～底部	－	－	－	灰白色	灰赤色	見込みに胎土目付着	一括
	315	L	11	Ⅲ	輸入陶器	壷？:越州窯青磁　Ⅱ類	体部～底部	－	15.0	－	灰白色	灰オリーブ色	底部に砂目付着	5754
	316	M	14	Ⅲ	輸入陶器	壷？:越州窯青磁　Ⅱ類	体部～底部	－	14.4	－	灰白色	灰オリーブ色	底部に砂目付着	一括
	317	M	12	Ⅳ	輸入陶器	碗？鉢？:越州窯青磁　Ⅱ類	腰部～底部	－	5.9	－	灰白色	灰オリーブ色		一括
		L												
		M		Ⅴ										6326
	318	L	11	Ⅱ	輸入陶器	壷？:緑釉陶器	腰部～底部	－	12.0	－	浅黄色，軟質	黄緑色		一括
	319	M	13	Ⅲ	輸入陶器	壷？:緑釉陶器	体部	－	－	－	浅黄色，軟質	黄緑色		5463

第４節　中世の調査

１　調査の概要

中世相当の遺物も，弥生時代から古代同様に，Ｋ～Ｍ－10～13区の傾斜面で多く出土した。遺物のほとんどはⅢ･Ⅳ層内の出土遺物であり，隣接する台地上段面（Ｌ・Ｍ－13区～18区）からの流れ込みと考えられる。上段面（Ｌ・Ｍ－13区～18区）の様子を伝える遺物として，報告することにした。遺物に関しては，若干の底部に糸切り痕を有する土師器坏・皿，龍泉窯青磁碗，玉縁の白磁碗，古瀬戸陶器，いわゆる「縦耳」を有する滑石製石鍋，土錘，鞴の羽口等が出土した。

２　遺構

中世相当の遺構は，溝状遺構１条と集石遺構が１基検出されている。溝状遺構は，段丘上段面のＬ・Ｍ－15区で検出された。南北方向に延び，調査区の北東側に位置する現集落と南側の川内川をつなぐ位置関係にある。

集石遺構は，段丘上段面が西側に急傾斜して下る中途（Ｍ－12区）に位置する。現況では，上段面と段丘最下面の耕作田をつなぐ位置に所在することとなる。

（１）　溝状遺構

Ｌ・Ｍ－15区で，Ia～Ic層を重機で除去し，人力による掘り下げでⅥa層上面に至る過程で溝状遺構が検出された。黒褐色砂壌土を埋土とするプランであり，厳密に検出されたのは２条である。この黒褐色砂壌土は，弥生時代から中世の遺物包含層と考えられる土壌である。現況では，河岸段丘の最上段面に位置する本地区（Ｌ・Ｍ－15区）周辺には黒褐色砂壌土が全く確認されない。北側隣接区の発掘調査の成果をまとめた「坂ノ下　2002」の土層図からも黒褐色砂壌土は確認されないことから，近世以前の時期に，人為・自然を含め大規模な削平を受けた可能性が高いと判断した。この溝状遺構の時期を中世に比定したのも，黒褐色砂壌土が段丘上に存在した下限時期が中世であろうと推察されたことによる。

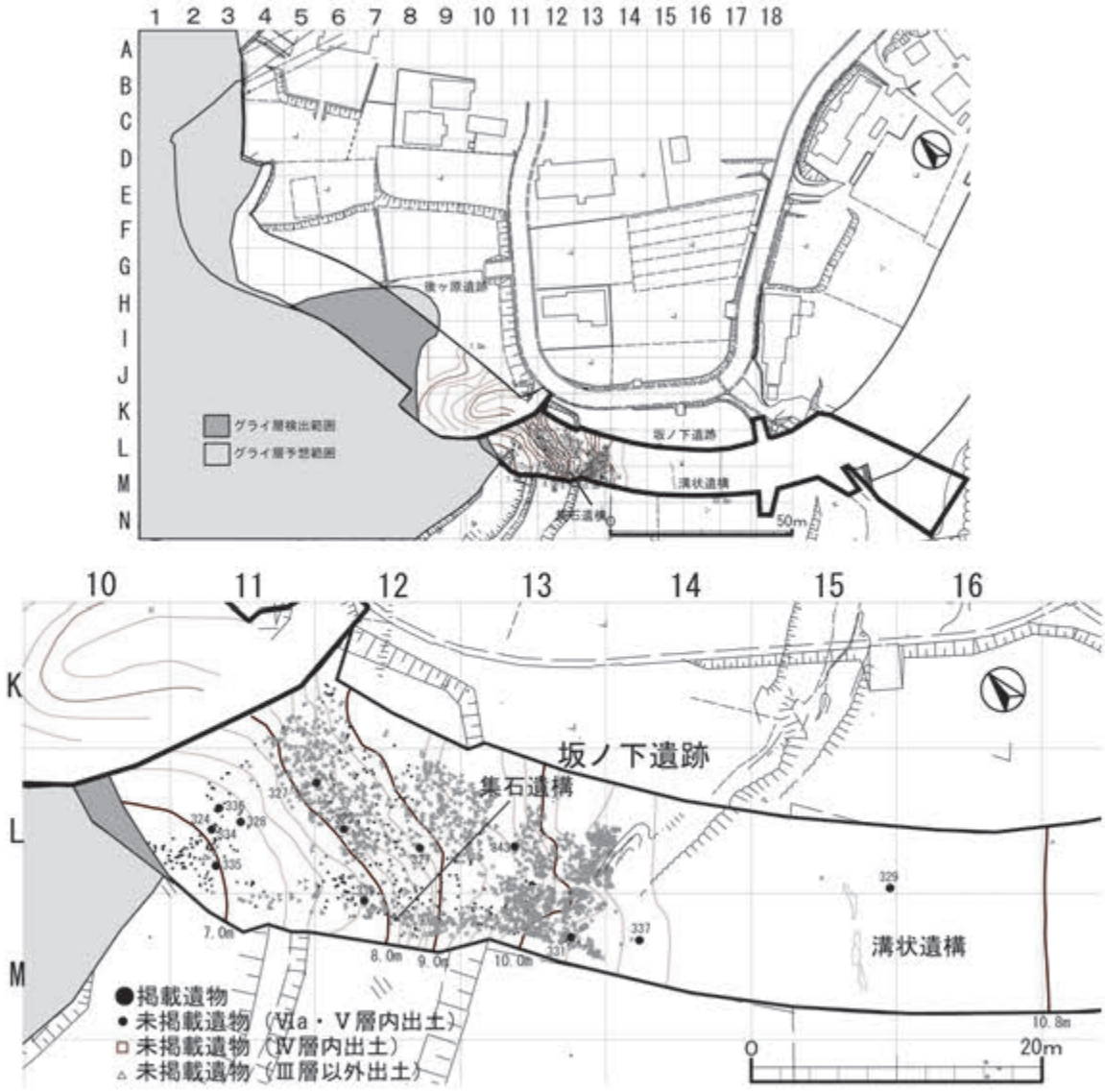
検出された２条の溝状遺構は，間隙を空けて同一直線上に位置し，同一遺構として取り扱うこととする。ほぼ平坦な段丘上段面が，東側から西側にかけてやや下りかける稜線に沿って南北に延びる方向に縦列する。この溝状遺構の方向・位置は，現南瀬集落と坂ノ下遺跡周辺の舌状台地上の畑をつなぎ，川内川に至る経路の一部を成す。

溝状遺構の平面観は，緩やかにＳ字状のカーブを描き，深度は14㎝～40㎝と明確な掘り込みを有する。埋土の硬軟は顕著でなく，床面に硬化面等は全く認められない。概して，平・断面観はいびつで不定形的である。プランには樹痕等が無数に入り込み，壁面や床面にも樹痕等が絡む。樹痕の存在については，本地区（Ｌ・Ｍ－13～18区）で黒褐色砂壌土を埋土とする円形プランが複数確認されており，床面・側面が不定形もしくは樹根が絡む埋土状況から樹痕と判断した経緯がある。

本溝状遺構の出自・用途を考察してみたい。本溝状遺構の西側（Ｌ・Ｍ－11・12区境）の段丘境の稜線に沿って，南北に延びる古道跡が検出された。数十年前まで利用されていた古道で，現集落から舌状台地の周縁を巡り，隣接する畑に通じる古道跡であると集落住民の証言を得た。この古道跡は，本溝状遺構より38m程離れているが，ほぼ並行する位置関係にある。本溝状遺構も，この古道跡同様に集落から舌状台地を縦断する（台地上の畑に至る）道跡の可能性が一考である。但し，溝状遺構には硬化面が確認されず，道跡を示す直接的根拠を持たない。Ia～Ⅱ層を除去する中で，Ｌ・Ｍ－12・13区の段丘境の稜線上のIb・Ⅱ層内に，稜線に沿って（南北方向に）礫が縦列される状況が捉えられた。現況の畑境の位置と礫の位置・方向はほぼ一致する。これらの礫は畑境を示す標もしくは造成の土留め礫の可能性が高い。検出された溝状遺構も，同様に畑境に絡む目的，例えば，当初は畑境の標や土留め用途に礫や木片等を配置し，その後用途を失い礫や木片等は除去された（消失した）などの経過も再現されうる。

（２）　集石遺構

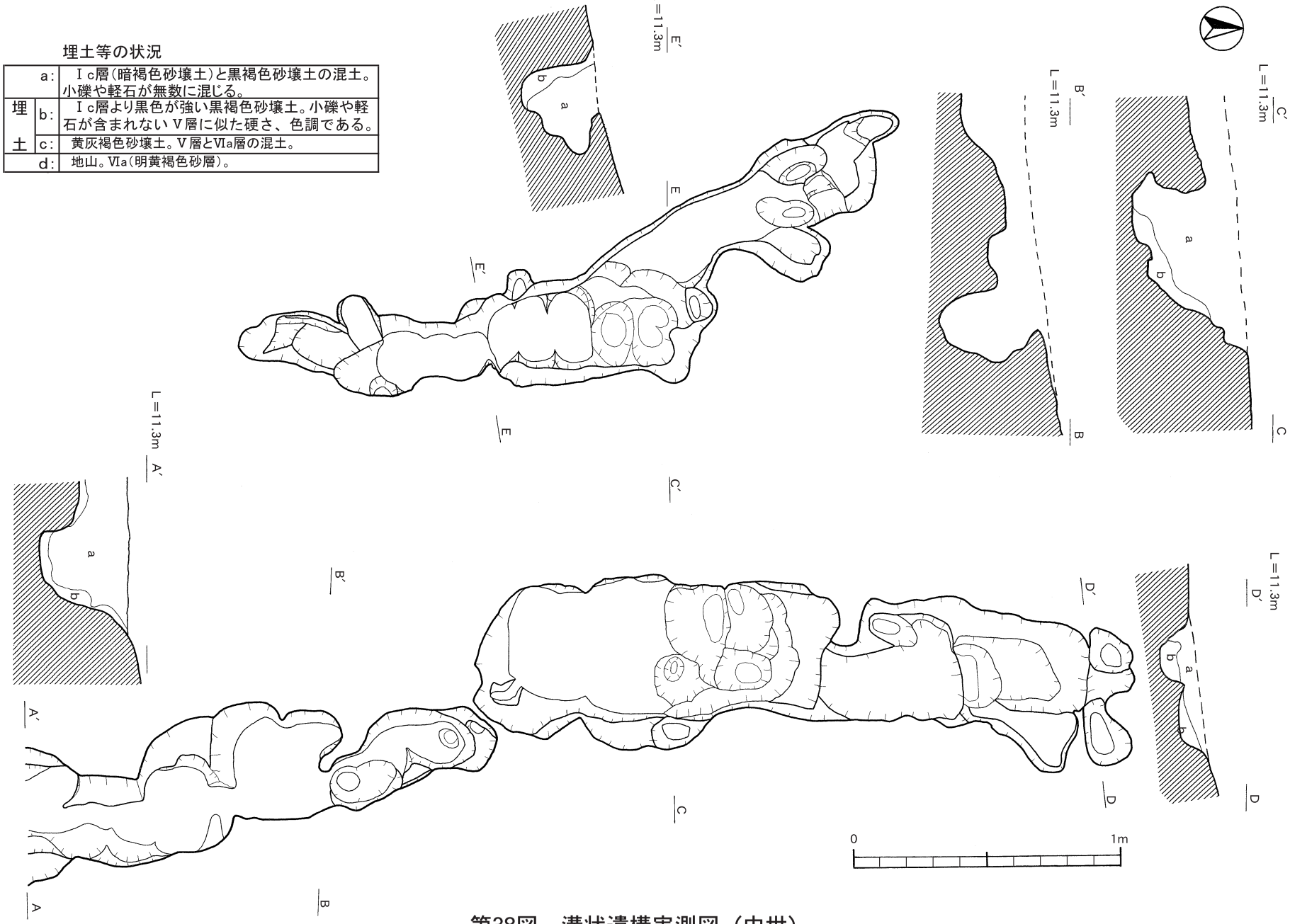
本遺構は，Ｍ－12区で，人力によりⅣ層を掘り下げてⅤ層上面に達する過程で検出した。12個の拳大の礫で構成され，縁辺が自然面もしくは磨滅を受けており，欠損礫は含まれない。礫自体に赤化・スス付着はなく，周辺に焼土も捉えられなかった。また，掘り込みも明確に捉えることはできなかった。Ⅳ層とⅤ層の色調や硬さの識別が困難であるが，Ⅴ層内に敷設されたと考えられる。周辺には，弥生時代から中世の遺物が混在して出土する。Ⅲ～Ⅴ層中に，この集石遺構以外に礫は全く包含されなかったことから，この集石遺構は流れ込んだものではなく，現位置に敷設された（据え置いたか掘り込んで埋めたか）と考えられる。敷設時期は，礫の床面が僅かに残るⅤ層を貫通しⅥa層上面に達することから，Ⅴ層（弥生時代～中世）の時期が考えられる。黒褐色砂壌土が段丘上段面に存在し，傾斜面に黒褐色砂壌土の流れ込みが顕著でなかったと判断される中世を集石遺構の敷設時期に比定した。古墳時代から古代の遺物が多くを占めることや，「坂ノ下　2002」では，古代相当のピットや土坑が隣接地で検出されていることから，古代の可能性も否定はできない。



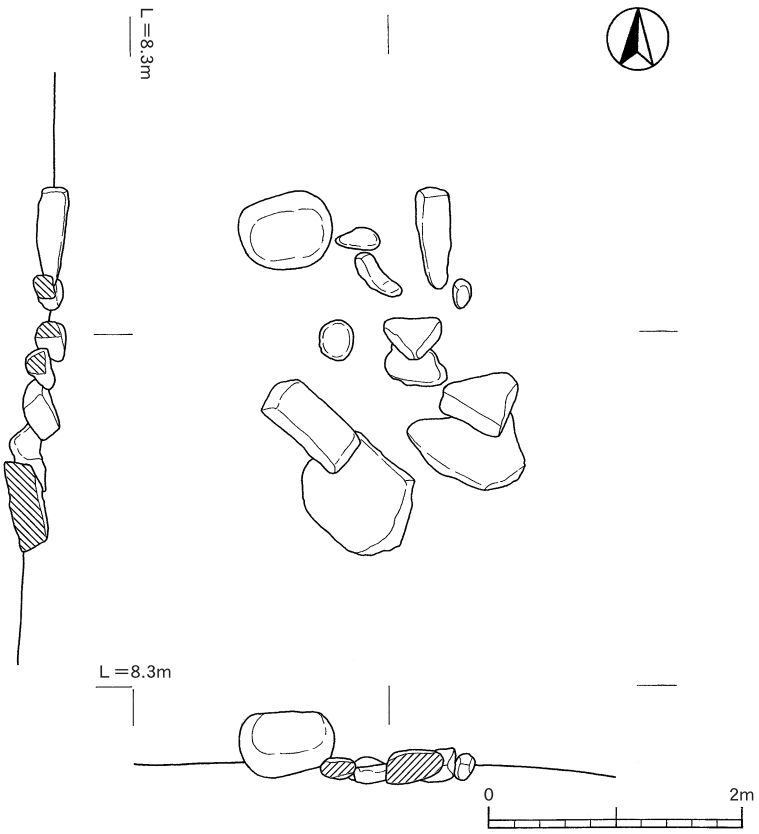
第37図　遺構位置図及び遺物出土状況図（中世）

埋土等の状況

	a:	Ⅰc層(暗褐色砂壌土)と黒褐色砂壌土の混土。小礫や軽石が無数に混じる。
埋土	b:	Ⅰc層より黒色が強い黒褐色砂壌土。小礫や軽石が含まれないⅤ層に似た硬さ、色調である。
	c:	黄灰褐色砂壌土。Ⅴ層とⅥa層の混土。
	d:	地山。Ⅵa(明黄褐色砂層)。



第38図　溝状遺構実測図（中世）



第39図　集石遺構実測図（中世）

3　遺物

（1）　土師器　坏　皿（第40図―320～322）

本遺跡出土の土師器は，殆どがヘラ切り痕を有する古代相当資料である。中世相当のいわゆる「回転糸切り痕」を有する土師器は，以下の３点のみである。320は復元底径7.5cmの坏である。口縁上縁端部に面取りを施す。321も，復元底径5.4cmの坏である。 322は復元底径5.7cmの小型の坏・皿である。底部外端が僅かに張り出す。何れも12世紀以降の年代が与えられる。

（2）　輸入陶磁器（第40図―323～333）

323･324は龍泉窯の稜花皿で，内面に菊花文を描く。14･15世紀が考えられる。325は，灰白色の色調を呈する碗の口縁部である。口縁上端部が大きく端反る。見込みの部分には，幅0.1cm程の白色の線が円を描く。断面観で白色線が僅かに膨らみを呈し，象嵌には捉えられない。産地等不明である。326は，台形状の玉縁口縁を有する白磁碗である。327も碗の口縁部資料である。内面に幅0.5cm程の乳白色の線が縦走する。断面観で象嵌には捉えにくく，325同様に白色線が極僅かに膨らみを呈する。着色によるものか産地は不明である。328は青磁碗の腰部である。畳付に釉剥ぎを施す。329は青磁碗の底部である。高台内面に釉剥ぎを施す。330は白磁碗の腰部と思われ，高台を有すると判断される。腰部は露胎し，見込みには釉剥ぎを施す。胎土に黒色の小粒子が混じる。331は碗の底部である。腰部には，2.4cm幅の無施釉帯が巡る。見込みには，幅0.1cm程の象嵌様の沈線が円を描く。釉の亀裂が縦横無尽に器面を走る。13世紀から14世紀中頃の中国製か？渡畑遺跡（南さつま市）にも同類が出土する。332は，頸部に把手を有する明代の陶器と思われる。333は，瀬戸産の壷の底部と思われる。腰部が光沢を発する。透明な釉がかかるか？底部に浅黄色の釉がかかる。腰部は露胎し，縦位の工具ナデ？が施される。

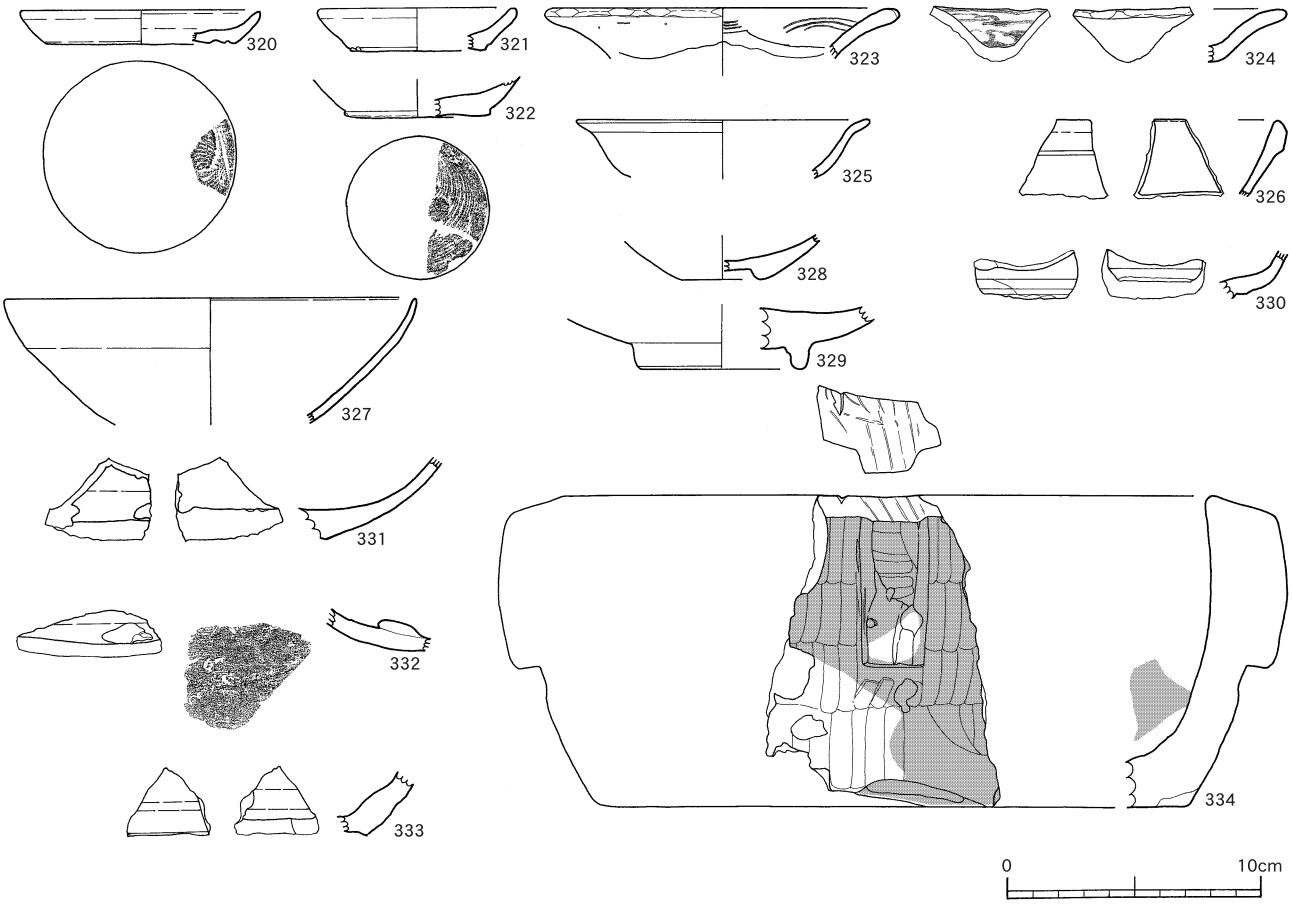
（3）　滑石製品（第40・41図―334～336）

334・335は滑石製石鍋である。334はいわゆる「縦耳型石鍋」である。復元口径（外径）28cm程を測る。ケズリの切り合い関係から，縦位ケズリを左から右の順に施し，恐らく一巡した後，下位から上位に移行してケズリを施すと判断される。縦耳下位の胴部には，上方向へのノミ状のケズリ痕が２つないし３つ並走する。口唇部には，平行する数条の線条痕が縦走する。本資料の加工痕から捉えられる石鍋の製作技法は，副島邦弘氏の製作工程案に合致する。一方，内面には明瞭なケズリ痕は見いだせず，縦走（一部斜走）する線条痕のみ捉えられる。なお，底部に幅４cm弱，奥行き1.5cm程のノミ痕が残される。335は，復元口径（外径）が31.6cmと大型である。ケズリの切り合い関係は，334と同様に縦位ケズリを右から左の順に，下位から上位に移行して施す。334の口唇部幅は２cm程でケズリ幅は2.5cm，335の口唇部幅は1.8cm

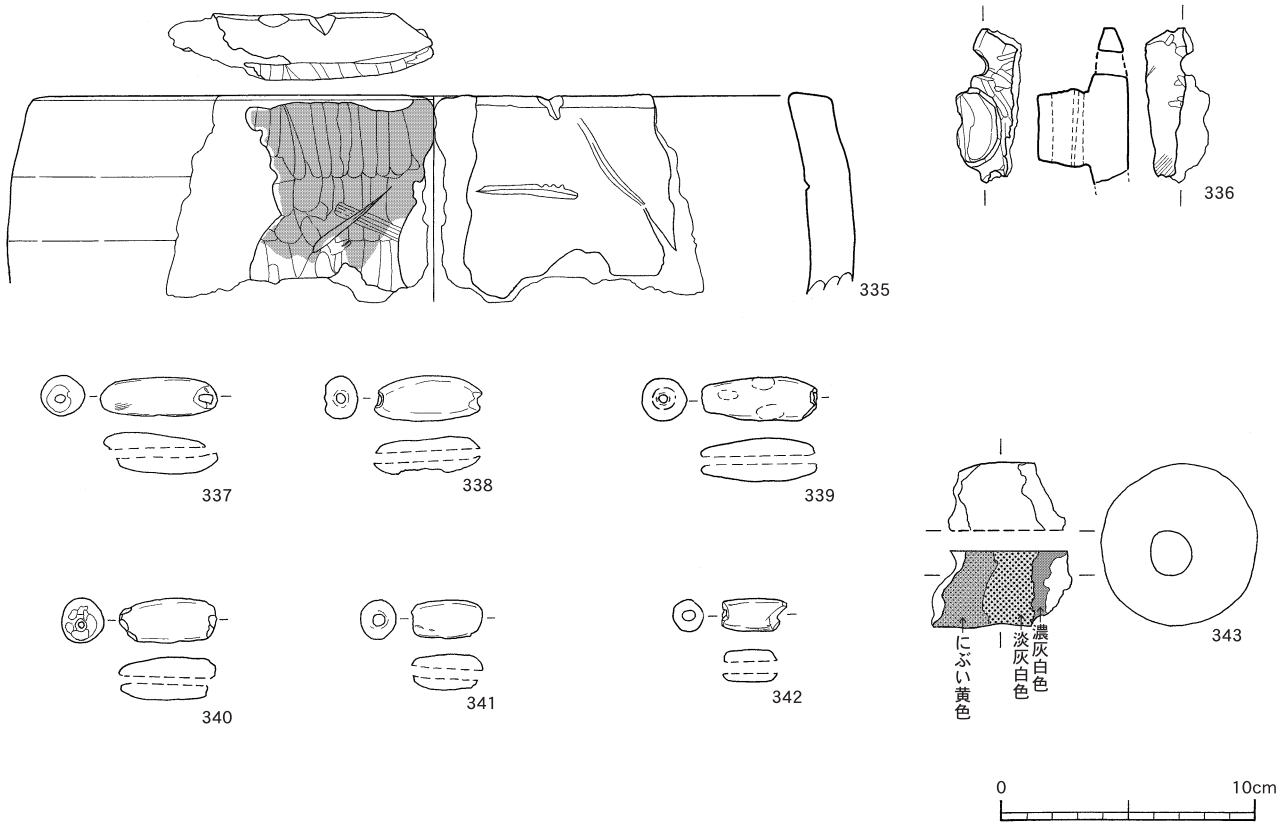
程でケズリ幅は，3㎝程と僅かに差異があるが，同一個体の可能性も否定できない。336は，いわゆる「バレン状石製品」であり，滑石製石鍋に欠損等が生じた時の補修具と考えられている資料である。滑石製石鍋の二次加工品と考えられる。直径0.9㎝程の孔を１孔，穿つ。穿孔の側面には，横走する６状程の極浅沈線条痕が捉えられ，螺旋状回転による穿孔工程を示すと思われる。また，把手にも縦断する孔が１孔，穿たれる。なお，隣接する後ヶ原遺跡では，滑石製石鍋の欠損品もしくは，二次加工品と思われる資料が３点出土している。

（４） 土製品他（第41図―337～343）

337～342は，管状土錘である。土錘の比定時期は，古墳時代から中世と見られるが，本稿では中世の可能性で報告することとする。何れも，孔径0.3～0.4㎝程に収まる。長軸長は，4㎝ ～4.5㎝程度の337～339と2.5㎝程の341の２種に大別できる。なお，342は欠損による廃棄の可能性もあるが，欠損後の継続使用を想定して図化した。内田律雄氏は，重量の重要さを指摘するが（内田2004），重さは，3.73ｇである。本遺跡の南側には川内川が位置し，直線距離も150m程と近く，漁を行っていたと思われる。343は，本稿唯一の鞴の羽口である。幅6.5㎝程度を測る。穿孔径は1.8㎝程で，ほぼ円形を呈する。孔は，中心軸よりやや下位寄りに穿たれ，穿孔より下位を中心とする同心円状に，強い焼成変性が広がる。



第40図　遺物実測図（26）土師器　坏　皿・輸入陶磁器・滑石製品（中世）



第41図　遺物実測図（27）滑石製品・土製品・羽口（中世）

第８表　遺物観察表（６）土師器・輸入陶器・滑石製品他（中世）

挿図	番号	出土区		層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考	取上番号
											外側	内側	外側	内側		
40	320	L	11	Ⅱ	土師器	坏	口縁部～底部	9	7.4	1.4	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ		一括
	321	M	12	Ⅳ	土師器	坏	口縁部～底部	5.2	5.4	1.7	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ		一括
	322	L	11	Ⅱ	土師器	坏・皿	腰部～底部	－	5.8	－	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ		一括
			12	Ⅳ												

挿図	番号	出土区		層	種別	器種・分類	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	備考	取上番号
40	323	L	12	Ⅲ	輸入磁器	稜花皿:龍泉窯	口縁部～体部	12.60	－	－	灰白色	灰白色		4524
				Ⅰc										4026
			13	Ⅱ										一括
	324	L	12	Ⅱ	輸入磁器	稜花皿:龍泉窯	口縁部～体部	－	－	－	灰白色	灰白色		一括
	325	L	12	Ⅳ	輸入磁器	碗:産地不明	口縁部	11.00	－	－	灰白色	緑灰色	見込みに白線？	一括
	326	L	11	Ⅲ	輸入磁器	碗:白磁	口縁部～体部	－	－	－	灰白色	明緑灰色	玉縁口縁	5204
	327	L	11	Ⅳ	輸入磁器	碗:産地不明	口縁部	15.80	－	－	灰白色	灰白色	内面に白線？	6440
	328	M	15	Ⅵ	輸入磁器	碗:龍泉窯	体部～底部	－	3.80	－	灰白色	明緑灰色		5903
			16											一括
	329	H	4	Ⅱ	輸入磁器	碗:龍泉窯	体部～高台		6.60	－	灰白色	オリーブ灰色		1327
	330	L	11	Ⅳ	輸入磁器	碗:白磁	腰部	－	－	－	灰白色	灰色　黒色粒含		6390
	331	M	13	Ⅳ	輸入磁器	碗:中国産	体部～底部	－	－	－	淡黄色	灰白色	見込みに象嵌？	1713
	332	L	10	Ⅳ	輸入陶器	壷？:中国産	頸部	－	－	－	灰白色	にぶい黄色	頸部に把手付き	一括
	333	M	12	Ⅳ	国産陶器	壷？:瀬戸	底部	－	－	－	灰白色	灰白色:釉か？	外面に光沢(透明釉？),底部に浅黄色の釉塗布	一括

挿図	番号	出土区		層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	取上番号
40	334	L	11	Ⅳ	滑石製品	石鍋	口縁部～底部	24.80	23.00	12.20	外面にスス付着	6394
41	335	L	11	Ⅳ	滑石製品	石鍋	口縁部～胴部	28.00	－	－	外面にスス付着	6435
	336	L	14	Ⅳ	滑石製品	バレン状製品		－	－	－	穿孔1孔あり	6602

挿図	番号	出土区		層	種別	品種	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	色調		備考	取上番号
											外側	内側		
41	337	M	14	Ⅵ	土製品	錘	4.65	1.75	1.60	9.87	明赤褐色/にぶい黄橙色	－		2411
	338	L	13	Ⅲ	土製品	錘	4.20	1.30	1.30	10.22	にぶい黄橙色	－		一括
	339	M	12	Ⅲ	土製品	錘	4.60	1.25	1.20	11.83	浅黄色	－		6309
	340	L	12	Ⅳ	土製品	錘	3.80	1.65	1.75	10.44	黄灰色	－		一括
	341	M	12	Ⅳ	土製品	錘	2.80	1.40	1.50	6.14	橙色	－		一括
	342	L	11	Ⅲ	土製品	錘	2.60	1.15	1.30	3.73	にぶい黄橙色	灰黄色		一括
	343	L	13	Ⅳ	土製品	羽口	6.55	6.00	5.55	156.81	明黄褐色	にぶい黄橙色	被熱による変色あり	4371

第５節　近世の調査

１　調査の概要

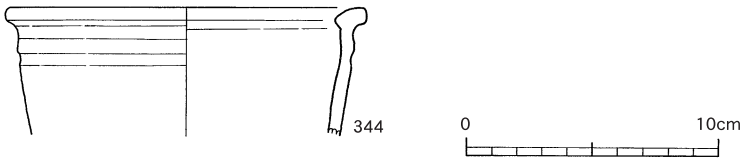
本遺跡の東側のＬ・Ｍ－13～18区は，発掘調査開始直前まで茶が植栽されていた。そのため，茶の植え込みが散在し，本事業に伴う土地買収後の植栽廃棄の為の溝が，調査区中央を東西に走る状況であった。西側のＫ～Ｍ－10～13区は西側に向けて大きく下る傾斜面で，調査直前まで菜園が営まれていた。耕作の影響により，表土以下攪乱により，現代製品に混じって近世遺物が出土した。また，明瞭に近世に限定できる包含層や遺構は検出できなかった。なお，Ｌ・Ｍ－10・11区の西北端に僅かに弱グライ層及び強グライ層が検出されたが，土壌サンプルを植物珪酸体分析したところ,「稲作に関わる土壌である可能性がある。」との結果を得た。しかし，試料抽出位置の2，3m西側からは現耕作田が続くことから，このグライ層等も近現代の耕作田の影響を全く排除はできないと判断した。

２　遺物

薩摩焼と思われる資料が395点出土し，そのうち，1点を図化した。

（１）　国産陶器（第42図―344）

344は，薩摩焼の片口鉢である。口縁部が外側から内側折り返して畳む。口縁部には，指頭押圧による２条のロクロ痕が巡る。口唇部には貝目が残る。



第42図　遺物実測図（28）国産陶器（近世）

第９表　遺物観察表（７）国産陶器（近世）

挿図	番号	出土区	層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	釉薬	備考	取上番号
										外側	内側				
42	344	Ｌ	12	Ⅱ	苗代川焼	鉢	口縁部～体部	6.5(5.85)	－	－	浅黄色	浅黄色	灰～にぶい橙色	内外面鉄･灰オリーブ色		一括

第５章　後ヶ原遺跡の調査成果

第１節　縄文時代の調査

１　調査の概要

本調査区は，東側に隣接する現南瀬集落より二段程低い河岸段丘の低丘面に位置する。現河川からは，二段程高い段丘面に相当する。捉えられる最下層はⅥ層（明黄褐色砂層）であり，縄文時代前期以前に形成された河川堆積層である可能性が高い。本遺跡では，縄文時代の遺物包含層であるⅥ層（明黄褐色砂層）から出土する縄文時代相当の土器は皆無であり，Ⅵ層出土遺物は，345の石器１点のみである。なお，Ⅵ層からは，後世からの落ち込みと思われる弥生時代～中世相当の遺物が若干包含される。縄文時代に比定し得る資料（石器製品）は，上位の弥生時代～中世の包含層（Va層）及び近世の河川堆積層（Ⅱ～Ⅳ層）から出土し，掲載遺物（石器）は殆どがVa層出土である。Va層及びⅡ～Ⅳ層出土遺物も，本遺跡及び南側に隣接する坂ノ下遺跡や西側の現南瀬集落の状況を示す資料となると判断し，本稿では掲載した。なお，遺構は検出されない。

２　遺物

縄文時代相当期に比定されるⅥ層の包含層において土器は検出できなかったが，包含層内に１点，その上位Va層等に複数の石器類が出土した。出土した石器類については，既知の石器研究や隣接する坂ノ下遺跡の出土状況から，縄文時代の可能性で報告する。

主な器種は，スクレイパー，使用痕剥片，石核，礫器，磨石・敲石類，軽石製品などである。本稿で掲載した石器中，軽石製品が25点中19点を占め，特に８Ｔ・11Ｔ内に集中する。８Ｔ・11Ｔは，土層状況や周辺の地形から，当時の湿地・沼地の内弯状の潮だまりの部分，及び隣接する坂ノ下遺跡の傾斜面の法尻部分に位置し，南隣の坂ノ下遺跡傾斜面からの流れ込みにより，潮だまり（法尻）に軽石製品が寄せ集まったためと考えられる。なお，本遺跡における縄文時代相当の石器の資料個体総数は205点であり，このうち25点を図化した。

①　スクレイパー・使用痕剥片（第43図―345～347）

７点中３点図化している。345は，針尾系黒曜石製である。スクレイパーに分類したが，打製石鏃の欠損品の可能性もある。346も，針尾系黒曜石製である。表面側からの押圧剥離により刃部を作出する。敲打点の凸部を剥離により潰し基部を形成する。掻器の可能性がある。347は頁岩を素材とする使用痕剥片である。隣接する坂ノ下遺跡では，同石材を用いた打製石斧が一定量出土しているが，本資料も打製石斧の整形剥片を利用した可能性がある。

②　石核（第43図―348）

石核は，2点中１点図化している。348は，礫皮面の復元器形より，円礫を素材とする日東系の黒曜石製である。石英等不純物が多く含まれる。先ず，上面から剥片を採取する。上面を打面とし，表面に打点転移を行い，上辺からの剥離により剥片を採取する。

③　礫器（第43図―349）

１点中１点図化している。頁岩質ホルンフェルス製である。表面右側縁は，表裏両面側からの剥離により刃部を作出する。一方，正対する表面左側縁には，使用による刃こぼれが認められる。

④　磨石・敲石類（第44図―350）

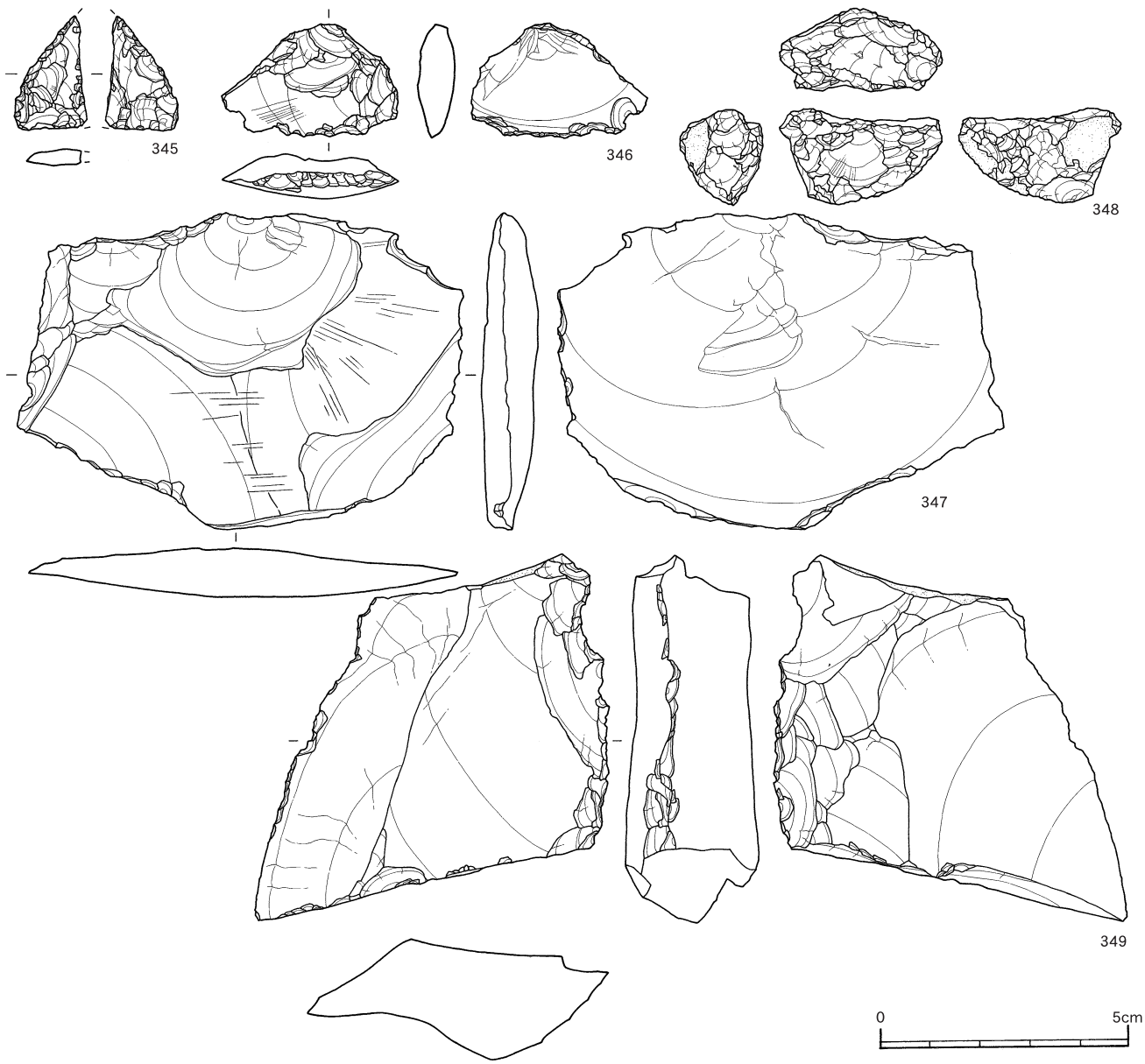
15点中１点図化している。花崗閃緑岩製の円礫である。基本的には，側面のみに敲打痕を有する。底面には部分的に擦痕が認められ，磨面を呈する。

⑤　軽石製品（第44・45図―351～369）

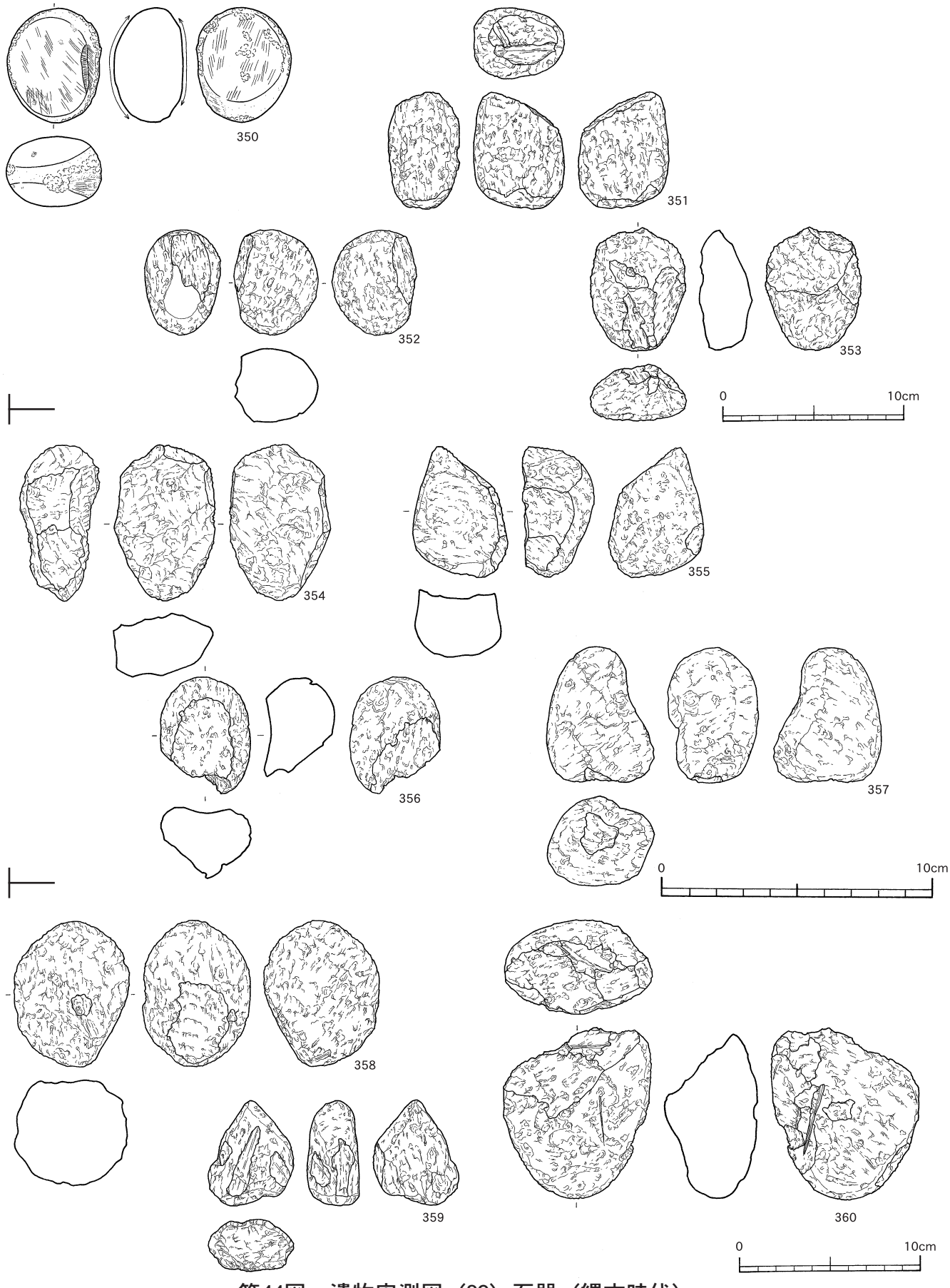
57点中19点図化している。軽石製品に捉えられる人為的痕跡には，以下のようなものがある。これは，隣接する坂ノ下遺跡にも共通する。一つ目には，磨って生じたと考えられる平坦面や曲面である。磨面以外に切り取った可能性もあるが，実見上磨面と見なし得ると判断し，本稿では磨面と定義したい。なお，縁辺を有する板状の工具で磨った際に生じるＬ字状の切り込みは，以下「立ち上がり」と呼称して述べる。また，刃状の切っ先で切り込みを入れたような痕跡は「切り込み」と呼称することとしたい。磨面の多くは凹み状を呈するので，本稿では，特に平坦面を有する資料のみ特記したい。二つ目は，鋭利な刃状の道具による切り込みである。断面観が「Ｕ」字状を呈するものもあり，その場合は特筆したい。そして，三つ目が貫通しない穿孔である。本稿では，以上の痕跡に分けて，軽石製品を述べていくこととする。

351～356は，磨面のみ捉えられる。351の上面の磨面には立ち上がりがある。 352の磨面は凹み状を呈するが，自然剥落の可能性もある。353の表面右側・裏面の磨面は，平坦である。354・355の磨面は，平坦である。356は，裏面の磨面が凹み状である。357は，不貫通穿孔のみ施される。本稿１点のみの出土である。下面の穿孔は，方形の工具痕が残される。358・359は，磨面及び不貫通穿孔を有する。358の穿孔は２つとも，竹串状の鋭い刺突

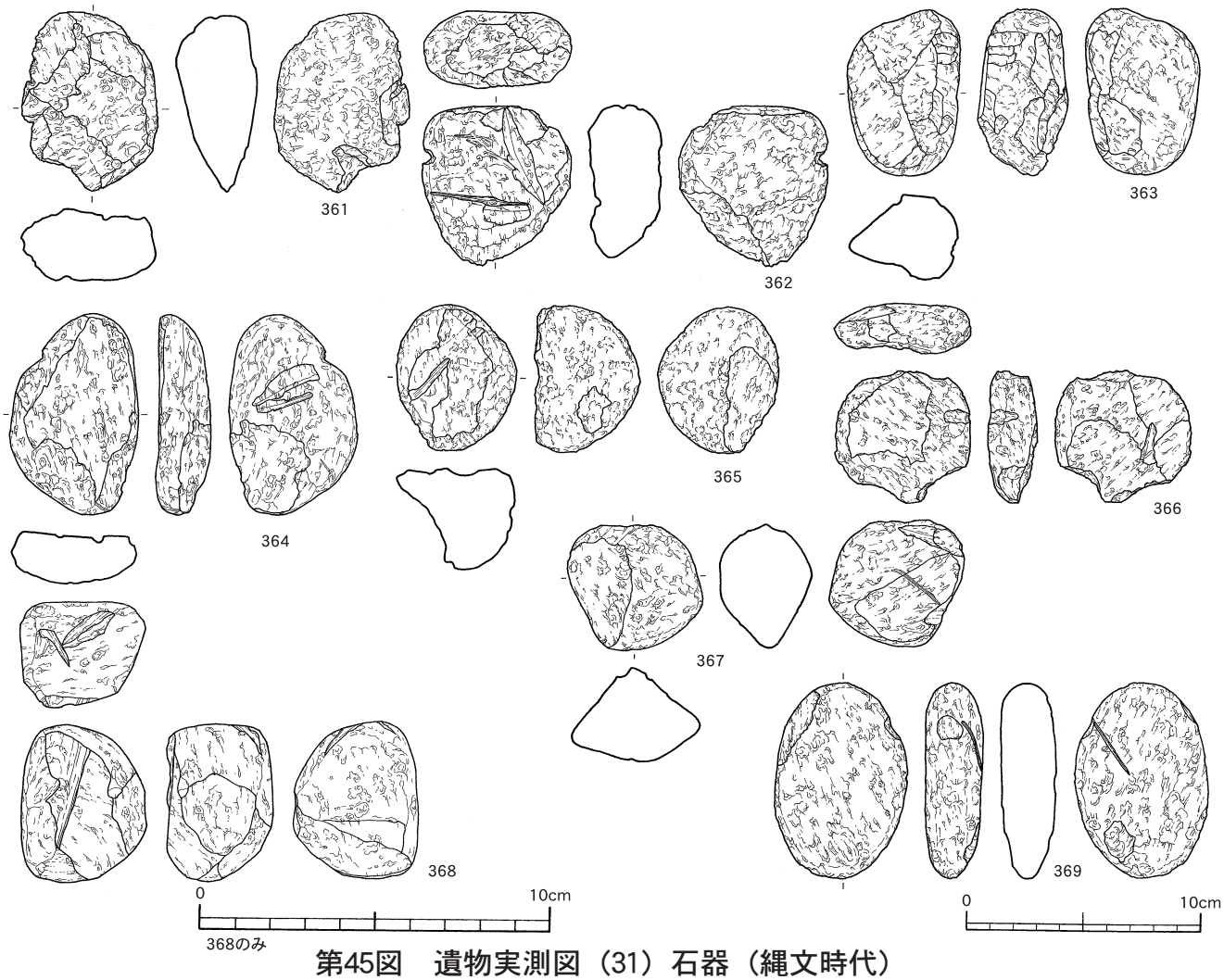
痕を有する。右側面の磨面は極平坦である。359の磨面は，何れも立ち上がりを有する。360～368は，磨面及び切り込みを有する。360上面の磨面はステップ状に切り合い，特に上位の磨面には明瞭な立ち上がりが捉えられる。裏面の磨面は平坦で立ち上がりを有する。Ｖ字状の切り込みが走る。361は，磨面に鋭角やＬ字状の立ち上がりを有する。裏面下位の切り込みは大きく抉られる。362は，立ち上がりを伴いステップ状に磨面が切り合うほか，表面には鋭利な切り込みが横走する。表面左側には，Ｕ字状の切り込みが入る。363の磨面は凹み状の他，一部平坦面を呈する。364の中位には，鋭利な切り込みが認められる。365の表面には，縦・斜走する２つの磨面が捉えられるが，斜走する磨面の下位の縁辺には，切り込みが捉えられる。そのことから，磨面の出自の一つに，ヘラ状（刀状）工具の縁辺を横滑りさせて掻き上げる風景が復元される。本稿中の資料中，Ｌ字状の立ち上がりを有する磨面に，複数散見される。366の右側面の磨面は，断面が綺麗なＵ字状を呈する。表面右側・裏面中央には切り込みが認められる。367の表裏面の磨面は，極平坦である。裏面中位には浅い切り込みがあり，上位の切り込みの断面観は，Ｕ字状を呈する。368の磨面の多くは，極平坦面である。上面には切り込みを有する。369は，磨面・不貫通穿孔・切り込みを有し，本遺跡で本資料１点のみの出土である。右側面の直径１㎝程の小さな磨面は，Ｕ字状に穿たれる。裏面には，切り込みと孔が穿たれる。



第43図　遺物実測図（29）石器（縄文時代）



第44図　遺物実測図（30）石器（縄文時代）



第45図　遺物実測図（31）石器（縄文時代）

第10表　遺物観察表（８）石器（縄文時代）

挿図	番号	出土区		層位	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号
43	345	9T	0	Ⅵ	スクレイパー	黒曜石（針尾系）	2.3	1.45	0.35	1.16	一括
	346	11T	0	Va	スクレイパー	黒曜石（針尾系）	2.3	3.6	0.9	6.29	一括
	347	8T	0	Va	使用痕剝片	頁岩	6.3	9	1.2	66.09	6496
	348	11T	0	Va	石核	黒曜石（日東系）	3.3	1.7	1.7	9.63	1015
	349	8T	0	Va	礫器	頁岩質ホルンフェルス(硬質)	7.4	7.1	2.8	119.32	956
44	350	8T	0	Va	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	6.35	5.3	3.85	183.75	6485
	351	8T	0	Va	軽石製品	軽石	6.4	5	4	29.67	6494
	352	11T	0	Va	軽石製品	軽石	5.85	4.7	4.2	27.76	1231
	353	11T	0	Va	軽石製品	軽石	6.8	5.3	3.1	20.59	1230
	354	8T	0	Va	軽石製品	軽石	5.75	3.8	3	10.67	936
	355	11T	0	Va	軽石製品	軽石	4.8	3.5	2.7	11.69	1245
	356	8T	0	Va	軽石製品	軽石	4.3	3.4	2.7	7.22	6487
	357	11T	0	Va	軽石製品	軽石	5	4	3.35	13.22	1232
	358	11T	0	Va	軽石製品	軽石	8.1	6.4	6	76.65	1005
	359	11T	0	Va	軽石製品	軽石	5.8	4.8	2.9	11	1114
	360	K10	0	Va	軽石製品	軽石	9.5	8.2	5.2	74.15	11
45	361	11T	0	Va	軽石製品	軽石	7.6	6.8	3.5	33.36	1264
	362	8T	0	Va	軽石製品	軽石	6.8	6.45	3.3	32.83	6490
	363	8T	0	Va	軽石製品	軽石	7.1	4.9	3.9	24.57	949
	364	K	10	Va	軽石製品	軽石	8.5	5.45	2.25	15.2	6532
	365	11T	0	Va	軽石製品	軽石	6.2	5.1	4.5	31.5	874
	366	11T	0	Va	軽石製品	軽石	5.6	5.8	2.15	12.34	1173
	367	11T	0	Va	軽石製品	軽石	5.3	5.7	4	18.8	1262
	368	8T	0	Va	軽石製品	軽石	4.5	3.5	3	13.25	6488
	369	11T	0	Va	軽石製品	軽石	8.3	5.7	2.5	28.95	1112

第２節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代から中世の遺物包含層（Va層からVc層：黒褐色砂壌土及びその弱グライ層・強グライ層）以外の上位層（Ⅱ～Ⅳ層）出土の遺物も，東隣の現集落及び隣接の坂ノ下遺跡の様相を示す有意義な資料と判断し，報告書に掲載した。なお，遺構は検出されない。

２　遺物

弥生時代相当遺物と判断した資料は５点で，内２点図化した。主な土器型式は黒髪式土器であり，隣接の坂ノ下遺跡（本稿遺物番号139～143）でも同様な資料が出土している。土器分類の詳細は本稿「第３章　調査の方法　４　出土遺物の分類」を参照されたい。

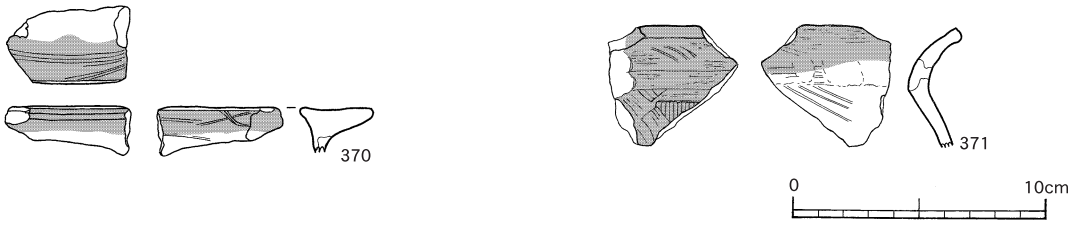
（１）甕形土器

①　XI 類土器（第46図―370）

口縁部がＬ字状に外に張り出す。口唇断面形が舌状を呈するいわゆる「鋤先口縁」である。黒髪式土器の甕形土器に比定される。胴部器厚が0.5㎝程，口唇部器厚が0.6，7㎝程と極めて薄い。ススが，口縁部から口唇上面を1.5㎝程回り込む。

②　XII 類土器（第46図―371）

本稿唯一の出土である。胴部上位を外側に「く」の字に折り曲げて口縁部の張り出しを作出する。口唇端部は，丸く舌状に仕上げる。須玖Ⅱ式の最後の段階の遠賀川以西系の特徴を持つか。在地の胎土に似ることから，外来産を模倣したものと考えられる。胴部には僅かに縦位のハケメが捉えられる。ススが胴部から口唇上面2.5㎝程回り込む。



第46図　遺物実測図（32）XI ・XII 土器（弥生時代）

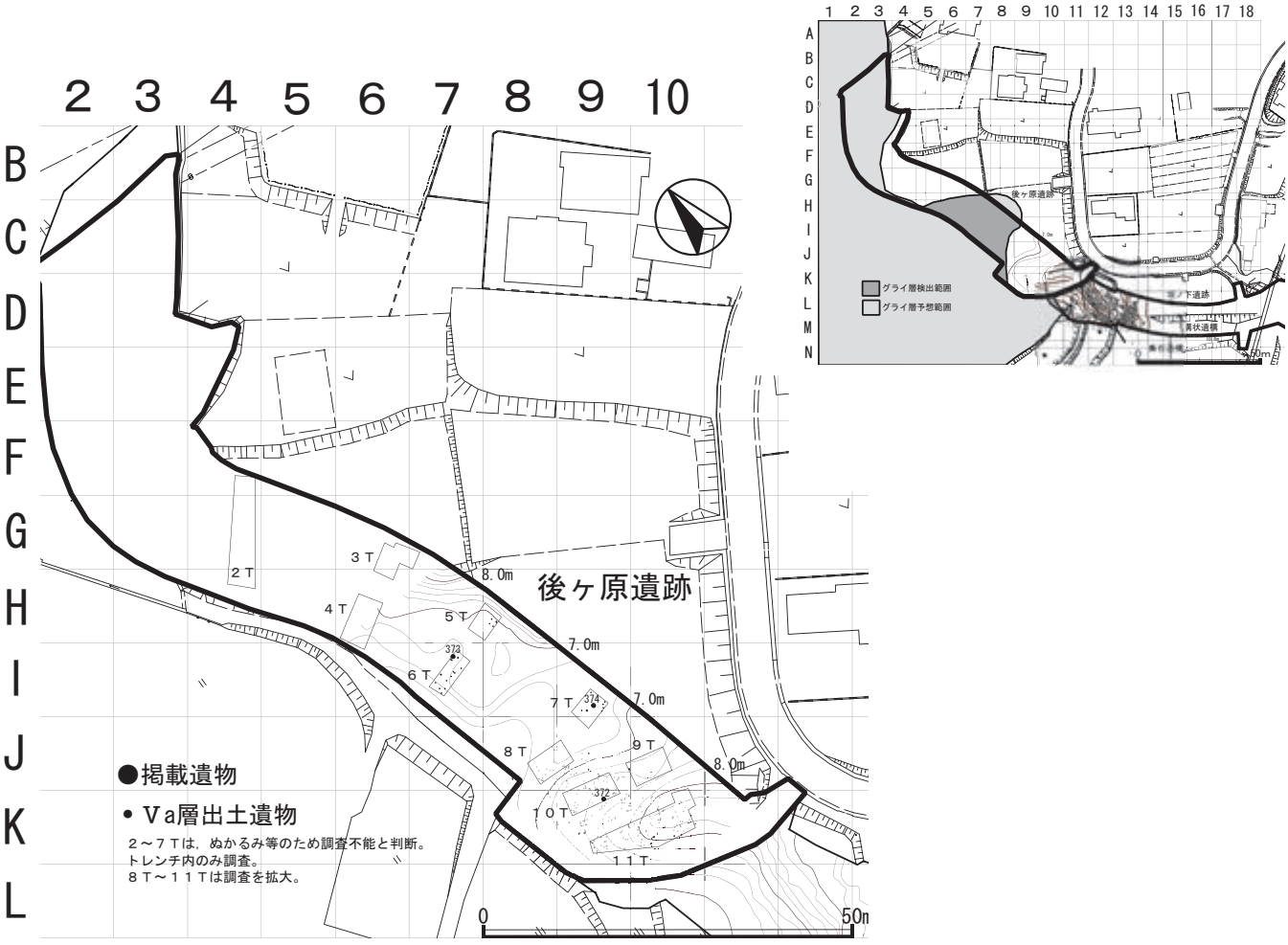
第11表　遺物観察表（９）XI ・XII 類土器（弥生時代）

挿図	番号	出土区	層	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		胎土								焼成	備考	取上番号
									外側	内側	外側	内側	石英	長石	角閃石・輝石	雲母	小礫	赤石	滑石	他			
46	370	8T	Va	XI類	口縁部	－	－	－	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	◎	◎	○		○				普通	スス外面～口唇部上面	767
	371	11T	Ⅵ	XII類	口縁部～胴部	－	－	－	暗灰黄色	にぶい黄色	ハケメ	ハケメ	○	○	○						普通	スス外面～口唇部上面	6459

第３節　古代の調査

１　調査の概要

本遺跡における古代相当の掲載遺物は３点と少ないが，内１点の土師器の胎土中には，籾痕が捉えられる。本来の遺物包含層（Va層～Vc層）から出土したのは２点（遺物番号372・373）である。「第１・２節の縄文・弥生の調査」でも触れたとおり，古代遺物包含層（Va層）の上位層（Ⅳ層）出土の遺物も，東隣の現集落及び隣接の坂ノ下遺跡の様相を示す有意義な資料と判断し，報告書に掲載した（遺物番号374）。なお，遺構は検出されない。



第47図　遺物出土状況図（古代）

２　遺物

掲載遺物は，土師器が１点，須恵器が１点，磁器が１点の計３点で，Ⅳ層もしくはVa層から出土した。

（１）　土師器（第48図―372）

372は，小片の為，天地や傾き等位置設定が困難である。欠損でなく「生きている」と認め得る側面を口縁部として上位に配置し，図化した。図に従えば，断面三角状の沈線を３条縦走させることになる。３条の沈線を横位に配置すると，弥生時代の壷の頸部・肩部に添付される断面三角形状の無刻み突帯の形態に近似する。レイアウト上は，内面に横位・斜位のナデを施すと捉えられる。一方，内面調整のナデは基本的に横位が殆どであることを鑑みると，本資料も90°回転させて配置すると，内面調整も横ナデと捉えられる。一般的な土師器の坏・埦等に比して，器厚が1.8㎝程と厚い。また，他の土師器の胎土には確認されない0.3㎝弱の乳白色の粘土(軽石状の石粒か。）が，胎土に密に含まれる点など，相違点がある。「坂ノ下　2002」の「図版９」に，本資料372の質感に類似する資料が報告されている。同掲の「第Ⅴ章　発掘調査のまとめ」に，「(柱穴の数ケ所からは,）土師器を作る過程で放置されたかのような塊（図版６：図版９の

誤植と判断される。）が出土した。」と報告される。なお，372の内面には，長軸長0.7㎝弱，短軸長0.3㎝弱の籾痕が付着する（写真13参照）。

（２） 須恵器

① 碗（第48図―373）

373は碗の底部と思われる。器高１㎝程の中空高台を持つ。腰部には，指ナデを巡らす。体部は，やや膨らみながら立ち上がる。本遺跡での器種確認を可能とする須恵器の出土は，本資料１点のみである。隣接する坂ノ下遺跡では，甕・壷の他に坏等が出土している。

（３） 輸入磁器

① 碗（第48図―374）

越州窯青磁Ⅱ類の碗の口縁部であると思われる。玉縁口縁を有する。内外面の地色は，灰白色やオリーブ灰色の色調を呈し，釉の固着が弱く，特に外面の剥離が顕著である。坂ノ下遺跡の313と釉や胎土の色調が酷似し，同一個体の可能性もある。「坂ノ下　2002」の「遺物番号221～224」にも越州窯青磁碗が報告されている。

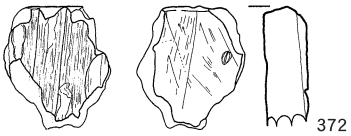
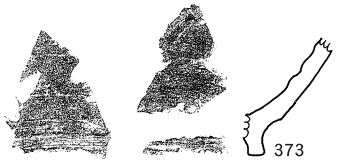
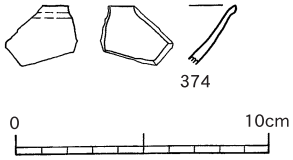


写真13　372の籾痕





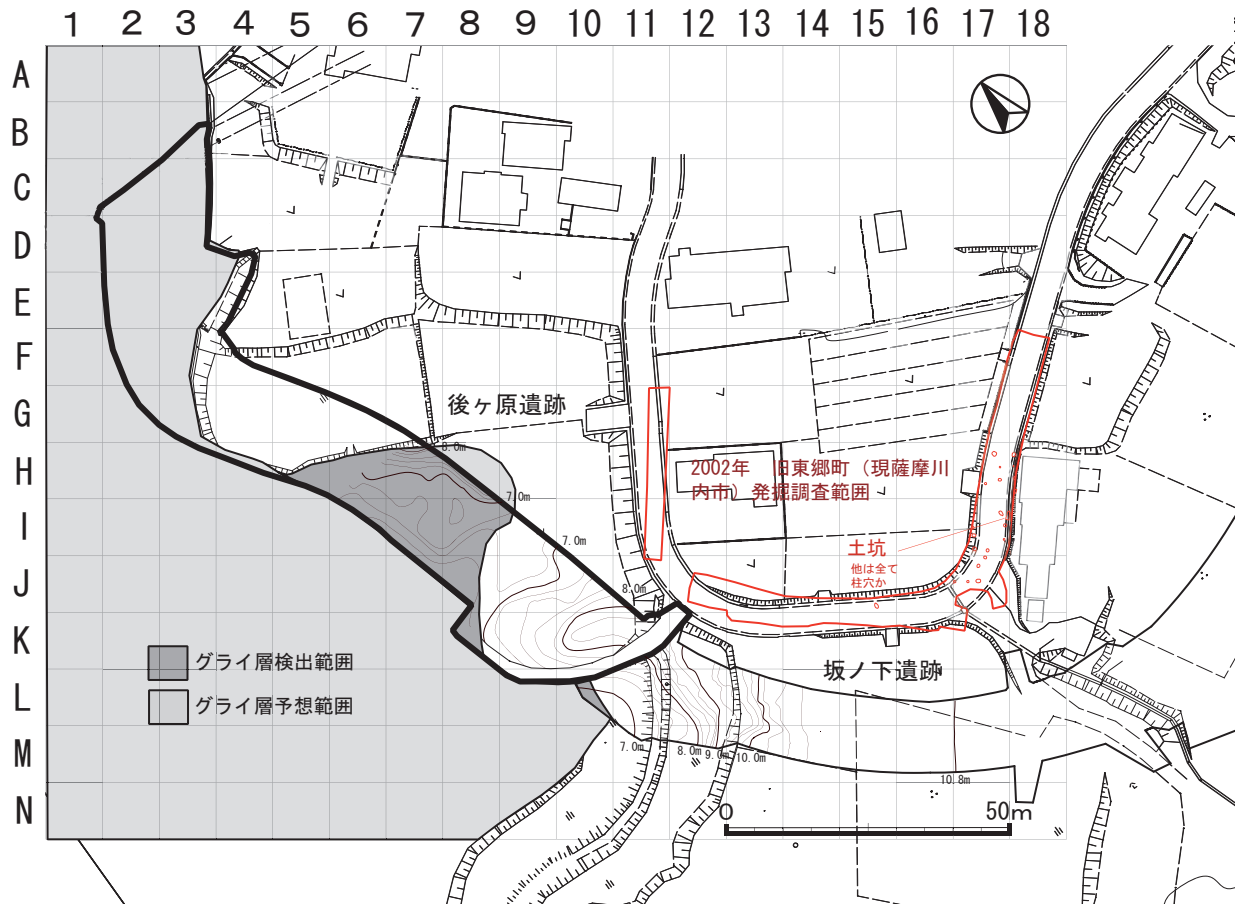
第48図　遺物実測図（33）土師器・須恵器　碗・輸入磁器（古代）

第12表　遺物観察表（10）土師器・須恵器　碗・輸入磁器（古代）

挿図	番号	出土区	層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考	取上番号
										外側	内側	外側	内側		
48	372	10T	Va	土師器	不明	口縁部？	－	－	－	黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	籾痕付着	929

挿図	番号	出土区	層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		胎土	備考	取上番号
										外側	内側	外側	内側			
48	373	6T	Va	須恵器	碗	体部～高台	－	－	－	灰色	灰色					6517

挿図	番号	出土区	層	種別	器種・分類	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	備考	取上番号
48	374	7T	Ⅳ	輸入磁器	碗:越州窯青磁Ⅱ類	口縁部～体部	－	－	－	灰白色	オリーブ灰色/浅黄色		134



第49図　グライ層検出状況及び推定分布範囲（中世）

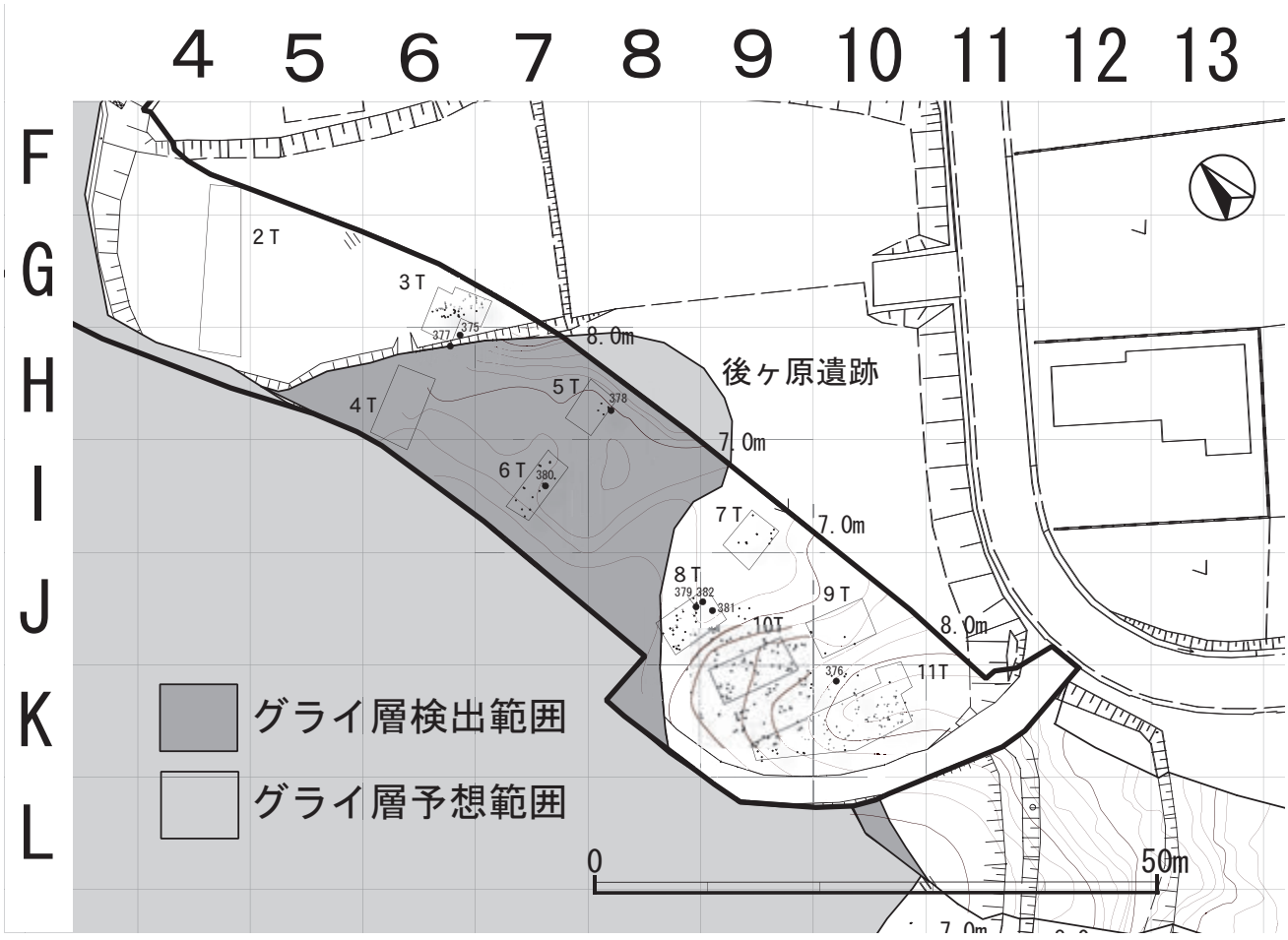
写真14　グライ層検出状況

写真15　グライ層堆積状況

1　調査の概要

本遺跡では，河岸段丘の低段丘面のＨ－５区からＫ－８区にかけて弱グライ層・強グライ層（Vb・Vc層）が広がる。発掘調査開始前半の７月から８月前半まで確認調査を実施し，8月前半で９・11Ｔのみ縄文時代の遺物包含層（Ⅵ層）に達した。５～８・10Ｔについてはトレンチ下面（河川堆積層：Ⅳ層）からの湧水により調査を一旦は断念した。10月にトレンチ内のⅣ層の湧水が終息したため，Ⅳ層を重機により除去し，Ⅳ層下面以下のトレンチ調査を行い，全トレンチにおいて弥生時代～中世の遺物包含層（Va層）に達した。しかし，激しい湧水により土砂崩落の兆候が一部に生じたため，重機で河川堆積層（Ⅱ層～Ⅳ層）を除去してトレンチ壁高を下げながら，Ⅵ層上面まで人力によるトレンチ調査を進めた。弱グライ層（Vb層）及び強グライ層（Vc層）を検出したが，トレンチ調査及び土層壁の観察からは畦畔や鋤床痕等人為的な痕跡を捉える事はできなかった。なお，隣接地域では「坂ノ下　2002」に「遺物番号110：石包丁」が報告されている。本稿「坂ノ下遺跡」でも，古代の土器片から籾痕が捉えられており（参照241），本調査区周辺には水田が存在した可能性がある。少なくとも，湿地・沼地が存在した可能性は高い。強グライ層（Vc層）の土壌の植物珪酸体分析の結果（参照本稿「第６章　自然科学分析」）や調査時の10月の少雨期にも湧水が激しかったことは，その傍証と言えよう。現集落住民によると，本調査区の西側隣接地に位置する，より一段低い低段丘面の現耕作田は元々湧水により水深が深く，苗植えや稲刈り時には外部から客土を水田に投入し，底床のかさ上げを行っていたとのことである。なお，本調査区の黒褐色砂壌土（Va層）及び弱グライ層・強グライ層（Vb・Vc層）からは中世の遺物（378～380：滑石製品，381・382：土錘）が出土し，近世遺物が包含されないことから，弱グライ層・強グライ層形成の下限時期は中世段階である（上位の河川堆積砂層Ⅱ～Ⅳ層は堆積していない。）と判断し，弱グライ層・強グライ層についても中世で取り扱うこととした。

遺物は，土師質土器や瓦質土器，龍泉窯青磁の盤，滑石製石鍋及び滑石製品，土錘が出土する。特に，滑石製石鍋はいわゆる「縦耳」を有するタイプで，中世初頭（11世紀～12世紀前半）の交易品に係る遺物として，本遺跡と外部との接触を探る上で重要である。



第50図　遺物出土状況図（中世）

2　遺物

①　土師質土器（第51図―375）

小片の為，天地の配置等困難であるが，箱状の製品と判断し図化した。器面前面に，丁寧なハケメを施す。底部に位置付けた外面には，ミガキが入る。硬質な土師質で特徴的な器形のため中世相当の可能性で掲載したが，古代や近世の可能性も否定できない。

②　瓦質土器（第51図―376）

口縁部もしくは胴部に，ゆるい台形状（舌状）の突帯が添付される。突帯上部には，幅0.1cmの縦位沈線がハケメ状に施される。内面の上位には，部分的に間隙の広いハケメが横走し，下位にはより密なハケメが斜走する。ハケメ調整を施すことから，樺ノ万丈系の可能性がある。

③　輸入磁器（第51図―377）

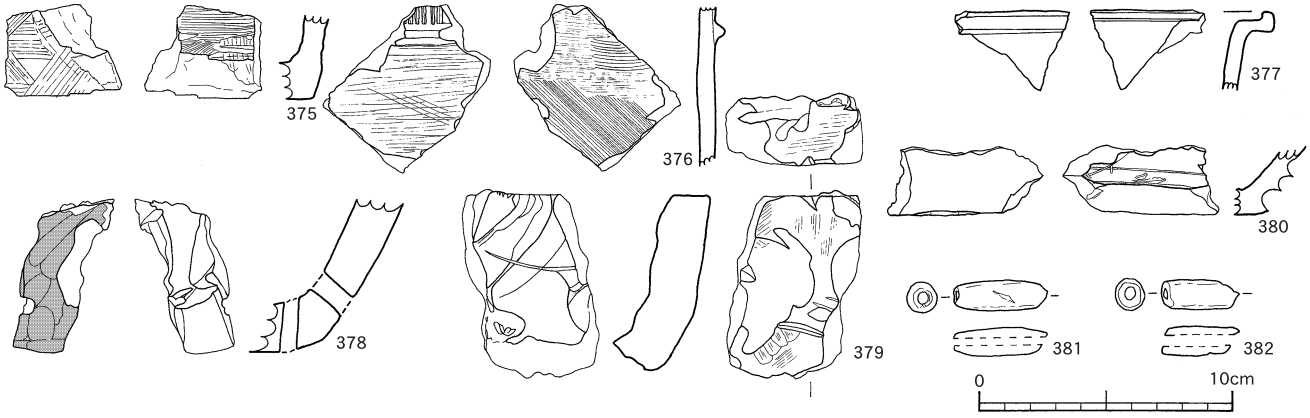
龍泉窯青磁の盤の口縁部と思われる。口縁部は逆Ｌ字状に外に張り出し，口縁上端部で屈曲・直口して立ち上がる。

④　滑石製品（第51図―378～380）

隣接する坂ノ下遺跡で縦耳を有する滑石製石鍋が出土することから，本遺跡の滑石製品も，同様な製品の二次加工品等の可能性が高いと見る。中世初頭(12世紀前半)の交易品に係る遺物として，本遺跡と他地域とのつながりを示す重要な資料である。378は，滑石製石鍋の底部及び腰部を素材とする。体部に直径0.7cm程の貫通穿孔を穿ち，底部にも穿孔らしき痕跡が捉えられる。表面右側面（裏面左側面）に粗い面取りが施され着紐痕のような磨滅が捉えられる。二次加工品もしくは再利用品の可能性で取り上げた。なお，外面全面にススが付着するが，滑石製石鍋として使用した際のス付着と思われる。379は，滑石製石鍋の底部及び腰部を素材とする。左・右側面及び下面に粗い成形を施す他，上面には丁寧な面取りが施される。人為的に長方形の形状を作出したと判断される。他に，表裏面や側縁にＶ字状の切り込みが散見される。用途不明の二次加工品と捉えたい。380も378･379同様に，滑石製石鍋の底部及び腰部を素材とする。裏面左側面にやや雑な面取りが施されることから，二次加工品及び再利用品の欠損品の可能性で捉えた。元来の底部に相当する部位にはススが付着する。

⑤　土錘（第51図―381・382）

381・382の何れも管状土錘で，長軸縁端を欠損後に破棄した可能性もあるが，継続使用の可能性で図化した。よって，器形及び長軸長は，製作時の姿を維持していない。ともに，貫通穿孔の口径は0.4cm程度で，隣接する坂ノ下遺跡の「図面番号337～342」と近似する。なお，本遺跡と川内川の最短距離は150m程である。



第51図　遺物実測図　土師質土器・瓦質土器・輸入磁器・滑石製品・土錘（中世）

第13表　遺物観察表（11）土師質土器・瓦質土器・輸入磁器・滑石製品・土錘（中世）

挿図	番号	出土区	層	種別	器種・分類	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考	取上番号
										外側	内側	外側	内側		
51	375	3T	Ⅱ	土師質土器	不明	体部～底部	－	－	－	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ハケメ	ハケメ	籾痕付着	1430
	376	11T	Ⅵ	瓦質土器	擂り鉢	胴部	－	－	－	褐灰色	灰黄色	ミガキ	ハケメ		6564

挿図	番号	出土区	層	種別	器種・分類	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	備考	取上番号
51	377	3T	Ⅳ	輸入磁器	盤:龍泉窯青磁	口縁部	－	－	－	にぶい黄橙色	灰黄色		1690

挿図	番号	出土区	層	種別	器種	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	取上番号
51	378	5T	Va	滑石製品	二次加工品	－	－	－	穿孔2孔・着紐痕？あり，外面スス付着	6531
	379	8T	Va	滑石製品	二次加工品	－	－	－	切り込みあり	6497
	380	6T	Va	滑石製品	欠損品	－	－	－	外面スス付着	6528

挿図	番号	出土区	層	種別	品種	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	色調	備考	取上番号
51	381	8T	Va	土製品	錘	3.75	1.25	1.2	4.5	浅黄橙色		941
	382	8T	Ⅳ	土製品	錘	3.1	1.2	1.2	3.92	浅黄橙色		373

第５節　近世の調査

１　調査の概要

殆どは，Ⅱ層からⅣ層の河川堆積層に包含された遺物であり，18世紀から19世紀にかけての陶磁器である。このことから，Ⅱ層～Ⅳ層の河川堆積層は，18世紀後半～19世紀前半以降に堆積したと判断される。氾濫の下限は，特にⅣ層等に近現代の陶磁器等が特段確認されないことから，近世末～近代初頭の可能性で捉えたい。本稿写真１より，この河川氾濫は，海抜高8.5mまで水位が上がった可能性があると思われる。なお，近世と断定し得る遺構は検出されない。

２　遺物

磁器と陶器に分けて，器種ごとに報告することとする。主に，18世紀後半から19世紀前半の肥前系磁器と薩摩焼の陶器が中心で，極一部肥後系の陶器が含まれる。

（１）磁器（第52図―383～390）

①　碗（第52図―383～389）

383の呉須は発色が悪く，オリーブ灰色を呈する。外面に「寿」の文字が描かれる。内外面の口縁部上端部及び見込みには，圏線が巡る。384は，小広東碗である。外面は梵字が簡略化された文様が描かれる。本資料では確認できないが，一般的に見込みには小さな虫文が描かれる。在地系の可能性が高い。385は，比較的器壁が薄い碗であるが，鉢の可能性も考えられる。386は，外面にコンニャク印判による花文がスタンプされる。呉須は発色が悪く，緑灰色の色調を呈する。387は，暗赤色の色絵を施す。口唇端部が端反る碗の口縁部と思われる。内外面の口縁上部には２条の圏線が巡り，その下位には花弁が描かれる。388は，外面青磁釉の碗である。見込みには２条の圏線が巡る。389は，外面に菊文が描かれる。調整不良で呉須の発色が悪い。

②　皿（第52図―390）

390は，復元口径10㎝程度，復元底径６㎝の皿で蛇の目凹型高台である。0.2㎝程の浅い高台の外底面には，幅1.5㎝程の蛇の目釉剥ぎが巡り，中央には直径1.5㎝程の円形の凹みが施される。見込みには，山水文が描かれる。

（２）陶器（第52図―391～397）

①　碗（第52図―391・392）

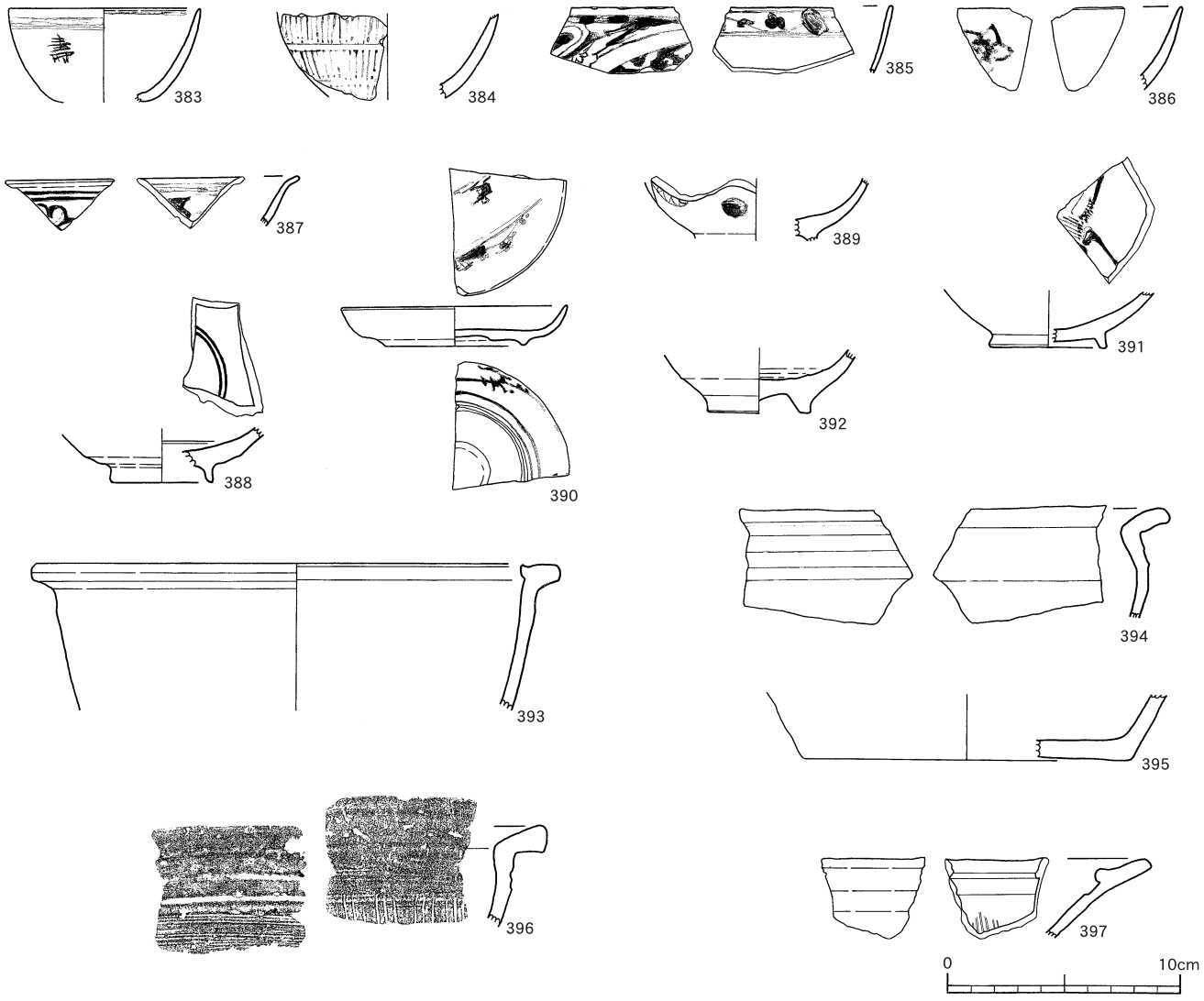
391は，淡黄色の色調を呈する碗の底部である。高台を中心に，2.5㎝幅の無施釉帯が巡る。見込み部には，オリーブ灰色の絵付けがなされている。392は陶器の碗である。胎土は，底部付近はにぶい褐色を呈し，体部に至り暗緑灰色に移行していく。高台のケズリは舌状に丸みを帯びる。高台内面を含む全面に施釉する。見込みには，２重円状の蛇の目釉剥ぎが施される。

②　鉢（第52図―393～395）

393～395は，鉢等と思われる。こね鉢等の用途が推察される。393は，復元口径22.5㎝を測る片口鉢である。口縁部は外側から内側に折り返して作る。内外面とも，器面調整はヘラ状工具によるもので，横筋が観察される。なお，口唇上面には施釉されない。394は，口縁部に１条の微隆起突帯が巡る。口唇上面がやや丸みを帯び，折り返しによる如意形口縁である。器面の色調及び調整は393に酷似する。395は，鉢の底部である。復元底径は，14.1㎝程度を測る。施釉は全面に施されるが，底部外面には溶着による剥がれか拭き取られたか，露胎が見られる。

③　擂鉢（第52図―396・397）

396・397は，擂鉢である。396は，上述の393～395同様に口唇上面には施釉されない。394同様に，折り返しによる如意型口縁である。口縁部上位には，2条の沈線が横走し，その下位にハケメ状の横筋が入る。口唇縁端から２㎝の余白を空けて，縦位の擂り目が施される。397は，口縁部が大きく外反する器形である。外側に大きく張り出した口唇端部を，内面側に折り返し畳む。口唇上面は，ユビオサエにより凹みを呈する。口縁部の内外面とも，3㎝幅で鉄釉がかかる。口唇縁端部から2.5㎝の間隙を空けて，擂り目が施される。



第52図　遺物実測図（35）国産陶磁器（近世）

第14表　遺物観察表（12）国産陶磁器（近世）

挿図	番号	出土区		層	種別	器種	部位	口径:内径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 外側	色調 内側	胎土	釉薬	備考	取上番号
52	383	H	5	Ⅲ	肥前系磁器	碗	口縁部～体部	4.9	－	－	灰白色	灰白色	灰白色	染付		1443
	384	3T		Ⅳ	肥前系磁器	碗	体部	－	－	－	明青灰色	明青灰色	灰白色	染付		1694
	385	K	10	Ⅱ	肥前系磁器	碗	口縁部～体部	－	－	－	灰白色	灰白色	灰白色	染付		一括
	386	K	10	Ⅱ	肥前系磁器	碗	口縁部～体部	－	－	－	灰白色	灰白色	灰白色～にぶい黄橙色	染付		一括
	387	K	10	Ⅲ	肥前系磁器	碗	口縁部～体部	－	－	－	灰白色	灰白色	灰白色	染付		一括
	388	H	5	Ⅲ	肥前系磁器	碗	体部～高台	－	4.4	－	灰白色	明青灰色	灰白色	染付		1500
	389	H	5	Ⅲ	磁器	碗	体部～高台	－	5.3	－	灰白色	灰白色	浅黄橙色	染付		1497
	390	H	5	Ⅲ	肥前系磁器	皿	体部～高台(完形)	9.4	6.0	1.75	明青灰色	明青灰色	灰白色	染付		1472
	391	7T		Ⅲ	陶器	碗	体部～高台	－	5.1(4.8)	－	淡黄色	淡黄色	浅黄色	染付		一括
	392	11T		Ⅳ	苗代川焼	碗	体部～高台	－	4.5	－	オリーブ黒色	灰オリーブ色	黄灰色～にぶい橙色	内外面鉄・黒褐色		917
	393	H	5	Ⅲ	苗代川焼	鉢	口縁部～胴部	19.2	－	－	暗褐色/浅黄色	暗褐色/浅黄色	黄灰色～にぶい橙色	内外面鉄・にぶい赤褐色		1298
	394	H	5	Ⅲ	苗代川焼	鉢	口縁部～胴部	－	－	－	極暗赤褐色/浅黄色	極暗赤褐色/浅黄色	黄灰色～にぶい橙色	内外面鉄・黒褐色		1505
	395	7T		Ⅲ	苗代川焼	鉢	胴部～底部	－	14.0	－	黒褐色	黒褐色/灰白色	黄灰色～赤褐色	内外面鉄・黒褐色		6571
	396	3T		Ⅳ	苗代川焼	擂鉢	口縁部～胴部	－	－	－	にぶい赤褐色/灰白色	にぶい赤褐色/灰白色	明赤褐色	内外面鉄・赤褐色		1698
	397	8T		Ⅳ	肥後系陶器	擂鉢	口縁部～胴部	－	－	－	赤褐色/褐灰色	赤褐色/褐灰色	にぶい橙色	内外面鉄・灰色/赤褐色		951

第６章　自然科学分析

第１節　概要

後ヶ原遺跡のVb層で弱グライ層，Vc層で強グライ層が捉えられたことから，稲作の可能性や沼地における古植生に関する情報を得るために，グライ層の珪酸体分析を実施することとした。

土壌試料は，3点である。

第２節　植物珪酸体分析

1．試料

試料は，3か所の地点におけるグライ層の土壌試料３点（試料番号1，2，3）である。分析時の肉眼観察では，試料番号１と２はシルト質砂，試料番号３はシルト混じりの砂であった。

2．分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，「近藤　2004」の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には，分析試料の乾燥重量，プレパラート作成に用いた分析残渣量，検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し，堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）を求める。

結果は，植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際，100個／ｇ未満は「＜100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする），合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また，各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3．結果

結果を第15表～第17表に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が悪く，表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号１では，植物珪酸体含量が約2.3万個／ｇである。栽培植物のイネ属の産出が目立ち，葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は，短細胞珪酸体が約2,800個／ｇ，機動細胞珪酸体が約2,400個／ｇである。短細胞珪酸体には，短細胞列を呈するものも見られる。この他にタケ亜科，ヨシ属，ススキ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科などが認められる。また，樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ「近藤・ピアスン　1981」も検出される。

第15表　植物珪酸体含量（１）

種類 ＼ 試料番号	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	2,800	400	900
タケ亜科	300	200	900
ヨシ属	200	<100	400
ウシクサ族ススキ属	1,000	200	500
イチゴツナギ亜科	500	200	200
不明キビ型	6,200	1,800	4,400
不明ヒゲシバ型	1,400	100	0
不明ダンチク型	1,400	600	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	2,400	300	200
タケ亜科	500	200	200
ヨシ属	200	100	200
ウシクサ族	1,600	700	400
不明	4,500	2,600	500
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	13,700	3,400	7,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,100	3,800	1,400
総　計	22,800	7,200	8,700
珪化組織片			
イネ属短細胞列	＊	＊	＊
樹木起源珪酸体			
第Ⅲグループ	＊	＊	－
第Ⅳグループ	＊	＊	－

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100:100個/g未満
－:未検出,＊:検出

試料番号２の植物珪酸体含量は試料番号１よりも少なく，約7,200個／ｇである。イネ属とともに，タケ亜科，ヨシ属，ススキ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科，樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループが見られる。イネ属の含量は，短細胞珪酸体が約400個／ｇ，機動細胞珪酸体が約300個／ｇである。またイネ属短細胞列も見られる。

試料番号３の植物珪酸体含量は試料番号２よりもやや多く，約8,700個／ｇである。本試料でもイネ属が見られ，短細胞珪酸体が約900個／ｇ，機動細胞珪酸体が約200個／ｇである。またタケ亜科，ヨシ属，ススキ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科が見られる。樹木起源珪酸体は，認められない。

なお，いずれの試料からも珪藻化石が散見される。

4．考察

土壌試料３点からは，栽培植物のイネ属が検出された。稲作が行われた水田跡の土壌では，栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され，植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料１ｇ当り5,000個以上の密度で検出された場合

に，そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（「杉山　2000」）。この判断基準と比較すると，試料番号１では含量がやや少ない。ただし，イネ属の産出が目立つことから，稲作に関わる土壌である可能性がある。試料番号２や３では，含量がかなり低い。この結果から見る限り，土壌試料が採取された土層で稲作が行われた可能性は少ない。

なお，各試料からは珪藻化石が検出されており，何らかの水の影響を受けたことが窺える。今後さらに珪藻分析を実施して，堆積環境に関する情報を把握した上で，今回の結果を検討することが望まれる。

ところで，イネ属の植物珪酸体は，稲作に伴って耕作土に含まれるだけでなく，燃料材や生活資材として稲藁が利用された結果，遺構覆土中に混入する場合も想定される。そのため，今回調査対象とした遺構の発掘調査所見を含めて，今回のイネ属の産出状況について評価されることが望まれる。

イネ属の他に検出された分類群では，各土層が形成された頃にタケ亜科，ヨシ属，ススキ属，イチゴツナギ亜科などのイネ科植物の生育したことが窺える。タケ亜科やススキ属には乾いた場所に生育する種類が多く，ヨシ属は湿潤な場所に生育する。そのため，調査地点周辺には乾いた場所や湿潤な場所が存在したものと推定される。

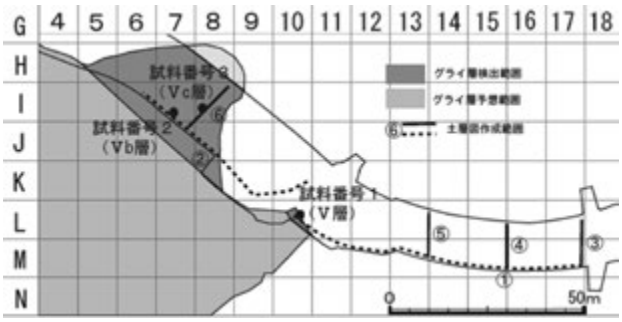
引用文献

近藤　錬三，2004，植物ケイ酸体研究．ペドロジスト，48，46－64.

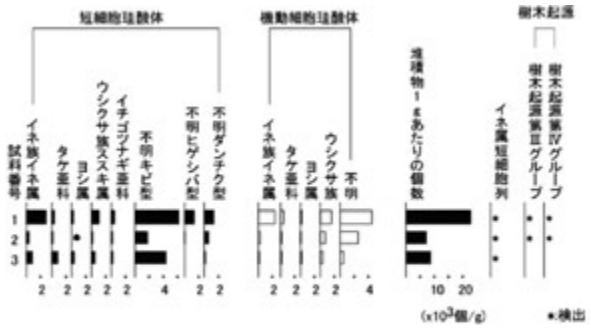
近藤　錬三・ピアスン　友子，1981，樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，　217－229.

杉山　真二，2000，植物珪酸体（プラント・オパール）．辻　誠一郎（編著）考古学と自然科学３　考古学と植物学，同成社，189－213.

※）本分析は，当社協力会社・パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

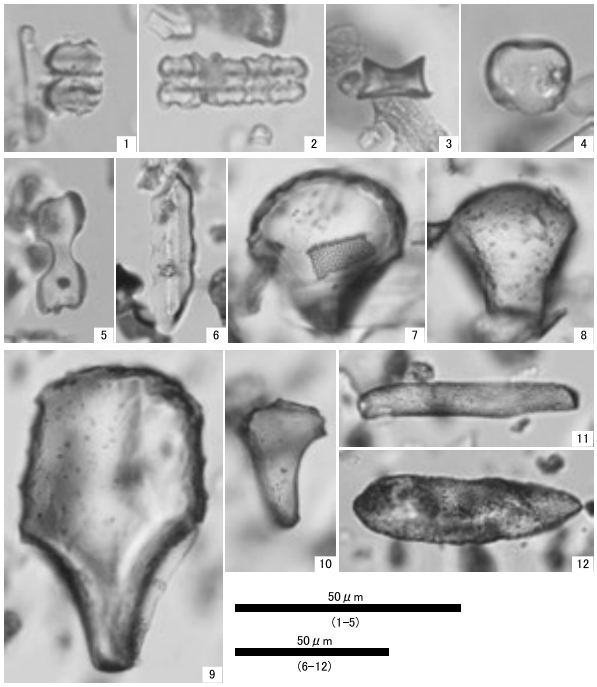


第16表　植物珪酸体含量（２）



1．植物珪酸体含量
堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●は100個/g未満を示す。
また，珪化組織片と樹木起源珪酸体の産状を＊で示す。

第17表　植物珪酸体含量（３）



1．イネ属短細胞珪酸体(試料番号1)
2．イネ属短細胞列(試料番号1)
3．タケ亜科短細胞珪酸体(試料番号1)
4．ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号1)
5．ススキ属短細胞珪酸体(試料番号1)
6．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号1)
7．イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1)
8．タケ亜科機動細胞珪酸体(試料番号1)
9．ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号1)
10．ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号1)
11．樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(試料番号1)
12．樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(試料番号1)

第７章　総括

１　はじめに

坂ノ下・後ヶ原両遺跡は，河岸段丘の最上段面から西側に下る傾斜面が坂ノ下遺跡調査区，続く下段の段丘面が後ヶ原遺跡調査区と連続する遺跡である。河岸段丘における段丘レベルの差異が，土地利用や河川氾濫の影響の程度に違いを生んだと思われるが，遺物に共通点が多いことなど両遺跡の発掘調査の成果を考える上では，一連の遺跡として総括することが有意義であると判断する。また，本稿坂ノ下遺跡に最短距離で38m程と直近の「坂ノ下　2002」の調査成果も鑑みて考察することとした。

２　坂ノ下・後ヶ原遺跡における調査成果

坂ノ下遺跡は，縄文時代前期・後期・晩期，弥生時代中期，古墳時代のほぼ全般，古代，中世，近世の時代の遺物を包含する。検出遺構は，中世と判断した溝状遺構１条と集石遺構１基である。

縄文時代に関しては，坂ノ下遺跡では，前期で曽畑式土器，後期で市来式土器・辛川式（納曽式）土器・西平式土器，晩期で黒川式土器・組織痕文土器が出土した。量的には，後期では西平式土器，晩期では黒川式土器が中心となる。中部九州系の土器である辛川式土器の出土により，後期において本遺跡は，中部九州とのつながりを有していたと判断される。縄文時代では，竪穴住居等縄文時代の遺構は検出されないが，一定量の打製石斧の出土は畑作等農業の存在を窺わせるものであり，近隣に生活根拠である集落の存在が看取される。他に，頸部に三叉文をもつ精製浅鉢が出土しており，近年出土資料が増加している滋賀里系土器との繋がりが見てとれる。

弥生時代では，黒髪式土器の甕形土器，同時代と思われる壷形土器が少量ながら出土した。旧東郷町内では，弥生時代該当の遺跡が少なかったが，本遺跡の遺物出土により弥生時代における本遺跡周辺の様相が若干ながら見えてきた。具体的には，縄文時代の辛川式土器同様に，弥生時代でも中部九州系の黒髪式土器が出土したことにより，川内川・東シナ海，もしくは内陸部を通じた中部九州とのつながりが垣間見える。川内川直近の本遺跡においては，中部九州との繋がりにおける舟（船）が交通手段として看取される。なお，遺跡直近の集落民の談によると，近年まで，川内川を船が往来してモノを運搬していたとのことである。他に，今回の発掘調査では出土しなかったものの「坂ノ下　2002」では石包丁が１点報告されており，稲作が行われていた可能性が見出される。候補地としては，現在水田がある後ヶ原遺跡調査区の西側一帯であろうと推察される。

古墳時代については，旧東郷町では川内川流域に遺跡が集中する。本遺跡でも，東原式土器から辻堂原式土器，笹貫式土器の前半期にかけての遺物が出土した。特に，坂ノ下遺跡傾斜面において比較的多量の遺物が出土し，その多くは坂ノ下遺跡段丘上段面からの流れ込みであると判断される。現況では，上段面は削平を受けており，弥生時代から中世の遺物包含層は捉えられないものの，古墳時代該期においては遺物密集地であったと思われる。但し，遺構については検出されなかった。旧東郷町内の川原遺跡や宮ノ脇遺跡，司野下遺跡，小田・小田原遺跡などでも古墳時代相当の遺物は出土するが，何れも遺構発見が少なく，遺跡の性格を捉えるのが困難となっている。

古代においては，ヘラ切り痕をもつ土師器の坏・埦，土師甕，須恵器の碗・甕・壷等のほか，越州窯青磁Ⅱ類の碗や盤，緑釉陶器の碗等中国大陸からの交易品が出土している。「坂ノ下　2002」には，上段面の北側隣接地（直近距離2,30m程）において，本稿と同様の越州窯青磁の碗や大碗，緑釉陶器のほか，鉄鏃が１点，墨書土器が６点,平瓦が１点報告されている。掘立柱建物跡であったかは不明であるが，ピットが21基検出されている。平瓦が出土することから，近隣を含めて建物が存在した可能性が高いと推察される。本遺跡及び「坂ノ下　2002」の調査区が川内川に張り出す舌状河岸段丘地である点や越州窯青磁碗等交易品が出土することから，複数ある河川交通の中継地の一つ，もしくは交易と何らかのつながりのある施設が存在した可能性も一考であろうか。旧東郷町内域においては，川内川が大きく蛇行し，結果的に本遺跡のように舌状に張り出し，他方で内弯を有する地点が３か所程確認されるが，河川交通の中継地としての有意性を見いだせる。なお，旧東郷町内の古代の遺跡としては，本遺跡から西北西方向に直線距離３㎞に五社遺跡がある。五社遺跡では，内黒土師器の他，外赤・内赤の土師器や刻書土器，須恵器の坏，蓋，甕，壷等出土する。「坂ノ下　2002」では外面丹塗りの土師甕や内赤土師器，墨書土器が出土し，本稿でも出土するヘラ描きする土師埦が出土するなど，特殊な遺物に関しても，五社遺跡と坂ノ下遺跡では共通する点が多い。生業を示す重要な資料として，土師器胎土内に籾痕が挙げられる。前述の「坂ノ下　2002」の石包丁及び土師器内の籾痕から，弥生時代以降，本遺跡周辺で水田稲作が行われていた可能性が看取される。そこで注目すべきは，少なくとも後世の中世までの本遺跡周辺の植生を示すグライ化層・グライ層が後ヶ原遺跡で検出されたことである。同層内土壌２点の珪酸体分析からは,「稲作が行われた可能性は少ない」と稲作水田の可能性は否定された。しかし，「イ

ネ属の他に－中略－タケ亜科，ヨシ属，ススキ属，イチゴツナギ亜科などのイネ科植物の生育した」植生が捉えられ,「タケ亜科やススキ属には乾いた場所に生育する種類が多く，ヨシ属は湿潤な場所に生育する。そのため，調査地点周辺には乾いた場所や湿潤な場所が存在した」可能性が導き出された。これは，後ヶ原遺跡が舌状台地の崖下の低段丘面（低地から台地崖下にかけて緩やかに上がる範囲）に立地する点や，多雨期・少雨期や川水の流入等による沼岸の経年変化を鑑みると，後ヶ原遺跡調査区及びその西側が湿地や沼地であったことを示す。現況では，後ヶ原遺跡の北側隣接地には三日月湖が現存する。畦畔や鋤床層など明確な人為的痕跡が捉えられないことや珪酸体分析による稲作の否定的分析から，後ヶ原遺跡調査区内における稲作の可能性は低いが，石包丁や籾痕付着の土師器の出土から，後ヶ原遺跡西側に広がっていたと推察される湿地・沼地の一部では稲作が行われていた可能性は看取される。

中世になると，遺物が量的には激減する。糸切り痕を有する土師器坏・皿，滑石製石鍋及び滑石製品，瓦質土器，土錘が出土するが，特に，縦耳を有する滑石製石鍋及び二次利用品と思われる滑石製品の出土が注目される。縦耳を有する滑石製石鍋は宋商人が好んで使用し，宋商人・博多商人を主体とした博多・九州東シナ海・南島をつなぐ海上交易の所産と捉える説もある（「鈴木康之2007」）。その説に従えば，薩摩半島東シナ海側から川内川を媒介して内陸部への人・モノの移動ベクトルが想定される。出土遺物からは，縄文時代後期（辛川式土器期）以降の中部九州とのつながりを初源として，川内川を通じた東シナ海と南九州内陸部への人・モノの動きが，時代による濃淡はありながらも連綿と続いたと推察される。なお，旧東郷町内には，中世以降，在地豪族の大前氏及び関東御家人であった渋谷氏に関わる文書や城館跡等多く現存するが，本遺跡において特にその関連する遺物を見出すことはできない。遺跡周辺の人々の生業を示すものとして土錘が複数出土し，中世で扱ったが，時期的には古墳時代から中世の何れかに相当すると思われる。投網漁による川魚が食料源の一つであったことを示す資料として評価したい。他には，鞴の羽口が１点出土しており，精練・製鉄を行っていたことを示す。

近世について特筆されるのが，後ヶ原遺跡において，中世遺物を含む弱グライ層・強グライ層の上に，18世紀後半期から19世紀前半期の肥前系磁器の坏・碗や薩摩焼の鉢・擂鉢等を含む河川堆積砂層が堆積することである。19世紀前半期まで湿地・沼地であった同域において，大規模な河川氾濫が発生し，砂層が堆積したと推察される。堆積砂層の出自についてであるが，堆積砂層に包含される遺物（緑釉陶器や縦耳の滑石製石鍋･滑石製品等含め）は隣接する坂ノ下遺跡及び「坂ノ下　2002」と全く共通することから，河岸段丘最上段の現集落の西側縁端部が河川氾濫により崩落し堆積したと考えられる。その後，土地レベルが上昇した後ヶ原遺跡では現況同様畑作が行われ，かつて湿地・沼地であった低い土地レベルを維持する西側の低段丘面では水田が営まれ現在に至ると推定できる。

以上，遺構や遺物，珪酸体分析の結果をもとに，坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡における歴史の一旦を復元してみた。河川沖積地における川と人々の関わり（河川交通（交易））や，土地（湿地・沼地）利用の変遷を明らかにし得る調査成果が出せたように思う。今後は，周辺の他地域との同一時期における比較・分析，時系列毎の変遷をつまびらかにする必要があると思われる。特に，川内川を媒介とした東シナ海沿岸地域と内陸部の交通や交易の分析，河川流域における水田耕作等土地利用の変遷を追究する必要があると思われる。

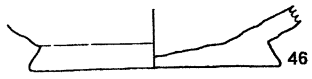
３　調整等から見る土器製作技法・手順

土器を観察していく中で，土器製作における規則性・法則性を窺わせる資料が散見された。資料の個別説明で既述した内容と重複するが，土器製作の技術・手順は土器編年や地域性，人・モノの動きを捉えうる材料になる可能性もあると思われるので，下記にまとめて紹介したい。なお，今回紹介する事例が，同時代において他の地域にも同様に普遍性を持つのか，本遺跡の地域独自の特徴及び製作者個人の個性の顕現なのかは，特段，触れないこととする。

（１）　第Ⅷ類　深鉢形土器の成形･調整技法（縄文晩期）

土器底部の断面観察により，縄文晩期相当の粗製深鉢形土器に分類した資料の一部に，成形手順が捉えられる資料が存在する。底部成形過程に，以下の二つの違いが捉えられる。

①　円盤状底部に，輪積みにより器壁を重層させるタイプ（下図46参照。他，53）



特徴

・底部及び胴部の器厚が薄い。

・見込みも，平坦に仕上げられる。

②厚みのある円盤状の底部に，壷形の胴部を合体・接合して成形する（下図49・次頁図52参照）。

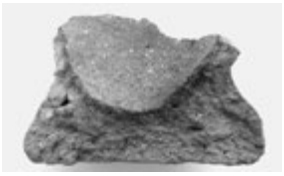
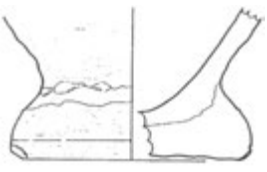
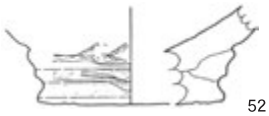


写真16　縄文晩期土器の底部断面（1）



49

写真17　縄文晩期土器の底部断面（2）



52

（２）第ＸⅣ～ＸⅦ類　甕形土器の調整技法（古墳時代）

古墳時代比定の第ＸⅣ～ＸⅦ類甕形土器は，既知の土器研究により東原式土器や辻堂原式土器に分類されうる土器資料であるが，内外面の器面調整を追究すると，以下のような調整手順が捉えられる。

外面調整について

①　口縁部及び胴部の調整に，2つのタイプが捉えられる。

ア　口縁部に縦位のハケメ，頸部に横位のハケメ，胴部に縦位のハケメと，調整方向の異なるハケメを組み合わせる（右図145参照。他，146・150・151・152・156）。

145

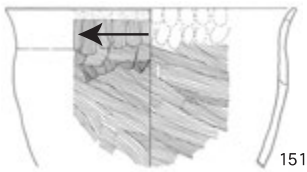
頸部下半で縦位（下方向）のハケメを施した後，頸部では横位（左方向）のハケメを施す。口縁部で縦位（上方向）にカキアゲて仕上げる。

※　ハケメの単位が２種捉えられ，使い分けがなされる。ハケメ調整が時間をおいて施される為と考えられる（右上図145・右下図148参照。他，151・152）。

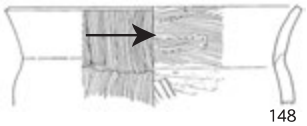
イ　口縁部・胴部ともに縦位のハケメを施す（下図148参照。他，147・149・157等）。

②　カキアゲの調整方向に２つのタイプが捉えられる。

ア　工具痕を僅かに重層させながら，縦位のカキアゲを右から左の順に施す（右図151参照。他，146・149）。



151



148

イ　縦位のカキアゲを左から右の順に施す（右図148参照。他，145・147・150・152・153・157・159）。

※　②のアとイの比率は１：３となり，製作者の利き腕の比率に関連すると推察される。

内面調整について

①　内面調整は，基本的に外面調整の手順や手法を踏襲している。頸部付近は横位，胴部以下斜位の方向を主とする（上図145・151参照。他，152・153・157）。

ア　基本的には，胴部下半から口縁部にかけてハケメ調整を施し，間隙を埋めて仕上げる（左図145・151参照。他，152・153・157）。

イ　基本的には，胴部下半から口縁部にかけてヘラナデ（ケズリ）調整を施し，間隙を埋めて仕上げる（下図156・159参照。他，150・154・155）。

159

156

突帯上の刻みについて

胴部に巡らされる突帯上に，ヘラ状工具を斜位に刺突しハケメ状工具痕を明瞭に残す資料が散見される。突帯の上下縁端にも明瞭なハケメ状の工具痕が施され，軟質の道具（布や革等）を当てた可能性が窺える（下図162参照。他，159～161）。

写真18　古墳時代甕形土器
突帯上の刻み

162

（３）　壷形土器の成形・調整技法（古墳時代）

胴部の接合痕は，ナデ・ケズリにより消されることが多いが，一部資料中，ナデやケズリが不十分なために接合痕が明瞭に残される壷形土器が出土している（次頁171参照。他，178～182・185）。

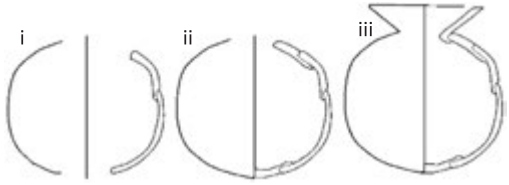
以下の手順を捉える事ができる。

ⅰ　筒状の器体（その時点で，底部は成形されていない。）に，底部を固着させ内側から胎土を追加して補強する。この段階で，半球形状の器形を作出する。

ⅱ　内面側から外方向に粘土紐（平板状？）を輪積みし，胴部中位から頸部にかけて成形する。内面の固着・成形については，頸部側から手を差し入れ，ヘラ状工具で横位ケズリを施す。

ⅲ　口縁部と胴部を接合させる。胴部同様に，頸部から手を差し入れ，ヘラ状工具で横位ケズリを施して固着を図る。

※　頸部口径は6.5㎝であり，製作者はこの口径に手握が貫通できる人物と判断される。身長174㎝の編者の手握は貫通せず，製作者は現代人の平均より小柄な男性や女性の可能性を見る。



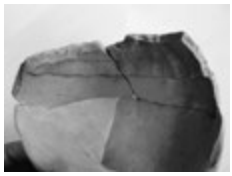


写真19　古墳時代壺形土器内面の接合痕（1）

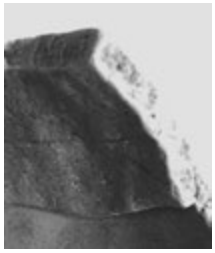
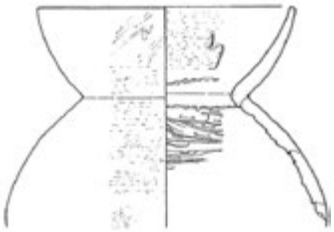


写真20　古墳時代壺形土器内面接合痕（2）



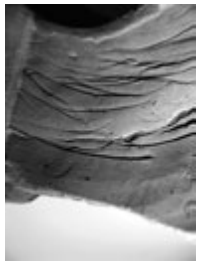


写真21　古墳時代壺形土器内面接合痕（3）

4　今後の見通し

上述のとおり，坂ノ下遺跡及び後ヶ原遺跡の発掘調査の成果により，両遺跡ともに遺物包含層を有していることが明らかとなった。また，両遺跡とも現南瀬集落に該当する舌状台地上段面を中心に，遺跡が広がる可能性が高いと見られる。2001年度の旧東郷町の発掘調査の成果も鑑みると，古代の遺構が存在する可能性があると思われる。

一方，後ヶ原遺跡の西側の現水田一帯については，古代の水田が存在する可能性があるが，梅雨時期以外の少雨期においても，湧水が著しく発掘調査は困難もしくは不可能と推察される。

〔引用文献〕

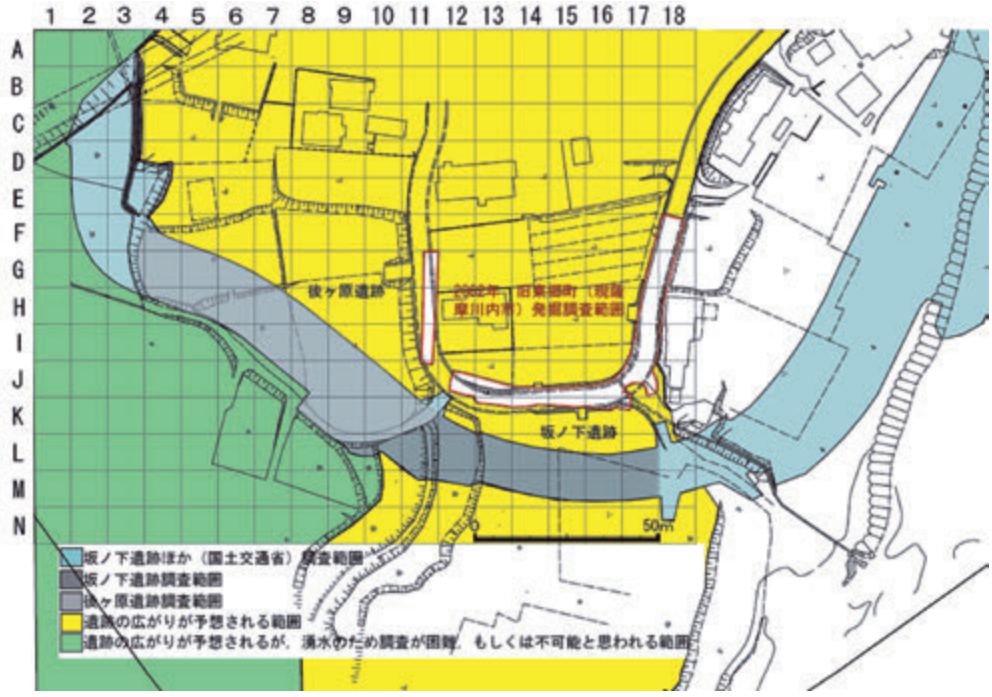
・東郷町教育委員会2002年３月『坂ノ下遺跡』鹿児島県東郷町教育委員会発掘調査報告書（６）

・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007年３月『上水流遺跡Ⅰ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）

・鹿児島県教育委員会1984年３月『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30）

・鹿児島県教育委員会2007年『先史・古代の鹿児島（通史編）』

・鈴木康之2007年「滑石製石鍋のたどった道」『東アジアの古代文化130号』古代学研究所



第53図　遺跡の広がりが予想される範囲

〔参考文献〕

・東郷町教育委員会1986年３月『五社遺跡』鹿児島県東郷町教育委員会発掘調査報告書（１）
・東郷町教育委員会1990年３月『川原遺跡』鹿児島県東郷町教育委員会発掘調査報告書（２）
・垂水市教育委員会1999年３月『後ヶ迫Ａ遺跡』鹿児島県垂水市教育委員会掘調査報告書（３）
・鹿児島県教育委員会1990年３月『前畑遺跡（第六分冊）』鹿児島県埋蔵文化財掘調査報告書（52）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター1997年３月『干迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター掘調査報告書（22）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2003年３月『雪山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター掘調査報告書（53）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2005年３月『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2007年３月『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2008年３月『前畑遺跡Ⅱ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（133）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2010年３月『渡畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（151）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2010年３月『栫城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（155）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2011年３月『渡畑遺跡Ⅱ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2011年３月『二渡船渡ノ上遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（161）
・「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名辞典46鹿児島県』角川書店
・小林達雄2008年『総覧縄文土器』「総覧縄文土器」刊行委員会

写　真　図　版

調査前風景（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－10～12区及び後ヶ原を望む）

調査前風景（北側から後ヶ原を望む）

図版2

調査前風景（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－13～18区）

表土剥ぎ（後ヶ原遺跡確認調査）

確認調査風景（後ヶ原：５Ｔ～11Ｔ）

完掘状況（後ヶ原：６Ｔ）

遺物出土状況（後ヶ原：７Ｔ）

南壁土層断面（坂ノ下：Ｍ－14・15区）

南壁土層断面（坂ノ下：Ｍ－12区）

東壁土層断面（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－12・13区）

南壁土層断面（後ヶ原：Ｋ－９・10区）

西壁土層断面（後ヶ原：Ｊ・Ｋ－８・９区）

図版4

本調査風景　西側から（坂ノ下：L・M－16～18区）

本調査風景　東側から（坂ノ下：L・M－10～13区）

本調査風景　北西側から（後ヶ原：Ⅰ～K－8～10区）

本調査風景　東側から（後ヶ原：Ⅰ～K－8～10区）

本調査風景　北東側から（後ヶ原：H～K－7～10区）

遺物出土状況　西側から（坂ノ下：L・M－16～18区）

溝状遺構完掘状況（中世）（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－１５区）

集石遺構検出状況（中世）（坂ノ下：Ｍ－１２区）

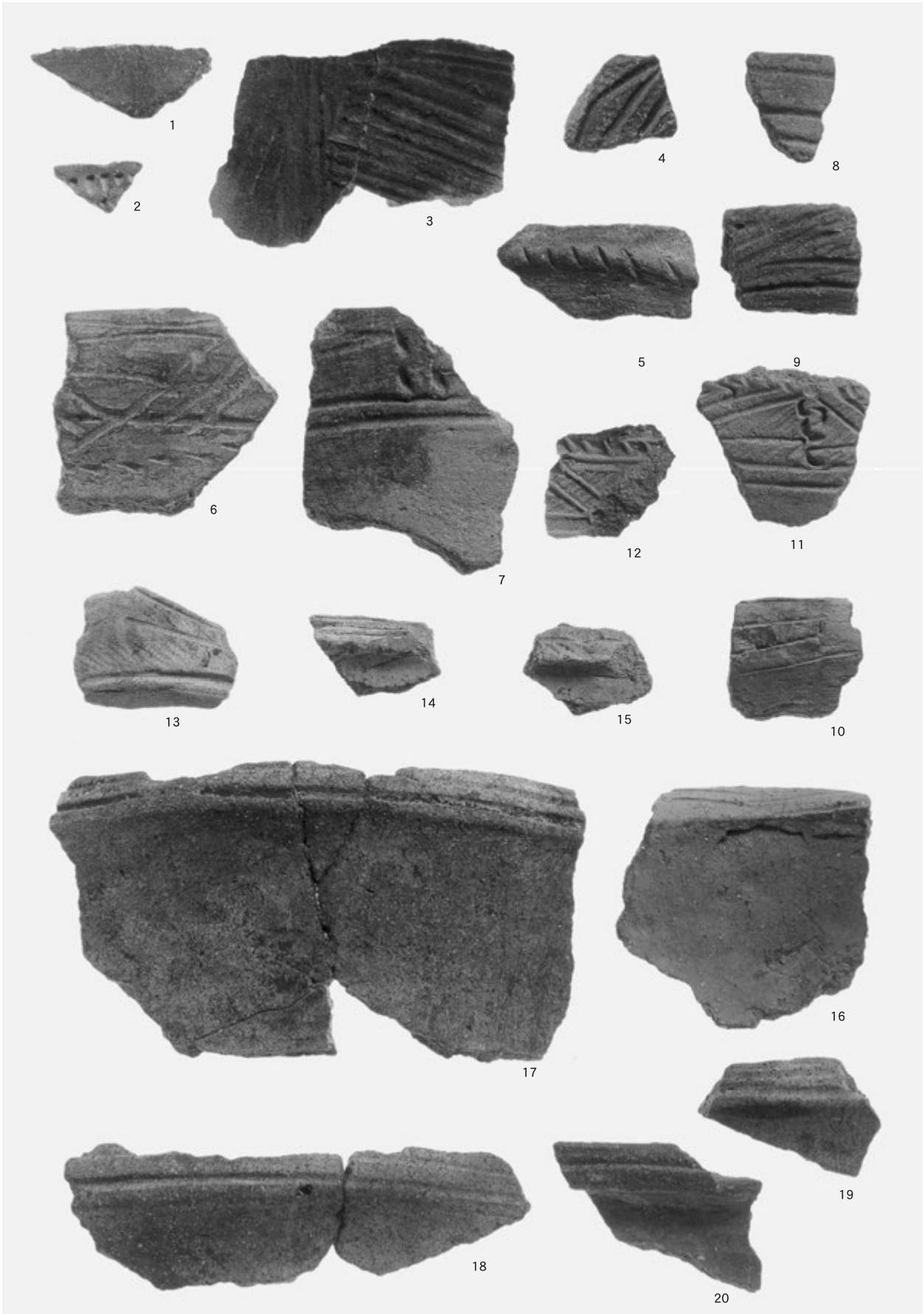
完掘状況　東側から（坂ノ下：Ｌ・Ｍ－１４・１５区）

完掘状況　北東側から（後ヶ原：Ｉ～Ｋ－７～１０区）

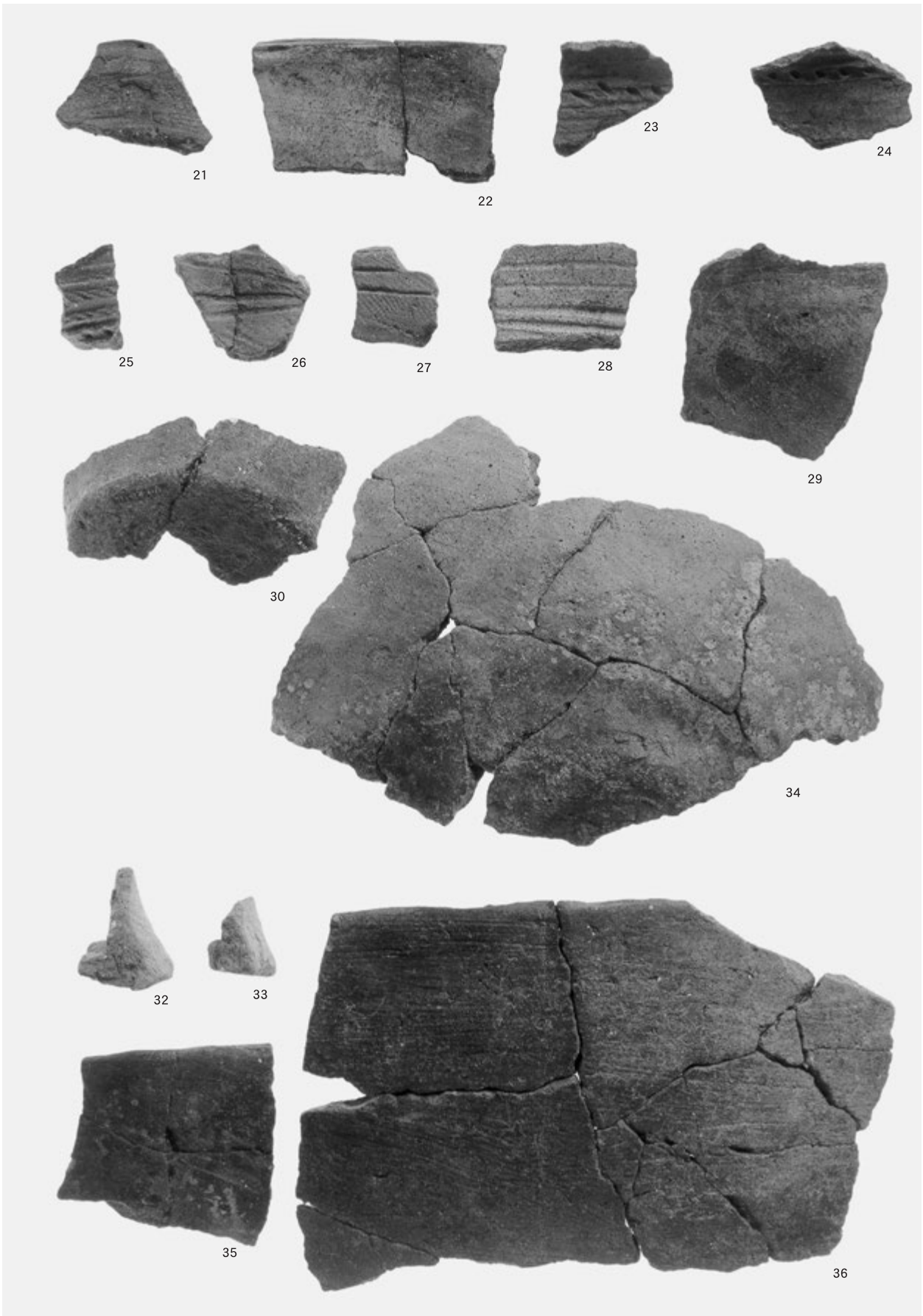
完掘状況　北東側から（後ヶ原：Ｈ～Ｋ－５～１０区）

埋戻し状況　南側から（後ヶ原：Ｈ～Ｋ－５～１０区）

図版6

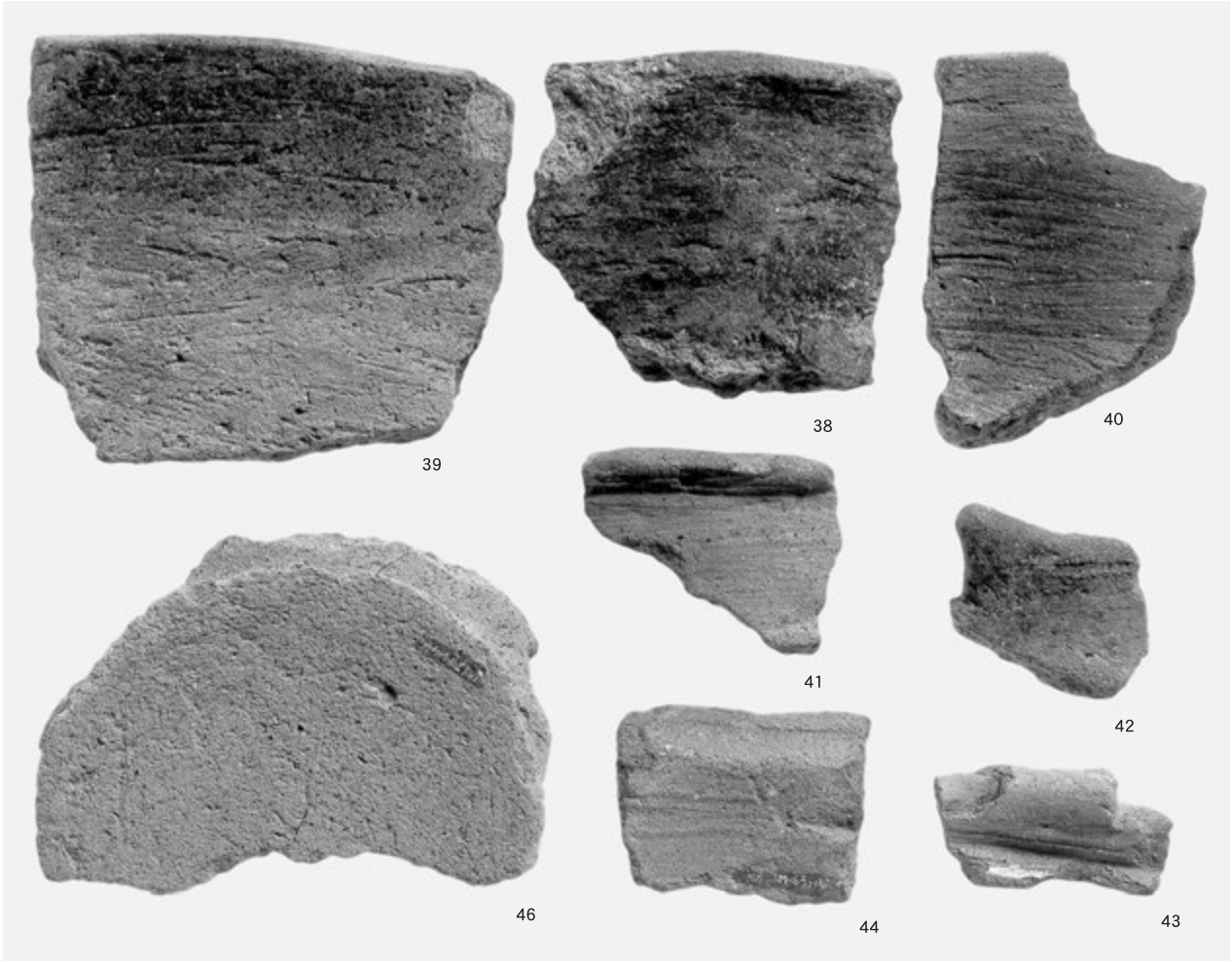


縄文時代の土器（1）坂ノ下

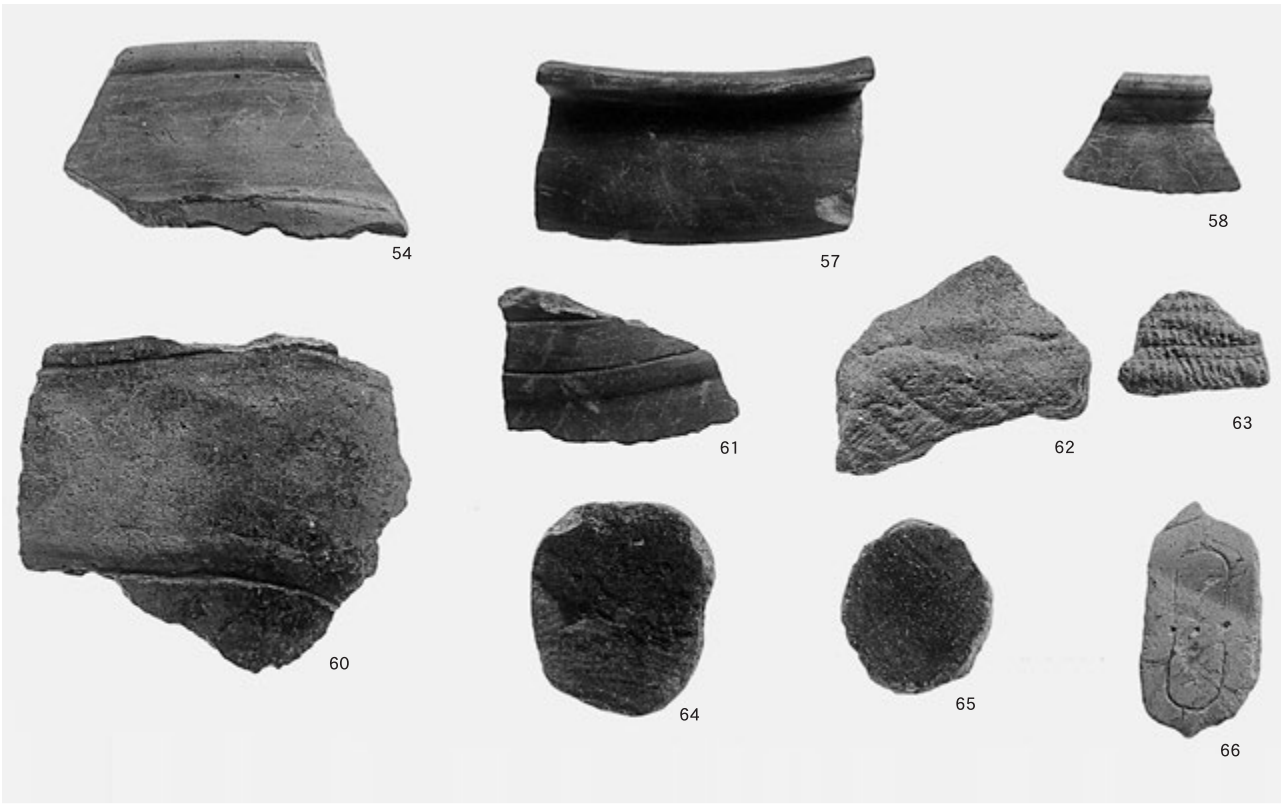


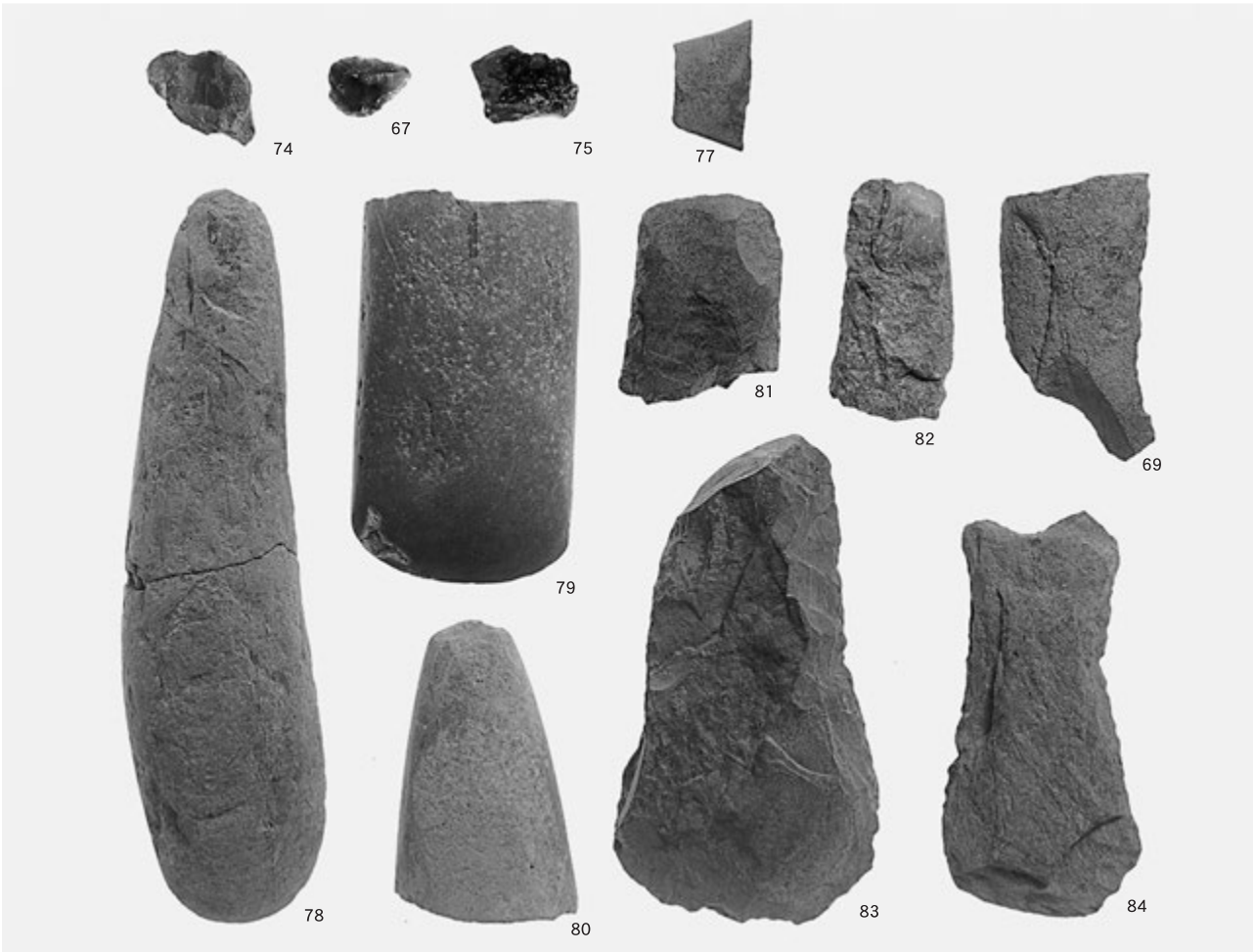
縄文時代の土器（2）坂ノ下

図版8



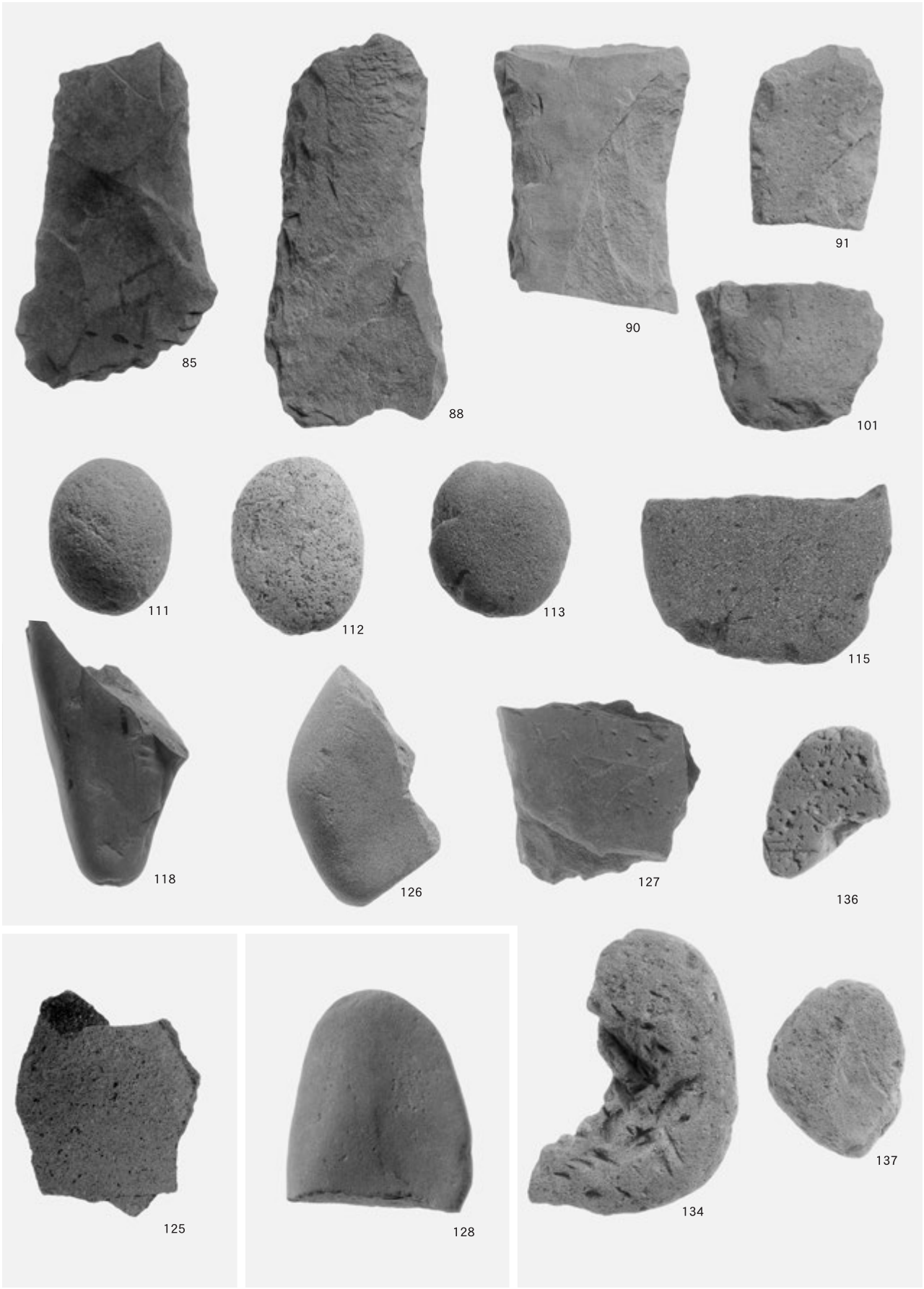
縄文時代の土器（3）坂ノ下



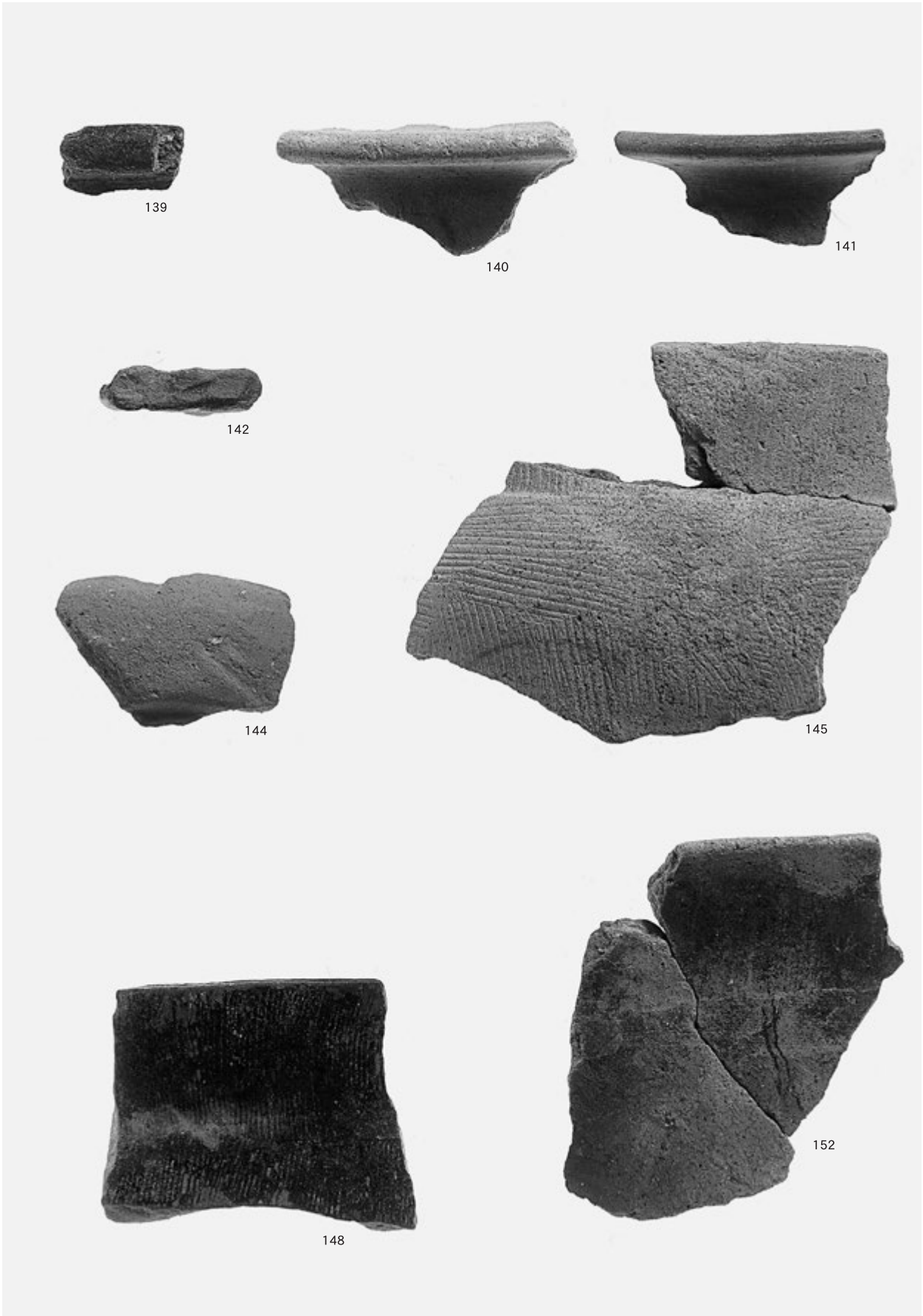


縄文時代の土器（４）・縄文時代の石器（１）坂ノ下

図版10

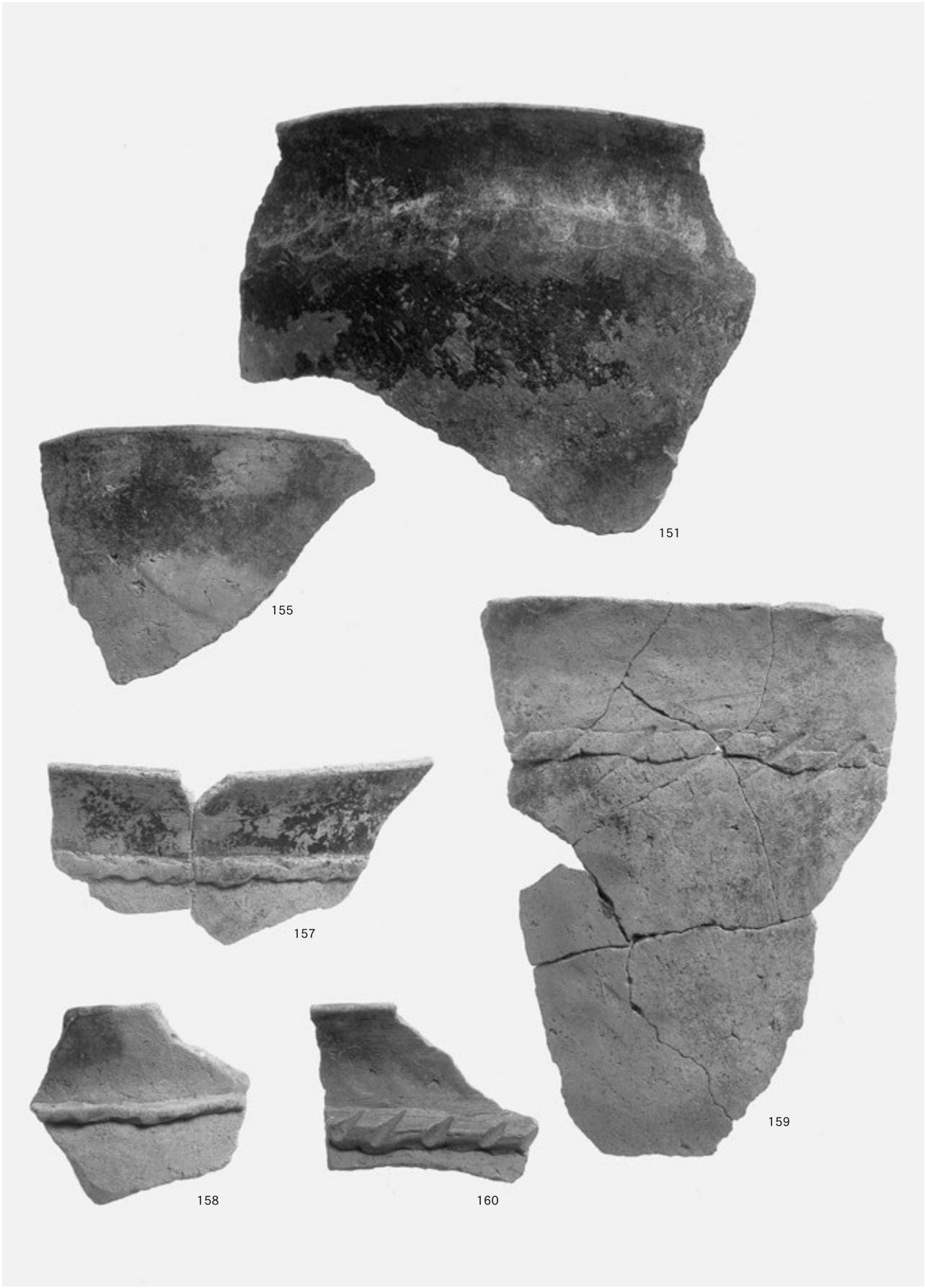


縄文時代の石器（2）坂ノ下

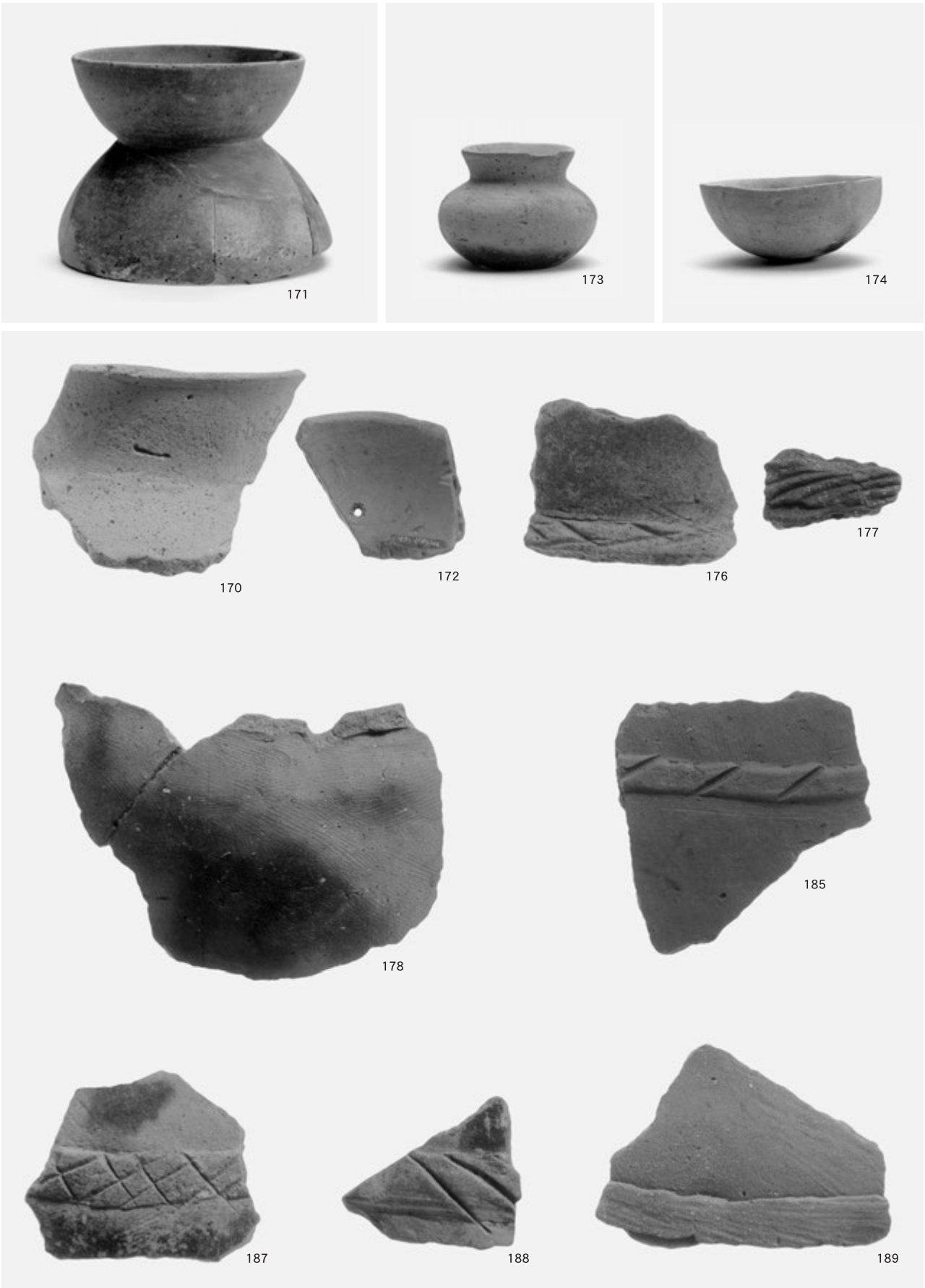


弥生・古墳時代の土器（１）坂ノ下

図版12

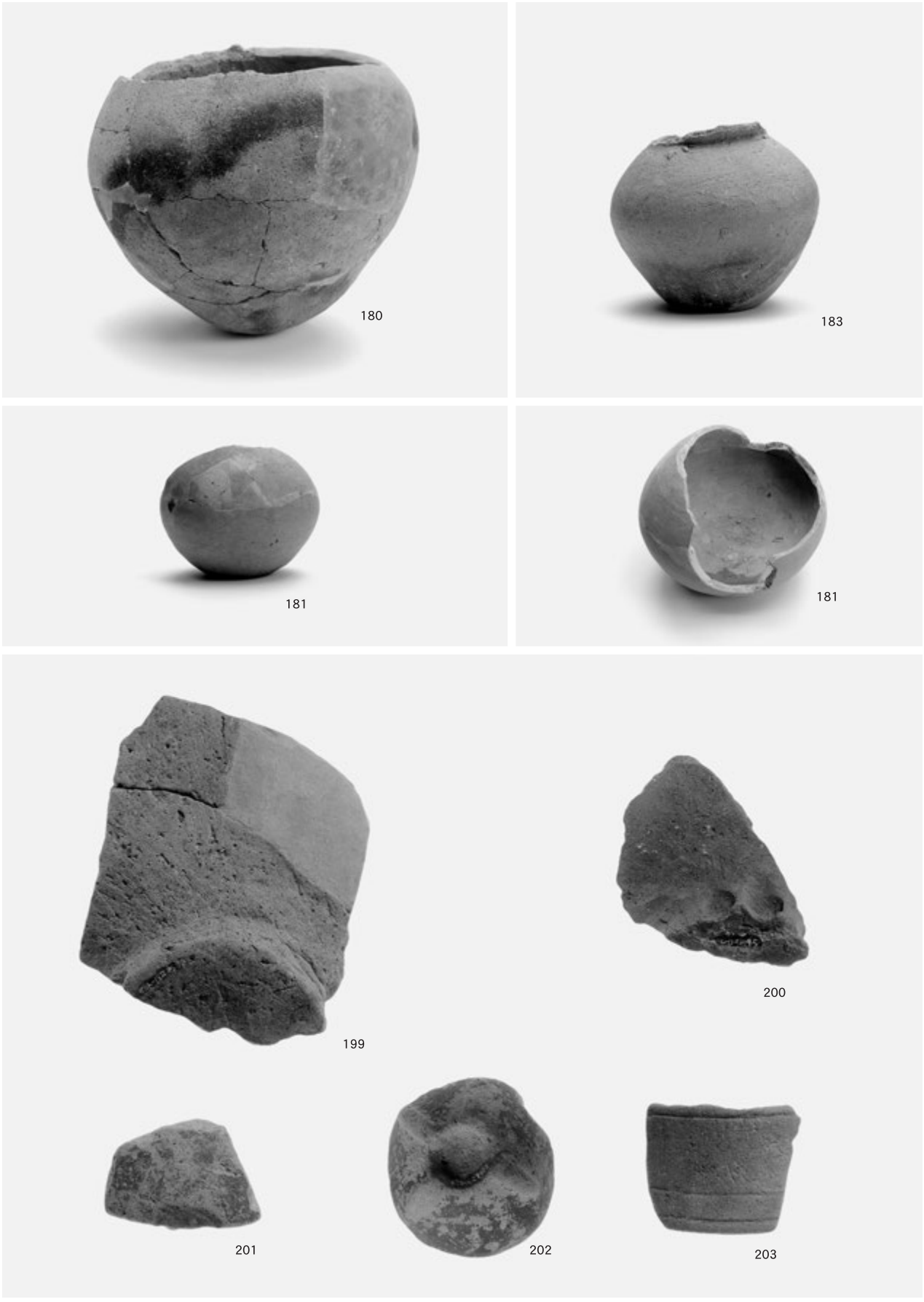


古墳時代の土器（2）坂ノ下



古墳時代の土器（３）坂ノ下

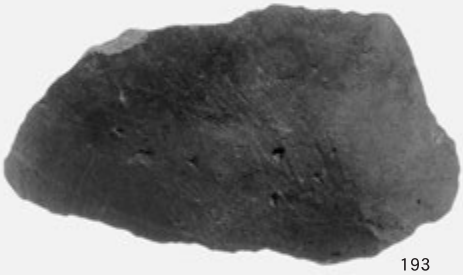
図版14



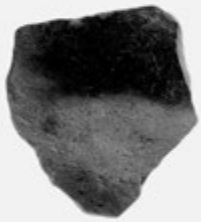
古墳時代の土器（4）坂ノ下

191

194


193

195

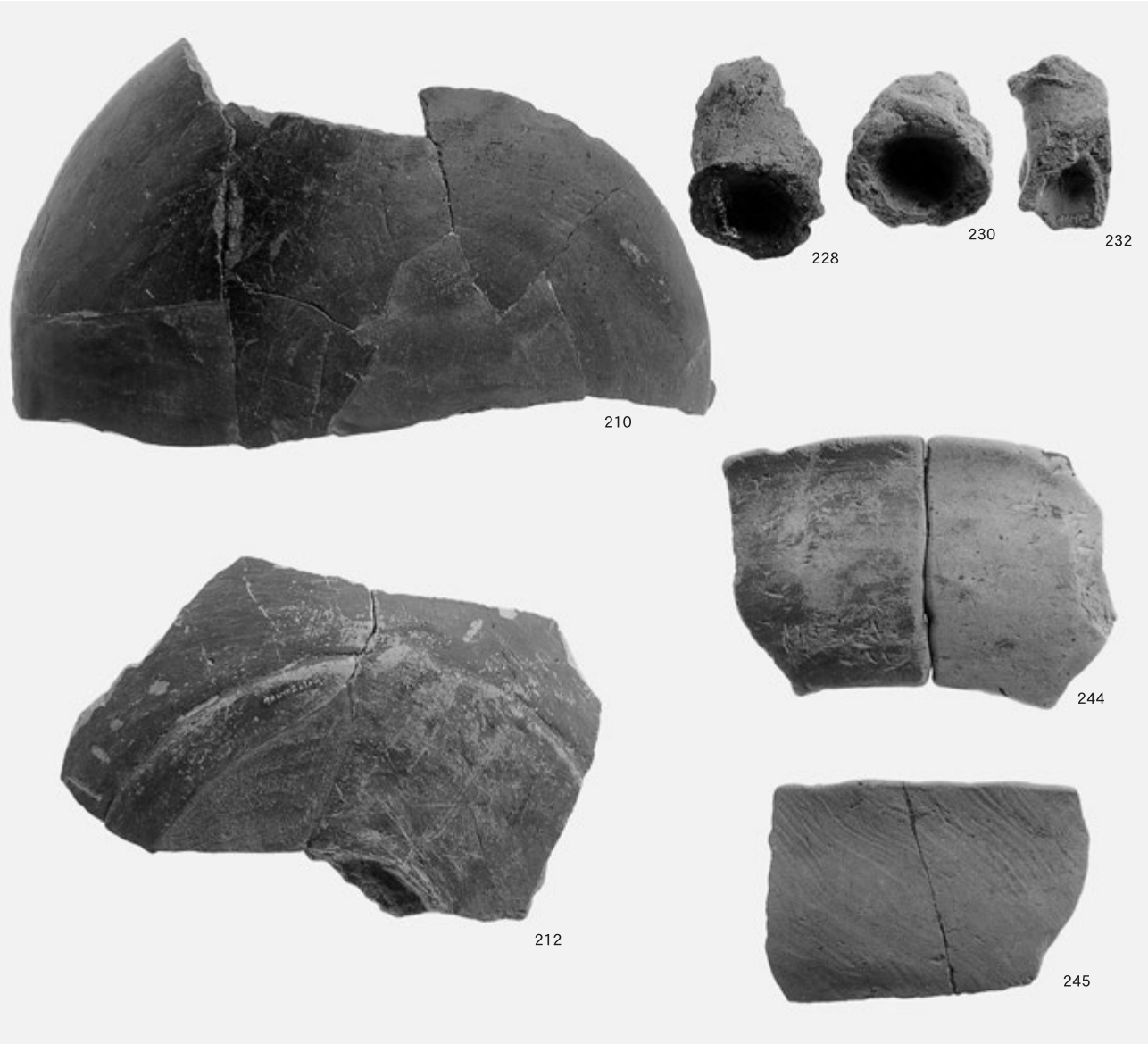

198

204

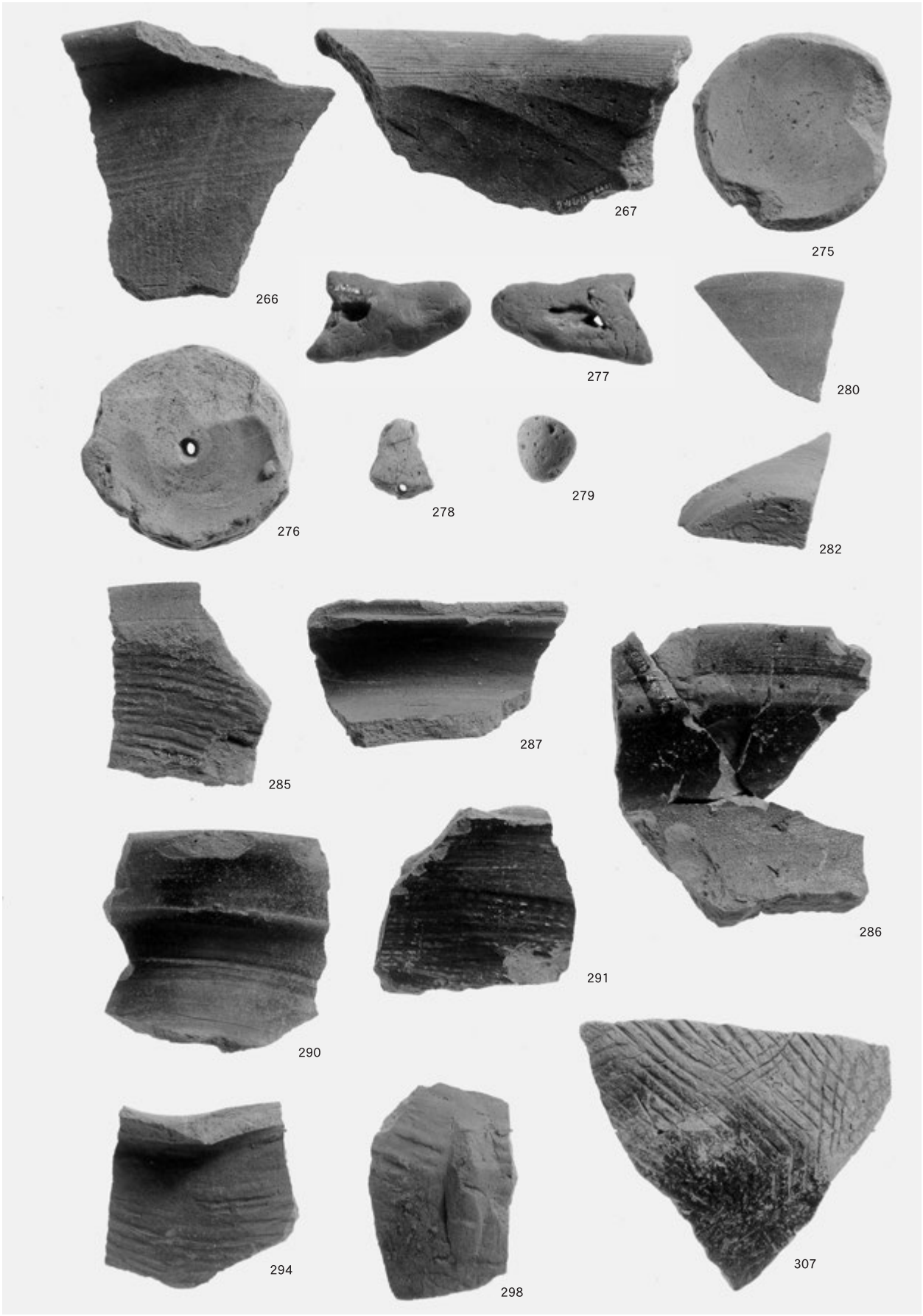
206

古墳時代の土器（5）坂ノ下

図版16

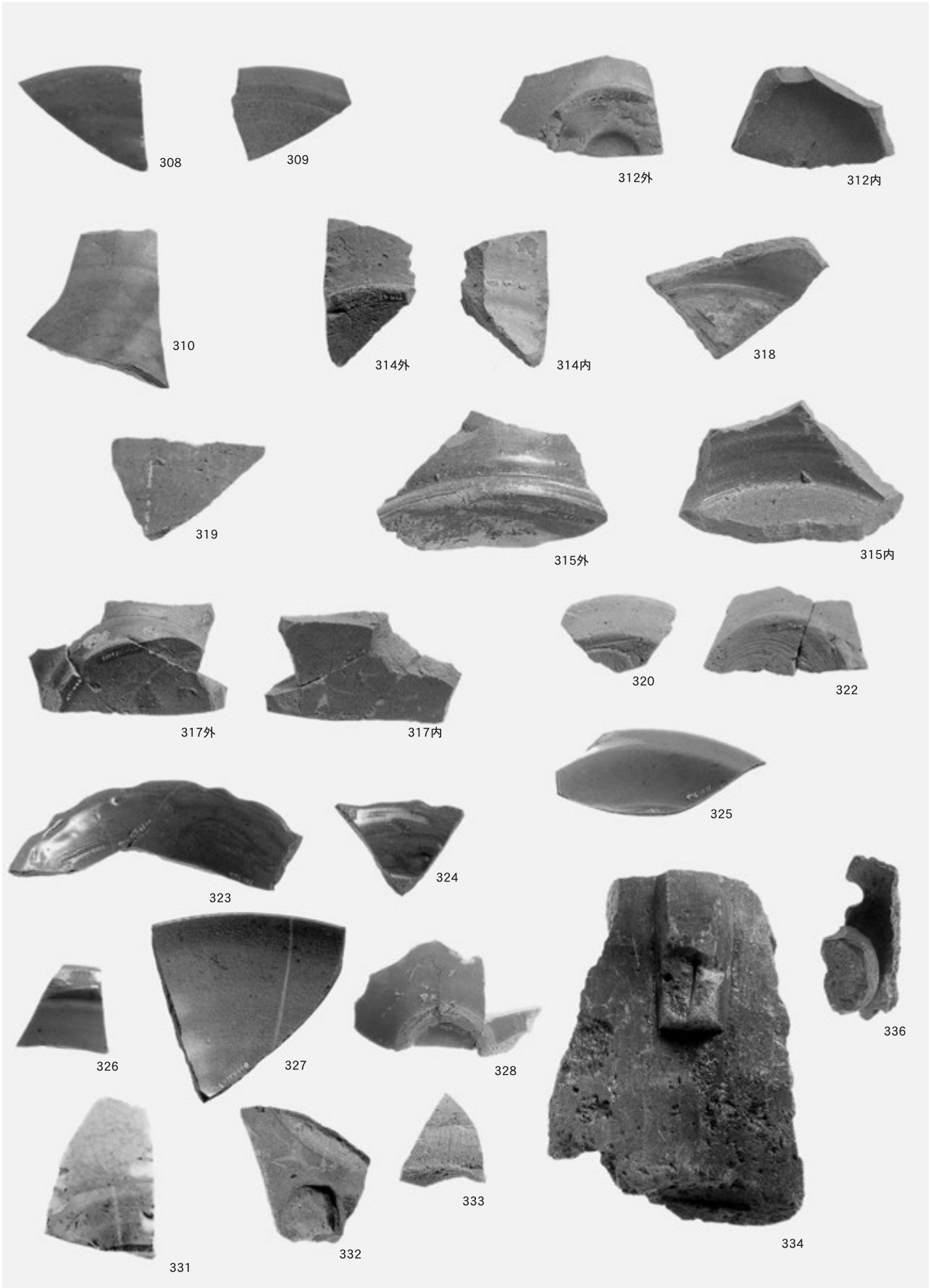


古墳時代の土器（６）・古代の遺物（１）坂ノ下

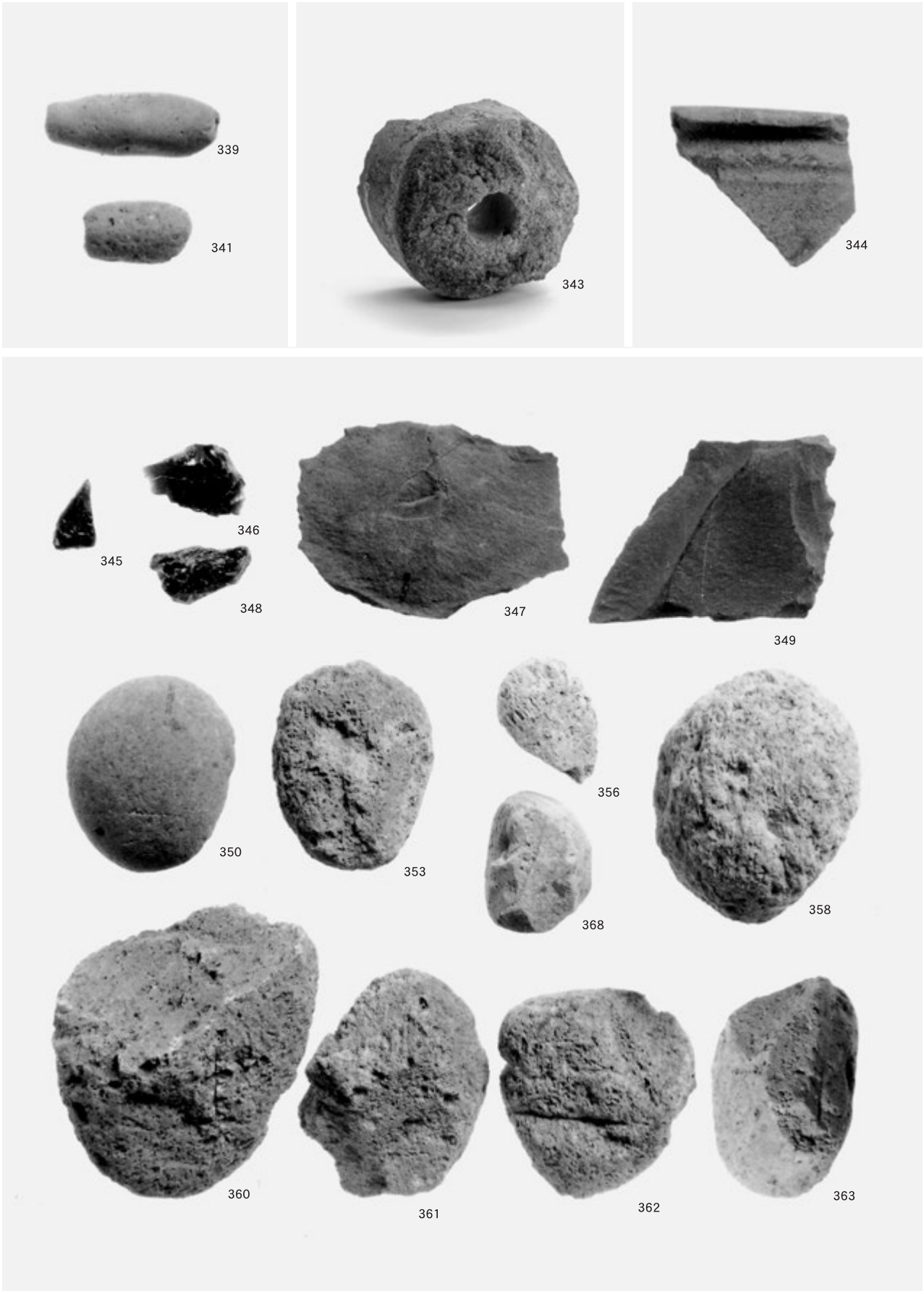

266
267
275
277
280
276
278
279
282
285
287
286
291
290
294
298
307

古代の遺物（２）坂ノ下

図版18

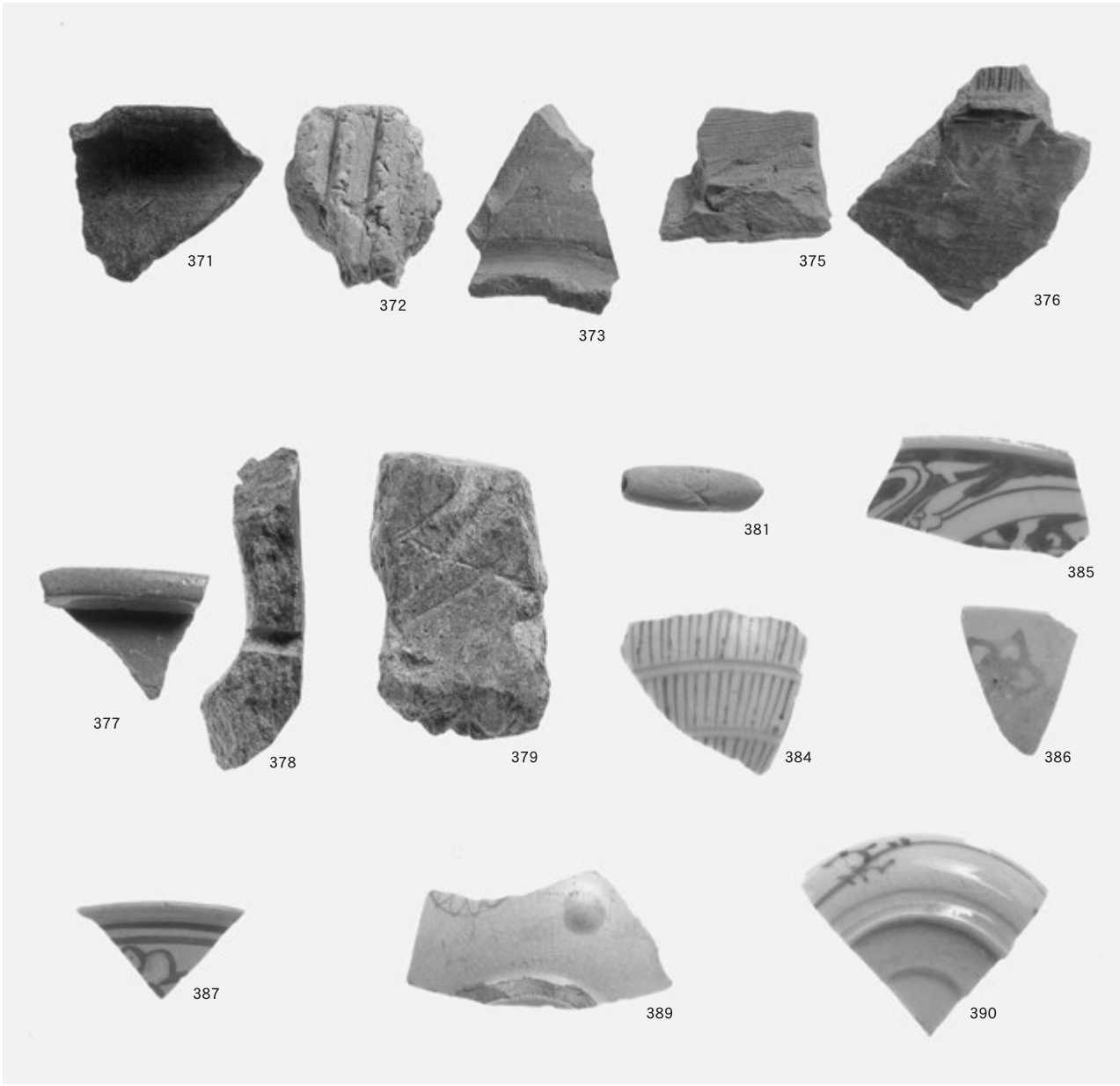


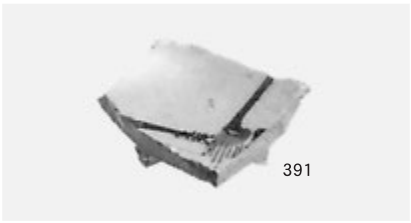
古代の遺物（３）・中世の遺物（１）坂ノ下

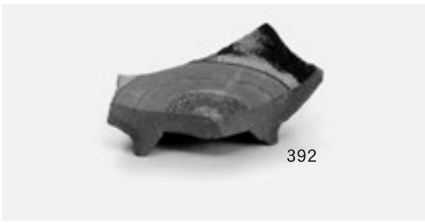


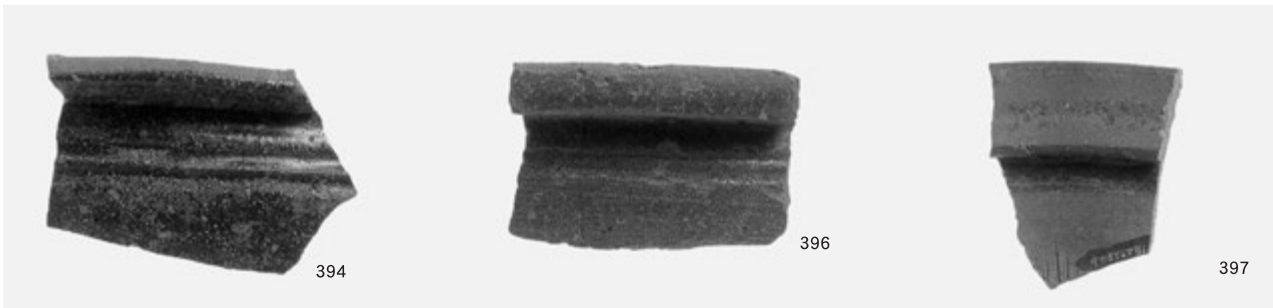
中世の遺物（２）・近世の遺物　坂ノ下・縄文時代の石器　後ケ原

図版20









弥生～近世の遺物　後ケ原

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（１６０）

坂ノ下遺跡・後ヶ原遺跡

発行年月日　2011年３月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号

ＴＥＬ　0995－48－5811　　ＦＡＸ　0995－48－5821

印　　刷　（株）あすなろ印刷

〒890－0041
鹿児島県鹿児島市城西２－２－３６
ＴＥＬ　099－214－3757　　ＦＡＸ　099－214－3758